多く、壁高は10cm～12cmである。

〔柱穴〕 主柱穴は４、柱穴状ピットは６基認められる。主柱穴のうち東側２基（ピットNo.1 No.4）は東壁と重複し、ピットNo.1とNo.3は、長方形のプランしている。

第６表

（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 9	No. 10	No. 12	No. 13	No. 14	No. 18
上場径	14×32	21×19	19×37	28×31	25×26	22×19	32×14	20×30	21×22	26×26
下場径	7×10	11×14	8×30	20×20	12×12	11× 7	16×11	14×19	9×10	8×14
深　さ	27	31	35	26	19	17	6	6	26	32
堆積土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土
性　格	主柱穴ＮＥ	主柱穴ＮＷ	主柱穴ＳＷ	主柱穴ＳＥ	柱穴状ＮＷ	柱穴状ＮＷ	柱穴状ＳＷ	柱穴状ＳＷ	柱穴状中央	柱穴状中央

〔かまど〕 東壁北寄りにつくられている。燃焼部は横約30cm、奥行約110cm、深さ7～16cmである。両袖は大部崩れているが若干残存し、袖中に埋めた礫が北側に５個、南側に４個残存している。煙道は長さ約70cm。巾約30cm。深さ約６cmである。暗赤褐色焼土と浅黄色シルト質土が堆積し、煙出寄りに坏Ｂ類No.1が、内面を下にして検出された。煙出は、上場径東西47cm、南北50cm、下場径東西20cm、南北30cm。深さ22cmで、焼土炭化物礫を包含している。

〔貯蔵穴〕 柱穴及び柱穴状ピット以外のピットは11基検出された。第６表の通り性格不明のものがあり、特にピットNo.16は、住居跡に伴うものかどうか疑問で、平面形や深さ等類例がない。堆積土中に遺物を多く包含するのはピットNo.21である。

第７表

（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 11	No. 15	No. 16	No. 17	No. 19	No. 20	No. 21
上場径	80×52	36×50	61×48	40×46	93×119	46×40	88×40	36×43	80×132	35×33	53×67
下場径	45×25	25×40	43×36	20×18	66× 92	24×22	61×22	17×19	67×100	9× 4	12×32
深　さ	8	4	14	12	10	13	64	15	16	16	20
堆積土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土	10YR2/3 黒褐色腐植土
性　格	貯蔵穴状	貯蔵穴状	貯蔵穴状	貯蔵穴状	貯蔵穴状	不　明	不　明	貯蔵穴状	貯蔵穴状	不　明	貯蔵穴状

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕88点、小型甕110点、内黒甕６点、内黒坏81点、内外黒色坏８点。須恵器、壷13点、小型壷１点、坏Ａ類70点、坏Ｂ類132点、高台坏１点。砥石１点が出土した。坏類はみな回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕 （21図１～４） １は口縁部体上半部¼、体下半部底部小破片多数残存である。体部外面の篦削り篦なでは、口端部から4.6cm下から始まる。胎土軟質砂粒を含む。色調は浅黄橙色。焼成は不良。外面各所に焼土が付着する。Ｑ１・Ｑ４床面、かまど焚口出土である。２は、口縁部体上半部⅛残存である。成形・調整技法は、１とほゞ同じである。口縁部は１よりかなり外反する。体部の篦削り篦なでは、口端部より3.6cm下より始まる。胎土軟質砂粒をかなり含む。

色調浅黄橙色。焼成やや不良。Q4床面出土である。3は、口縁部体上半部⅛残存である。成形・調整技法は1とほゞ同じである。口縁部は、かなり外反し、1・2よりも薄い。体部の篦削り篦なでは、体部上端（口端部より1.7cm下）から始まる。上端は右上⟷左下とやや斜めである。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調浅黄橙色。焼成やや不良。Q4床面出土である。4は口縁部体上端部⅛以下残存である。内外面共横なでであるが、外面の横なでによる凸凹は1～3より著しい。胎土軟質砂粒を若干含む。色調にぶい橙色。焼成不良である。Q1埋土出土である。その他に、口縁部10点、体部破片66点、底部8点が出土した。他の口縁部もみな上に挽き出されておりくの字形に外反している。体部破片は、内面は横なで、外面上半は横なで、下半は篦削り篦なでが大部分であるが、内面下半に横なで後、縦になでているものもみられる。底部は、下面が篦削りか篦なで調整、上面が不定方向の篦なでの様である。体下端と底部の破片の中に体下端外面に叩き目痕が左上—右下へ斜めと、縦に施され、底部下面全体に砂粒が密に付着した破片があり、底径は7.8cm、Q1床面出土である。またQ4床面出土の底部破片は、底径10cmで、下面は篦なで調整されている。

小型甕　(21図7～12) 7は、口縁部⅛以下、体部⅛、底部ほゞ全部残存である。口縁部から底部まで、いくつかの破片が接合した。口縁部は外反するが、口端の挽き出された部分は、内傾している。残存する体部の破片は大部分2次焼成を受け変質している。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良。Q1床面、Q2・Q3埋土出土である。8は、口縁部体上半部⅓残存である。体中央部破片に焼け爛れているものがあり、2次焼成を受け剝離したと思われる。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調はにぶい橙色。焼成やや不良。かまど出土である。9は、口縁部体上部⅛以下残存である。口端部の挽き出された部分は直立する。胎土軟質砂粒若干を含む。色調は灰褐色～にぶい橙色。焼成はやや不良。Q3埋土出土である。10は、体下半底部が全部残存である。若干体部に歪みがみられる。底部は下に張り出し、下面中央が、わずかに凹んでいる。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調はにぶい赤橙色、胎部は黒色である。焼成は不良。南壁際ほゞ中央より出土した。11は、口縁部体上部⅛残存である。口端部の上に挽き出された部分は内傾する。胎土軟質石英等砂粒をかなり含む。色調は褐灰色～淡赤橙色。焼成は不良。Q1・Q4床面出土である。12は、口縁部体上部⅛残存である。口端部は9と同様直立する。口縁部体部外面は2次焼成を受けたためか、剝離した部分が大部みられる。また内外面の1部に黒褐色の煤かタール様の付着物がみられる。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は灰褐色。焼成は不良。Q1・Q4埋土出土である。他に3点口縁部破片が出土しているが、小破片で測定不能、全容不明である。1つは口縁部だけの破片3片で、内外面は煤様の黒色付着物がみられる。Q1・Q4埋土出土である。1つはろくろなで成形で、胎土にかなりの砂粒を含んでいる。ピットNo.19出土である。1つは、体部外面上端から縦に篦なで痕を持ち、口端部と外体面の一

部が黒色化している。Q3床面ピットNo.17出土である。3点共口端部が上に挽き出され、口縁部はくの字形に外反している。体部の小破片は、ろくろなで成形が39点、縦に篦削り篦なで調整が27点、磨滅等により不明のもの27点である。底部は、回転糸切り無調整のもの5点、篦削りか篦なで調整のもの3点である。従って小型の甕は、長胴の甕と同様の外面調整のものと、ろくろなで成形無調整のものとに分けられる。

内面黒色処理甕　(21図5) 体部若干の破片4点と、底部⅓残存である。体部内面は縦に磨き、一部横磨き、外面は縦に篦削り篦なで。底部上面は放射状磨きの様であるが、平坦でなく凸凹がある。下面も篦なでの様であるが、大部凸凹がある。胎土軟質砂粒をほとんど含まない。色調はにぶい橙色。焼成不良である。Q1床面、かまど、Q3床面から出土し、大部分内面の黒色は消えている。6点共同1個体か2個体分位と思われる。

内外面黒色処理坏　(21図6) 口縁部体部底部共¼残存であるが、底部3点は接合しない。個体数は不明である。口縁部体部の破片2点は同一個体と思われ、体部がかなり外傾する。底部破片3点は、下面に磨きはなく回転糸切り無調整、黒色処理のみである。体下半の破片2点は、黒色処理のみで、外面に磨きの痕がみられない。内面は1点に磨きの痕がない。他の1点は底部の破片と思われ、両面が磨きの痕がみられる。以上の事から5個体位とも思われる。

内黒坏　(22図1～8) 1は口縁部½、体部⅔、底部全部残存である。口縁部外面まで黒色処理がみられ、磨きは内面のみである。体部外面に墨書が認められる。下半中央と左側が欠損しており明確ではないが、「恵」の様に見える。体部下端と底部には篦削り調整は認められない。胎土はやや軟質で砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良で、Q2・Q3・Q4埋土Q3床面出土である。2は口縁部体部⅓、底部全部残存である。黒色処理は口縁部外面の1部まで及んでいる。体部内面の一部は黒色処理が消えている。体部下端の一部に篦削り調整がある。体部下半に墨書が認められるが、上半と左半が欠損し、磨滅しているため字体は不明で、2字以上書かれているように思われる。胎土はやや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良でQ4床面出土である。底部に薄いが黒斑様の黒色部がみられる。3は、口縁部体部½、底部⅔残存である。口縁部外面まで黒色処理が及び、磨きは内面のみである。体部下半は篦削り調整が明瞭である。胎土はやや軟質砂粒はほとんど含まない。焼成はやや不良。ピットNo.21出土である。底部下面から体部下端にかけて黒斑がある。4は、口縁部体部⅓、底部全部残存である。黒色処理は口縁部外面から一部外体部下半にも及ぶ。体下端に回転篦削り調整が認められる。胎土は軟質砂粒を若干含む、焼成はやや不良。ピットNo.21出土である。5は、口縁部体部½、底部全部残存である。内黒処理は一部口縁部外面に及び、磨きは内面のみである。体部外面下端と底部に黒斑が認められる。底部下面中央がやや凸んでいる。胎土やや軟質砂粒をほとんど含まない、焼成はやや不良である。Q2北西隅出土である。6は、口縁部体部¼、底部⅔残存である。

内黒処理と磨きは内面のみである。体部外面下端に黒斑がある。胎土やや軟質砂粒をわずか含む。焼成はやや不良である。ピットNo.21出土である。7は、口縁部若干、体部¼、底部⅔残存である。2と同様かなり外傾する椀形である。内黒処理と磨きは内面だけである。底部下面縁に黒斑がある。胎土やや軟質砂粒をわずか含む。焼成はやや不良である。Q1・Q3・Q4床面出土である。8は、口縁部⅙、体上部若干残存である。内黒処理と磨きは内面のみである。体部外面はろくろなでによる凸凹がかなり認められる。胎土はやや軟質砂粒をわずかに含む、焼成はやや不良である。Q4床面出土である。他に口縁部破片26点、体部破片41点、体底部破片2点、底部破片4点が出土している。口縁部破片は、内黒処理が外面にも及んでいるもの24点、内面だけのもの12点。内面が磨きのみのもの1点である。体部破片41点中に内外面に磨きがあり黒色処理の認められないものが1点ある。底部破片6点中、下面に篦削り調整のあるもの2点。回転糸切り無調整のもの3点、磨滅著るしく不明のもの1点である。下面に篦削り調整のあるもの2点は、体部外面下端にも篦削り調整が認められ、ろくろを使わず手持で体下端と底面下面を篦削りしている。全体傾向は、口縁部は外反するものが少なく、体壁がかなり丸みをもち、かなり外傾する椀形で、胎土に砂をほとんど含まない事である。

須恵器

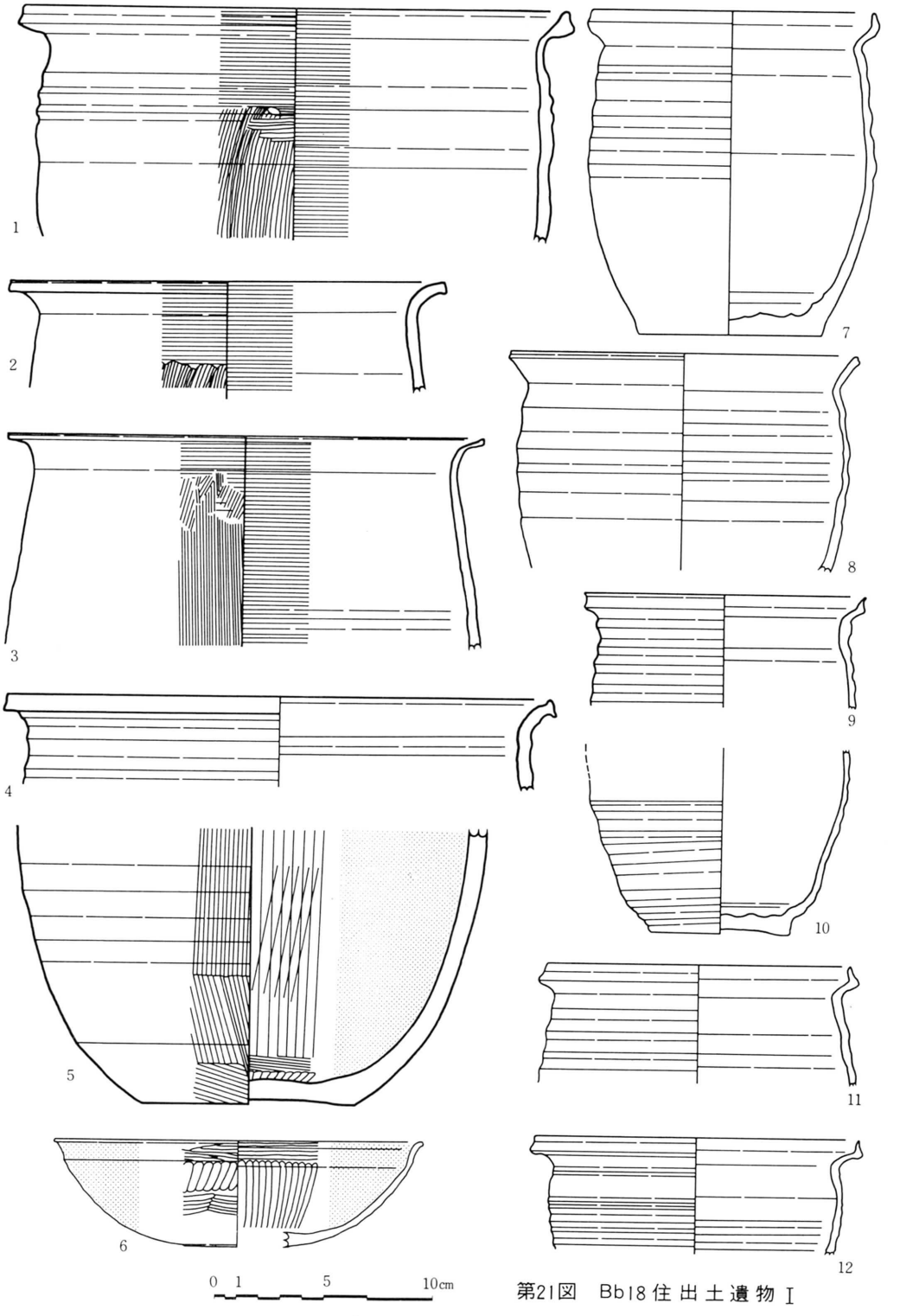
壷　1つは体部¼、底部½残存である。体部は上端と下端にやや丸みをもち、中央部はほゞ直線的であり、あまり外傾しない事から甕形に近いのではないかと思われる。体部外面調整は上端部が横なで後縦に篦削り篦なで、一部に平行叩き目痕がみられる。中央部は縦に篦削り篦なで、下半部は縦に篦削り篦なでで、下端は斜めに篦なで痕が付く。下端部に平行叩き目痕が付く、内面は上半が横なで、下半部は縦なで、下端部は横なでである。底部上面は不定方向になでられ、下面は篦なでと思われるが、凸凹著しい。胎土硬質砂粒を若干含む、色調は灰褐色～にぶい赤褐色。焼成は良好である。底径は約11cm。かまど焚口、煙出、Q1・Q3・Q4床面及び埋土出土である。8片1個体分と思われる。1つは、体部の小破片6点で、かなり大型の壷である。内外面に平行叩き目痕が施される。胎土は硬質砂粒をほとんど含まない。色調は灰白色。焼成はやや良好で、Q1・Q3床面出土である。1つは、体部小破片1点で、外面は平行叩き目痕が斜めに重複し、内面は放射状叩き目痕が施される。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は灰色。焼成は良好である。Q1埋土、Q3床面出土である。1つは、体部小破片2点1個体分で、外面は平行叩き目痕が斜めに重複し、外面は放射状叩き目か平行叩き目と、平行叩き目が直角に重複している。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は灰色。焼成は良好で、Q1・Q4埋土出土である。1つは、体部小破片で、2片1個体分である。外面は畳表様の叩き目痕が斜めに重複し、内面は波状の叩き目が重複している。胎土硬質砂粒をわずかに含む。色調は灰色。焼成は良好で、Q3床面とQ4埋土出土である。1つは、口縁部⅛の破片である。口端部は、折返しか貼付か不

明であるが２重になっており、上と外側に挽き出されている。胎土硬質石英粒等砂粒をわずか含む。色調は褐灰色。焼成は良好である。ピットNo.21出土である。１つは、肩部上半の小破片で、外面に自然釉が付着する。胎土は硬質石英等砂粒をかなり含む。色調は灰色。自然釉は黄灰色である。焼成は良好で、Q3床面出土である。他に口縁部１点、体部４点、体下・底部１点の小破片がある。いずれも住居跡内埋土から出土した。

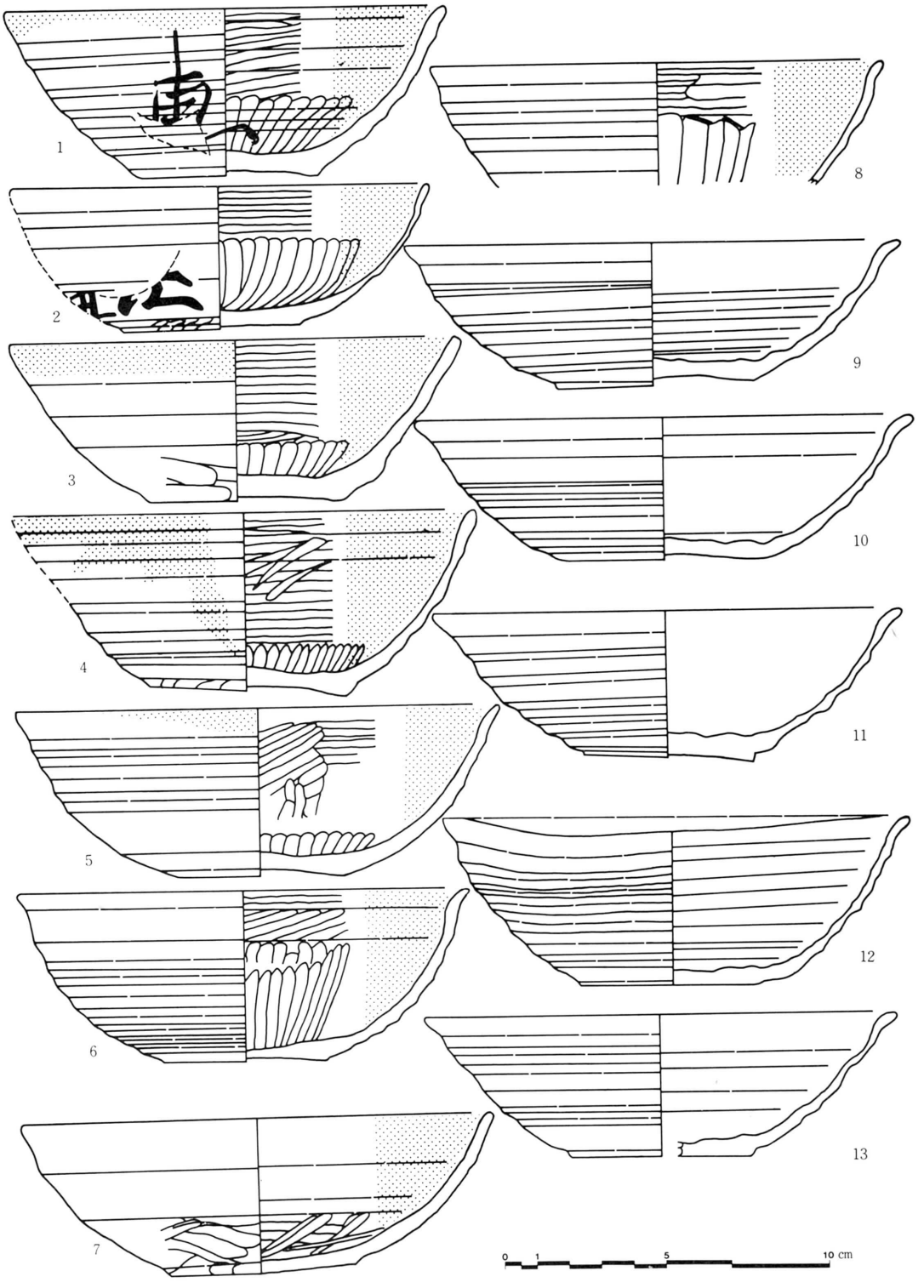
小型広口壷　(23図７）口縁部½、体部¾、底部½残存である。口縁部はわずかに内湾し外傾する。体壁は上半部が丸みが強い。底部下面中央が凹んでいる。胎土は上記壷と同様硬質で、焼成も良好である。かまど右袖（南）先端部出土である。

坏Ａ類　(22図９～13、23図１～５）22—９は、口径底径に比べ、器高がかなり低い。胎土は硬質で砂粒をほとんど含まない。焼成は良好である。ピットNo.21出土である。22—10は、やや歪みがみられ、口縁部体部内外面の一部に煤様の黒褐色付着物が認められる。胎土はやや硬質で砂粒をほとんど含まない。焼成はやや良好である。Q3床面、Q4埋土出土である。22—11も、やや歪みがあり、体壁はろくろなでによる凸凹が著るしい。底面がやや下に張り出している。胎土は硬質で砂粒をほとんど含まない。焼成は良好である。ピットNo.21、かまど燃焼部及びQ1Q3床面出土である。22—12も、口縁部体部に歪みがかなりみられ、体壁にろくろなでによる凸凹が著るしい。口縁部外面に重ね焼きの痕がみられる。胎土硬質砂粒をほとんど含まない。焼成は良好である。Q1・Q2・Q4埋土より出土した。22—13にも、口縁部に若干の歪みがみられ、体壁はろくろなでによる凸凹が著るしい。底部が若干下に張り出す。胎土硬質砂粒をわずか含む。焼成は良好である。ピットNo.21出土である。23—１は、他の物に比べ体下端がかなり丸みをもつ底部は下に張り出し、中央がかなり凹んでいる。胎土はやや硬質砂粒を若干含む。焼成はやや良好で、ピットNo.21出土である。23—２は、22—９よりも外傾し、体壁の凸凹もかなり著るしい。胎土やや硬質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや良好で、Q3埋土出土である。23—３は、他のＡ類坏より砂粒を多く含むが、器形・体壁・胎土・焼成は、ほゞ同様である。Q4床面より出土した。23—４は、23—３よりやや白っぽい灰白色で、器形・体壁はほゞ他と同様である。胎土はやや硬質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや良好。Q2埋土出土である。23—５は、小破片４点で全容は不明である。胎土はやや硬質砂粒を若干含む。焼成はやや良好で、Q1埋土ピットNo.21出土である。他に口縁部小破片23点、体部小破片30点、底部破片７点が出土した。いずれも、ろくろなで成形無調整。回転糸切り。口縁部外反。胎土硬質砂粒をほとんど含まない。色調灰色～灰白色。焼成良好。という共通点をもつ。

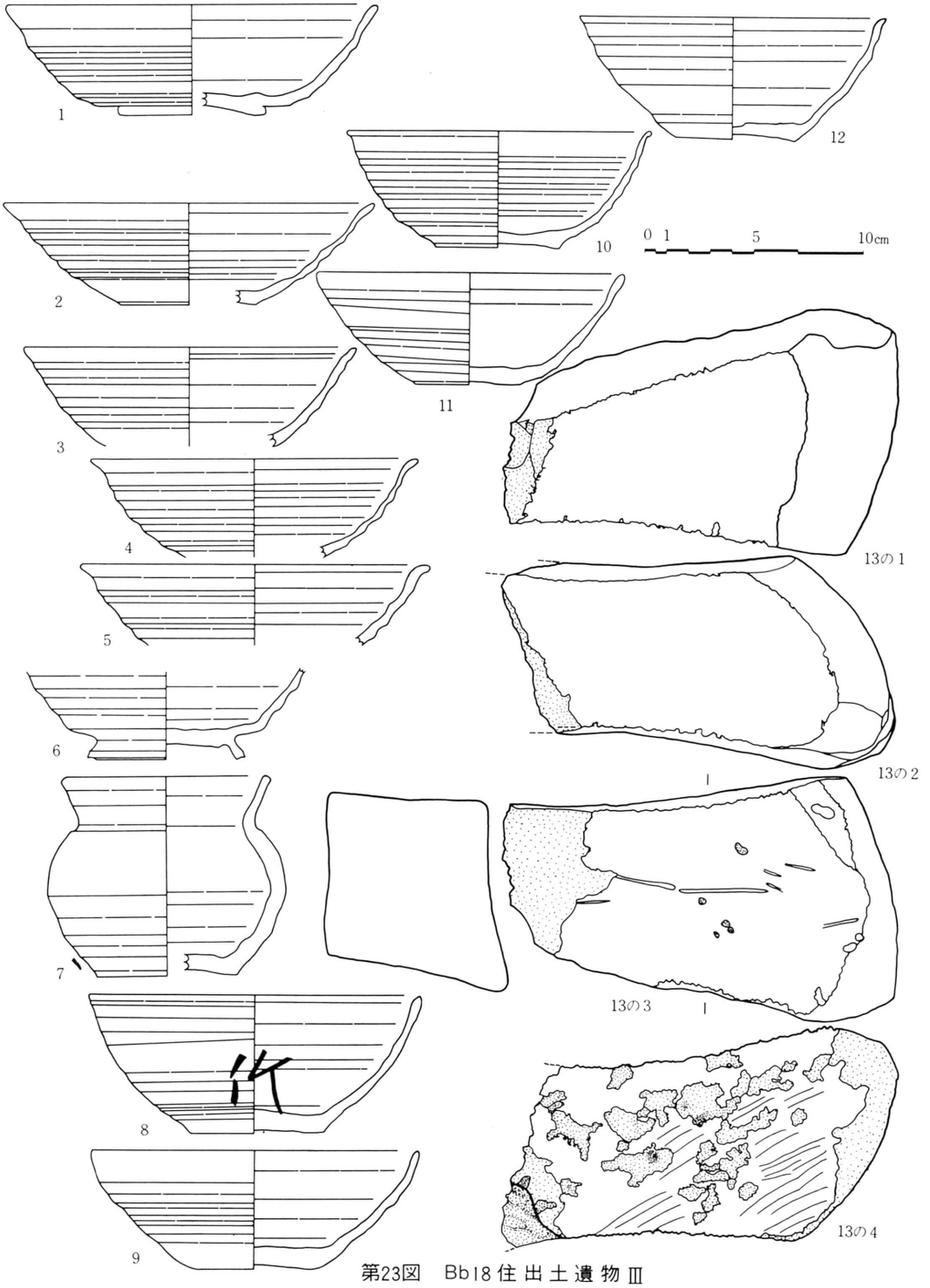
坏Ｂ類　(23図８～12）８は、ろくろなで整形無調整である。体壁は下半部が外反、中央が丸み、上半はほゞ直線的である。ろくろなでによる凸凹は少ない。内面下半部に火襷様の痕跡がある。外体面に墨書が認められるが、薄く明確でない。胎土やや軟質砂粒を含む。焼成はやや



第21図　Bb18住出土遺物Ⅰ



第22図　Bb18住出土遺物Ⅱ



第23図　Bb18住出土遺物Ⅲ

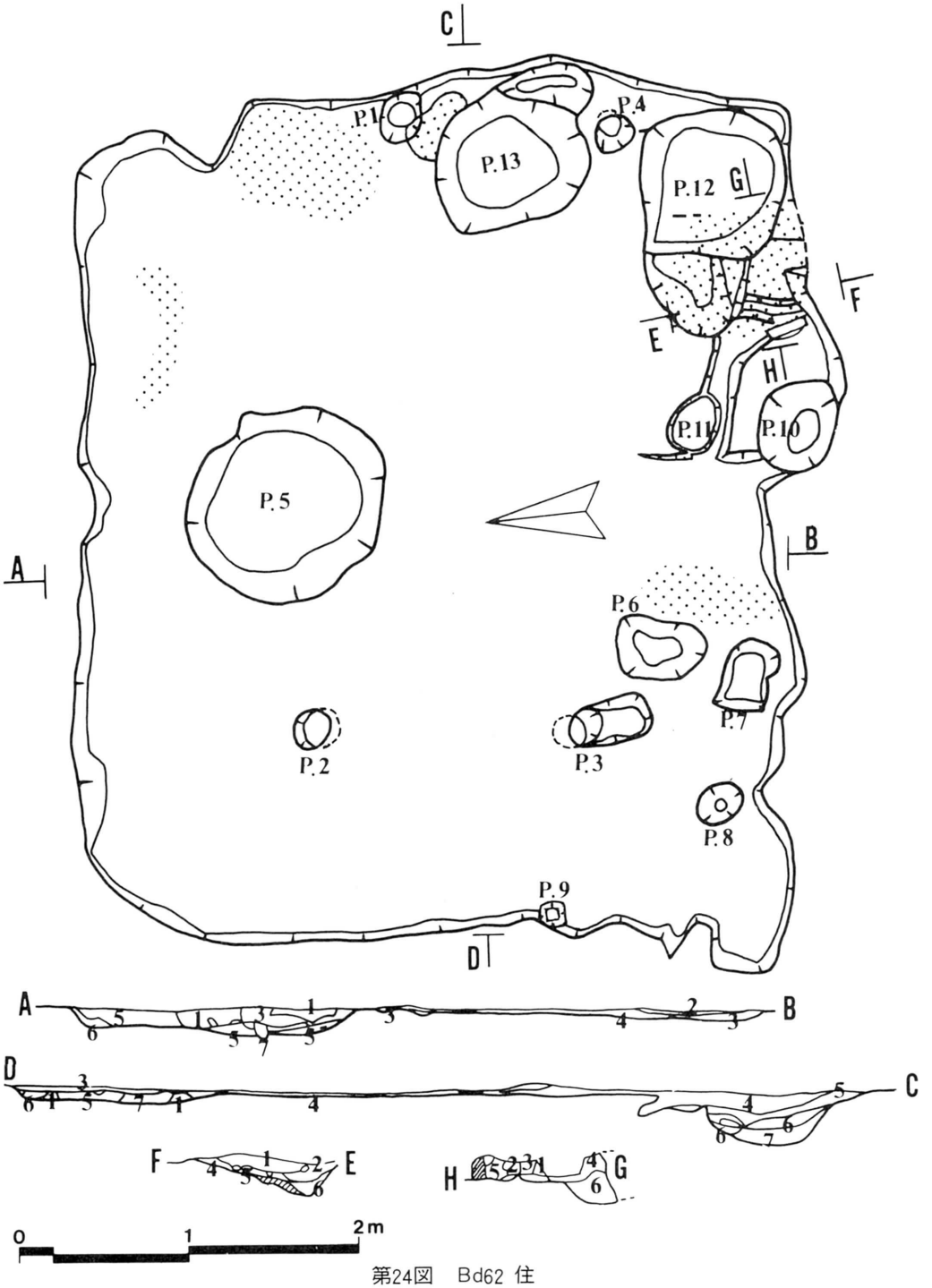
不良で、煙道先端側に底部下面を上にした状態で出土した。9は、ろくろなで整形無調整である。体部中央と下半は直線的に外傾し、上半部に丸みがある。ろくろなでによる凸凹が体壁に若干みられる。胎土は軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良で、Q1床面出土である。10は、ろくろなで成形無調整である。体壁全体がかなり丸みをもつ。ろくろなでによる凸凹は少ない。胎土はやや軟質砂粒をかなり含む。焼成はやや不良で、Q1・Q3・Q4床面と埋土出土である。11は、ろくろなで成形無調整である。体壁は上半と中央が丸み少なく、下半部の丸みが強い。外体面下半から底部へかけて黒斑様に黒変している部分がある。胎土やや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良で、埋土1層出土である。12は、ろくろなで成形無調整である。体壁はろくろなでによる凸凹がみられ、中央部が丸みをもち、上半と下半は丸みが少ない。胎土は軟質砂粒をかなり多く含む。焼成は不良で、かまど燃焼部出土である。その他に、口縁部44点、体部65点、底部17点が出土している。口縁部は外反するものが多く、直線的なものや、内湾気味のものも若干ある。体壁の丸みは、上半が強いもの、中央が強いもの、下半が強いものと、多様である。底部は皆回転糸切りで、下に張り出すものと、そうでないものがある。胎土は大部分やや軟質で砂粒を含んでいる。色調は橙色系が多いが、坏A類の焼き損じかと思われる灰色部のみられるものもある。坏A類と比べ共通点は、ろくろなで成形無調整、回転糸切である。異なる点は、口縁部がA類ほど外反しないものが多い。胎土に砂粒がB類の方が多く含まれる。色調がB類は橙色系、A類は灰色系である。焼成はB類が不良で、A類が良好である。明確ではないが、A類は器高が5cm以下で、B類は5cm以上のものが多い様に思える。以上の傾向がみられるが、これはBb18住居跡の遺物のみの結果である。

高台坏　(23図6) 体部下半⅓、底部大部分、高台部⅔残存である。口縁部と体部の大部分を欠損しているため全容は不明である。胎土硬質砂粒をほとんど含まない。色調は表面が灰色、胎部は灰褐色である。焼成は良好である。以上から坏A類と同様のものに、高台部を貼り付けたものと思われる。

砥石　(23図13) 13の1は下面。13の2は折断部の方からみて左面。13の3は上面。13の4は折断部の方からみて右面。13の5は右側が上面、左側が下面、上が左面、下が右面である。残存部長さ18.1cm。巾約19cm。厚さ約8cmで、4面共利用された痕跡はあるが、右面は剝離したのか、自然面に凸凹が著るしかったのか、あまり明確ではない。多く利用されて凹んでいる面を上面とした。複輝石安山岩で多孔質のため粗砥と思われる。

(8) Bd62住　(第24図)

〔**遺構の確認**〕 基準線より東へ14.28m～20.14m。基準点より北へ16.24m～19.79mの地点、Bd62地区とその周囲に、黒褐色及び暗褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐


C
P.1
P.4
P.13
P.12
G
F
E
H
P.11
P.10
P.5
B
A
P.6
P.7
P.2
P.3
P.8
P.9
D
A
B
D
C
F
E
H
G
0
1
2m

第24図　Bd62 住

褐色シルト質土である。(第３次調査)

〔重複・増改築〕 住居跡内の東寄りを南北に巾25cm、深４cmの溝が走っており、かまどと思われる地点を切っている。第１次調査以降何度も重機が入って地面を削平しており、かまどと思われる地点の焼土が異様に盛り上っていた。また、西壁と柱穴ピットNo.２とNo.３の間の床面にBd62溝状土壙が検出された。床面上の堆積土が若干溝状土壙の上層に入り込んでいる。

〔平面形・方向〕 東西約５m、南北約4.25mの長方形である。主軸方向は、かまどの位置が明確でないため断定は出来ないが、南壁東寄がかまど跡とすれば、S－15.5°－Eで南である。

〔堆積土〕 住居跡の中央部は床面が一部検出面に露出している状態であった。

１層10YR 5/6黄褐色シルト質土、やや密で、粘性あり。地山と同質、２層10YR 3/4暗褐色腐植土、粗で、粘性なし。３層10YR 2/2黒褐色腐植土、粗で、粘性なし。所により焼土を含む。４層10YR 3/3暗褐色腐植土、粗で、粘性ややあり、シルト質土を含む。５層10YR 2/2黒褐色腐植土、粗で、粘性ややあり、焼土遺物を含む。６層10YR 3/2黒褐色腐植土、やや粗で、粘性ややあり、シルト質土を若干含む。７層10YR 2/3黒褐色腐植土、粗で、粘性なし、シルト遺物を含む。

〔床面〕 かなり凸凹がみられる。特に壁際と、南西隅が掘り方状になっている。貼り床は確認されなかった。床面から壁への立ち上がりは、東壁と南壁では明確でなく、北壁と西壁は緩やかで、壁高は２cm～10cmしかなく、旧表土面をかなり削平してしまったようである。

〔柱穴〕 主柱穴は４（ピットNo.１～４）柱穴状ピットは１（ピットNo.９）である。ピットNo.１は、上場径29×22cm。下場径15cm。深さ53cmで、東壁中央部に接している。堆積土は住居跡堆積土６層である。ピットNo.２は、上場径24×21cm。下場径23×21cm。深さ58cmで、Q３床面に位置する。堆積土は住居跡堆積土６層である。ピットNo.３は、上場径20cm。下場径18cm。深さ57cm。自然に倒れたか、引き抜いたか不明であるが、上場が南に10cmほどずれ、更に径30cmのピットが南側に続いている。堆積土は住居跡堆積土６層で、Q３床面に位置する。ピットNo.４は、上場径23cm。下場径14cm。深さ53cmで、Q４東側に位置する。上場が下場より10cm南西にずれている。堆積土は住居跡堆積土６層である。ピットNo.９は、やや方形のプランをもつ小ピットで上場径14cm。下場径９cm。深さ９cmで、西壁やや南寄りに接してつくられている。堆積土は住居跡堆積土６層である。

〔かまど〕 原形・痕跡共とゞめていない。焼土の堆積は東壁際に２カ所、南壁際に２カ所あり、最も堆積量の多いのが、南壁東寄りである。ここは溝によって切られているためと、ピットNo.12の西側と重複しており、焼土を除去しても、かまどの痕跡は確認されなかった。他の３カ所についても、焼土の下には、かまど跡らしい痕跡は確認されなかった。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは２基（ピットNo.12・13）、他の６基は性格不明である。

第8表　　（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13
上場径	110×114	35×53	44×28	22×30	60×43	38×29	86×87	82×90
下場径	85× 85	17×30	28×17	6× 6	28×16	34×24	63×66	54×59
深さ	20	10	13	11	10	12	22	27
平面形	円形	不整形	やや長方形	楕円形	楕円形	卵形	やや円形	やや円形
堆積土	5層、腐植土シルト	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土	10YR3/3 黒褐色腐植土
性格	不明	不明	不明	不明	不明	不明	貯蔵穴状	貯蔵穴状

〔その他の施設〕　確認されなかった。

〔年代決定資料〕　土師器、長胴甕66点、小型甕33点、内黒坏26点、内外黒色坏1点。須恵器、壷10点、長頸壷7点、坏A類27点、坏B類62点が出土した。検出面から床面までは2cm～10cmのため、ほとんどの遺物はピット内堆積土及び焼土中からの出土である。坏類は大部分回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕　（第25図1～4）　1は、口縁部体上半部1/8以下残存である。口縁部と体部の境は明確ではない。口縁部は短く、やや外反する。体部上半はやや内傾し丸みは残存部下端にわずか見られる。胎土軟質砂粒を若干含む。色調は淡橙色。焼成はやや不良。ピットNo.13出土である。2は、口縁部体上端1/8以下残存である。口縁部はほゞ直線的に外反し、体部上端はほゞ直線的にわずか内傾する。胎土は軟質砂粒を含む。色調は浅黄橙色。焼成は不良で、磨滅著るしい。Q4付近に露出していた。3は、口縁部1/8以下の小破片である。口縁部のみの破片で全容は不明であるが、口端部断面は、小型甕より長胴甕に類似する。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は灰白色。焼成は不良で、磨滅著るしい。ピットNo.13出土である。4は、口縁部体上半部1/8残存である。体部から口縁部まで直線的に外傾しているため深鉢形に近いと思われる。口端部がわずかに外反する。体壁は歪み凸凹がかなりあり、壁面調整が充分施されていない。体部外面に焼土が付着している。胎土軟質粗砂粒を含む。色調は淡橙色。焼成は不良。ピットNo.13出土である。他に口縁部2点、体部49点、底部10点が出土した。口縁部2点は、25図2と類似した成形である。体部破片は、外面が篦削り、篦なでが施される。内面は横なで、下半になると斜め横になでが施される。底部は1点が、外縁を外側に張り出しており、他は張り出さない。大部分ピットNo.12・13出土である。

小型甕　（25図5～7・26図1）25—5は、口縁部体部底部1/4残存である。口縁部はやや外反し、かなり歪み凸凹がある。体壁は中央に丸みがみられ、上下半は丸みが少ない。かなり凸凹がみられる。体部外面下端は横に調整痕があり凹んでいる。底部は外縁が外側に張り出し、下面中央が下にやや張り出している。胎土軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい赤褐色～にぶい橙

色。焼成は不良。ピットNo.12出土である。25—6は、口縁部体上部1/6残存である。長胴甕と同様の成形技法である。口縁部はわずかに外反し、体上部はわずかに丸みをもち内傾する。胎土は軟質石英等砂粒をかなり多く含む。色調は橙色。焼成は不良で、かなり磨滅している。Q2埋土出土である。25—7は、口縁部体上半部1/8残存である。ろくろなで成形であるが、かなり歪みがみられる。口縁部は外反し、体上半部はわずかに丸みをもち、わずかに外傾している。内外面に煤様の黒褐色付着物がみられる。胎土は軟質石英等砂粒を含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良。Q1床面出土である。26—1は、口縁部体上半部1/4残存である。口縁部は内湾気味に外傾し、ろくろなで成形であるが歪みが著るしい。体壁はやや丸みをもつ。ろくろなで成形である。胎土は軟質砂粒を若干含む。色調は灰褐色～にぶい橙色。焼成はやや不良。ピットNo.12出土である。他に体部22点。体下底部7点が出土している。体部破片は8点がろくろなで成形、長胴甕同様体部外面を篦削り篦なでしているもの7点、不明のもの7点である。底部破片は3点が回転糸切り無調整。2点は篦削りか篦なで、2点は不明である。回転糸切りの2点は、底径が7.6cmと7.4cmである。

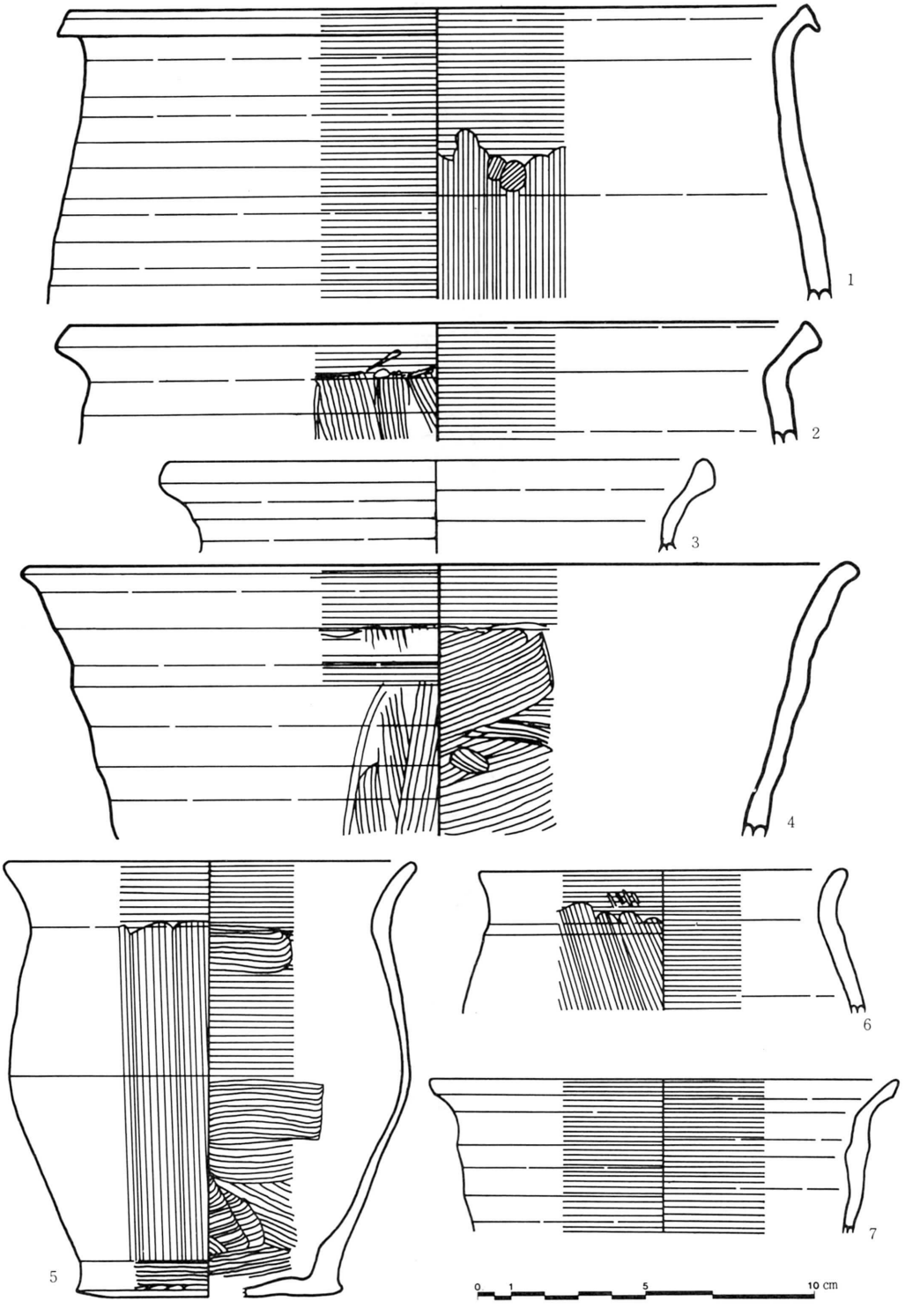
内黒坏　(26図2・3) 2は、口縁部体部1/3残存である。口縁部外面には黒色処理は認められず、黒斑様のものが1カ所、煤様のものが体部の一部まで認められる。体部外面下端に篦削り調整は認められない。胎土は軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良。南壁東側焼土内出土である。2は、口縁部体上部1/8残存である。口縁部は内外面共黒色処理は消えて、内面磨きのみ認められる。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.12出土である。他に口縁部6点、体部14点、底部6点が出土している。口縁部は3点が外面まで黒色処理が認められ、内1点には磨きが認められる。他の3点は内面のみ磨きと内黒処理である。体部破片は、皆磨滅しており調整の有無は不明である。底部破片は回転糸切り無調整2点、体下端底部下面に回転篦削り調整が認められるもの1点、外面磨滅のため不明のもの1点である。

内外黒色処理坏　体部の小破片1点である。磨きは内外面共明確でない。Q2埋土出土である。

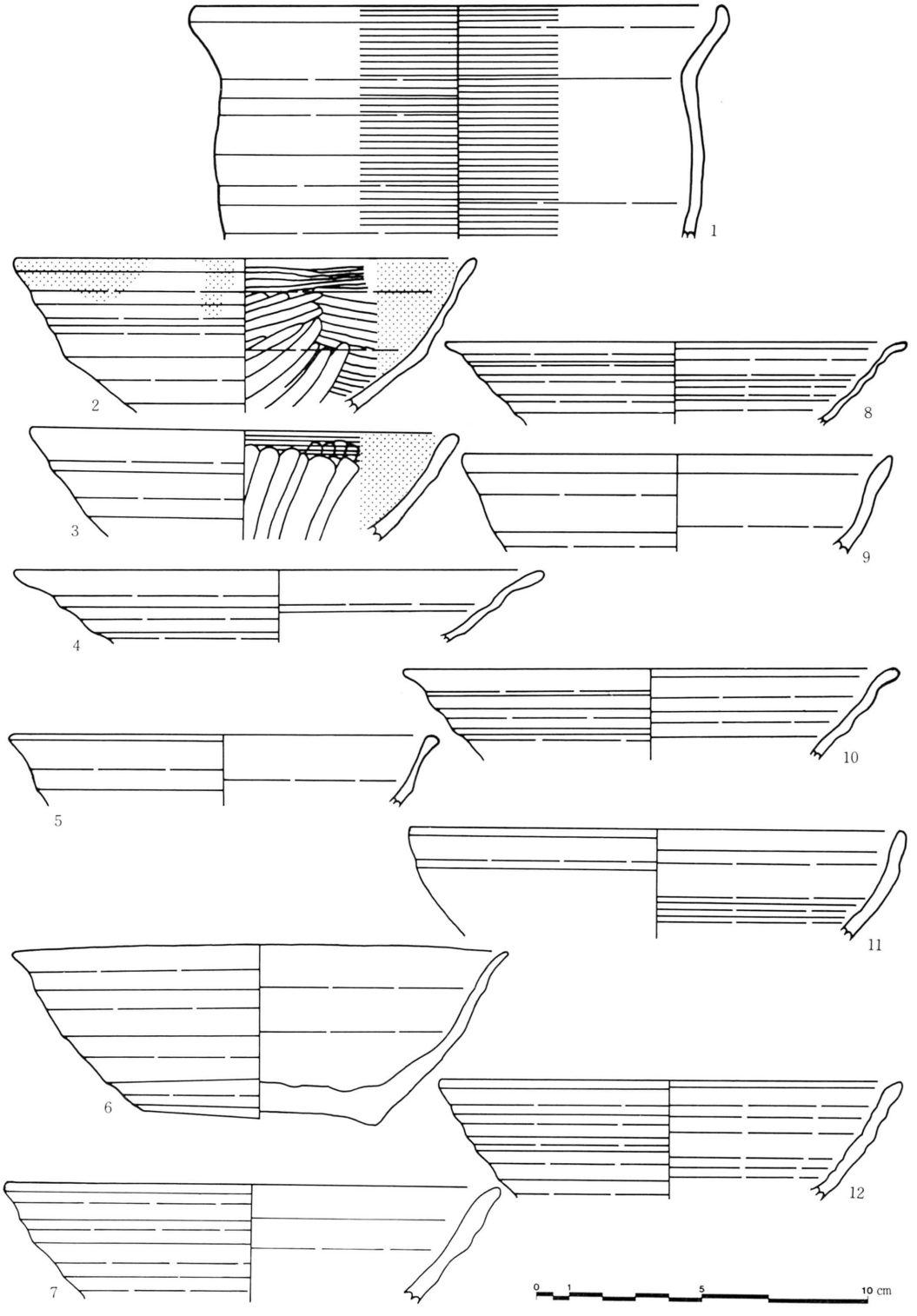
須恵器

壷　10点出土しているが、いずれも体部小破片である。内外面に平行叩き目痕のあるもの1点、内外面共横なでのもの2点、外面平行叩き目痕、内面放射状叩き目痕のもの4点。外面平行叩き目痕、内面横なでのもの2点、外面剝離し、内面平行叩き目痕のもの1点である。

長頸壷　口縁部破片1点。頸部破片1点。肩部破片1点。体部破片4点である。口縁部破片は、かなり外反し、口端部が上に挽き出される。胎土硬質砂粒を若干含む、色調は灰色、胎部がにぶい赤褐色。焼成良好である。頸部破片も、胎土硬質砂粒を若干含む。色調は灰色。胎部はにぶい赤褐色。焼成良好である。壁の厚さ、胎土・色調・焼成等、口縁部破片と類似する。Q2埋土出土である。肩部破片は、内面にオリーブ黄色の自然釉が付着している。胎土は硬質砂



第25図　Bd62 住 出 土 遺 物 Ⅰ



第26図　Bd62 住 出 土 遺 物 Ⅱ

粒を若干含む。胎土灰白色。焼成は良好。Q4埋土出土である。体部破片中２点は、篦削り篦なでが施され。内面も縦に篦なでが施されている。一部に灰オリーブ色の自然釉が付着する。胎土は硬質砂粒を若干含む。色調は外面黒色、内面灰色、下半の胎部はにぶい赤褐色。焼成良好である。１点はピットNo.13、１点は南壁東側焼土内出土である。他の２点中１点は、外面黒色、内面灰色、胎部にぶい赤褐色。焼成良好である。南壁東側焼土内出土で、もう１点は、内外面共横なでである。胎土硬質砂粒若干を含む。色調は灰色。焼成良好である。南壁東側焼土付近出土である。

坏Ａ類　(26図４・８～12) ４は、体壁がかなり外傾し皿形に近い。ろくろなでによる凸凹がみられる。胎土硬質砂粒若干を含む。焼成は良好である。Q2埋土出土である。８は、体壁がかなり外傾し皿形に近い。ろくろなでによる凸凹は、４より著るしく、体壁も薄い。胎土硬質砂粒若干を含む。焼成良好である。Q2・Q3床面出土である。色調は灰色に近い。９は、かなり磨滅し、外面の大部分はろくろなでの痕跡が消えている。胎土やや軟質砂粒を含む。焼成は良くない。Q3床面出土である。10は、口縁部が褐灰色に近い、ろくろなでによる凸凹がみられる。胎土硬質砂粒若干を含む。焼成は良好である。南壁東側焼土内出土である。11は、上半部に丸みがみられ、椀形に近い器形と思われる。胎土やや硬質砂粒をわずか含む、焼成はあまり良くない。Q1埋土出土である。12は、かなり磨滅しているが、ろくろなでによる凸凹がかなり認められる。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はあまり良くない。Q2埋土出土である。他に口縁部14点。体部５点、底部２点が出土した。口縁部は外反するもの７点、わずかに外反するもの６点。直線的なもの１点である。体部破片は丸みの大きいものはなく、みなやや直線的で、ろくろなで成形無調整である。底部破片は２点共回転糸切りで、１点の底径は約６cmである。

坏Ｂ類　(26図５～７) ５は、かなり小型である。胎土はやや軟質砂粒をかなり含む。体壁はろくろなでによる凸凹が著るしい。焼成は不良である。南壁東側焼土内出土である。６は、口縁部に若干歪みがみられる。胎土はやや軟質石英等粗砂粒をかなり含む。焼成はやや不良である。ピットNo.12南側出土である。７は、体壁に丸みがあまりみられず、凸凹のある小破片で、胎土やや軟質砂粒をかなり含む、焼成はやや不良である。Q1埋土出土である。他に口縁部14点。体部35点。底部10点が出土した。口縁部破片は、いずれもわずかに外反するか直線的である。体部破片は、いずれもろくろなで成形無調整で、２点はＡ類の焼き損じと思われ、胎土硬質表面の一部が灰色である。底部破片はいずれも回転糸切りで、１点はＡ類の焼き損じと思われ、胎土硬質で胎部が灰色である。

(9)　Be06住　(第27図)

〔遺構の確認〕　基準線から西へ4.22m～東へ2.06m。基準点より北へ10.52m～16.48mの地点

Be03地区とその周囲に暗褐色～黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色シルト質土である。(第３次調査)

〔重複・増改築〕 上場径50cm前後のピットが、北壁際東寄。かまど手前、西壁際北側。西壁際中央に４カ所検出された。いずれも上層に径20cm前後の礫を３個～５個埋めており、性格不明の石組ピットと思われたが、西壁中央のピットを半掘りすると、丸太材に釘金を巻き付けたものが検出された。旧地主に依れば、ぶどう棚を支えたもので、戦前にぶどう栽培をしたとの事であり、Ah12住、Ai09住にも検出され、50年３月の第２次調査の際、方形周溝の内外で検出された礫を含む小ピットも同じものであった。

〔平面形・方向〕 東西約5.5m、南北約5.4mのほゞ方形であるが、西壁より東壁が約40cmほど長く、北壁より南壁が20cmほど長い。また北壁がやや丸みをもち、中央やや北寄りが30cmほど張り出しており、歪んだ形をしている。主軸はほゞ東向きである。

〔堆積土〕 床面の一部が、検出面に露出した個所もあり、土層は薄く、攪乱もみられた。

１層　10YR3/3暗褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、焼土炭化物シルト若干。粉パミ粒状。

２層　10YR3/2黒褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、粉状パミスを粒状に含む。

３層　10YR3/2黒褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、シルトをブロック状に含む。

４層　10YR3/2黒褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、シルトを若干含む。

５層　10YR3/3暗褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、焼土、粉状パミスを若干含む。

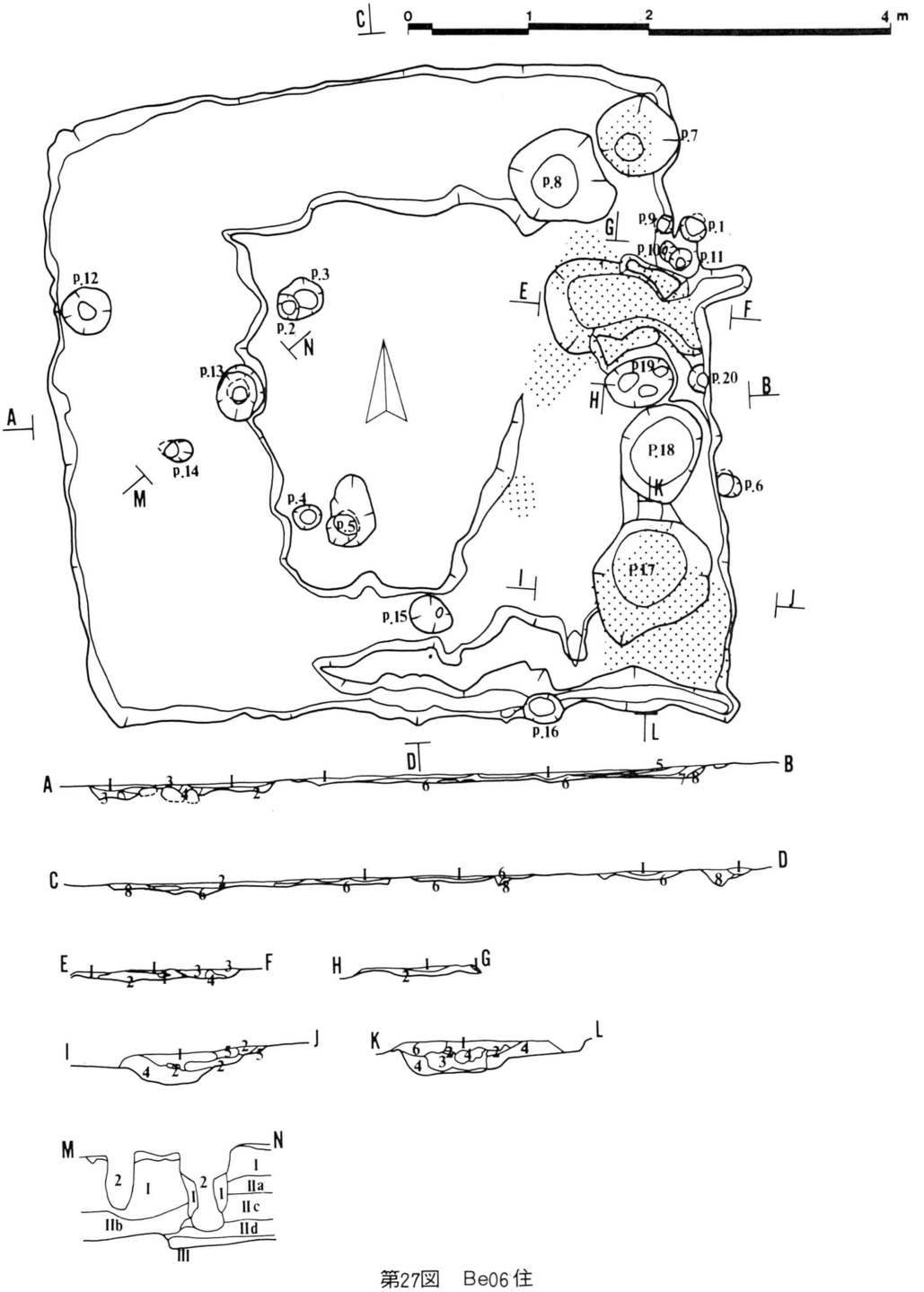
６層　10YR3/3暗褐色腐植土層、やや密で、粘性なし、焼土、炭化物、粉パミ、遺物を含む。

７層　10YR4/3黄褐色腐植土・シルト混合層、やや密で、粘性若干あり。

８層　10YR5/4黄褐色シルト層、密で、粘性ややあり、腐植土をわずかに含む。

〔床面〕 中央部は、地山をそのまま利用し、平坦である。北側と西側、南側は掘方状の凸凹がみられ中央部より３～10cmほど低くなっている。床面より壁への立ち上がりは緩やかな所が大部分で、壁高は２～10cmである。

〔柱穴〕 柱穴は10個所にあり、ピットNo.１とピットNo.９・10・11が東壁北側に、ピットNo.２と３が北西側やや中央寄りに、ピットNo.４と５が南西側やや中央寄りに、ピットNo.６が東壁南側に、ピットNo.14が西側にある。ピットNo.９～11は、ピットNo.１の補助的なものかもしれない。ピットNo.２と３は並立か、どちらかが補助的なものと思われるが、切り合いで、ピットNo.２の方が後でつくられている。ピットNo.４と５も、No.２と３と同じ関連と思われ、少し離れているがNo.５の方がNo.３と同様上場・下場共にNo.４よりやや大きく、上場が若干崩れている。ピットNo.14も柱穴状で、補助的な役割をしたのかもしれない。ピットNo.15と16は、小ピットであるが、柱穴とは断定できない。主柱穴はいずれも東寄りにつくられ、No.１とNo.６は東壁の外側につくられ、ピット２～５もかなり東寄りにつくられている。


C
0
1
2
4 m
P.7
P.8
P.9
P.1
P.10
P.11
G
E
F
P.12
P.3
P.2
N
P.13
P.19
P.20
B
H
A
P.18
P.14
M
K
P.6
P.4
P.5
P.17
I
J
P.15
P.16
L
D
A
B
C
D
E
F
H
G
I
J
K
L
M
N
I
IIa
IIc
IIb
IId
III

第27図　Be06住

第9表

（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 9	No. 10	No. 11	No. 14
上場径	22×21	19×21	25×30	25×22	26×27	20×20	14×16	13×18	17×18	23×19
下場径	16×20	12×11	20×25	14×12	23×20	19×22	14×12	5× 9	8× 9	16×12
深さ	31	50	41	47	45	38	27	24	24	43
堆積土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/3 暗褐色腐植土	10YR3/2 黒褐色腐植土

〔かまど〕　東壁やや北寄りにつくられている。燃焼部は東西130cm、南北15～50cmで、5cmほど浅く掘り下げている。底面にかなりの凸凹がみられる。堆積土は3層（27図）で、1層 7.5YR3/2黒褐色腐植土、密で、粘性なし、焼土・炭化物・シルト・小礫を含む。2層、2.5YR2/2 極暗褐色焼土腐植土混合層、やや密で、粘性なし、炭化物・遺物・粉状パミスを含む。3層 7.5YR3/4暗褐色腐植土・シルト・焼土混合層、密で、粘性なし、炭化物・粉状パミス・小礫を含む。釉は両方共に残存しているが、かなり崩壊し痕跡をとゞめているだけと思われる。北側は長さ64cm、巾15～25cm、床面からの高さ約4cmである。南側は長さ56cm。巾9～25cm。高さ約3cmである。煙道と煙出は確認されなかった。北袖の東側に壁を長さ40cm、巾25cmほど掘り込んだ一見煙道様の張り出しがある。堆積土に若干炭化物・焼土は含まれるが、燃焼部からは、かなり屈曲し、壁は焼けておらず、急に立ち上がっており、煙道とは断定し難い。

〔貯蔵穴〕　貯蔵穴状ピットと思われるものはNo.7・8・17・18・19の5つであり、他のNo.12・15・16・20は性格不明である。

第10表

（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 7	No. 8	No. 12	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20
上場径	58×70	90×76	41×38	36×32	33×23	98×106	65×81	55×42	20×24
下場径	25×22	38×47	14×14	5×10	22×16	61× 64	50×60	約40×25	10×12
深さ	50	36	18	17	16	21	29	11	11
堆積土	10YR3/3 暗褐色腐植土・焼土	10YR3/3 暗褐色腐植土・シルト	10YR3/2 黒褐色腐植土・シルト	10YR3/3 暗褐色腐植土・シルト	10YR3/3 暗褐色腐植土・シルト	10YR5/3 黄褐色腐植土・焼土・シルト	10YR4/3 黄褐色腐植土・シルト	10YR5/3 黄褐色腐植土・焼土	10YR5/3 黄褐色腐植土・シルト

〔その他の施設〕　住居跡の中央西寄りの所に、ろくろ台を据え付けたピット（No.13）が検出された。上場径東西41cm、南北46cm。下場径27cm。深さ約67cmで、深さ約15cmから54cmまでの間に、腐植土とシルトの混合土を周囲に埋め突き固めて、ろくろ台を固定している。(27図中のピットNo.13セクション図）周囲に若干の粘土塊が発見された。

南壁半分の下に、周溝様の溝が検出された。長さ約3.5m、巾約14～40cm。深さ約10cmで、東端が東壁より東に14cmほど張り出している。

〔年代決定資料〕　土師器、長胴甕110点、小型甕35点、内黒長胴甕1点、内黒坏41点、内黒高台坏3点、内外黒色坏7点、内外黒浅鉢1点。須恵器、壷5点、長頸壷1点、坏A類4点、坏B類449点。高台坏（B類系）7点。ミニチュア土器？11点。有孔土製玉3点。紐状土製品10点、土製品1点。刀子2点が出土した。小型甕、坏類、浅鉢の大部分は回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕　(28図１) １は、口縁部体上部⅛残存である。口縁部はかなり外反している。胎土はやや軟質粗砂粒をかなり含む。色調は淡橙色。焼成は不良である。Q1床面出土である。他に口縁部４点、体部103点、底部２点が出土している。口縁部４点中３点は28－1同様かなり外反し、口端部は上に挽き出され、内外面共横なでである。他の１点は口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもち薄い。体部は外面が縦に粗い箆削り、内面は横なで後乱暴に縦と斜めに箆なで痕がみられる。体部は外面が箆削り、箆なでが縦に施される。上部は横なでが多い。下端部を横に箆削り調整しているものも若干ある。内面は上半部横なで、下半部は横か縦のなでが多い。横に刷毛目痕のみられるものが若干ある。底部破片１点は上面に刷毛目痕、下面は箆削りが施される。もう１点は上下両面共箆なでである。

小型甕　(28図２) ２は、口縁部体上部⅛残存である。口縁部はやや外反する。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。色調は淡橙色。焼成はやや不良である。Q4埋土出土である。他に口縁部４点、体部30点が出土している。口縁部４点はいずれも外反し、口端部が上に挽き出される。体部破片は、ろくろなで成形のもの13点、外面に縦の箆削り箆なでの施されるもの13点、不明４点である。口縁部破片の推定口径は、いずれも15cm以下である。

内面黒色処理甕　体上端の小破片で、全容等詳細は不明である。外面は横なで後、縦に若干の箆なで痕が認められる。内面は縦に磨き痕が認められ黒色処理がなされる。体壁は上端がやや外反し、以下はやや丸みをもっている。Q1床面出土である。

内黒坏　(28図３・４) ３は、口縁部体部¼残存である。口縁部外面まで磨きと黒色処理が施されている。胎土やや軟質砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良である。ピットNo.17埋土第２層（焼土）出土である。４は、口縁部体上半部⅙残存である。磨きと黒色処理は内面のみである。胎土やや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良である。Q2埋土出土である。他に、口縁部19点、体部14点、底部６点が出土した。口縁部破片は、やや外反するもの４点、わずかに外反するもの９点、直線的なもの６点で、外面まで黒色処理のみられるものが５点あり、いずれも磨きは認められない。体部破片は、いずれもろくろなで成形無調整である。底部破片はいずれも回転糸切りで、調整は認められない。Q4埋土出土のものは、底径5.2cmで、内面に磨きは施されない。Q3床面出土のものは、底径5.5cmで、内面は放射状磨き黒色処理である。ピット18出土のものは、底径5.5cmで、放射状磨き内黒処理である。Q2床面出土のものは、上面の磨きが平行に施された後、それと直交した平行な磨きを施している。ピットNo.7出土のものは内面放射状磨き、Q3埋土出土のものも放射状磨きである。

内黒高台坏　(28図５) 口縁部体上半¼。底部高台部⅕残存である。体部と底部は接合しない

が、胎土と色調が類似し、同一個体と思われる。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ。体壁は下半部にかなりの丸みがみられる。内面と底部上面は磨きのみで黒色処理は完全に消えている。高台部は内湾、内傾し、壁はかなり薄い。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。ピットNo.17埋土第２層（焼土）出土である。他の１点は体下端¾底部ほゞ全部残存で、高台部は剝離欠損する。底部上面はやや不鮮明であるが平行に磨かれる。底径は４.７cmで、Q４床面出土である。他の１点は体下端⅓、底部¼、高台部⅙残存である。底部上面は放射状磨き黒色処理である。高台部の高さは1.5cmで、内湾しかなり内傾する。もう１点は、高台部小破片で、28－５と類似するが、高台部の高さがやや低い。

内外面黒色処理坏　（28図６）６は、口縁部体部¼、底部若干残存である。体部中央がかなり丸みをもち、体下半部と上半部はほゞ直線的で、かなり外傾している。胎土はやや軟質砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良である。ピットNo.18出土である。他に口縁部４点、体部１点、口体底⅛以下のもの１点が出土した。口縁部破片は、外反するもの１点、直線的なもの３点である。体部破片は、かなり丸みがあり、表面がかなり磨滅している。口体底の小破片は、器高約4.1cmで、体壁は、口縁部、体上半部、下半部がほゞ直線的で、体中央にかなり丸みがある。底部上面は放射状磨き、下面は回転糸切り無調整である。

内外面黒色処理浅鉢　（28図８）口縁部½、体部大部分、底部全部残存である。体部中央が外側に張り出し、壷型に近い形状である。外壁の磨きは明確であるが、内面の体底面はほとんどみられない。底部下面は、回転糸切り無調整である。Q２埋土出土である。

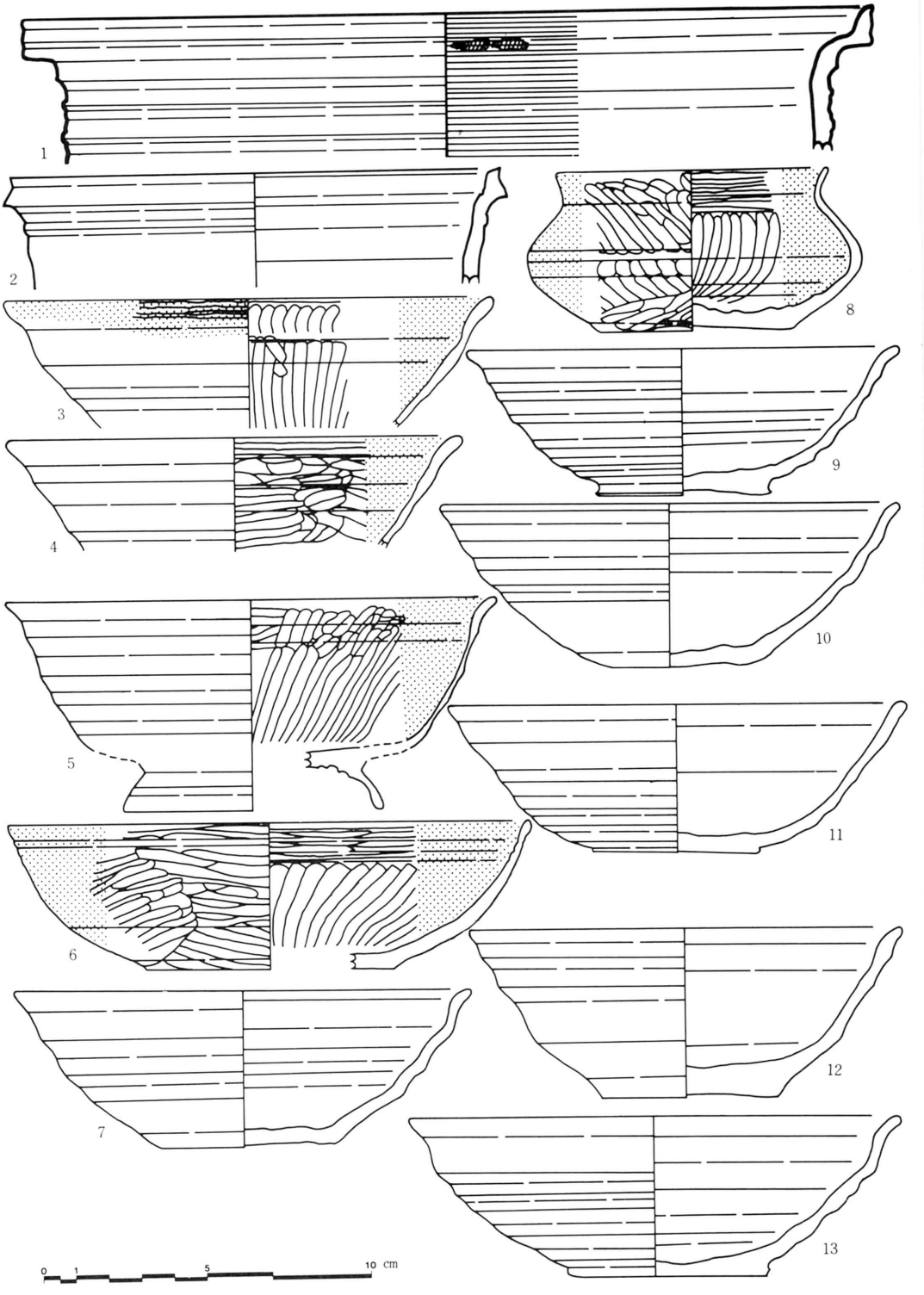
須恵器

壷　体部小破片４点が出土した。１点は平行叩き目痕が、内外面に施され、内面は磨り消している。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は表面が灰色、胎部がにぶい橙色である。焼成は良好である。ピットNo.18・19、Q４埋土出土である。他の１点は平行叩き目痕が内外面に施され、内部の一部は磨り消している。胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は灰白色。焼成はやや良好である。Q２埋土出土である。他の１点は、外面平行叩き目痕、内面波状叩き目痕がみられる。胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は灰色。焼成は良好である。Q３埋土出土である。他の１点は、内外面に叩き目痕がみられるが、小破片であるため詳細は不明である。外面に赤褐色の自然釉が付着している。胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は表面は灰色、胎部はにぶい橙色である。焼成成は良好である。Q２埋土出土である。他の１点は、外面横なで後一部に縦の箆なで痕がある。内面は横なでである。胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は灰色～灰白色。焼成は良好である。Q４南東隅出土である。

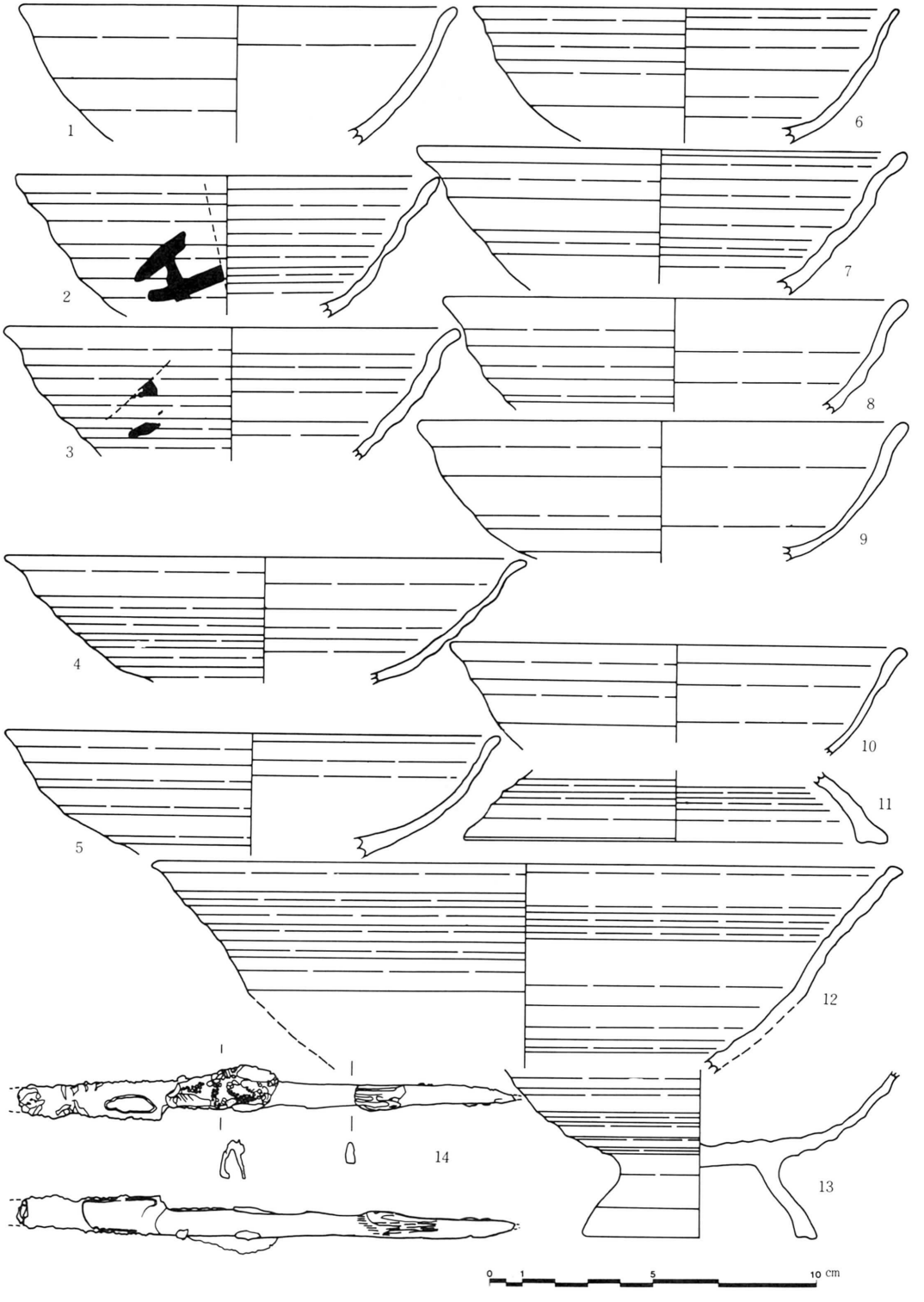
坏Ａ類　口縁部１点、体部１点、体下底部２点が出土した。口縁部破片は⅛以下残存で、かなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はわずかに丸みをもち凸凹がかなりみられる。胎土硬

質で砂粒をわずか含む、色調は灰色～灰白色。焼成は良好である。Q1床面出土である。体部破片は、ろくろなで成形無調整で、胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は灰色。焼成は良好である。体下底部のうち1点は、共に⅓残存で、ろくろなで成形無調整回転糸切りである。胎土やや硬質砂粒若干を含む。色調は灰色。焼成は良好である。ピットNo.17出土である。もう1点は小破片で、ろくろなで成形無調整である。胎土硬質砂粒をわずか含む。色調は灰色。焼成は良好である。柱居跡内検出面に露出していた。

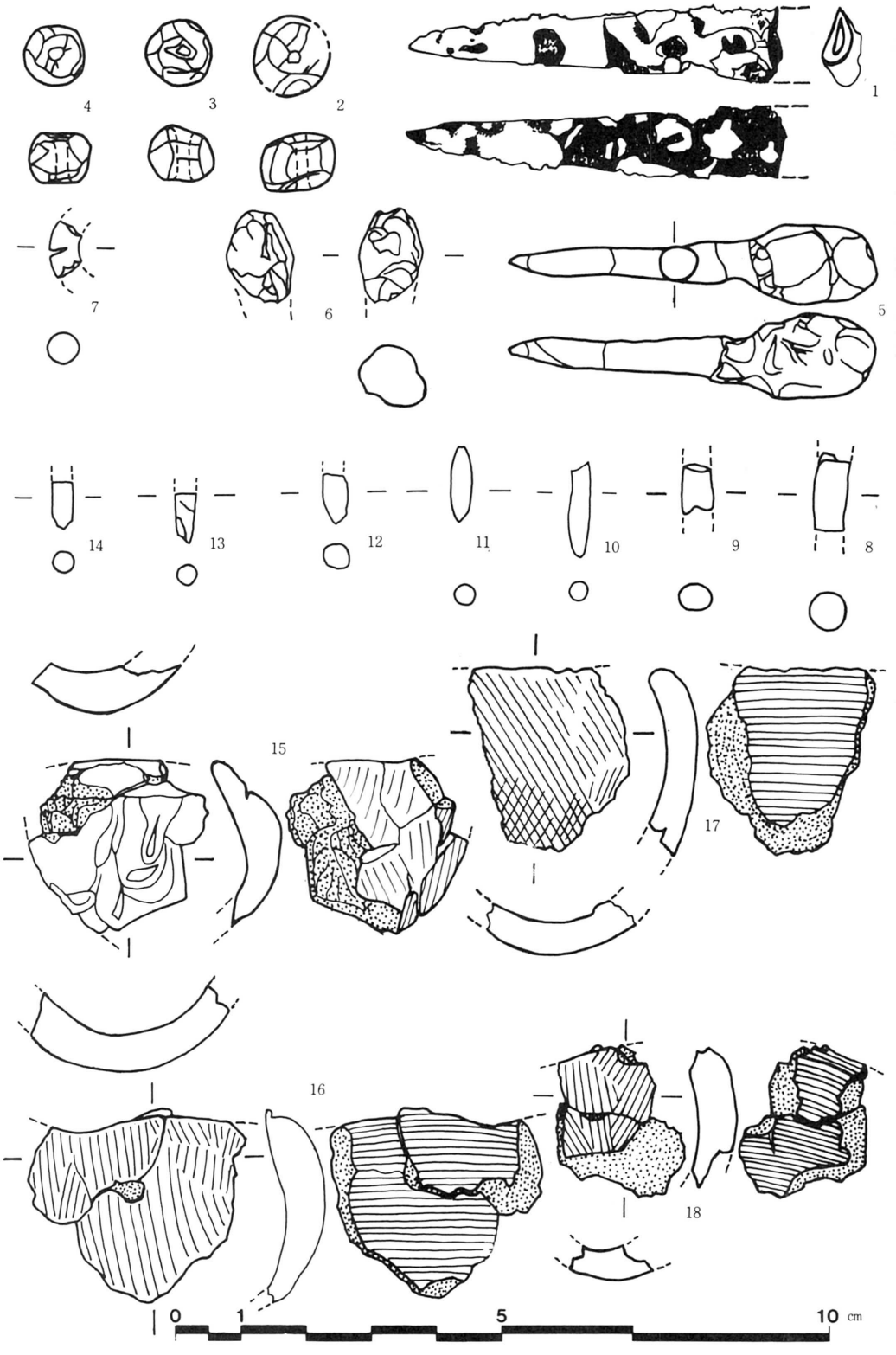
坏B類　(28図7・9—13、29図1～10) 28－7は、全体にやや歪みがみられ、体壁にかなり凸凹がみられる。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.17出土である。28—9は、底部にかなり凸凹がみられ、底部が下に張り出す。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。ピットNo.18出土である。28－10は、体部の凸凹少なく、体下端と底部の境がはっきりしない。底部下面に1.1×7mmの黒色化した部分がある。胎土やや軟質石英粒等砂粒を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.17の2・3層出土である。28－11は、体壁に凸凹は少なく、底部が若干下に張り出す。内外表面、特に体部外面下半、底部下面と、口縁部内面に煤かタール様の黒褐色付着物が認められる。胎土やや軟質砂英粒等砂粒をかなり含む。焼成はやや不良である。Q4床面とピットNo.17第2層出土である。28－12は、体壁に凸凹少なく、底部が下に張り出している。体壁と底部が他よりかなり厚い。体部外面の一部が黒色化している。胎土軟質石英粒等砂粒をかなり多く含む。焼成やや不良である。ピットNo.17の3層出土である。28－13は、体部上半に丸みがみられ、下半部はほゞ直線的で、凸凹は少ない。底部は下に張り出す。胎土やや軟質石英粒等砂粒をかなり多く含む。焼成はやや不良である。Q1床面出土である。29－1は、体上半部に丸みがみられ、体壁の凸凹はほとんどない。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。ピットNo.17の2層出土である。29－2は、体下半部に丸みがあり、体壁はかなり凸凹がある。墨書が体外面にあり、「千」か「工」と思われるが、かなり薄く明確でない。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成不良である。ピットNo.17の2層出土である。29－3は、体上半部にやや丸みがあり、体外面に墨書が認められる。磨滅のため薄く、字体は不明である。胎土は軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。Q4埋土出土である。29－4はかなり歪みがあり、体下半に丸みがみられる。体壁の凸凹は少ない。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。ピットNo.17の3層出土である。29—5.は、体部中央に丸みがみられ、体壁の凸凹はわずかである。内面の一部に煤かタール様の黒色付着物がみられる。胎土軟質石英等砂粒をかなり多く含む。焼成は不良である。ピットNo.18南縁西寄り出土である。29－6は、体下半の丸みが強い。体壁の凸凹はわずかである。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。ピットNo.18出土である。29－7は、口縁部体部共に歪みがあり、体部の丸みはほとんど無く、体壁の凸凹が著るしい。胎土軟質石英等砂粒をかなり多く含む。焼成は不良である。ピットNo.17



第28図　Be06 住 出 土 遺 物 Ⅰ



第29図　Be06住出土遺物Ⅱ



第30図　Be06 住 出 土 遺 物 Ⅲ

の3層出土である。29－8は、体上半部の丸みが強い。体壁は凸凹がかなりみられる。胎土軟質砂粒をかなり多く含む。焼成は不良で、磨滅している。ピットNo.17の2層出土である。29－9は、体上半の丸みが強く、体壁の凸凹が少ない。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良で、磨滅している。ピットNo.17の3層出土である。29－10は、体下半に丸みがみられ、体壁の凸凹は少ない。胎土軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.17の3層出土である。他に、口縁部114点、体部280点、底部39点が出土した。大部分が、ろくろなで成形無調整。回転糸切りで、胎土はやや軟質～軟質で砂粒を含む。色調は橙色系である。焼成はあまり良好ではない。

高台坏　(29図11・13) 11は、高台のみ⅓残存で、かなり大型と思われる。残存部の高さは2.2cmで、やや内湾しかなり内傾している。畳付部の厚さは9mmで、中央がやや凹んでいる。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。ピットNo.18出土である。13は、体下半⅓、底部½高台部⅔残存である。体下半部は、かなり丸みをもち、凸凹が著るしい。底部下面は高台貼付のための圧痕のみである。高台部は内湾内傾し、畳付部中央が凹む。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。ピットNo.13付近とピットNo.17、No.18出土である。他に底部1点、高台部4点が出土した。底部破片は、推定直径約12cm、厚さ1cmと大型で、高台部貼付痕がみられる。¼残存のみで器形等は不明であるが、高台坏に便宜上入れた。高台部破片は、2点が外反内傾、2点が内湾内傾である。畳付部中央が凹むもの3点、平坦なもの1点である。

浅鉢　(29図12) 須恵器坏B類と同質同色で、かなり大型である。口縁部体部⅓残存で、体部下半に丸みがみられる。体壁はろくろなでによる凸凹がみられる。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。Q2埋土出土である。

土製品　(30図2～18) 2～4は、有孔玉類である。ピットNo.17最下層出土である。5～14は紐状で、作製の目的は不明である。15～18は、ミニチュアの土器で、破片のため器形は不明であるが、甕形に近いと思われる。外面は指頭による縦方向のなで、外面は指頭による横方向のなでである。焼成をしているが、みな不良である。他に7点出土した。また形態不明で有孔の土製品が1点出土した。いずれも玉類と同地点出土である。

刀子　(29図14、30図1) 29－14は、鋒部と茎尻が欠損している。酸化と剝離が著るしい。平造り、甲伏鍛と思われる。30－1は、鋒部と先半分で、酸化剝離がかなりみられる。平造り、甲伏鍛と思われるが、明確ではない。両者共ピットNo.17出土である。

粘土塊　ピットNo.13と、ピットNo.19から出土している。No.13出土の粘土は、7.5YR⅚明褐色で、かなり粘性が強い。砂粒をほとんど含まない。約5×5×2.5cmの大きさで、約105gの重さである。測定時は完全に乾燥しており、調査時にはこれよりやや重量があったと思う。表面に禾木科系と思われる植物の葉の圧痕が2カ所、指頭痕と思われる圧痕が1カ所みられる。ピ

ットNo.19出土の粘土は、2.5Y 7/6 明黄褐色で、かなり粘性が強く、指圧痕もつかない。若干砂を含む。約10×10×3.5cmの大きさで、約540gの重量がある。表面に焼土・炭化物・遺物が腐植土と混合し付着している。

⑽ Bf30住 （第31図）

〔遺構の確認〕 基準線から西へ23.4m～29.51m。基準点から北へ6.54m～13.44mの地点、Bf30地区とその周囲に黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色シルト質土である。(第1次調査)

〔重複・増改築〕 方形周溝の南西辺が、住居跡の北東部と切り合っている。方形周溝は、住居跡の東壁やや北寄りと、かまどの大部分を切り取り、Q1床面を巾約80cm、深さ約10cm掘り下げ。北壁東寄りを切り取って、北北西へ延びている。

東壁南端を切って、Q4床面から壁外に跨る円形のピットも住居跡に伴なうものでないと思われる。但し、このピットの底面北西側にある長方形の小ピットは、住居跡に伴うものと思う。

南壁東側から南東隅は、調査時にも電柱が残存しており、南壁東半分と南東隅は、壊されており、壁と床面は残存していない。

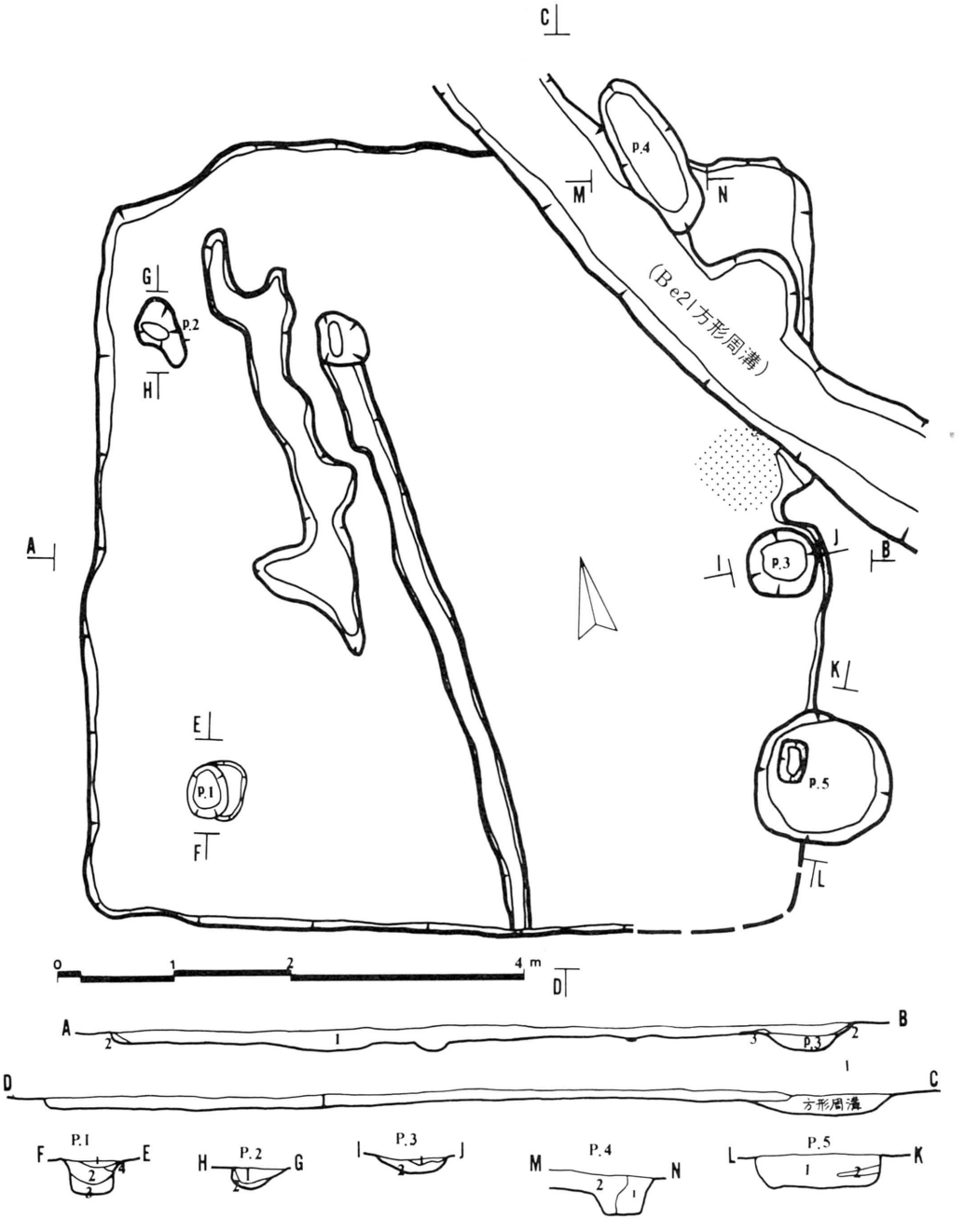
床面中央やや西寄りを2条の溝が南北に延びている。住居跡実測図セクションでは、新旧関係と住居に伴うものかどうかは不明である。また、東側の溝は南壁下で切れている様であるが、住居跡全景写真を見ると、更に南壁を切って、南へ延びているようにも見える。従って2条の溝の関連、北西部にあるピットNo.2との関連等も不明である。

方形周溝西辺の東壁に接し、住居跡のQ1床面から北壁東寄り、北壁外に跨る長楕円形のピットは、住居跡平面図では、方形周溝西辺の東壁を一部切り取り、住居跡のQ1床面を掘り下げ、住居跡北壁を切り取ってつくられている。従って住居跡の後に方形周溝がつくられ、その後に長楕円形ピットがつくられたと思われる。

〔平面形・方向〕 東西6.2m。南北6.7mの長方形である。北西隅は、北東隅や南西隅の様な角を持たず、壁が内側へ張り出した形をしている。また南東隅は、前述の通り電柱が建っており、壊されているために輪郭は不明である。主軸はE－12°－Sで、ほゞ東を向く。

〔堆積土〕 堆積土は2層であるが、床面上には1層の堆積土だけで、他の1層は壁際だけに見られる。1層 7.5YR 2/2 黒褐色腐植土、やや密で、粘性はほとんどない。炭化物と焼土を一部に若干含む。また7.5YR 7/1 灰白色粉状パミスを中央部に含む。2層 7.5YR 4/4 褐色シルト質土（火山灰土）、粗で、粘性は若干ある。腐植土が若干混入する。

〔床面〕 ほゞ平坦であるが、床面中央部がやや浅く、壁際がやや深い所が多い。掘り方や貼床は確認されなかった。地山面を床として直接利用している。床面から壁への立ち上がりは、


C
P.4
M
N
(Be21方形周溝)
G
P.2
H
A
I
P.3
J
B
K
E
P.1
F
P.5
L
0
1
2
4 m
D
A
B
P.3
D
C
方形周溝
P.1
F
E
P.2
H
G
P.3
I
J
P.4
M
N
P.5
L
K

第31図　Bf30住

急角度な個所が多く、壁高は10～15cmである。

〔柱穴〕 不明である。もしピットNo.1とピットNo.2が柱穴とすれば、東壁南側にある後世攪乱の円形ピットNo.5底面北西側にある長方形のピットは、柱穴と推定される。また住居跡全景写真には、切り合っている方形周溝の西壁下に小ピットがあり、北東側の柱穴と推定される。ピットNo.1は、南西側Q3にあり、上場径東西36cm、南北46cm。下場径東西23cm、南北33cmの卵形で、深さは床面より31cmである。ピットNo.2は北西側Q2にあり、上場径東西38cm、南北60cm。下場径13cm×37cmの楕円形で、深さは床面より26cmである。攪乱円形ピットNo.5の底面にある長方形ピットは、上場東西24cm、南北38cm、下場東西11cm、南北25cm、床面からの深さ31cmである。北東側Q1の小ピットは平面図記入が無いので不明である。位置は大体N11.6mW24.2mの地点と思われる。或は方形周溝西辺東壁の張り出し部かもしれない。

〔かまど〕 東壁中央やや北寄りにある。燃焼部の北半分と、煙道部・煙出部は、方形周溝に切られて残存しない。燃焼部は横約70cm、奥行90cmである。セクション図がないため堆積土の土性・土色・厚さは不明であるが、焼土が円形に堆積し、径約70cmである。東壁に、住居内に向って、巾約30cm、長さ40cmの張り出しがあり、南側の袖跡と思われる。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは、かまど跡南側、東壁中央下にある。上場径東西62cm、南北50cm。下場径東西38cm、南北36cm。深さ15cmで、歪みのある円形である。堆積土は、上層が7.5YR 3/2黒褐色腐植土、密で、粘性なし。シルト質土が若干混入する。下層は、7.5YR 3/4暗褐色腐植土、密で、粘性なし。焼土炭化物遺物を含む。シルト質土が混入する。

〔その他の施設〕 確認されていない。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕45点、小型甕18点、内黒長胴甕1点、内黒坏20点。須恵器、壷7点、小型壷1点、坏A類15点、坏B類30点。用途名称等不明の鉄製品1点が出土している。小型甕と坏類は回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕 (32図1) 1は、口縁部体上半部1/3残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上と外側に強く挽き出される。体壁はやや丸みをもち、ほゞ直立する。かなり歪みと凸凹がみられる。胎土は軟質砂粒をかなり含む。色調は淡橙色～橙色。焼成は不良で、磨滅している部分がかなりみられる。ピットNo.3出土である。他に口縁部1点、体部42点、底部1点が出土した。口縁部破片は、かなり外反し、口端部が上に挽き出されている。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は橙色。焼成は不良である。Q4埋土出土である。体部破片は、外面が縦に箆削り箆なでが多い、上端部が横なでのものが若干ある。体部下端外面に平行叩き目痕が右上⟷左下に付くものが1点みられる。内面は上半部横なで、下半部横なでが大部分で、下半部に縦なでのもの

が若干みられる。底部破片は上面不定方向になで、下面も篦なでで、体部外面下端に横なで調整が施される。

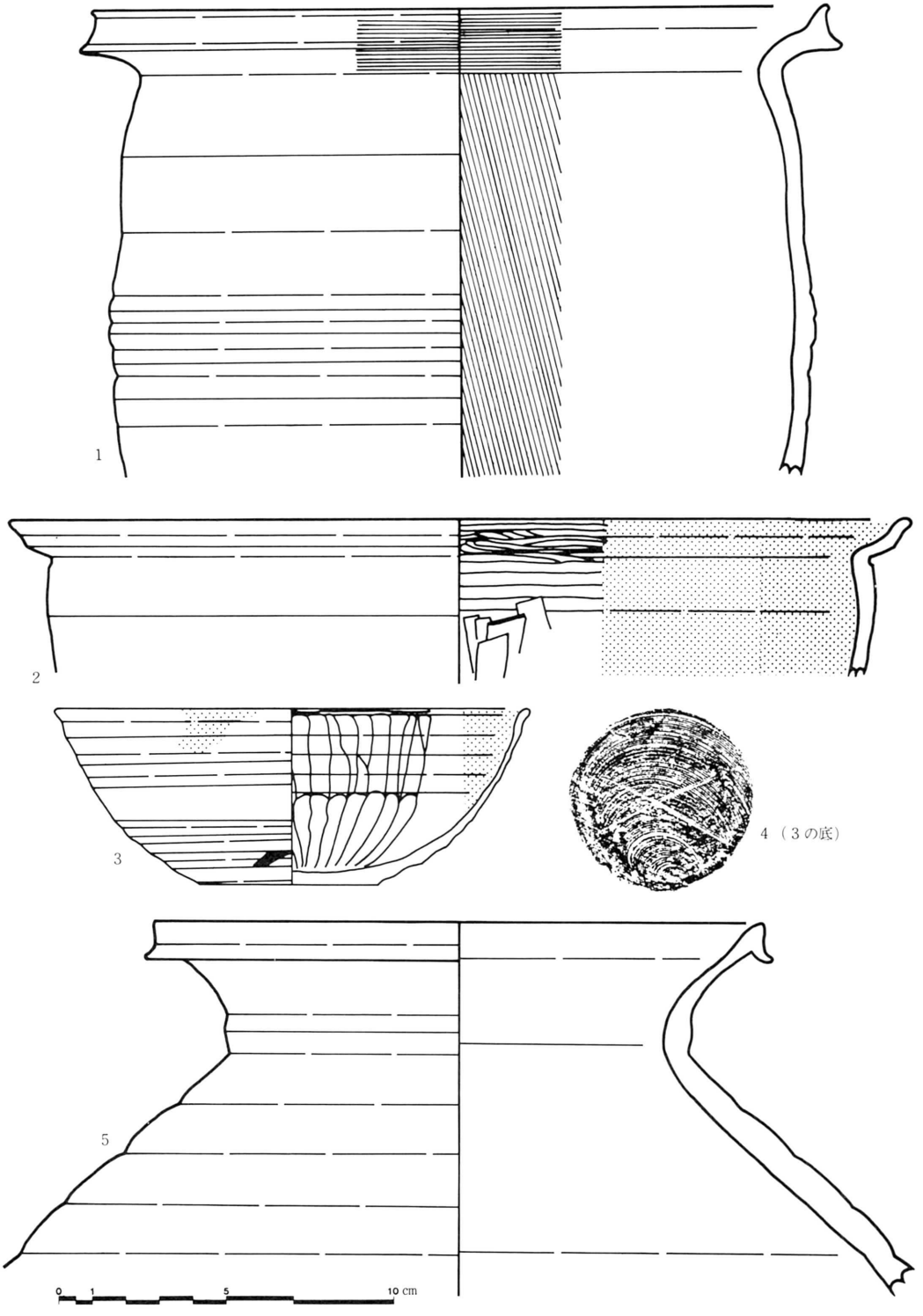
小型甕　口縁部３点、体部11点、体下半底部４点が出土した。いずれも小破片で、全容不明、測定不能である。口縁の１点は⅛以下残存である。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は橙色。焼成は不良で、２次焼成を受ける。Q4埋土出土である。他の２点は、口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出されている。Q3とQ4埋土出土である。体部破片は、５点がろくろなで成形無調整である。他の３点は同一個体の様で内面が横に刷毛目痕、外面が横なで成形で、上端部破片である。他の２点は、内面横なで、外面縦の篦なでである。他の１点は磨滅著るしく不明である。体下半底部の破片は４点共ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。

内黒長胴甕　(32図２) ２は、口縁部体上端⅛以下残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は薄くなり丸みをもつ。口縁部の中央から上半部が内側にやや屈曲する。体部上端は、やや丸みをもち直立する。胎土軟質砂粒をほとんど含まない。色調は浅黄橙色。焼成は不良で、外面がかなり磨滅している。Q1埋土出土である。

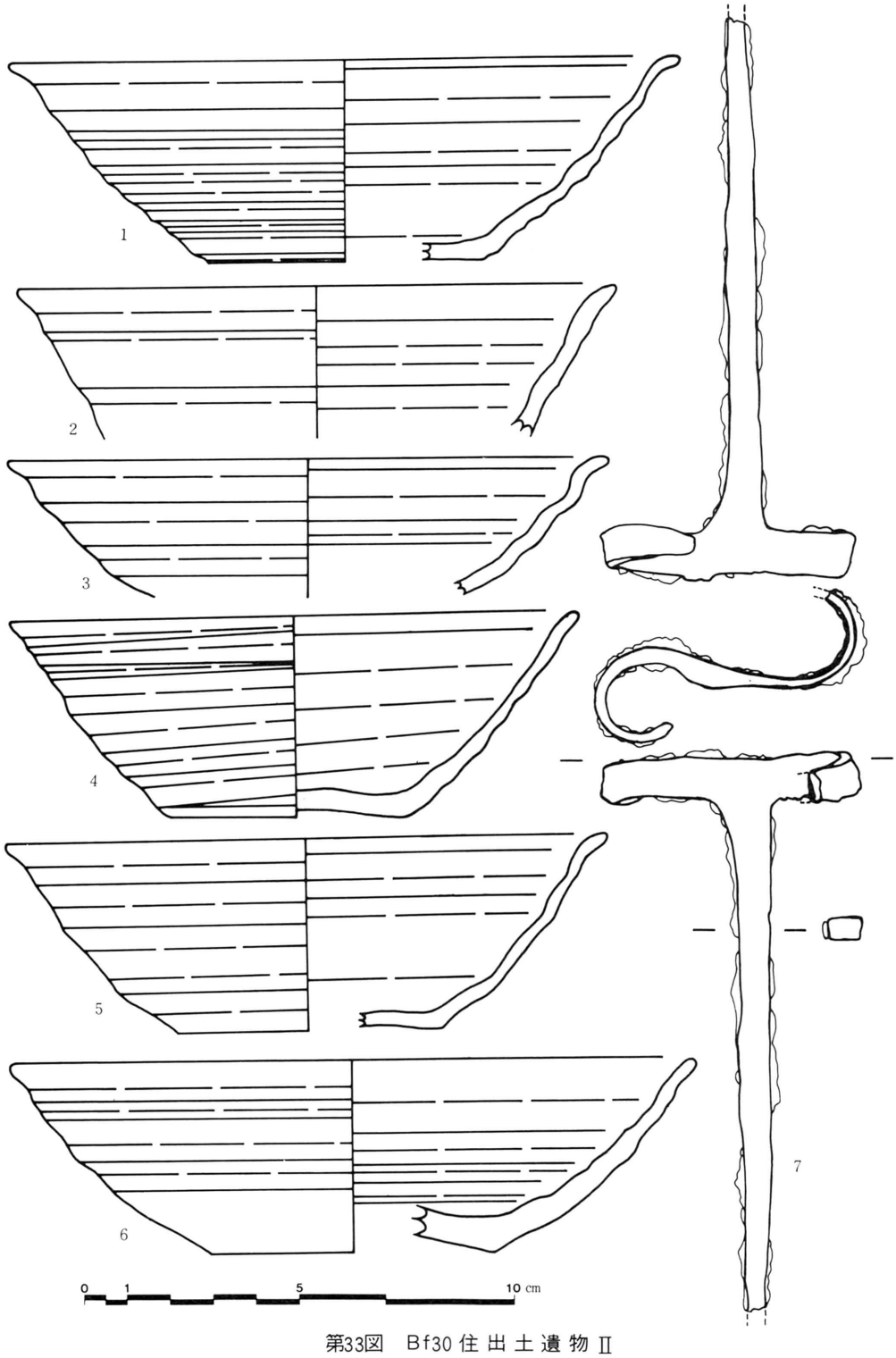
内黒坏　(32図３) ３は、口縁部体部½、底部全部残存である。口縁部の外面にも一部黒色化しているが、磨きは施されない。体壁の丸みは、上半部から下端まで同じ程度である。ろくろなでによる凸凹は少ない。体下端外面は無調整である。体下半に黒斑が１カ所ある。胎土軟質砂粒はほとんど含まない。焼成はやや不良である。ピットNo.3出土である。他に、口縁部６点。体部８点。底部５点が出土した。口縁部は、３点がやや外反し、３点が直線的である。外面の黒色化は３点である。１点の内面は磨きだけで、黒色は消えている。体部破片は、いずれも丸みが小さく、壁面の凸凹があるのは３点で、他の５点をほとんどみられない。底部はいずれも回転糸切り無調整である。全部残存のものが２点あり、底径は5.2cmと5.9cmである。下面は、平坦なもの３点、中央がや丶凹むもの２点である。

須恵器

壷　(32図５) ５は、口縁部⅕、肩部¼、体上部¼残存である。口縁部は外反し、上半部がかなり薄くなる。口端部は上と下に挽き出されるが、上端はわずかであり、下に強く挽き出される。肩部は、わずかに丸みをもち内傾する。粘土帯を巻き上げ貼付した際の境が明瞭で、成形が充分でなかった様である。１部に罅割れがみられる。肩部外面と、口縁部上半内面に、暗オリーブ色の自然釉が付着している。接合しないが、体部中央の破片は、外面の一部が口縁部外面の一部と同様黒色化している。体壁はやや丸みをもつ。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は褐灰色。焼成は良好である。口縁部と肩部はQ1埋土、体部はQ3埋土出土である。他に、頸部１点、肩部１点、体部４点が出土している。頸部と肩部の破片は、内外面共に横なでである。体部破片



第32図　Bf30住出土遺物Ⅰ



第33図　Bf30 住 出 土 遺 物 Ⅱ

は、内外面共に叩き目痕のあるもの２点、不明のもの２点である。

小型壷　口縁のみの小破片である。32―５をミニチュアにしたような形で、口径が10cm以下と思われる。口縁部は外反し、口端部は上に若干、下に強く挽き出される。口縁部外面は黒色化している。壁の厚さは２～４mmである。胎土硬質砂を若干含む。色調は灰白色。焼成は良好である。Q1埋土出土である。

坏Ａ類　(33図１～６）１は、体部上半にわずか丸みがあり、下半部はほゞ直線的である。体壁下半部にろくろなでによる凸凹がみられる。胎土硬質砂粒を若干含む。焼成は良好で、重ね焼きの痕跡が口縁部外面にみられる。Q3埋土出土である。２は、体壁の凸凹が少なく、他の坏より若干厚みがある。胎土硬質砂粒を若干含む。焼成は良好で、重ね焼きの痕跡が口縁部にみられる。Q4埋土出土である。３は、かなり体壁が外傾し、凸凹が若干上半部にみられる。胎土硬質砂粒を若干含む。焼成は良好で、重ね焼き痕はない。Q1埋土出土である。４は、体部下端に丸みがあり、体壁の凸凹はわずかである。胎土は硬質砂粒をかなり含む。色調は、表面が灰白色で、胎部はにぶい橙色である。口端部の１部に重ね焼きの痕跡がみられる。焼成はやや良好である。ピット№.５出土である。５は、ろくろなでによる凸凹が３個所あり、凸部から屈曲するような体壁である。凸凹はかなり目立つ。胎土は硬質で砂粒を若干含む。焼成は良好である。Q1埋土出土である。６は、体壁全体に丸みがみられ、凸凹は少ない。底部中央がかなり凹むようである。胎土はやや硬質石英粒等砂粒をかなり含む。色調は灰白色であるが、にぶい黄橙色に近い。焼成はやや良好である。Q3埋土出土である。その他に、口縁部７点、体部１点、底部１点が出土している。口縁部小破片は３点が、かなり外反する。３点の内１点は口端部に重ね焼きの痕跡がみられる。他の４点は、直線的で、体壁に厚みがあり凸凹も少ない。胎土はいずれも硬質で、色調は灰色～灰白色。焼成は良好である。

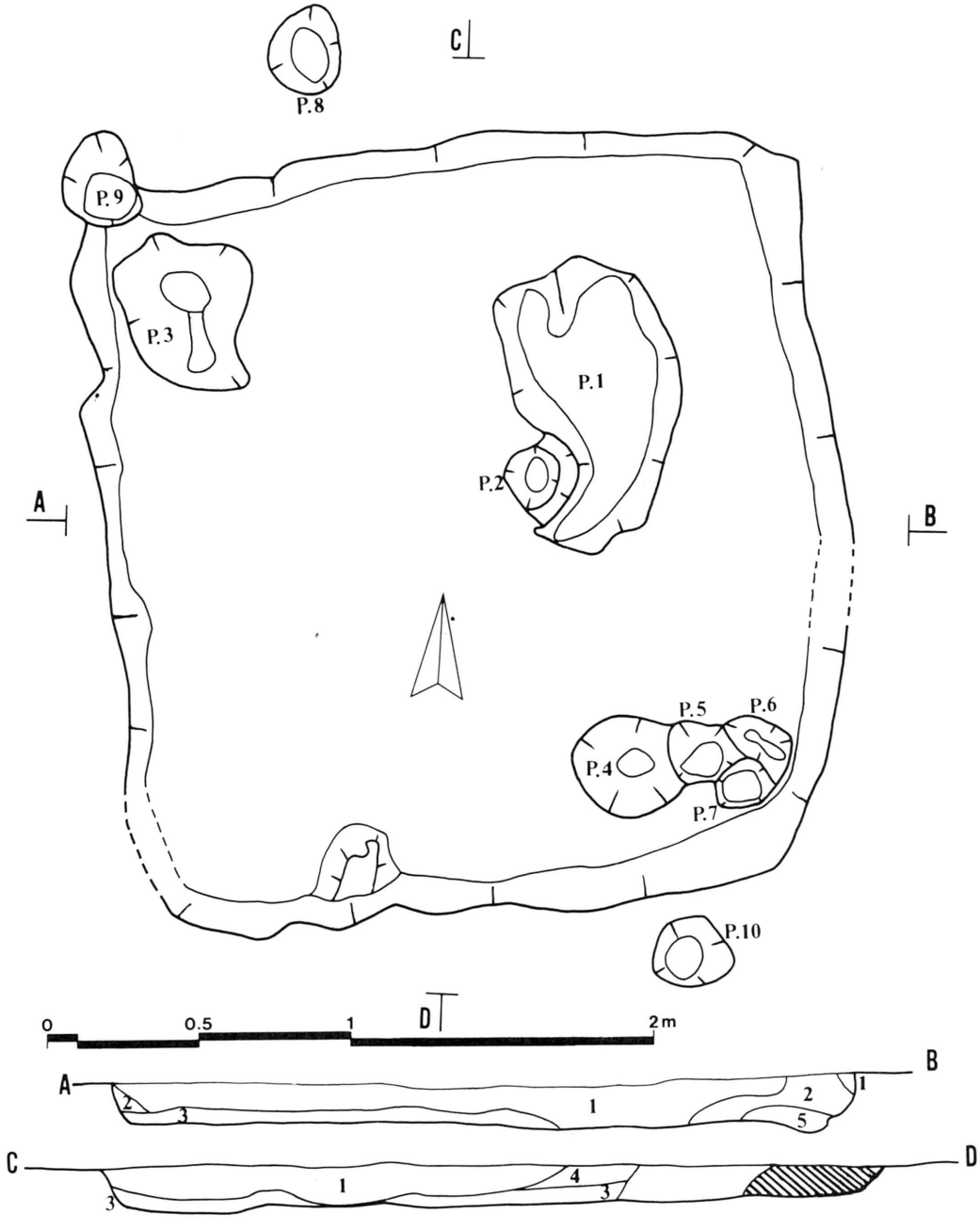
坏Ｂ類　口縁部20点、体部６点、底部４点が出土している。胎土軟質で砂粒をかなり含む。色調は橙色系。焼成は不良である。ろくろなで成形無調整回転糸切りである。

鉄製品　(33図７）先端部が茎に直行し、ｓ字形に湾曲する。茎先は欠損するが細くなるようである。使用目的、名称は不明である。Q1やや中央寄り床面出土である。

(11)　Bi50住（第34図）

〔**遺構の確認**〕　基準線から東へ2.6m～5.42m。基準点から北へ1.47m～4.45mの地点、Bi50地区とその周囲に黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第３次調査)

〔**重複・増改築**〕　住居跡の西壁南端から東壁中央やや南寄りに溝状土壙が西南西から南南東方向にあり、長軸両端を残し大部分を掘り込んで住居跡がつくられていた。またこの遺跡の現



第34図　Bi50住

状は果樹園で、りんごの栽培が営まれており、りんご樹を中心にした環状の溝を掘り、肥料を施している。その環状の溝が、住居跡の南西部と、溝状土壙を切っていた。この環状の溝は、調査地区内にかなりあり、特にＢＣ区の東側に多くみられ、遺物をかなり包含していた。

〔平面形・方向〕 東西約2.46m、南北2.54mのほゞ方形で、やや南北が長い。東壁がやや丸みをもち、若干西に張り出し、他の壁はほゞ直線である。主軸方向は、かまどが確認されないため不明であるが、北壁と南壁は、Ｅ－8.5°－Ｎで、ほゞ東西方向を向き。西壁と東壁は、Ｎ－10°－Ｗで、ほゞ南北方向を向く。

〔堆積土〕 ５層の堆積土が確認されたが、床面上は２層である。他の３層は壁際にある。

１層　10YR 3/2黒褐色腐植土、密で、粘性わずかにあり、焼土・炭化物・シルト質土を若干含む。

２層　10YR 2/2黒褐色腐植土、やや密で、粘性わずかにあり、焼土・炭化物を若干含む。

３層　10YR 2/1黒色腐植土、密で、粘性わずかにあり、炭化物多量、焼土・紛状パミス若干含む。

４層　10YR 3/2黒褐色腐植土、やや密で、粘性なし、焼土・炭化物・シルト質土若干を含む。

５層　10YR 2/3黒褐色腐植土、粗で、粘性わずかにあり、小礫・粉状パミス若干を含む。

〔床面〕 ほゞ平坦であるが、東壁と北壁の下場はやや深くなっている。周溝の状態までには至らない。地山をそのまま利用しており、掘り方や、貼床は確認されなかった。床面から壁への立ち上がりは、急角度の所が多い。壁高は10～17cmである。

〔柱穴〕 主柱穴は、住居跡床面からは検出されなかった。柱穴状ピットは北壁外（ピットNo.８）と北西コーナの壁に接し（ピットNo.９）たものと、南壁東側壁外（ピットNo.10）に検出されたが、住居跡に伴うものかどうか不明である。

〔かまど〕 確認されなかった。焼土の堆積も検出されなかった。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは、Ｑ1・Ｑ2・Ｑ4の３個所にみられ、Ｑ4では４つが接している。

第11表

（単位：cm　径は東北×南北）

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10
上場径	57×90	19×21	46×54	32×33	25×20	24×14	19×15	24×28	24×31	28×24
下場径	41×90	8×11	15×14	13×10	12×11	17× 3	12×10	11×19	18×16	12×15
深さ	9	8	14	14	13	9	10	9	41	36
堆積土	10YR 2/1 黒色腐植土	10YR 2/1 黒色腐植土	10YR 2/1 黒色腐植土	10YR 3/2 黒褐色腐植土	10YR 3/2 黒褐色腐植土	10YR 3/2 黒褐色腐植土	10YR 3/2 黒褐色腐植土	—	—	—

〔その他の施設〕 特に確認されなかった。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕102点、小型甕10点、内黒坏25点。須恵器、壷２点、坏Ａ類９点、坏Ｂ類120点、高台坏１点が出土した。坏類はいずれも回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕　（35図１・２）１は、口縁部体上端1/8以下残存である。口縁部は外反し、かなり短い。

体上端部外面の篦なでは、かなり粗雑である。胎土は軟質粗砂粒をかなり多く含む。色調は浅黄橙色。焼成は不良である。Q1埋土出土である。2は、口縁部体上端⅛残存である。口縁部は外反し、口端部に行くにつれ薄くなっている。内外面共に煤様の黒褐色付着物がみられる。胎土やや軟質砂粒を若干含む。色調は灰褐色。焼成は不良である。Q1埋土出土である。その他口縁部8点、体部88点、底部4点が出土した。いずれも小破片で、体部には同一個体と思われる物もかなりあるが、接合しない。口縁部破片は、かなり外反し口端部が丸みをもち薄いもの1点。口縁部がかなり外反し口端部が平坦なもの3点。口縁部がやや内湾気味に外傾し口端がわずか上に挽き出されるもの3点。口縁部がかなり外反し、口端部が上に強く挽き出されるもの1点である。体部破片は、外面が縦に篦削り篦なで、内面が横なでされているものが大部分である。底部破片は下面が篦なでである。口縁部体部底部破片共、胎土は軟質砂粒をかなり多く含み、色調は橙色系であり、焼成は不良である。主に床面東側から出土した。

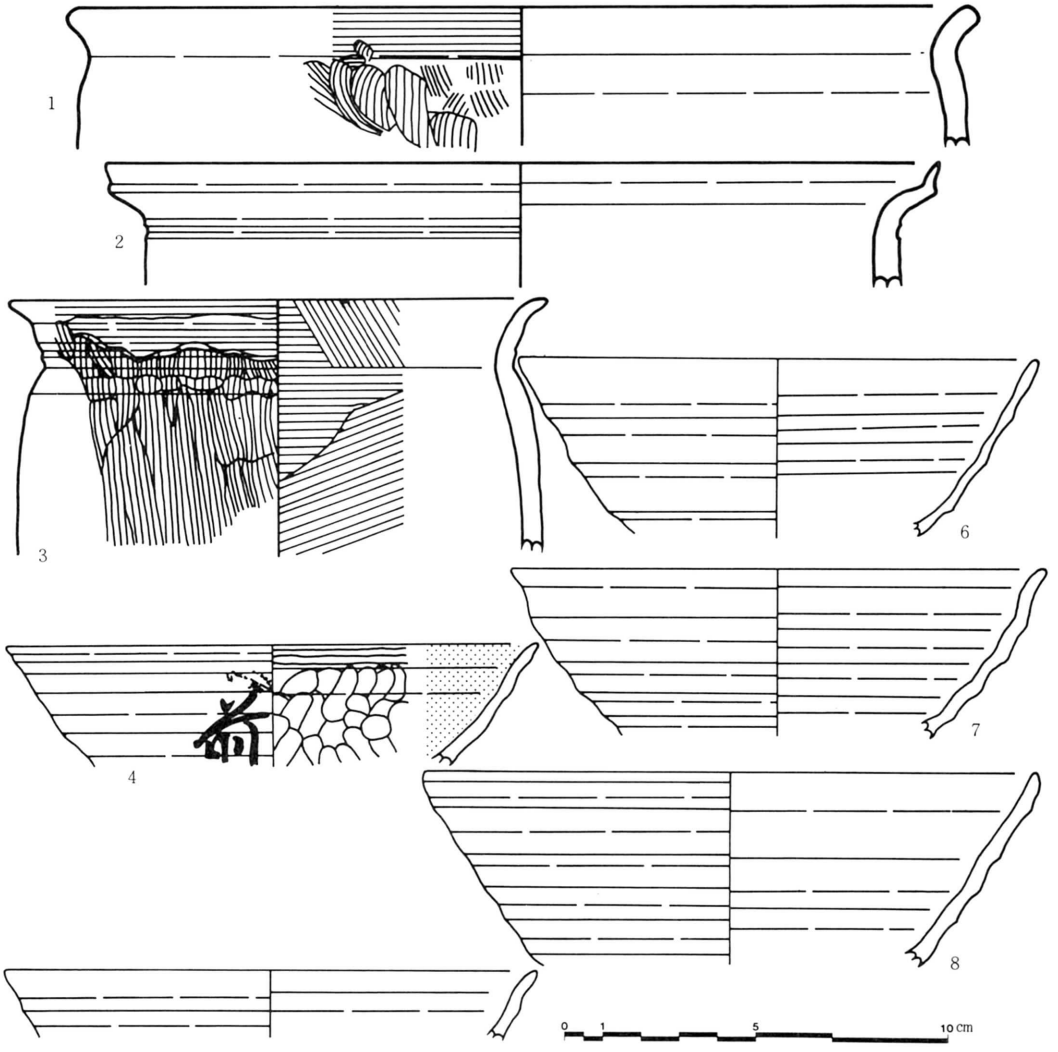
小型甕　(35図3) 3は、口縁部体部上半⅕残存である。口縁部は外反し、口端に近ずくほど薄くなる。口端部は丸く薄い。体部外面の篦削り篦なでは、口縁部中頃迄達している個所もある。体壁は体部上端がやや丸みをもつ。胎土軟質砂粒をかなり多く含む。色調は淡赤橙色。焼成は不良で、口縁部内面に黒褐色の煤様付着物がみられる。検出面に露出していた。

他に口縁部1点、体部6点、底部2点が出土している。口縁部破片は、下端より上端部が厚く、口端部は丸みをもつ。ろくろなで成形である。体部破片は、ろくろなで成形のものが5点。外面が縦の篦なでが1点である。底部破片は、1点が回転糸切り、1点は下面に砂粒付着痕が多くみられる。

内黒坏　(35図4) 4は、体壁下半に丸みがみられ、椀形に近い。体部外面に墨書があり、下半部が欠損して明確ではないが、「前」と思われる。胎土はやや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良である。Q4東壁下埋土出土である。他に口縁部6点。体部14点。底部4点が出土している。口縁部破片は、口端部が急に外反するもの1点、やや外反するもの2点。直線的なもの3点である。また口縁部外面も黒色化しているものが2点あり、磨きは確認されない。口端部は5点が丸みをもち、1点はかなり薄い。体部破片の内1点は、外面下端に篦削り調整が施されている。尚14点中2点は、内面に磨きが認められず、内黒坏と断定は出来ない。底部破片の内2点は体部外面下端から下面まで回転篦削り調整。1点の下面は手持ち篦削り調整の様である。1点は回転糸切り無調整である。

須恵器

壷　口端部小破片1点と、肩部小破片1点が出土した。口端部破片は、上と外側に強く挽き出されている。胎土硬質砂粒はほとんど含まない。色調は褐灰色で、内面に若干の灰釉が付着する。焼成は良好で、検出面に露出していた。肩部破片は、やや丸みをもち、内外面横なでで



第35図　Bi50住出土遺物

ある。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は青灰色。焼成は良好である。Q2埋土出土である。

坏A類　(35図5) 5は、体壁に凸凹が若干あり、丸みはほとんどない。胎土は硬質砂粒を若干含む。焼成は良好である。Q2埋土出土である。他に口縁部3点、体部5点が出土している。口縁部破片は、かなり外反するもの1点、わずかに外反するもの2点で、体壁の凸凹がかなりみられる。外反する1点の体部はかなり丸みがある。胎土はいずれも硬質砂粒を若干含む。色調はわずかに外反する2点が灰白色。かなり外反するものが褐灰色。焼成はみな良好である。前者2点がQ3埋土、後者がQ2埋土出土である。体部破片は、いずれも下半部に若干の丸みを有し、凸凹がかなりみられる。胎土は硬質で砂粒を若干含むが、1点は砂粒をかなり含む。色調は、2点が灰色、1点が灰白色、2点が褐灰色である。焼成はいずれも良好である。

坏B類　(35図6～8) 6は、体部下半に丸みがあり、体壁に凸凹がみられる。胎土はやや軟質砂粒をかなり多く含む。焼成は不良で、2次焼成を受け体部外面の1部が変質している。ピットNo.3出土である。7は、体部上端に丸みがあり、体壁の凸凹がかなりみられる。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。内面に黒色の付着物がある。6より体壁がやや厚い。Q4東壁寄り埋土と東側検出面出土である。8は、体壁に丸みはほとんどなく、凸凹がみられる。胎土軟質砂粒を若干含む。焼成は不良である。住居跡西側の検出面に露出していた。以上3点のみについては、内黒坏や須恵器坏A類に比べ体壁があまり外傾せず、器高もやや高いように思われる。他に口縁部41点、体部64点、底部12点が出土した。口縁部破片は、25点が外反しており、その内かなり外反するものが9点である。15点は直線的である。他の1点は外面が剝離しているため不明である。胎土は何れも軟質か、やや軟質で砂粒をかなり含むもの7点、若干含むもの37点である。色調は橙色系が36点、褐灰色が5点である。焼成は、何れも不良である。体部破片は、体壁中央から下半部に、若干丸みが認められ、ろくろなでによる凸凹が大部分の破片にみられる。底部破片は、何れも回転糸切り無調整で、下面はほゞ平坦である。

高台坏　高台部のみ⅛残存である。台部下端の径は推定約7㎝。台部の高さ1.3㎝。畳付部はかなり厚く、丸みをもつ。壁は、ほゞ直線的にやや内傾する。

(12) Bj21住 (第36図)

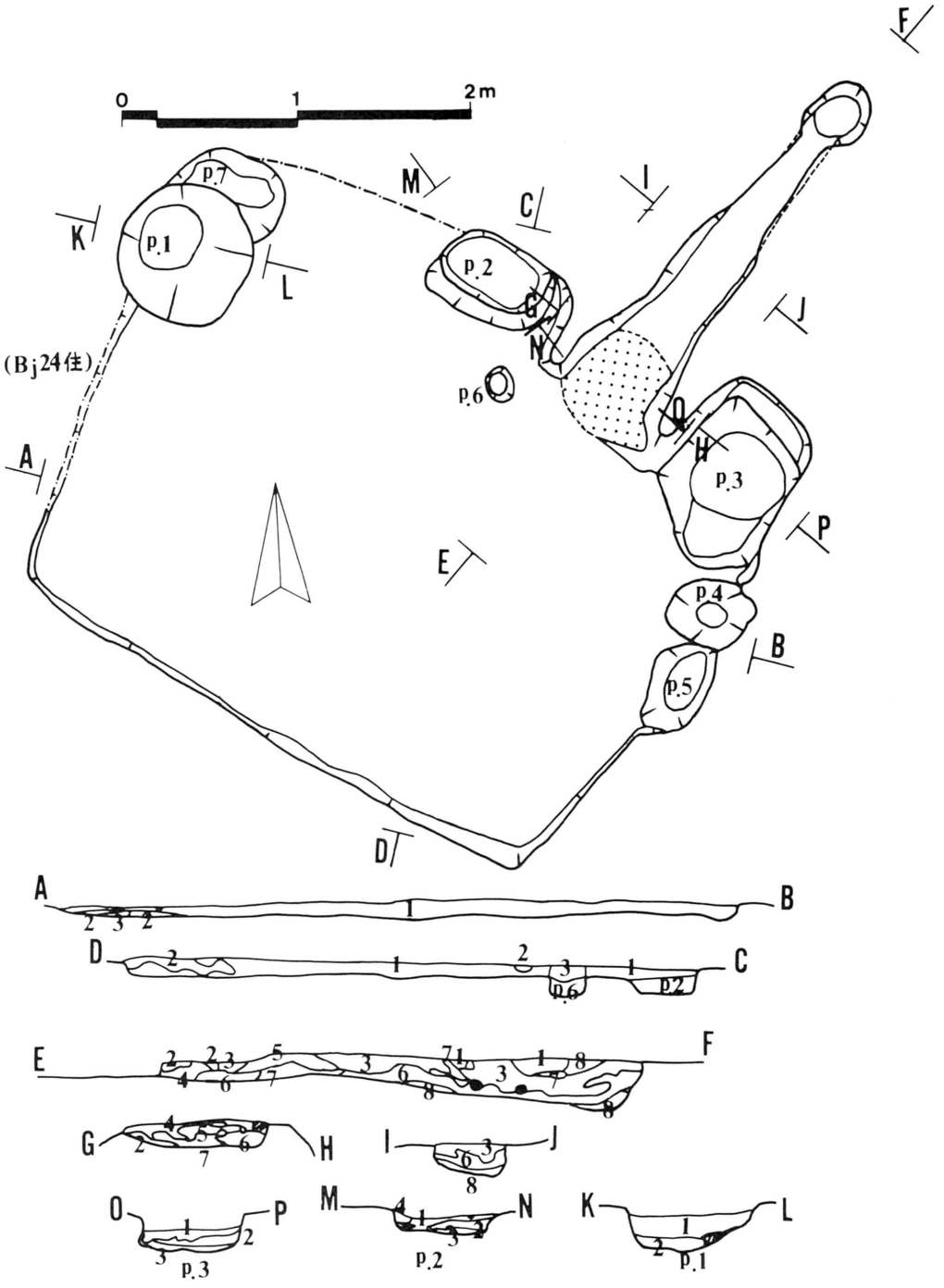
〔**遺構の確認**〕 基準線より西へ14.64m～19.3m。基準点より北へ21.5m～南へ1.76mの地点、Bj21～Bj18地区とその周囲に黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第2次調査)

〔**重複・増改築**〕 西壁の大部分と南壁の西端が、Bj24住居跡(縄文)と切り合いである。Bj21住の床面が浅く、切り合い部には、若干のシルト質土を混入した腐植土で、叩き締めているため、輪郭は明確であった。

〔**平面形・方向**〕 東西約3.8m、南北3.1mの長方形で、北壁が3.8m、南壁が3.3m、西壁が2.7m。東壁が2.95mで、かなり歪む。主軸はN－43.5°－Eで、ほゞ北東向きである。

〔**堆積土**〕 3層の堆積が確認されたが、床面上はほゞ一層で、他の2層は、西側と南側にのみ集中している。1層、7.5YR⅔黒褐色腐植土、粗で、粘性わずかにあり。焼土・シルト質土若干、炭化物・遺物をかなり含む。床面上に広く堆積する。2層、7.5YR¾褐色シルト質土腐植土混合層。粗で、粘性ややあり。3層、7.5YR⅔黒褐色腐植土、粗で、粘性わずかにあり。シル質土を1層よりやや多く含む。

〔**床面**〕 ほゞ平坦であるが、掘り方状の凸凹が若干みられ、北西側より南東側が10㎝程低くなっている。床面から壁への立ち上がりは緩やかな所が多い。壁高は約5～10㎝で、旧地表面



第36図　Bj21住

がかなり削平されたと思われる。

〔柱穴〕 柱穴状ピットは1カ所、かまど西袖前に検出された。上場径東西17cm、南北20cm。下場径東西11cm、南北14cm。深さ床面下13cmである。堆積土は住居跡堆積土の3層と同じである。

〔かまど〕 かまどは北壁東寄りにつくられている。燃焼部は巾約60～90cm。奥行58cmで、深さ約5cm程浅く掘り込まれている。堆積土は主に焼土で3層に大別される。煙道は、住居跡の中で最も長く、145cmである。巾は15～38cm。深さは10～29cmである。堆積土は3層に大別され、上層と最下層に焼土が包含され、中層に遺物が若干包含されている。煙出は、楕円形で、上場径東西30cm、南北40cm。下場径東西23cm、南北25cm。深さは検出面より約30cmである。煙道との境は明確ではない。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは、西壁北端に2基、かまどの西側に各1基、東壁に接して2基検出された。西壁の2基は切り合いで、南側のピットが北側のピットを切っている。東壁のピットは上場が接している。遺物が多く出土したのは、かまどの西側にあるピットNo.2・3で、焼土・炭化物もかなり混入している。

第12表

（単位：cm　径は東西×南北）

ピットNo.	No. 1	No. 7	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5
上場径	76×80	60×(26)	70×48	64×80	50×38	35×60
下場径	34×40	50×(14)	59×29	49×49	19×14	20×37
深さ	25	5	12	13	4	5
平面形	円形	半円形	楕円形	不整五角形	楕円形	楕円形
堆積土	7.5YR 2/2 黒褐色腐植土	7.5YR 2/2 黒褐色腐植土	5YR 4/6 にぶい赤褐色焼土	7.5YR 2/3 極暗褐色腐植土シルト	7.5YR 2/2 黒褐色腐植土	7.5YR 2/2 黒褐色腐植土

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕30点、小型甕5点、内黒坏21点、内外黒色坏2点。須恵器、壺2点、坏A類3点、坏B類117点が出土した。坏類は大部分回転糸切りである。

出土遺物

土師器

長胴甕 (37図1・2) 1は、口縁部体部1/2、底部1/4残存であるが、体部、底部で接合しない破片がかなりある。口縁部は外反し、短かい。体部上半は、ほゞ直線的で直立する。下半部に丸みがややみられる。体部外面の箆削り箆なでは、かなり粗雑である。体部の内外面に煤様の黒色付着物が1部みられる。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は淡橙色～橙色。焼成は不良である。ピットNo.2出土である。2次焼成を受け、変質している所がみられ、体下半部に焼土が付着している。2は、口縁部体上端部1/8以下残存である。口縁部は内湾気味に外傾し、口端部外面は2条の沈線が横に走る。口縁部外面に煤様の黒色付着物が1部みられる。体上端外面は大部分が剝離している。胎土軟質石英等砂粒をかなり含む。色調はにぶい橙色。焼成は不良である。その他に口縁部3点、体部25点が出土した。口縁部破片は、かなり外反し、口端が平ら

に横なでしたもの１点。かなり外反し口端部が上下に挽き出され、その間が凹むもの１点、やや外反し、口端部が下に挽き出されているもの１点である。体部破片は、外面上端が横なで上半と下半が篦削り篦なで。内面は横なでのものが大部分である。焼土の付着するもの４点。煤様の黒色付着物のみられるもの３点である。

小型甕　５点共小破片で、体部２点、体下端部２点、体下端底部１点である。体部破片は、１点が、外面篦削り篦なで。１点がろくろなで成形無調整である。体下端部破片２点は、ろくろなで成形無調整。体下端底部破片は、ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。体部破片以外は、胎土軟質砂粒をかなり多く含み、磨滅が著るしい。

内黒坏　(37図３～６）３は、口縁部若干、体部¼、底部⅙残存である。体部中央が丸みをもち、下半部は外反気味にかなり外傾する。上半部は丸みがわずかである。体壁の厚さは中央と下半が、かなり厚く、上半は口端部になるほど薄くなる。底部下面はほゞ平坦で、中心部がかなり薄くなる。外体面に「田」と思われる墨書が認められた。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。Q１・Q４埋土とピットNo.３出土である。４は、口縁部と体上半部の小破片で、体壁にかなり凸凹がある。外体面に「田」と思われる墨書が認められるので図示した。胎土は軟質砂粒をかなり含む。色調は大部分磨滅し褐灰色に近い。焼成は不良である。Q４埋土出土である。５は、口縁部体部⅓、底部⅛残存である。内黒の黒色は消え、磨きは若干認められる。口縁部内面に煤様の黒色付着物がある。体壁は全面が丸みをもち、凸凹が若干ある。底部は、下に張り出し、中央部下面がやや凹む。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良で、２次焼成を受けている。かまど焚口及びピットNo.３出土である。６は、口縁部体部⅓残存である。体壁は中央に丸みがあり、凸凹は少ない。内面の放射状磨きは、口端部近くに迄達している。胎土やや軟質砂粒をやや多く含む。焼成はやや不良である。Q２床面出土である。他に、口縁部10点、体部６点、体下半底部１点が出土した。口縁部破片は、外反するもの２点、わずかに外反するもの８点。外面まで黒色化し、磨きの認められないもの３点である。体部破片は、１点に篦削り調整がある。体下半底部の破片は、体壁にかなり丸みをもち、底部下面は、回転糸切りである。内面は放射状磨きが認められる。

内外黒色坏　２点共小破片で、１点は口縁部、１点は底部である。内面は磨きが認められるが外面は認められない。口縁部はQ２埋土、底部はQ１埋土出土である。

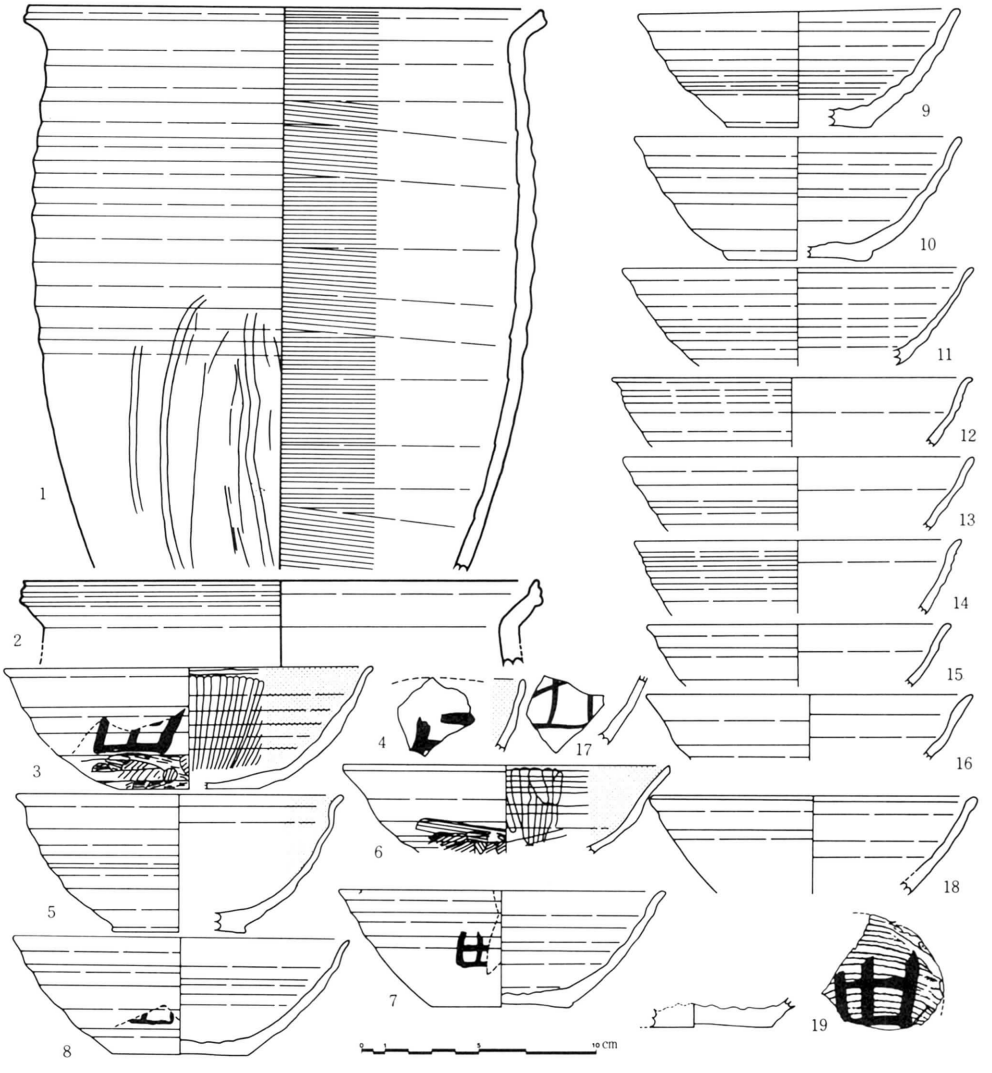
須恵器

壷　１点は頸部下端と肩部上端の破片である。内外面共横なでである。胎土硬質砂粒若干を含む。色調は灰色。焼成は良好である。Q１埋出から出土した。１点は頸部下端と肩部⅛残存である。頸部と肩部の境は帯状に若干張り出す。肩部は内湾しかなり内傾する。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は、外面が赤褐色気味のにぶい橙色。内面が橙色。焼成はやや良好である。煙

道埋土出土である。

坏A類　口縁部１点、体部２点の小破片である。口縁部破片は、直線的で、口端部は丸みをもつ、体壁は凸凹がかなりみられる。胎土硬質砂粒をほとんど含まない。色調は灰色、焼成は良好である。Q1埋土出土である。体部破片の１つは上半部で、丸みはほとんどなく、凸凹が若干みられる。胎土硬質砂粒若干を含む。色調は褐灰色。焼成は良好である。Q3埋土出土である。他の１点は体下半部で、体壁が若干丸みをもち、凸凹は少ない。

坏B類　(37図７～19) ７は、体壁の丸みは下半部にみられ、上半部はほゞ直線的である。ろくろなでによる凸凹は、壁面には少なく底部上面にみられる。体部下端内外面と底部上下面に煤様の黒褐色付着物がみられる。体部外面に墨書が認められ、右半分が欠損しているが「田」と思われる。胎土軟質砂粒若干を含む。焼成やや不良である。ピットNo.２出土である。８は、体壁の丸みは下端にみられ、ろくろなでによる凸凹は少ない。２次焼成により体壁外面の１部が変質している。体部外面に墨書が認められ、上半の大部分が欠損しているが、「田」と思われる。胎土やや軟質砂粒を含む。焼成はやや不良である。Q3床面とかまど焚口から出土した。９は、７・８より体壁がかなり厚い。体壁の丸みは上半部にみられ、下半部は直線的にやや外反している。ろくろなでによる凸凹は外面より内面が著るしい。胎土やや軟質砂粒をかなり含む。焼成はやや不良である。Q1床面とかまど焚口より出土した。10は、体部下半に丸みがみられ、中央と上半部は丸みは少ない。凸凹が若干みられる。２次焼成により口縁部と体部の外面が一部変質している。胎土やや軟質砂粒をかなり含む。焼成はやや不良である。ピットNo.２出土である。11は、体部下半に丸みがみられ、上半部はほゞ直線的である。体壁の凸凹は若干みられる。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。12は、口端部が急角度に外反し、体上半部に丸みをもつ。凸凹は少ない。胎土軟質砂粒をかなり含む。焼成は不良である。ピットNo.３出土である。13は、体部上半に若干の丸みがある。体壁の凸凹は不明瞭でかなり歪みがある。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。Q1埋土出土である。14は、体上半に若干の丸みがあるが、かなり歪みがある。体壁の凸凹は若干みられる。胎土軟質砂粒をかなり多く含む。焼成はやや不良である。ピットNo.３出土である。15は、丸みがわずかで、体壁の凸凹もわずかである。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.２出土である。16は、体部中央に丸みがある。体壁の凸凹は明確ではない。胎土やや軟質砂粒若干を含む。焼成はやや不良である。ピットNo.２出土である。17は、外面に墨書が認められ、上と左側が欠損しているが、「田」と思われる。18は、体壁にわずかな丸みがあり、凸凹は少ない。胎土やや軟質石英等砂粒をかなり多く含む。焼成はやや不良である。Q4埋土出土である。19は、底部下面に墨書が認められ、上半がかなり磨滅しているが、「田」と思われる。底部¼残存の破片であるが、かなり歪みがあり、底径を推定出来なかった。胎土はやや軟質砂粒をかなり含



第37図　Bj21 住 出 土 遺 物

む。焼成はやや不良である。かまど焚口出土である。他に口縁部48点、体部47点、底部９点が出土した。口縁部は大部分やや外反し、１部直線的なものもある。体壁は若干丸みをもち、ろくろなでによる凸凹がある。体部下端には調整痕は認められない。底部上面はろくろなでによる渦巻形の凸凹がかなり著るしく、下面は回転糸切り無調整である。胎土はやや軟質か軟質で、砂粒を含んでいる。色調は橙色系で、淡橙色かにぶい橙色が多い。焼成はやや不良である。坏A類の出土量が少ないため、内黒坏と比較すれば、口径・底径・器高は、差がほとんどなく、器形については、体部下半の丸みと外傾度は、内黒坏の方が大きい。尚、外傾度は、口端部と

底部外縁を結ぶ直線と、底面に垂直な直線との角度とした。胎土は、含まれる砂粒の量が内黒坏の方が少ない。色調は、内黒坏が灰白色に近いものが多く、坏B類は橙色系である。体下半の篦削り調整は、内黒坏の一部にみられるが、坏B類にはみられない。

⑿ Cd21住 （第38図）

〔遺構の確認〕 南北基準線より西へ14.06m～19.30m。基準点から南へ11.30m～15.62mの地点。Cd21地区・Cd18地区とその周囲に黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第１次調査)

〔重複・増改築〕 ピットNo.２・８が、東壁を切っているが、住居跡に伴うものかどうかは不明である。

〔平面形・方向〕 東西4.6m、南北3.75mの長方形である。主軸方向は不明であるが、北壁と南壁はほゞ東西方向、東壁と西壁はN－10°－Wで、ほゞ南北方向を向く。

〔堆積土〕 床面上は、ほゞ１層で、西壁と東壁際に１層みられる。

１層 7.5YR½黒色腐植土 指圧痕つく、粘性若干あり、焼土炭化物シルト遺物を含む。

２層 7.5YR⅜黒褐色腐植土、指圧痕つく、粘性若干あり、シルト質土混合、炭化物少量含む。

〔床面〕 ほゞ平坦であるが、北側より南側が４～８cm低い。床面から壁への立ち上りは、急角度の所が多く、壁高は３～13cmである。

〔柱穴〕 柱穴状ピットは床面からは検出されなかった。北壁外に２基、東壁外に１基検出されたが、住居跡に伴うものかどうか不明である。

〔かまど〕 かまど。炉共検出されなかった。床面中央やや西寄りに焼土が堆積されていたが、平面形のみの実測で、土色土性厚さ等は不明である。写真には床面を掘り込んだ跡はない。

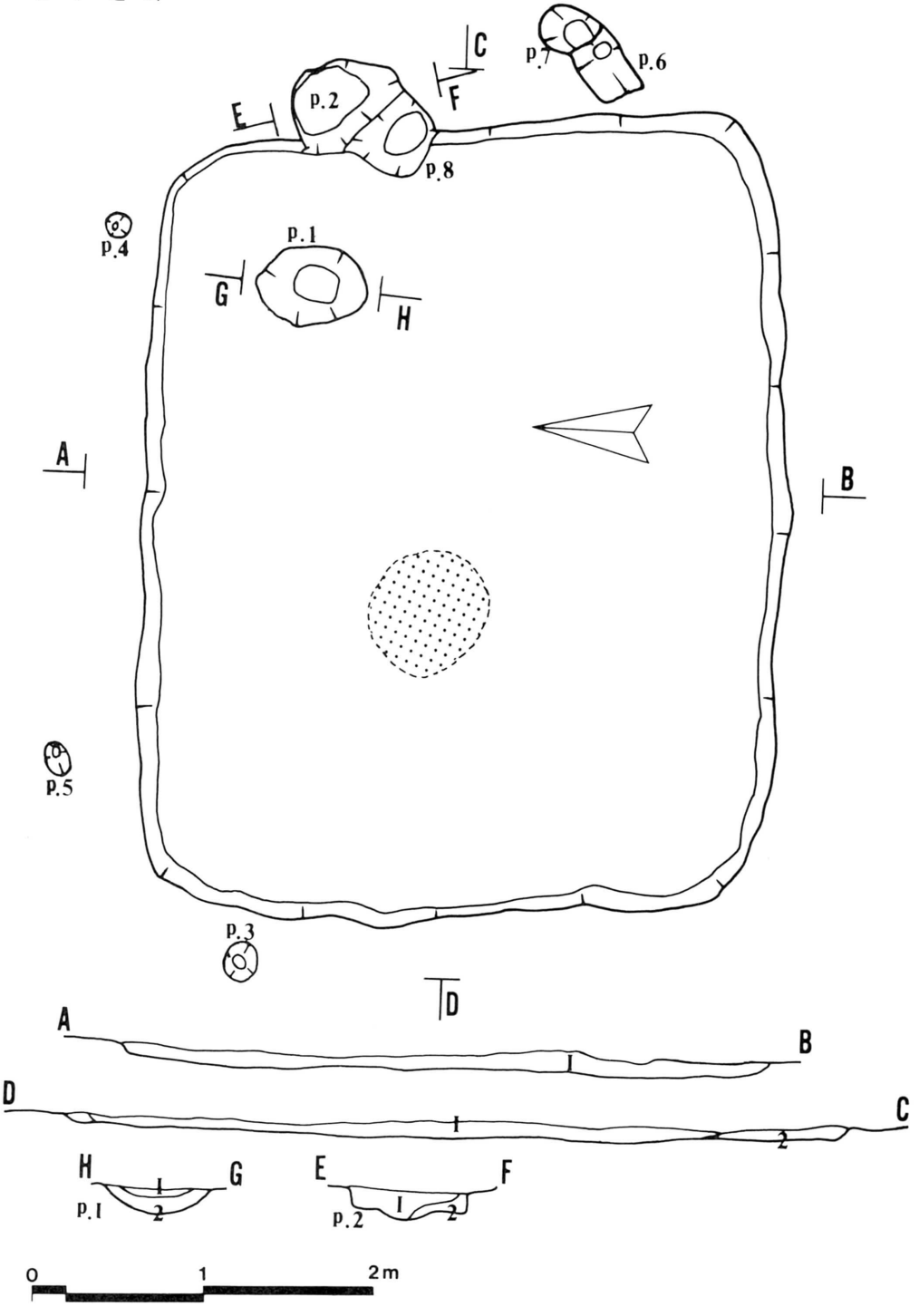
〔貯蔵穴〕 Q1床面に１基みられ、北西側上場に接して鉄滓が出土している。

第13表 （単位：cm 径は東西×南北）

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
上場径	45×64	48×66	28×24	14×14	19×24	40×28	28×30	38×47
下場径	22×27	32×46	12×10	5× 2	8× 5	8×12	17×17	32×20
深さ	22	18	15	12	2	39	13	24
堆積土	第38図	第38図	7.5YR⅔黒色腐植土	7.5YR⅔黒色腐植土	7.5YR⅔黒色腐植土	7.5YR⅔黒色腐植土	7.5YR½黒色腐植土	7.5YR⅔黒色腐植土
位置	Q1床面	東壁北寄 No.8と接す	西壁外北寄り	北壁外東寄り	北壁外西寄り	東壁外南寄り	東壁外南寄り	東壁やや北寄り
平面形等	楕円形	不整形	円形・柱穴状	円形・柱穴状	円形・柱穴状	方形、P7と接す	半円形、P6と接す	やや方形、P2と接す

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔年代決定資料〕 土師器甕８点、内黒坏３点、内黒高台坏１点、内外黒色高台坏１点。須恵器、壺３点、坏A類１点、坏B類23点、鉄滓３点が出土した。坏類は大部分回転糸切りである。坏



第38図　Cd21住

B類は大部分が器高が低く、皿形に近い。

出土遺物

土師器

長胴甕　口縁部２点、体部４点、底部２点が出土した。いずれも小破片で計測は不能である。口縁部破片は、いずれもかなり外反し、１点は口端を平らになでている。１点は上に挽き出される。前者はかなり歪みがあり、内外面横なで、体上端部は外面は不明、内面は横なでで、若干丸みをもつ、胎土やや軟質砂粒をかなり含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良である。後者は、内外面横なでである。体部は残存しない。胎土はやや軟質石英等の砂粒をかなり多く含む。色調は淡橙色。焼成はやや不良である。体部破片は、外面が縦に箆なで、内面が横なでのもの３点、体下端部破片は内外面共横なでで、３点の内１点と同一個体と思われる。いずれも胎土は軟質砂粒をかなり含む。色調は２点が橙色。同一個体と思われる２点が浅黄橙色。焼成はいずれも不良で、磨滅している。底部破片は、いずれも底径が10cm以上と、かなり大きい、中心部の厚さは、１点が2.3cmで、上面の中央が盛り上る。下面は平坦で木葉痕が付く。他の１点は、厚さが中心部で２cm。上面中央が凹んでいる。下面は平坦で、２次焼成を受け剝離した個所が多く変質している。

内黒坏　口縁部２点、体部１点が出土した。口縁部破片の内１点は、やや外反し、口端部は丸みをもつ、内面の磨き黒色処理は口端部までである。胎土は軟質砂粒をかなり含む。色調は橙色。焼成はやや不良である。他の１点は、黒色処理が外面に及ぶが磨きは明確でない。ほゞ直線的で、口端部は丸みをもつ、体上端部は若干丸みをもち、凸凹はほとんどみられない。胎土は軟質砂粒をかなり含む。色調は灰白色に近い浅黄橙色。焼成は不良である。体部破片は、ほゞ直線的で、凸凹も少ない。胎土やや軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい橙色、焼成は不良である。

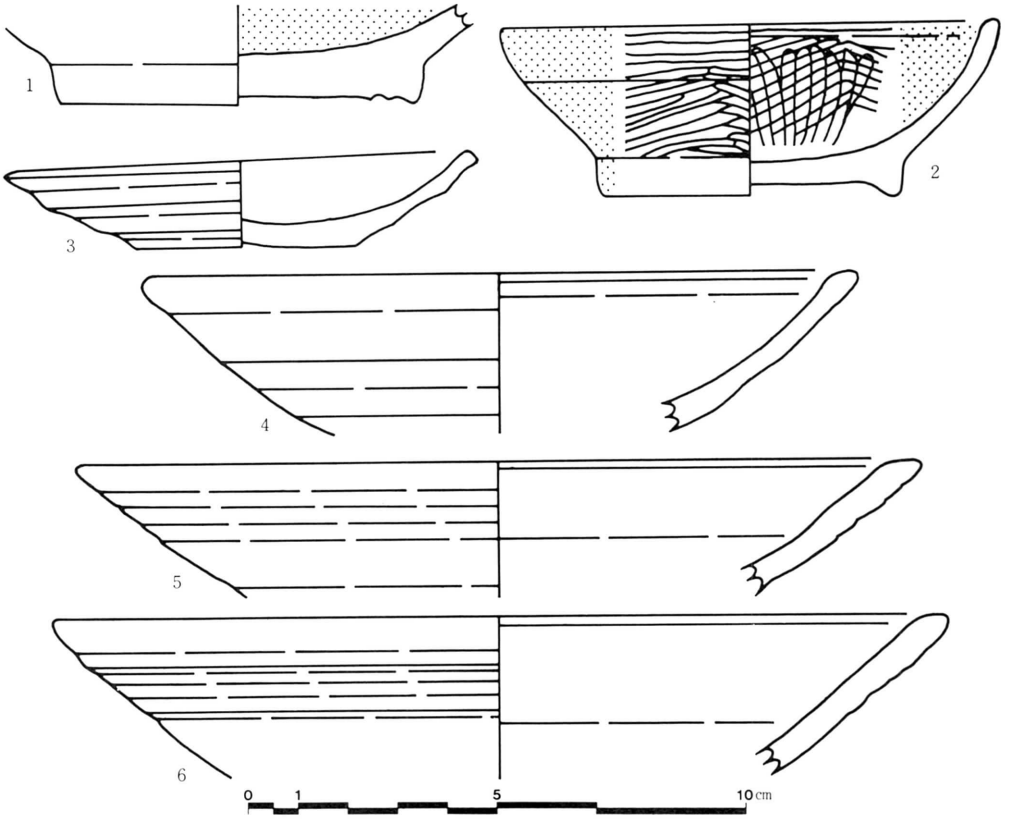
内黒高台坏　高台部⅔、底部¾残存である。高台部は貼り付けでなく、底部周縁を下に若干挽き出す程度である。底部下面は回転糸切り痕が若干残存する。上面に磨きは認められない。内外面共に、直径１～５mmの円形の剝離がみられる。Q2埋土出土と思われる。(39図１)

内外黒色高台坏　口縁部体部¾、底部高台部全部残存である。39—１同様高台部は底部周縁を若干下に挽き出す程度である。底部下面に回転糸切り痕が若干残存する。１と同様胎土はやや軟質砂粒をかなり含む。焼成はやや不良である。Q4床面出土である。(39図２)

須恵器

壷　体部小破片３点で、２点は内外面に平行叩き目痕、１点は外面のみ平行叩き目痕がみられる。いずれも胎土硬質砂粒を若干含む。色調は灰色。焼成良好である。

坏A類　体下端底部の破片で、外面は大部分剝離している。胎土硬質砂粒はほとんど含まな



第39図　Ca21 住 出 土 遺 物

い。内外表面はにぶい橙色、胎部は灰色。焼成はやや良好である。

坏B類　(39図3～6) 3は、かなり小型の皿である。体部外面と底部下面は、2次焼成を受け若干変質し、煤様の黒褐色付着物がみられる。口縁部内面の¼は灰白色で、須恵器坏A類と同色である。胎土やや硬質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。4は、3よりかなり大きいが、やはり器高が低くほゞ皿形に近い。体部下半がかなり丸みをもつようにみえる。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。5も、3・4とほゞ同様の器形で、かなり大きい。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。6も、ほゞ皿形で、口径が39—3の約2倍と推定される。胎土軟質砂粒をかなり含む。焼成は不良である。他に、口縁部12点。体部4点。底部3点が出土した。いずれも、体壁がほゞ直線的にかなり外傾する皿形に近い。ろくろなで成形無調整。回転糸切りである。胎土はやや軟質砂粒を含む。色調は淡橙色か

にぶい橙色である。焼成はやや不良、または不良である。

鉄滓　3点出土している。No.1は、横8.0cm、縦7.2cm、厚さ3.2cm。重量205g。不整楕円形で、多孔質である。木の繊維らしいものが付着している。No.2は、横6.8cm、縦5.5cm。厚さ2.3cm。重量96g。不整形で、多孔質。木の繊維らしいものが付着し、No.1とかなり類似している。No.3は、横5.9cm。縦3.7cm、厚さ1.8cm。重量36g。不整形で、多孔質。3点共Q1床面出土である。

2　焼土遺構

焼土遺構は、4基検出されたが、3基は明確な輪郭と掘り込んだ跡が確認され、2基からは、遺物が出土している。他の1基は輪郭がはっきりせず、堆積された焼土が薄く、掘り込んだ跡もないため、記述から除外した。

(1)　Bi50焼土遺構　(第40図)

〔平面形・方向〕　上場は北北西ー南東にやや長い楕円形、下場はやや方形である。

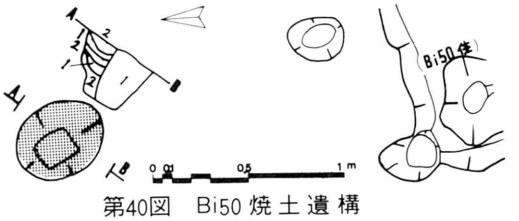
〔規模〕　上場50cm×39cm、下場20cm×17cm。深さ30cmである。

〔断面〕　壁面は傾斜し、底面は平坦な鉢形である。

〔堆積土〕　1層10YR2/2黒褐色腐植土、やや密で、粘性ややあり。焼土・炭化物・礫を含む。2層10YR4/4褐色シルト質土、密で、粘性ややあり。焼土・炭化物をわずか含む。南西側の1層が柱あたり様で、北東側が1層と2層を交互に埋め固めたようにもみえるが、これと同様なピットは周囲には検出されず柱穴とは断定し難い。

〔年代決定資料〕　遺物の出土は皆無である。

〔性格〕　柱穴状ピットの様にも考えられる。また、Bi50住との関連も考えられるが、明確ではない。



第40図　Bi50焼土遺構

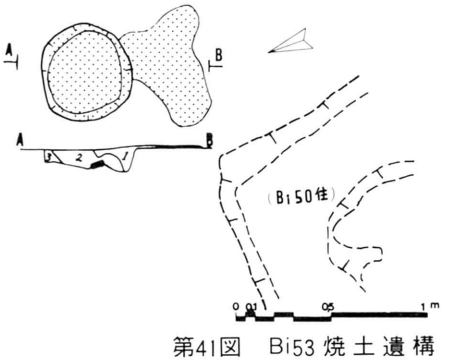
(2)　Bi53焼土遺構　(第41図)

〔平面形・方向〕　上場も下場も、ほゞ円形である。

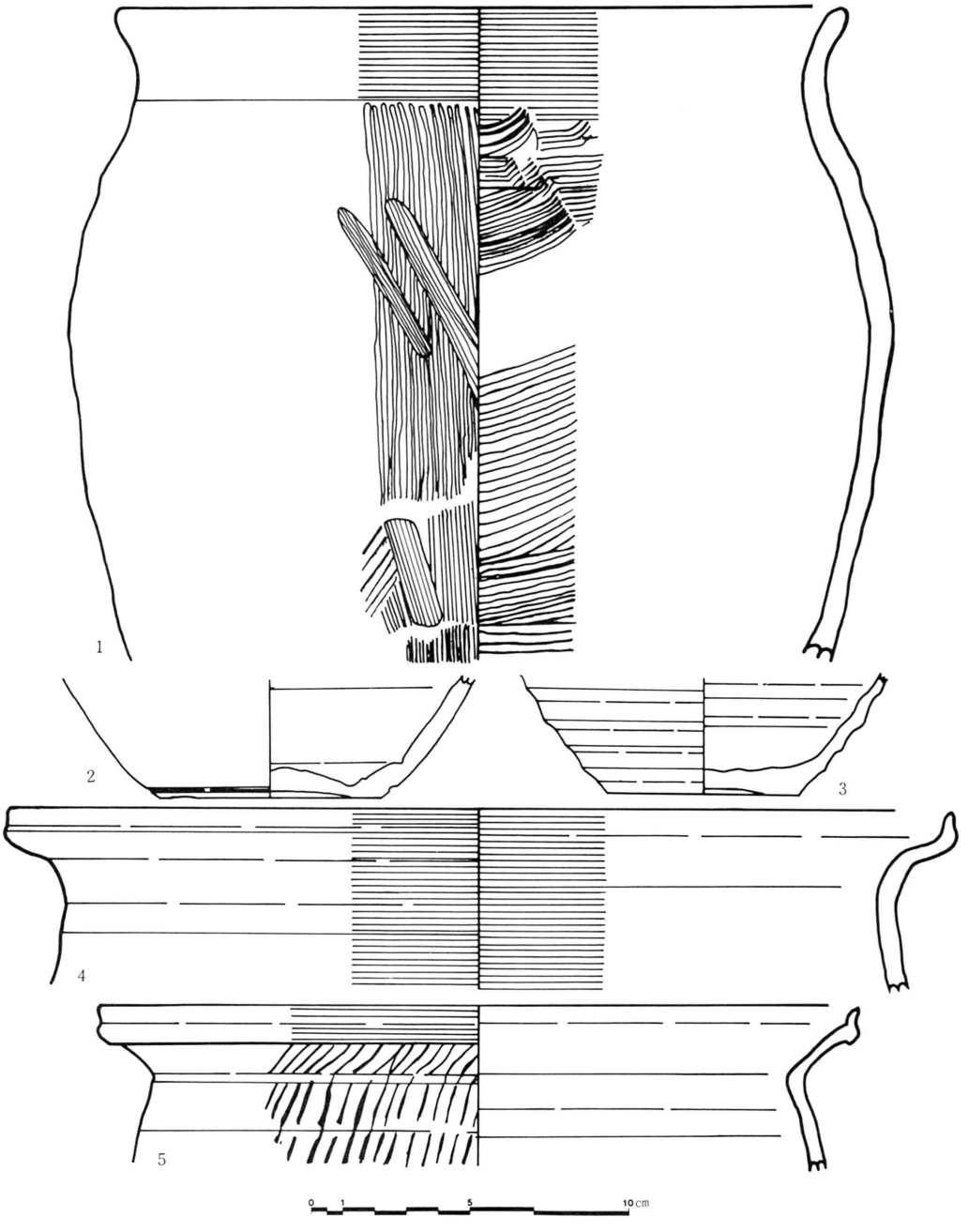
〔規模〕　上場径50cm。下場径40cm。深さ約12cm。

〔断面〕　浅い皿状であるが、壁面はほゞ垂直で、底面は若干凸凹がみられる。

〔堆積土〕　1層7.5YR4/4褐色シルト・焼土混合層。粗



第41図　Bi53焼土遺構



第42図　Bi53焼土遺構出土遺物（1～3）
Cc68焼土遺構出土遺物（4・5）

で、粘性ほとんどなし。炭化物を若干含む。南側壁外にも散布する。2層10YR 3/1黒褐色腐植土。密で、粘性ほとんどなし。底面に焼土をブロック状に含む。遺物を包含する。3層10YR 4/4褐色シルト層、密で、粘性なし。焼土炭化物、礫を含む。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕、小型甕。須恵器、坏B類が、数点ずつ出土した。

〔性格〕 Bi50住の北東約57cmの所にあり、住居跡との関連が考えられる。屋外炉か、土師器製造のかま跡かは不明である。

出土遺物

土師器

長胴甕 (42図1) 口縁部1/4、体部上半1/2、体部下半1/4残存である。口縁部はあまり外反せず、体部との境がはっきりしない。体壁はかなり丸みがみられる。内面は横に刷毛目痕。外面は箆削り箆なで後刷毛目痕が縦に施されている。胎土軟質砂粒をかなり多く含む。色調は浅黄橙色。焼成は不良である。接合しないが同一個体と思われる破片が数点ある。

小型甕 (42図2) 体部下端1/4、底部全部残存である。体下端はわずかに丸みをもつ。底部下面は切り離しが2度行なわれている。下面中央がかなり凹む。胎土軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良である。接合しないが同一個体らしい破片が若干出土した。

須恵器

坏B類 (42図3) 体壁はろくろなでによる凸凹がかなりみられる。底部下面は、中央がやや凹み、切り離し痕が一般的でなく、ゆるい回転で強く手前に引いて糸切りしたように思われる。胎土やや軟質粗砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。他に同一個体と思われる破片が若干出土した。

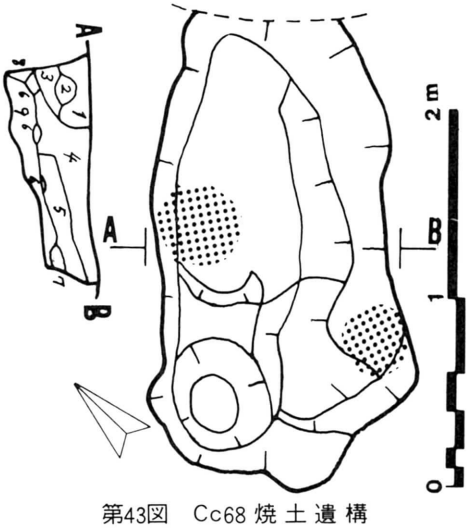
(3) Cc68焼土遺構 (第43図)

〔平面形・方向〕 不整楕円形で、長軸が北東—南西方向を向く。北東端は攪乱により切られている。

〔規模〕 上場長軸2.5m(残存部)。短軸1.22m。下場長軸2.1m。短軸0.9m。深さ43cmである。

〔断面〕 皿状をしているが、西壁・南壁が急傾斜で他は緩かである。底面は南端に径60cm。深さ34cmのピットがある。北半分は、ほゞ平坦である。

〔堆積土〕 焼土の密な集積が2カ所あり、5層迄若干の焼土炭化物が含まれる。1層2.5YR 5/8明赤褐色焼土。炭化物遺物若干含む。2層10YR 3/3暗褐色腐植土。



第43図 Cc68焼土遺構

焼土炭化物シルト若干含む。3層10YR 3/2黒褐色腐植土。炭化物を含む。4層10YR 2/2黒褐色腐植土。炭化物を含む。5層10YR 2/2黒褐色腐植土。焼土炭化物を含む。6層10YR 2/2黒褐色腐植土。シルトを含む。7層10YR 4/4褐色シルト質土。腐植土を若干含む、8層10YR 6/6明黄褐色シルト質土。9層10YR 2/1黒色腐植土、炭化物粒を含む。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕口縁部2点(42図4・5)体部11点。底部1点。小型甕、体部3点、底部1点。須恵器、坏B類体部4点が出土した。長胴甕口縁部の内1点(42図4)は1/8残存。1点(42図5)は1/5残存で、外面に叩き目痕がみられ、両者共かなり胎土に砂を含む。

〔性格〕 断定する資料に欠けるが、窯跡ではないかと思われる。

3 溝状土壙 (第44・45図)(第14表)

(1) Ac09溝状土壙 (第2次調査)(44図1)

〔位置と現状〕 基準線より西へ7.22m～9.83m。基準点より北へ49.64m～52.62mの地点、Ac09地区にあり、北東部が溝によって上部を若干切られているが、壁の崩壊は少ない。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト質土と礫を含む。溝の下層と同質である。2層7.5YR 4/3褐色シルト・腐植土混合層。粗で、粘性若干あり。ブロック状に2個所堆積する。3層7.5YR 3/1黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト質土を若干含む。4層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。腐植土・礫を若干含む。

〔長軸両端の壁〕 南西端はほゞ垂直。北東端はやや傾斜する。

(2) Ae18溝状土壙 (第2次調査)(44図2)

〔位置と現状〕 基準線より西へ14.05m～16.96m。基準点から北へ45.56m～18.21mの地点、Ae18～15地区にあり、大部分の上部が、溝によって切られている。従って北西側の大部分と、南東側東寄りが、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 記録が無く不明である。

〔長軸両端の壁〕 両軸共下場の長軸が長く、壁は抉られている。

(3) Ag09溝状土壙 (第3次調査)(44図3)

〔位置と現状〕 基準線より西へ5.96m～7.7m。基準点より北へ39.82m～42.68mの地点、Ag09地区にあり、壁面の崩壊は少ない。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性わずかあり。礫を含む。2層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルトを若干含む。3層10YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘

性ややあり。礫を含む。4層7.5YR 2/1黒色腐植土。1層と同じ。5層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし、6層7.5YR 2/1黒色腐植土、粗で、粘性なし。

〔長軸両端の壁〕 南西端は下場の方が長く抉られている。北東端はわずかに傾斜する。

(4) Ai 21溝状土壙 (第2次調査)(44図4)

〔位置と現状〕 基準線より西へ19.36m～22.29m。基準点より北へ33.50m～34.38mの地点、Ai 21地区にある。壁面の崩壊が若干認められる。

〔堆積土〕 1層7.5YR 3/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。シルト質土を含む。2層7.5YR 2/1黒色腐植土層。やや密で、粘性ややあり。炭化物をわずか含む3層7.5YR 4/4褐色シルト質土、粗で、粘性なし。腐植土を若干含む。4層7.5YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。

〔長軸両端の壁〕 両端共わずかに傾斜する。

(5) Ai 50溝状土壙 (第3次調査)(44図5)

〔位置と現状〕 基準線から東へ0.40m～3.1m。基準点から北へ33.78m～35.28mの地点、Ai 50地区にある。壁面の崩壊がややみられる。

〔堆積土〕 1層10YR 2/3黒褐色腐植土。密で、粘性ややあり。礫・炭化物を含む。2層10YR 4/4褐色シルト質土。密で、粘性ややあり。礫・炭化物・腐植土若干を含む。3層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。礫・炭化物を含む。4層10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性なし。

〔長軸両端の壁〕 両端共わずかに傾斜する。

(6) Aj 12溝状土壙 (第3次調査)(44図6)

〔位置と現状〕 基準線より西へ10.6m～11.3m。基準点より北へ29.52m～32.30mの地点、Aj 12地区にある。方形周溝より北東へ延びる溝によって壁がかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。2層7.5YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性ややあり。3層10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。4層は1層と同じ。

〔長軸両端の壁〕 両端共わずかに傾斜する。

(7) Aj 59溝状土壙 (第3次調査)(44図7)

〔位置と現状〕 基準線より東へ9.6m～10.2m。基準点から北へ30.37m～34.29mの地点、Aj 59～Ai 59地区にある。中央部壁面が崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。2層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。

密で、粘性ややあり。腐植土を若干含む。3層7.5YR 5/8明褐色シルト質土。密で、粘性ややあり。4層10YR 6/6明黄褐色粘土。密で、粘性あり。5層10YR 5/4にぶい黄褐色粘土。密で、粘性あり。腐植土を若干含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共下場の長軸が長く、かなり抉られている。

(8) Ba03溝状土壙 (第3次調査)(44図8)

〔位置と現状〕 基準線より西へ40cm～2.31m。基準点から北へ26.27m～28.77mの地点。Ba03～Bb03地区にある。Ba06住に切られ、かなり壁面が崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/3黒褐色腐植土。密で、粘性なし。2層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。3層7.5YR 2/3黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土を含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

(9) Bb15溝状土壙 (第3次調査)(44図9)

〔位置と現状〕 基準線から西へ11.76m～12.13m。基準点から北へ24.39m～27.04mの地点、Bb15・Bb12地区にある。Bb18住の床面下にあり、壁が若干崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR 3/4暗褐色腐植土。密で、粘性なし。2層7.5YR 4/4褐色シルト質土。密で、粘性ややあり。腐植土を含む。3層10YR 3/4 暗褐色腐植土層。密で、粘性ややあり、シルト・砂を含む。尚1層上面はBb18住の床面で、焼土・炭化物を含む所あり。

〔長軸両端の壁〕 両端共若干の傾斜をもつ。

(10) Bb50溝状土壙 (第3次調査)(44図10)

〔位置と現状〕 基準線から西へ82cm、東へ1.38m。基準点から北へ24.80m～26.72mの地点、Bb03・Bb50地区にある。北東端がAj 50住の南壁に接している。壁面がかなり崩壊し、上場の凸凹が著るしい。

〔堆積土〕 1層10YR 2/3黒褐色腐植土層、密で、粘性なし。2層10YR 3/4暗褐色腐植土シルト質土混合。密で、粘性ややあり。3層10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。4層は2層と同じ。5層は3層と同じ。6層10YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性なし。炭化物若干含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

(11) Bd09溝状土壙 (第3次調査)(44図11)

〔位置と現状〕 基準線から西へ7.00m～9.41m。基準点から北へ18.29m～21.17mの地点、Bd09地区にある。壁面上部が若干崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 3/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。2層7.5YR 4/4褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。腐植土を若干含む。3層10YR 3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。4a層7.5YR 4/4褐色シルト・腐植土混合。粗で、粘性若干あり。4b層7.5YR 4/3褐色シルト・腐植土混合。粗で粘性若干あり。4c層は4b層とほゞ同じ。4d層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。4e層10YR 4/3にぶい黄褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。腐植土・砂を含む。5a層7.5YR 3/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性若干あり。シルト質土・砂を含む。5b層7.5YR 2/1黒色腐植土層、粗で、粘性なし。炭化物若干含む。5c層10YR 2/3黒褐色腐植土層、粗で、粘性若干あり、シルト質土を含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共下場の長軸が長く、壁は抉られている。

(12) Bd62溝状土壙 (第3次調査)(44図12)

〔位置と現状〕 基準線より東へ14.75m～16.27m。基準点より北へ17.18m～19.78mの地点、Bd62～Be65地区にある。Bd62住の床面下にあり、壁面上部は崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。シルト質土を含む。2a層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。シルト質土若干含む。2b層10YR 4/3黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。腐植土を含む。3a層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。3b層10YR 6/6明黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。4層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし、5層は3b層とほゞ同じ。6層は3a層とほゞ同じ。シルト質土を含む。7層は3b層とほゞ同じ。8a層。10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。腐植土を若干含む。8b層は1層とほゞ同じ。8c層は、8a層とほゞ同じ。9層と10層は同質で、10YR 5/4にぶい黄褐色砂層、やや密で、粘性なし。11層10YR 2/1黒色腐植土層。粗で、粘性なし、砂を含む。

〔長軸両端の壁〕 北端はほゞ垂直である。南端は下場が長く、若干抉られている。

(13) Be65溝状土壙 (第3次調査)(44図13)

〔位置と現状〕 基準線から東へ15.64m～17.98m。基準点から北へ14.03m～15.56mの地点、Be65～Bf65地区にある。壁の南西側上部が崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。炭化物を若干含む。2層10YR 2/3黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土を含む。3層10YR 3/4暗褐色腐植土シルト混合。粗で、粘性ややあり。4層10YR 4/4褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。5層は2層と同じ。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

⑭ Bf 62溝状土壙 （第３次調査）（44図14）

〔位置と現状〕 基準線より東へ12.84m～16.41m。基準点より北へ13.35m～14.46mの地点、Bf 62～Bf 65地区にある。壁が若干崩壊している。

〔堆積土〕 １層10YR1/7黒色腐植土。粗で、粘性若干あり。２層10YR 3/3暗褐色腐植土シルト質土混合。粗で、粘性若干あり。炭化物を若干含む。３a層10YR 4/4褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。炭化物を若干含む。３b層10YR 6/8明黄褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。4層10YR 5/4にぶい黄褐色砂質土。粗で、粘性なし。５層は１層とほゞ同質同色。６層は４層とほゞ同じ。７層は１層とほゞ同じ。

〔長軸両端の壁〕 両端共若干抉られている。

⑮ Bf 65溝状土壙 （第３次調査）（44図15）

〔位置と現状〕 基準線より東へ16.09m～18.38m。基準点から北へ12.86m～14.9mの地点、Bf 65～Bf 68地区にあり、Be 65溝状土壙の南側10～50cmの所にほゞ平行している。壁の崩壊は少なく、壁はほゞ垂直である。

〔堆積土〕 １層10YR 2/3黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト質土・炭化物を若干含む。２層10YR 4/4暗褐色シルト質土、粗で、粘性若干あり。３層10YR 2/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性若干あり。炭化物を若干含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

⑯ Bg 59溝状土壙 （第３次調査）（44図16）

〔位置と現状〕 基準線より東へ9.59m～11.28m。基準点より北へ10.56m～11.17mの地点。Bg 59地区にある。壁の上半部は崩壊した所が非常に多く、凸凹が著るしい。

〔堆積土〕 １層10YR 2/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性若干あり。炭化物を若干含む。２層7.5YR 3/3暗褐色腐植土層。粗で、粘性若干あり。シルト質土を含む。３層7.5YR 4/6褐色粘土層。粗で、粘性あり。４層は１層とほゞ同じ。５層は２層とほゞ同じ。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

⑰ Bh 62溝状土壙

〔位置と現状〕 基準線から東へ12.22m～14.96m。基準点から北へ5.32m～7.48mの地点。Bh 62－Bi 62地区にある。南東壁の一部が、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 １層7.5YR 2/2 黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。炭化物を含む。２層10YR 4/6 褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。３層7.5YR 2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり、シ

ルト質土を含む。4層10YR 4/4褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。腐植土を含む。5層7.5YR 3/1黒褐色腐植土層。粗で、粘性ややあり。砂を含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

⑱ Bi09溝状土壙 (第3次調査)(44図18)

〔位置と現状〕 基準線より西へ6.76m～9.71m。基準点から北へ4.28m～6.24mの地点、Bh09～Bi12地区にある。壁の上部に崩壊が若干みられる。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。密で、粘性若干あり。炭化物を若干含む。2層10YR 3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト質土を含む。3層7.5YR 4/6褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。4層は2層とほゞ同質で、砂を若干含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

⑲ Bi56溝状土壙 (第3次調査)(44図19)

〔位置と現状〕 基準線より東へ6.43m～9.73m。基準点より北へ3.28m～5.18mの地点、Bi56～Bi59地区にある。壁面上部はかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし、北西側に焼土炭化物層が薄く集積している。2層10YR 5/8黄褐色シルト質土。粗で、粘性若干あり。砂を含む。3層10YR 3/3暗褐色シルト・腐植土混合。粗で、粘性若干あり。砂を含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共下場が長く、かなり抉っている。

⑳ Bi62溝状土壙 (第3次調査)(44図20)

〔位置と現状〕 基準線より東へ13.39m～16.46m。基準点より北へ2.88m～3.76mの地点Bi62～Bi65地区にある。壁面上部全体がかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性ややあり。炭化物若干含む。2層10YR 3/4暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。炭化物を若干含む。3層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。4層10YR 2/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性ややあり。5層は2層とほゞ同じ。6層は4層とほゞ同じ。7層10YR 3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり、シルト炭化物を含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共ほゞ垂直である。

㉑ Bi65溝状土壙 (第3次調査)(44図21)

〔位置と現状〕 基準線より東へ14.67m～17.06m。基準点より北へ4.39m～5.52mの地点、Bi65地区にある。壁面上部全体がかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR1.7/1黒色腐植土層。やや密で、粘性若干あり。炭化物を含む。2層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト・炭化物を含む。3層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。炭化物を若干、シルト質土を含む。4層は2層とほゞ同じ。5層は3層とほゞ同じ。6層は2層とほゞ同じ。7層は3層とほゞ同じである。

〔長軸両端の壁〕 両端共わずかに傾斜がある。

(22) Bj53溝状土壙 (第3次調査)(44図22)

〔位置と現状〕 基準線より東へ2.62m～5.80m。基準点より北へ1.22m～3.48mの地点、Bj53～Bi53地区にある。Bi50住に切られ、壁面上部は大部分崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。炭化物を含む。2層10YR 3/4暗褐色シルト・腐植土混合。粗で、粘性若干あり。炭化物若干含む。3層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性若干あり。シルト質土・炭化物を含む。4層10YR 4/4褐色シルト層。粗で、粘性ややあり、腐植土を含む。5層7.5YR 5/6明褐色シルト層。粗で、粘性ややあり、腐植土を含む。6層10YR1.7/1黒色腐植土層。粗で、粘性ややあり、炭化物を含む。7層は3層とほゞ同じである。

〔長軸両端の壁〕 両端とも下場が長く、かなり抉られている。

(23) Ca53溝状土壙 (第3次調査)(45図1)

〔位置と現状〕 基準線より東へ2.99m～5.02m。基準点より南へ0.22m～2.88mの地点、Ca53地区にある。壁の上部全体が、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。炭化物を含む。2層7.5YR 2/3極暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土・炭化物を含む。3層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。4層は1層とほゞ同色同質。5層は2層とほゞ同色同質。6層は1層とほゞ同色同質。7層は3層とほゞ同色同質。8層は2層とほゞ同色同質である。

〔長軸両端の壁〕 北西端の壁はかなり抉られ、南西端の壁はほゞ垂直である。

(24) Ca62溝状土壙 (第3次調査)(45図2)

〔位置と現状〕 基準線から東へ12.01m～14.70m。基準点から南へ0.65m～2.08mの地点Ca62地区にある。壁の上部大部分が、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/3黒褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。炭化物を含む。2a層7.5YR 3/4暗褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。2b層7.5YR 4/4褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。3層は1層とほゞ同色同質。4層は2b層とほゞ同色同質。5層は1層とほゞ同色同質。

〔長軸両端の壁〕 東端はわずかに傾斜する。西端はほゞ垂直で、やや抉られている。

(25) Cd59溝状土壙 (第1次調査)(45図3)

〔位置と現状〕 基準線より東へ7.79m～10.74m。基準点より南へ11.14m～12.41mの地点、Cd56～Ce59地区にある。壁の上部特に北側が崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR2/1黒色腐植土。やや密で、粘性若干あり。シルト質土を少量含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共若干傾斜をしている。

(26) Cf18溝状土壙 (第1次調査)(45図4)

〔位置と現状〕 基準線より西へ16.23m～17.12m。基準点から南へ16.56m～18.69mの地点。Cf18～Cg18地区にある。壁の上部が大部崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR2/1黒色腐植土。やや密で、粘性わずかあり、シルト質土を少量含む。2層7.5YR4/4褐色シルト質土。やや密で、粘性ややあり、腐植土を少量含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共にわずか傾斜がある。

(27) Cf21溝状土壙 (第1次調査)(45図5)

〔位置と現状〕 基準線より西へ17.93m～18.43m。基準点より南へ16.29m～17.78mの地点、Cf18～Cf21地区にあり、前述のCf18溝状土壙の西1.2m。Cd21住居跡の南西コーナーから南へ約60cmの所である。壁の上部大部分はかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層7.5YR2/1黒色腐植土。やや密で、粘性若干あり。2層7.5YR2/1黒色腐植土層。やや密で、粘性若干あり。シルト質土を若干含む。3層7.5YR2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。シルト質土を少量含む。

〔長軸両端の壁〕 両端共にほゞ垂直である。

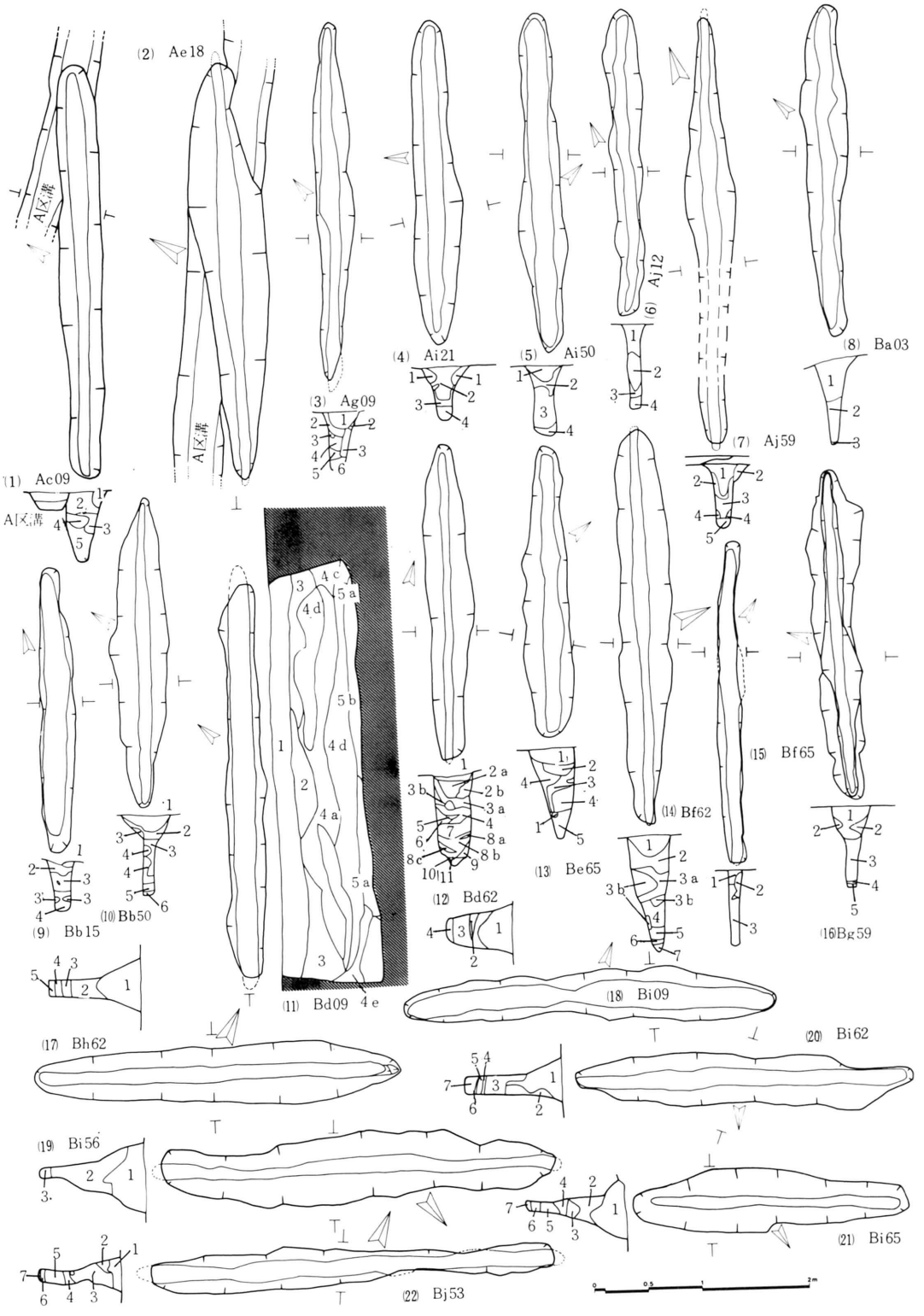
(28) Cg12溝状土壙 (第1次調査)(45図6)

〔位置と現状〕 基準線より西へ11.31m～11.84m。基準点より南へ18.17m～11.65mの地点、Cg12地区にあり、(27) Cf21溝状土壙の東南東約6.3m。(26) Cf18溝状土壙の東南東約4.7m。(29) Cg15溝状土壙の東南東約1.5mの所で、これらの4基は、ほゞ平行している。壁の上部は、若干崩壊した所がある。

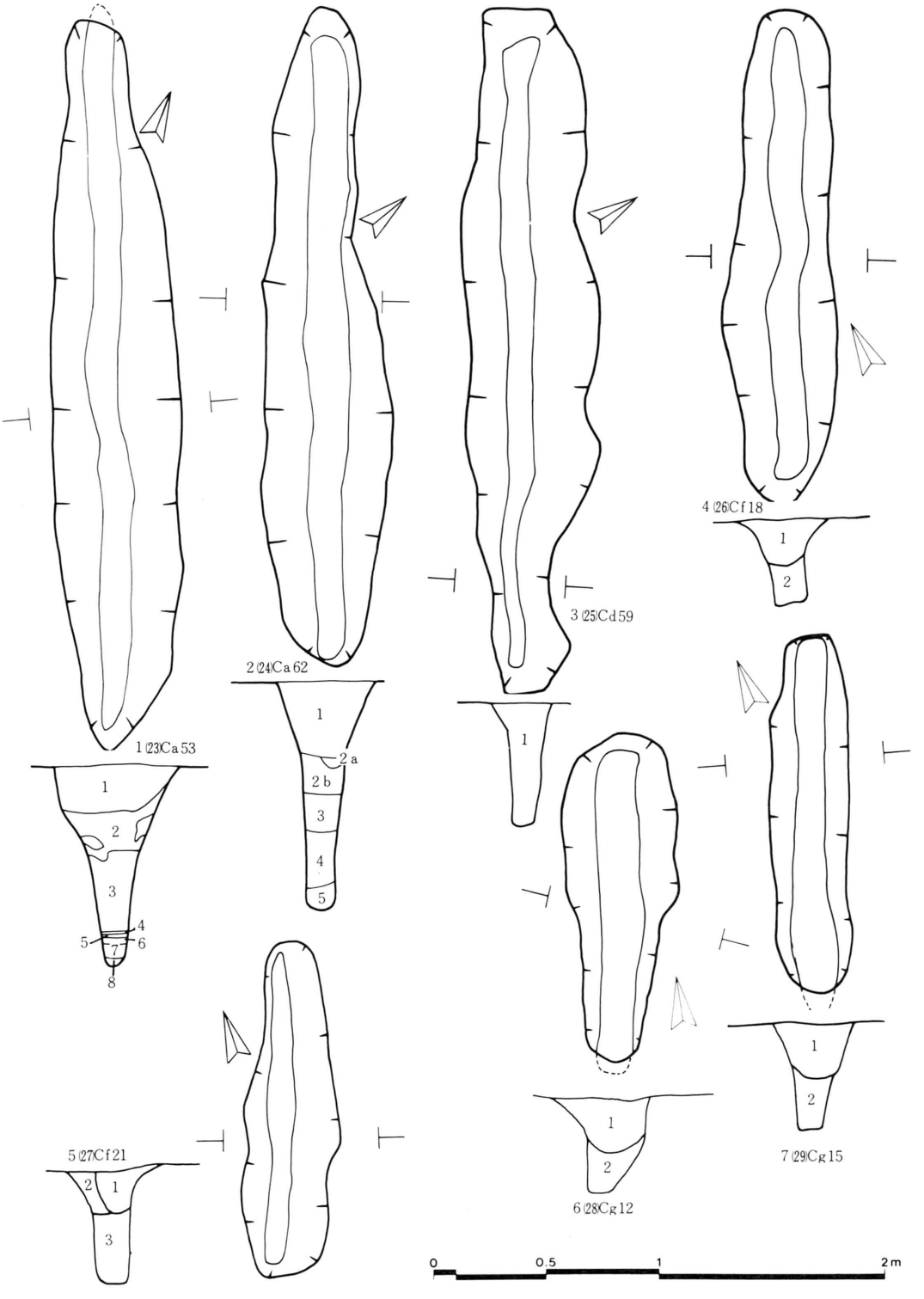
〔堆積土〕 1層7.5YR2/1黒色腐植土。やや密で、粘性ややあり。シルト質土を少量含む。2層7.5YR4/4褐色シルト質土。やや密で、粘性ややあり。腐植土を少量含む。

〔長軸両端の壁〕 北端の壁は、ほゞ垂直である。南端の壁はやや抉られている。

(29) Cg15溝状土壙 (第1次調査)(45図7)


(1) Ac09
A区溝
(2) Ae18
A区溝
(3) Ag09
(4) Ai21
(5) Ai50
(6) Aj12
(7) Aj59
(8) Ba03
(9) Bb15
(10) Bb50
(11) Bd09
(12) Bd62
(13) Be65
(14) Bf62
(15) Bf65
(16) Bg59
(17) Bh62
(18) Bi09
(19) Bi56
(20) Bi62
(21) Bi65
(22) Bj53

第44図　溝　状　土　壙（1）


1 (23)Ca 53
2 (24)Ca 62
3 (25)Cd 59
4 (26)Cf 18
5 (27)Cf 21
6 (28)Cg 12
7 (29)Cg 15
0
0.5
1
2m

第45図 溝 状 土 壙 (2)

第14表　溝　状　土　壙　一　覧

遺構名	実測図番号	規模（m）上場 長軸	上場 短軸	下場 長軸	下場 短軸	深さ	長軸方向	断面	下場形状	堆積土*	重複
Ac 09	44－1	3.84	0.3～0.41	3.75	0.10	0.70	N－52°－E	U	北端丸い、南端南へ尖る	5層	A区溝
Ae 18	44－2	3.88	0.70	4.04	0.1～0.2	0.42	N-57.5°-E	U	両端丸い、両端上場より長い	—	A区溝
Ag 09	44－3	3.30	0.34	3.38	0.10	0.55	N-40.5°-E	U	両端尖る、南端のみ上場より長い	6層	—
Ai 21	44－4	3.00	0.35	2.85	0.15	0.50	N－87°－E	U	東端丸い、西端北へ反る	4層	—
Ai 50	44－5	3.15	0.35	3.05	0.20	0.66	N－48°－W	U	両端丸く、やや細くなる	4層	—
Aj 12	44－6	2.85	0.22	2.75	0.10	0.78	N－22°－E	U	両端丸い、蛇行著るしい	4層	方形周溝の溝
Aj 59	44－7	3.90	0.45	4.10	0.14	0.60	N－16°－E	V	両端丸く上場より長い、かなり蛇行する	5層	—
Ba 03	44－8	3.05	0.38	2.98	0.07	0.80	N－47°－E	U	両端尖る、かなり蛇行する	3層	Ba 06住
Bb 15	44－9	2.65	0.30	2.45	0.14	0.40	N－12°－E	U	両端丸く、やや細くなる	4層	Bb 18住
Bb 50	44－10	2.90	0.45	2.80	0.12	0.75	N－58°－E	U	両端丸く、北東半分細い	6層	—
Bd 09	44－11	3.65	0.33	3.82	0.20	0.80	N－49°－E	U	両端丸く、上場より長い	5層	—
Bd 62	44－12	2.93	0.40	2.89	0.07	0.84	N－20°－W	U	両端丸い、南端のみ上場より長い	11層	Bd 62住
Be 65	44－13	2.70	0.40	2.60	0.15	0.80	N－48°－W	V	両端共南西へ尖る	5層	—
Bf 62	44－14	3.65	0.42	3.70	0.06	1.08	N－65°－W	V	東端丸、西端北へ尖る、両端共上場より長い	7層	—
Bf 65	44－15	3.00	0.25	2.90	0.15	0.66	N－39°－W	U	両端丸い、南東端のみ上場より長い	3層	—
Bg 59	44－16	3.06	0.35	3.00	0.09	0.75	N－71°－E	U	両端丸い、ほゞ直線的	5層	—
Bh 62	44－17	3.40	0.50	3.22	0.15	0.86	N－62°－E	U	北東端やや尖る、南西端やや膨らむ	5層	—
Bi 09	44－18	3.45	0.36	3.40	0.1～0.27	0.60	N－67°－E	U	両端共丸い、中央せまくなる	4層	—
Bi 56	44－19	3.65	0.65	3.80	0.10	1.00	N－52°－W	V	両端共丸く、上場より長い	3層	—
Bi 62	44－20	3.15	0.40	3.05	0.15	0.91	N－85°－E	U	西端尖る、東端丸い	7層	—
Bi 65	44－21	2.60	0.56	2.35	0.10	0.93	N－55°－W	U	両端丸い、東端やや細い	7層	—
Bj 53	44－22	3.75	0.30	4.00	0.15	0.78	N－67°－E	U	両端共丸く、上場より長い	7層	Bi 50住
Ca 53	45－1	3.25	0.60	3.25	0.15	0.90	N－26°－W	V	北端尖り、上場より長い、南端尖る	8層	—
Ca 62	45－2	2.95	0.50	2.77	0.20	0.60	N－55°－W	U	両端共西へ尖る	5層	—
Cd 59	45－3	3.06	0.50	2.81	0.06～0.1	0.55	N－59°－W	U	西端北へ張り出す、東半分細い	1層	—
Cf 18	45－4	2.20	0.40	2.01	0.14	0.38	N－26°－E	U	北端丸く細い、南端西へ尖る、蛇行	2層	—
Cf 21	45－5	1.52	0.40	1.40	0.10	0.51	N－20°－E	U	北端尖る、南端丸い	3層	—
Cg 12	45－6	1.48	0.50	1.45	0.15～0.2	0.42	N－12°－E	U	北端東へ尖る、南端丸く上場より長い	2層	—
Cg 15	45－7	1.60	0.35	1.68	0.14～0.2	0.48	N－21°－E	U	両端丸い、南端のみ上場より長い	2層	—
平　均		3.02	0.41	3.00	0.12	0.69					

＊（表土・地山混合）

第15表　土　壙　一　覧

遺構名	規模（m）上場 長軸	上場 短軸	下場 長軸	下場 短軸	深さ（m）	方向	形状 上場	形状 下場	埋土	出土遺物
Bb 56	1.80	0.80	1.60	0.35	0.87	N－33°－W	楕円形	長方形	4層	1層より石箆状石器
Bc 53	2.00	0.90	1.70	0.35	0.83	N－35°－W	楕円形	長方形	6層	1層より縄文土器片
Bd 50A	1.90	1.00	1.70	0.25	1.06	N－40°－E	楕円形	長方形	6層	1層より縄文土器片
Bd 50B	1.60	0.60	0.85	0.20	1.18	N－70°－E	楕円形	長方形	6層	1層より石斧
Be 09	1.80	0.70	1.40	0.25	0.86	N－15°－W	楕円形	長方形	7層	1層より縄文土器片
Be 12	2.00	1.00	2.00	0.30	1.10	N－25°－W	繭形	長方形	7層	1層より縄文土器片
Be 56	1.50	0.50	1.60	0.20	0.95	N－3°－W	楕円形	長方形	6層	1層より縄文土器片
Bg 09	2.50	0.90	2.15	0.50	0.64	N－55°－E	楕円形	長方形、両端やや丸	5層	1層より縄文土器片・縦型石匙
平　均	1.89	0.80	1.63	0.30	0.94					

〔位置と現状〕 基準線より西へ13.22m～13.74m。基準点より南へ17.48m～19.06mの地点、Cf 15～Cg15地区にあり、(28) Cg12溝状土壙の西北西約1.5m。(26) Cf 18溝状土壙の東南東 約2.9mの所である。壁の上部が若干崩壊している所がみられる。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/1黒色腐植土。やや密で、粘性ややあり。シルト質土を少量含む。2層7.5YR 4/4褐色シルト質土。やや密で、粘性ややあり。腐植土を少量含む。

〔長軸両端の壁〕 平面形は、(28) Cg12溝状土壙に類似し、北端の壁は、ほゞ垂直である。南端の壁は、上場より長く、若干抉られている。

以上29基の溝状土壙を記述したが、主な項目については、対比するため第14表に記載した。

年代決定資料は、29基共皆無であるが、第1層からは、縄文早期末から、前期初頭と思われる土器片や石器が、ほとんど29基全部から出土している。また、住居跡との切り合いの溝状土壙からは、やはり第1層より、土師器、須恵器等の破片が若干出土している。またAi 50・Bf 62・Bi 62・Bi 65・Bj 53・Ca53の各溝状土壙には、最下層、またはそのすぐ上層に、炭化物を含んでいたが、少量で分析できる量ではなかった。

4 土壙 (第46図)(第15表)

(1) Bb56土壙 (46図1)

〔位置と現状〕 基準線より東へ6.07m～7.50m。基準点から北へ25.61m～27.11mの地点、Ba 56～Bb56地区にある。Ba53住の東壁から東へ29cmの所である。壁の上端部が若干崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。縄文土器片1、石篦状石器1を含む。2層10YR 3/3暗褐色腐植土層。やや粗で、粘性なし。シルト質土を若干含む。3層10YR 3/3暗褐色腐植土層。やや粗で、粘性なし。シルト質土を若干含む。4層10YR 5/6黄褐色シルト質土。やや粗で、粘性あり。5層10YR 2/1黒色腐植土層。粗で、粘性ややあり、炭化物粒状、シルト質土若干を含む。

〔壁の形状〕 長軸側、短軸側共、ほゞ垂直である。

〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は皆無である。

(2) Bc53土壙 (46図2)

〔位置と現状〕 基準線より東へ3.09m～4.72m。基準点から北へ22.73m～24.40mの地点、Bb 53～Bc53地区にある。Ba53住の南壁から南へ約2mの所である。北東壁の上半が、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。縄文土器片若干含む。2層10YR 3/3

暗褐色腐植土層。粗で、粘性ややあり。シルト質土を含む。3層10YR 5/6黄褐色シルト質土、やや密で、粘性あり。4層10YR 2/2黒褐色腐植土層、粗で、粘性なし。シルト質土を若干含む。5層10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。3層とほゞ同質で、水分をかなり含む。6層10YR 2/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし。シルト質土若干を含む。1層・4層とほゞ同質で、水分をかなり含む。

〔壁の形状〕 長軸側、短軸側共にほゞ垂直である。

〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は、皆無である。

(3) Bd50A 土壙 (46図3)

〔位置と現状〕 基準線より東へ0.35m～1.64m。基準点から北へ約20m～21.87mの地点、Bc50～Bd50地区にある。Aj 50住の中間地点である。

〔堆積土〕 1層10YR 3/3暗褐色腐植土層。やや密で、粘性なし。シルト質土、縄文土器片4、磨製石斧1、フレーク1を含む。2層10YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。3層10YR 4/6褐色シルト質土。密で、粘性あり。4層10YR 4/3黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。腐植土を若干含む。5層10YR 3/4暗褐色シルト質土。粗で、粘性あり。腐植土混合。6層10YR 2/3黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土を若干含む。7層10YR 3/3暗褐色腐植土層。粗で、粘性ややあり。シルト質土を若干含む。8層10YR 6/6明黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。9層10YR 3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土若干を含む。1層・7層とほゞ同質。10層10YR 4/6褐色シルト質土。粗で、粘性あり。3層とほゞ同質。11層2.5Y 7/4浅黄色粘土、やや密で、粘性あり。12層10YR 7/6明黄褐色砂質土。密で、粘性なし。13層10YR 3/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性ややあり。2層とほゞ同質。

〔壁の形状〕 長軸両端の壁は、下半部が若干抉られている。短軸側は、東側がかなり崩壊しているが、下半部はほゞ垂直と思われる。西側の下半部はわずかに抉られ丸みをもっている。

〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は皆無である。

(4) Bd50B土壙 (46図4)

〔位置と現状〕 基準線から東へ0.83m～2.34m。基準点から北へ19.00m～20.20mの地点、Bd50地区にある。Bd50A土壙の南南東側にあり、壁との間隔は13cmである。壁の上半部に若干崩壊した所がある。特に西北西側のBd50A土壙に近い所は、かなり崩壊している。

〔堆積土〕 記録が無い。

〔壁の形状〕 南北側の壁は傾斜が若干みられる。東西長軸両端の壁は、ほゞ垂直である。

〔年代決定資料〕 出土遺物は皆無である。

(5) Be09土壙 (46図5)

〔位置と現状〕 基準線より西へ5.92m～7.11m。基準点より北へ16.10m～17.91mの地点、Be06～Be09地区にある。Be06住の北西約2mである。西壁上半部の崩壊が若干ある。他はほゞ原形のまゝと思われる。

〔堆積土〕 1層10YR3/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。炭化物を若干含む。縄文土器片6、縦型石匙1、剝片1を包含。2層10YR3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。3層10YR3/3暗褐色腐植土層。粗で、粘性あり。4層10YR3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。5層10YR5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。砂・礫を含む。6層10YR黒褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。4層とほゞ同質。7層10YR3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。砂・粘土を若干含む。

〔壁の形状〕 ほゞ垂直である。

〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は皆無である。

(6) Be 12土壙 (46図6)

〔位置と現状〕 基準線より西へ9.38m～11.00m。基準点より北へ17.00m～18.88mの地点、Bd12～Be12地区にある。Bb18住南東隅から南へ3.4m。Bd09溝状土壙の南西端から南西へ30cmの所にある。東壁上半部に崩壊した個所がある。他はほゞ原形のまゝと思われる。

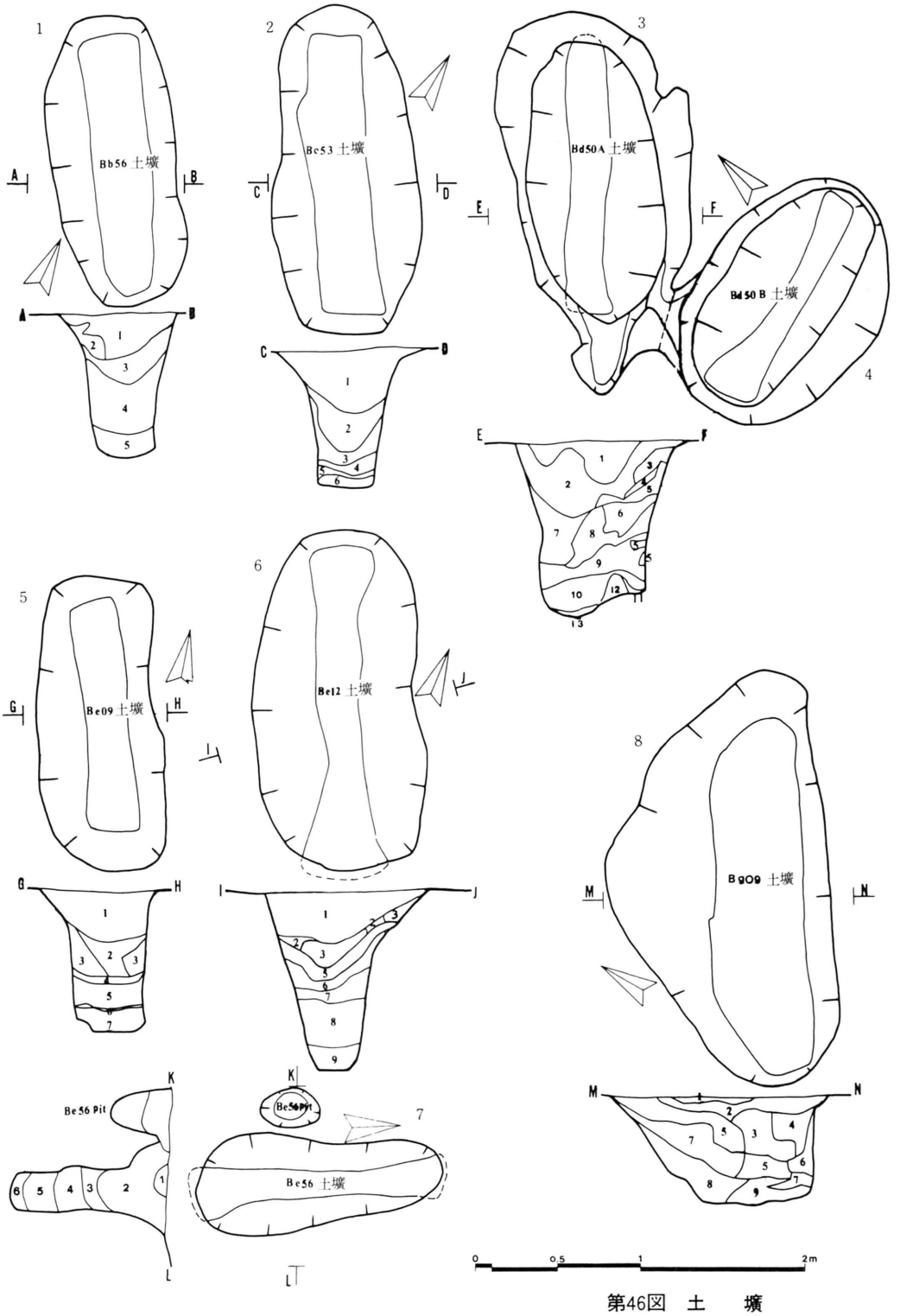
〔堆積土〕 1層10YR2/2黒褐色腐植土。やや密で、粘性なし。炭化物を含む。縄文土器片5を包含。2層10YR2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。シルト質土を含む。3層10YR3/4暗褐色腐植土。やや密で、粘性ややあり。シルト質土を含む。4層10YR4/4褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。腐植土を含む。5層10YR4/3黄褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。炭化物・腐植土を含む。6層10YR5/6黄褐色シルト質土、粗で、粘性あり。腐植土を若干含む。7層10YR3/2黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし。シルト質土若干を含む。8層10YR5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。9層10YR2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。シルト質土を若干含む。2層とほぼ同質。6層と8層もほゞ同質。

〔壁の形状〕 長軸北西端は、ほゞ垂直。南東端は、やや抉られて下場の方が長い。短軸両側は若干傾斜がある。

〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は皆無である。

(7) Be56土壙 (46図7)

〔位置と現状〕 基準線より東へ8.25m～8.98m。基準点より北へ16.64m～18.11mの地点、Bd56～Be 56地区にある。Be06住とBd62住のほゞ中間になる。東西両壁の南側上端部が若干崩壊している。他はほゞ原形のままと思われる。


1
Bb56 土壙
A
B
2
Bc53 土壙
C
D
3
Bd50A 土壙
E
F
Bd50B 土壙
4
5
Be09 土壙
G
H
6
Be12 土壙
I
J
8
Bg09 土壙
M
N
Be56 Pit
K
L
7
Be56 土壙
0
0.5
1
2m

第46図 土 壙

〔堆積土〕 セクション図だけで、注記なし。各層サンプルはあり。

〔壁の形状〕 東西両壁は、ほゞ垂直。南北両端は、下場の方が長く、抉られている。

〔年代決定資料〕 1層より縄文土器片1。2層以下は、出土遺物皆無。

(8) Bg09土壙 (46図8)

〔位置と現状〕 基準線より西へ5.60m～7.64m。基準点より北へ8.48m～10.44mの地点、Bg06～Bh09地区にある。Be06住の西約5mのところである。北西壁がかなり崩壊している。

〔堆積土〕 1層10YR 2/2黒褐色腐植土。密で、粘性なし。縄文土器片16。石鏃1包含。2層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。3層10YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性なし。4層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。5層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。シルト質土混合。6層10YR 3/3暗褐色腐植土。粗で、粘性ややあり。シルト質土混合。7層10YR 5/6黄褐色シルト質土。粗で、粘性あり。8層10YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、粘性なし。9層10YR 2/1黒色腐植土。粗で、粘性なし。3層とほゞ同質。

〔壁の形状〕 北西側は崩壊し原形は残っていないが、セクション図をみると、ほゞ垂直であったと思われる。他の壁はほゞ垂直である。

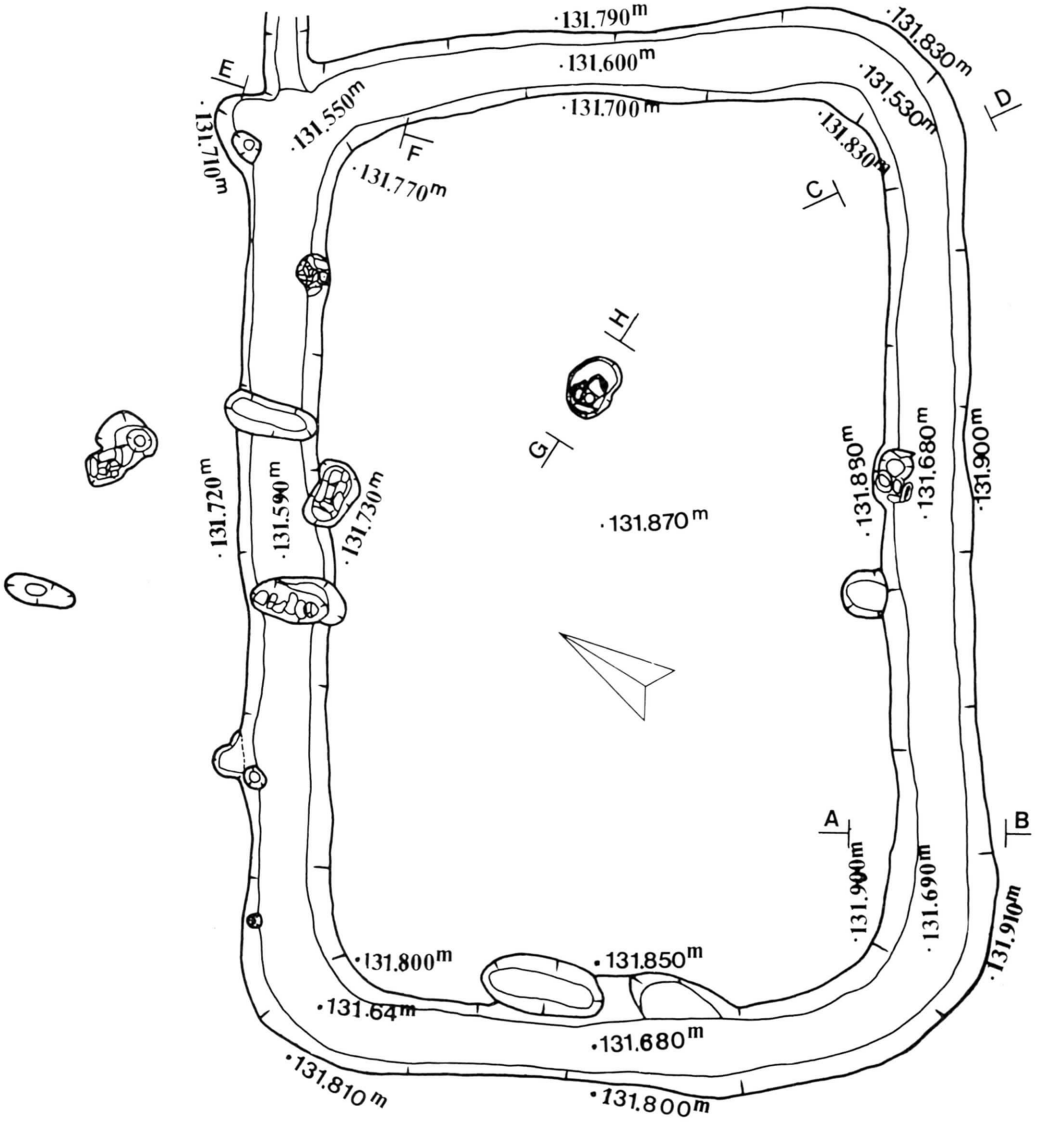
〔年代決定資料〕 2層以下からの、遺物の出土は皆無である。

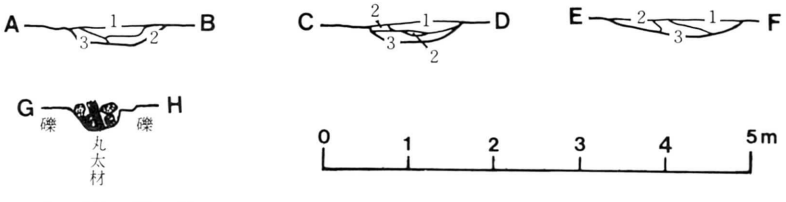
以上8基の土壙は、共通点をまとめてみると、長軸と上場下場共に、溝状土壙よりは、かなり短い。また短軸の上場下場共に、溝状土壙よりは長い。深さは、平均値が、溝状土壙よりは、かなり長い。溝状土壙の長軸上場は、最大3.9m。最小1.48m。長軸下場は、最大4.1m。最小1.4m。深さは、最大1.08m。最小0.4mと、かなりの差があり、多様であるが、土壙に於ては、長軸上場は、最大2.5m。最小1.5m。長軸下場は、最大2.15m。最小0.85m。深さは、最大1.18m。最小0.64m。とそれほどの差がない。また、溝状土壙は、長さ60m、巾25mの範囲に集中しており、北北西から南南東へ延びている。土壙は、B区の基準線を中心に、20mの範囲内に集中している。

土壙の性格については、2層以下に出土遺物が無く。切り合いの遺構も無いため、年代・性格共に不明である。しかし、規模・形状・堆積土の状態を観察すると、墓壙の可能性があるように思われ、安徳寺との関連も考え得る。

5 Be21方形周溝 (第47図)

〔遺構の確認〕 基準線より西へ13.56m～27.05m。基準点より北へ9.57m～23.07mの地点、





第47図　Be21 方 形 周 溝

Be21地区及び、Bc21～Bg24、Be15～Be27の各地区に跨っている。遺構確認面は表土下の黄褐色シルト質土である。

〔重複〕 周溝の南西部が、Bf30住の、かまど・Q1床面・北壁東側を切っている。また、周溝に伴うと思われる溝が、北隅から北東に約16mほゞ直線状に延びており、Bb18住の北西部、Aj 12溝状土壙・Ai 09住の北西部を切っている。また、北西部中央と、南東部中央が、ぶどう棚を支える針金を埋めたピットにより切られている。

〔平面形・方向〕 11.50～12.40m×8.40×8.60mの長方形である。北西部は、長さ約11.4m。上場の巾約1.0m。下場の巾約60～70cm。深さ約13cm。方向はN－60°－Eである。南西部は、長さ約8.0m。上場の巾約80～100cm。下場の巾55～60cm。深さ約12～18cm。方向はN－30°－Wである。南東部は、長さ約11.4m。上場の巾約90～100cm。下場の巾50～70cm。深さ約20cm。方向はN－60°－Eである。北東部は、長さ約90cm。上場の巾約70～105cm、下場の巾約45～75cm。深さ約20cm。方向はN－30°－Wである。

〔堆積土〕 1層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。粗で、やや粘性あり。シルト質土混入。2層7.5YR 3/2黒褐色腐植土。粗で、粘性あり。シルト質土若干含む。所により礫を含む。3層7.5YR 4/3褐色シルト質土。粗で、粘性ややあり。腐植土若干混入。

〔底面の状態〕 ほゞ平坦で、凸凹は少ない。底面より壁への立ち上りは、内壁側が緩やかで、傾斜も緩やかな個所が多く。外壁がやや急角度で、傾斜も急な個所が多い。

〔傾斜〕 南側がやや高く、北側が低い。その比高は約15cmである。

〔内側台状部〕 周溝に伴う遺構は、何も検出されなかった。

〔近接した遺構〕 北東約1mにBb15住南西コーナーがあり、東約2.6mにBe12土壙があり、南西側はBf 30住と切り合っており、南約7.7mにはBj 24住の北壁がある。しかし方形周溝と関連する遺構は不明である。切り合い関係に於て、住居跡・溝状土壙よりは新しいと思われ、土壙については、関連を実証する資料が無い。

〔切り合いの遺構等による新旧関係〕 前述の通り、住居跡・溝状土壙よりは新しく、戦前のぶどう棚を支える石組のピットよりは、前であるが、その間の年代があまりにも長すぎるため、年代決定の資料にはならない。

〔出土遺物〕 出土遺物も年代決定の資料となる物は無かった。繊維を含む縄文土器片、口縁部4点。内2点は不整撚糸紋、他の2点は縄文。体部18点。体部下端2点。繊維を含まない体部の縄文土器片4点。これは、Bj 24住と関連する物も含まれていると思われる。土師器、甕、口縁部1点、体部1点。小型甕、体部1点、底部1点。須恵器、壷・体部1点。坏A類、口縁部1点。坏B類、口縁部1点、体部1点、体下半底部2点が、縄文土器片と同一層から出土している。これはBf 30住のかまど部を切っているから、これと関連する遺物がかなり含まれてい

ると思われる。

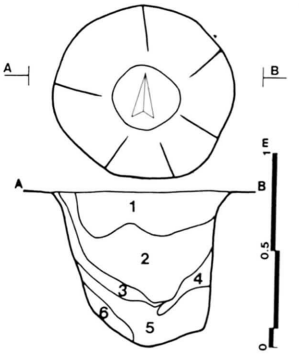
6　円形土壙

(1)　Ba24円形土壙　(第48図)

〔位置と現状〕　基準線より西へ21.44～22.37m。基準点より北へ29.2～30.1mの地点、Aj 24～Ba24地区にある。Bb18住居跡の西北西約6mの地点である。ほゞ原形をとゞめている。(第2次調査)

〔規模・平面形〕　上場径約90cm。下場径約35cm。深さ約80cm。ほゞ円形である。

〔堆積土〕　1層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。2層7.5YR 2/1黒色腐植土。3層7.5YR 3/3暗褐色腐植土・シルト混合。4層7.5YR 5/6明褐色シルト質土。5層7.5YR 2/1黒色腐植土。6層7.5YR 4/4褐色シルト・腐植土混合。尚、1層より繊維を含む縄文土器片、体部5点が出土している。



第48図　Ba24 Pit

〔近接した遺構〕　北約3mにAi 21溝状土壙がある。東南東約6mにBb18住居跡がある。遺跡内には、Ba24ピットと類似した遺構は検出されなかった。

〔年代決定資料〕　1層より出土した縄文土器片は、年代決定資料とは思われない。2層以下からは、遺物は出土せず、従って性格も不明である。

(2)　Be56円形土壙　(46図7西側)

〔位置と現状〕　基準線より東へ8.04～8.29m。基準点より北へ16.95～17.32mの地点。Be56地区にある。Be56土壙の西側に接している。東側のBe56土壙と接した上場が若干崩れているだけで、ほゞ原形のまゝである。

〔規模・平面形〕　上場径東西24cm、南北37cm。下場径東西17cm、南北21cm。深さ38cmで、やや南北に長い楕円形である。小型の柱穴状をしたピットである。

〔堆積土〕　2層で、1層より、繊維を含む縄文土器体部破片1点と、土師器、内黒坏1片。須恵器、坏B類4片が出土した。

〔近接した遺構〕　東側に接してBe56土壙がある。遺跡内にはBe56ピットと類似した遺構は検出されなかった。

〔年代決定資料〕　1層より出土した遺物は、遺構に伴うものかどうか疑問であり、性格も不明である。

その他に、Ai 68地区にピットが検出されたが、半掘りの途中で、破壊され、遺物が盗難にあい。規模・平面形・堆積土等。調査不能であった。残存した若干の遺物は、住居跡とほゞ同時期と思われる土師器、甕18点。小型甕26点。須恵器、壷６点。小型壷１点。坏Ａ類１点。坏Ｂ類２点。ごく最近の瓦１点である。(第54図18)

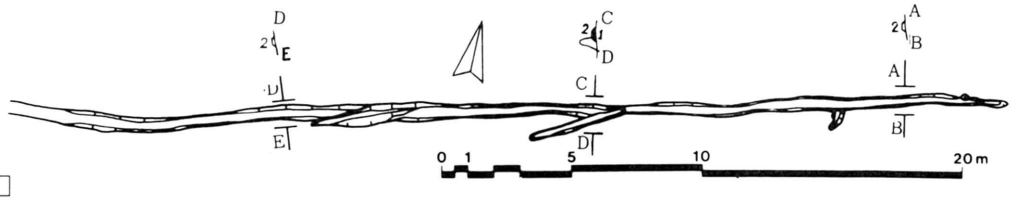
7　溝　(第49図)

〔位置と現状〕　基準線より東へ4.9m～西へ27.36m。基準点より北へ60.9～39.45mの地点、Aa 53～Ag 30地区にある。東端は輪郭がはっきりしているが、西端は不明確である。

〔規模・方向〕　長さ約38.4m。巾約40～50cm。深さ14～18cm。方向はＮ－66°－Ｅである。

〔堆積土〕　１層7.5YR 3/2黒褐色腐植土。部分的な堆積である。２層7.5YR 2/2黒褐色腐植土。溝の大部分に堆積する。

〔傾斜〕　西端の下場が標高131.15m。東端の下場が標高130.77mで、比高約38cmになる。また、標高131mと131.5mの等高線の間にあり、北が低く、南が高い。溝は131mの等高線に平行している。



第49図　Ａ　区　構

〔近接した遺構〕　Ac 09溝状土壙とAd 18溝状土壙と重複し、溝が土壙を切っており、溝が、新しいと思われる。類似した遺構としては、BE21方形周溝の北隅と接する溝がある。これはＡ区の溝の南約18mの所を、ほゞ平行に（Ｎ－60°－Ｅ）つくられているが、同時期のものかどうかは、決め手となる資料が無いため、不明である。

その他、Be21方形周溝に接する溝については、前述しているが、Ai 09住居跡の北西隅から、方形周溝の北隅まで長さ約16mのほゞ直線である。位置はAi 09～Bc 21地区である。Be21方形周溝との接する地点をみると、溝が方形周溝の外壁を切っている事から、溝は方形周溝と同時期か、それ以降で、方形周溝以前とは思われない。(第３図参照)

また、Be 09溝状土壙の北端、Be21方形周溝の南東側、Bj 21住居跡の南東側に、平面形が方形の浅いピットが検出された。これらは、底面にガラス片等の現代の物品が、土師器・須恵器の破片と共伴して出土し、南西側に宮手公民館があり、関連の施設と考えられる。

Be62住居跡の東側を南北に切っている溝についても、堆積層が表土に粒状のシルト質土が混入したもので、検出された住居跡の面にはっきり確認されている事から、かなり新しいものと思われる。

Bh24ピットは、電柱を建てた跡であるが、堆積土の底面近くまで遺物が包含されていた。繊維を含む縄文土器片、口縁部２点、体部25点、体下端部１点、縦型石匙１点。石箆状石器２点。内黒坏体部１点。須恵器坏Ｂ類口縁部３点、体部３点が出土している。堆積土はかなり人為的で、シルト質土が粒状に混入した腐植土である。

Bi 09溝状土壙付近から東端までのかなりの範囲に、円形周溝状の浅い掘り込みが検出された。外縁の直径が５m前後で、堆積土は皆１層である。りんご樹に肥料を施す為に掘られた環状の穴で、繊維を含む縄文土器片口縁部２点、体部14点、石箆状石器１点。土師器、長胴甕口縁部５点、体部49点、底部１点。小型甕口縁部８点、体部18点。内黒坏口縁部５点、体部９点。内外黒色処理坏口縁部１点。須恵器壺体部２点。坏Ａ類口縁部３点、体下底部１点。坏Ｂ類口縁部31点、体部35点、底部11点が出土している。特に遺物が多く出土した地点は、Bi 50地区。Bi 56地区。Bj 59地区である。

8　表土より出土した遺物

当調査地区は、かなりの撹乱があり、再三に渡って重機による表土削平がなされ、遺構内の遺物が散乱した。電柱を建てた穴の底面や、ごみ棄て場、りんご樹に肥料を施すための環状の溝にも、かなりの量の遺物が混入していた。

(1)　縄文土器

第19表の通り、約700片が出土した。口縁部刺突紋の２片は、円形刺突紋と横の沈線のもの１点と、縦に長い長方形の刺突紋のもの１点である。体部破片中に、外面の径1.1cm。内面0.8cm。中心部内面寄り0.5cmの孔を両面から穿ったものが１点みられる。羽状縄文を施したものが６点出土している。大部分が胎部に繊維を含んでいる。

口端部が残存するものでは、平らで外側が若干高いもの、平らで傾斜の無いもの、平らで内側が若干高いもの。丸みをもつもの。丸みをもつ所と平らな所の両方をもつもの。波状口縁のもの、やや波状のもの。縄文の圧痕のあるもの。円形刺突紋のあるもの等がみられる。

器形は、大部分が深鉢と思われ、器壁が直線的で外傾するもの。わずかに外反し外傾するもの。やや外反し外傾するもの等がみられる。

(2)　石器

表採等による石器は、第16表の通りである。

(3) 土師器・須恵器

第19表の最下段の通り、住居跡等遺構以外の地点から、かなりの量が出土している。

土師器の内甕は、口縁部のあまり外反しない低いものが多く、体部との境がはっきりしないものもみられ、小型の甕は、ろくろなで成形、回転糸切りのものが大部分である。内黒処理の甕は、小破片で、磨きの痕が認められる。

内黒処理高台坏は、外体面下端に墨書が認められるが、墨書部の大部分が欠損し字体は明確ではないが、「田」か「口」の様に思える。

須恵器の壷・甕・長頸壷、小型壷は、小破片が大部分で、胎土硬質、色調灰白色～灰色、焼成良好のものが大部分である。

須恵器坏A類は、胎土硬質、色調灰白色～灰色、焼成良好。ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。中に1点墨書の認められるものがあり、「十」と思われる。

須恵器坏B類は、胎土軟質、色調にぶい橙色～橙色～浅黄橙色、焼成不良～やや不良。ろくろなで成形無調整、回転糸切りが大部分であるが、中に1点内面に刷毛目様の調整が認められるものがみられ、外体面下端に手持ち箆削り調整の認められるものが1点ある。また、底部下面に墨書の認められるものが1点あるが、字体は不明である。

(4) 瓦

ごく新しい褐色の瓦が1点出土している。「　波郡赤石村」の線刻が認められる。

第25表の須恵器坏はA類とB類に分けたが、A類は胎土硬質、色調灰白色～灰色。焼成は還元炎焼成で良好のもの。B類は胎土やや軟質～軟質。色調は橙色系。焼成は酸化炎焼成でやや不良～不良である。またA類の器形は大部分が器高が4.3cm～5.2cmで、平均4.6cmであるが、B類は、器高が4.3cm～6.4cmで、平均4.9cmとB類の方が高く、外傾度もA類よりB類の方がやや小さい。胎土に含まれる砂粒は、B類にかなり多く含まれ、A類は少ない。

坏類と浅鉢の外傾度は、口端部と底部外縁を結ぶ直線と底部下面に垂直な線との角度であり、土師器内黒坏は、角度の小さいものが多い。次いで、須恵器坏B類に小さいものがみられ、土師器内外黒色坏と、須恵器坏A類は角度の大きいものがみられる。

坏類・浅鉢の口縁部形状を、直線的・ほゞ直線的・わずか外反・やや外反・外反・かなり外反としたが、直線的は、口縁部と体上半部が角度を持たないもの。ほゞ直線的は、口縁部と体上半部が角度を持たないが、口縁部内面が外面より丸みがややあるもの。わずか外反は、口端

第16表　　表採遺物（石器）

種別	形状	部位	出土地点	最大長(cm) 縦	横	厚さ	重量(g)	a面調整	b面調整	材質
凹石 3	三角形	完形	表土	5.3	17.1	3.1	340.0	(中央に叩痕)	(中央に叩痕)	輝石安山岩
磨石 1		半欠	Ah12住Q4	9.1	(10.7)	5.8	850.0	全面磨滅	火気で剝離	〃
磨石 2		〃	Ai09住Q4	7.5	(12.6)	5.9	810.0	全面磨滅	全面磨滅	〃
石匙 6	縦形	完形	Bh24ピット	6.1	2.0	0.6	6.9	全辺、全面	つまみ、右辺一部	硬質泥岩
〃 7	〃	〃	表土	5.6	2.0	0.7	8.0	全辺	つまみ、左右上端	珪質泥岩
〃 8	〃	〃	Be09区表土	5.5	2.3	0.6	7.8	全辺	つまみ、左右上端	〃
〃 9	横形	〃	Bf21溝状土壙1層	2.7	5.4	0.8	7.0	全辺	つまみ、左右上端	珪化した細粒石質凝灰岩(グリンタフ層)
〃 10	縦形	〃	南東端表土	5.3	2.6	0.6	8.6	全辺	つまみ、左右上辺	〃
〃 11	〃	上半部	Bi62区表土	(3.4)	(2.6)	0.6	(6.4)	全辺	つまみ、右辺	珪質泥岩
〃 12	〃	〃	〃	(4.5)	(2.1)	0.7	(6.5)	右辺、つまみ	つまみ、右辺	凝灰質硬質泥岩
〃 13	〃	〃	Bc区表土	(3.6)	(2.7)	0.6	(6.3)	左辺、つまみ	つまみ、左辺	硬質泥岩
〃 14	〃	〃	Be06住Q4	(4.5)	(2.4)	0.8	(5.9)	右辺、つまみ	つまみ、左上辺	〃
〃 15	〃	つまみ欠	Bg09土壙1層	(7.4)	(1.8)	0.5	(5.8)	全辺	つまみ	〃
〃 16	〃	先端欠	Bj21住ピット2	(8.4)	(3.7)	0.8	(23.0)	全辺	つまみ、右辺	凝灰質硬質泥岩
〃 17	〃	下半部	Bd62住1層	(3.2)	(2.7)	0.9	(10.0)	全辺	先端	硬質泥岩
石斧		〃	Bd50区表土	(6.8)	5.4	2.3	(141.5)	全面磨製	全面磨製	淡緑色細粒石質凝灰岩
石篦状石器 3		〃	BH24ピット	(7.6)	4.8	2.1	(94.5)	全面	左右辺	凝灰質硬質泥岩
〃 4		完形	〃	6.0	3.7	1.2	36.5	全面	左右辺	珪質泥岩
〃 5		中央部	Bi68区表土	(3.8)	(3.0)	0.9	(9.5)	左右辺	左右辺一部	〃
〃 6		完形	Ah12住1層	7.2	3.6	1.0	33.0	左右辺、先端	なし	凝灰質硬質泥岩
〃 7		下半部	C区東端表土	(3.9)	(3.7)	0.9	(14.5)	全面	左右辺	珪化した細粒石質凝灰岩(グリンタフ層)
〃 8		〃	Ai66区表土	(6.1)	(3.0)	1.0	(25.0)	全面	左辺上、先端	凝灰質硬質泥岩
〃 9		完形	Bb56区表土	10.5	4.0	1.6	71.5	全面	左右辺	〃
〃 10		下半部	表土	(4.9)	(3.0)	0.9	(15.5)	左辺、先端	左右辺	〃
〃 12		〃	Bb18住煙道	(7.3)	(3.8)	1.6	(54.5)	剝離のみ	剝離のみ	硬質砂質泥岩
〃 13		完形	Bd62住1層	5.6	3.8	1.2	28.5	全面	左右・上、先	凝灰質硬質泥岩
〃 14		〃	Bj21住1層	6.4	4.0	1.3	34.5	全面	左右辺	珪化した細粒石質凝灰岩(グリンタフ層)
玦状耳飾		半欠	Be06住1層	(3.2)	(1.5)	0.8	4.8	全面研磨	全面研磨	蛇紋岩(一部滑石化)
石鏃 5	無茎	先端欠	Bg09区表土	(2.0)	1.5	0.35	(1.0)	全辺	全辺	凝灰質硬質泥岩
〃 6	〃	完形	Bd62住1層	2.0	1.5	0.45	1.0	全辺	全辺	珪質泥岩
〃 7	菱形	〃	表土	4.9	2.2	0.5	4.4	左右辺一部	左右辺一部	〃
〃 8	〃	両端欠	Bd50区表土	(2.5)	1.1	0.3	1.5	全辺	全辺	珪化した細粒石質凝灰岩(グリンタフ層)
剝片 10		—	表土	3.5	2.6	0.6	4.9	全面	左右辺	凝灰質硬質泥岩

第17表　　住　居　跡　一　覧

遺構名	規模(m) (東西×南北) 壁高(cm)	形状	主軸方向	かまど 位置	燃焼部(cm)	煙道(cm)	煙出(cm)	袖	床面	主柱穴	周溝	重複	貯蔵穴状ピット
Bj 24住 (縄文)	約 4.10×3.35 16～23	不整 楕円形	—	—	—	—	—	—	地山	床に 1 壁外に 9	—	Bj 21住	No.11ピット？
Ah12住 (平安)	約 4.70×4.00 3～4	方形	E－5°－S 東	東壁 やや 北寄り	巾 60.0 奥行 80.0 深さ 3.0	—	—	—	地山	—	—	Ai 09住	No.1・No.2ピット
Ai 09住 (平安)	約 5.15×5.60 5～12	四辺形	W－E 東	東壁 やや 北寄り	巾 15～25 奥行 75 深さ 8	—	—	両側 共有 袖石2	地山	4	—	Ah12住 Ba06住溝	No.5～8・No.17・No.20ピット
Aj 50住 (平安)	約 3.00×3.20 7～10	方形	—	—	—	—	—	—	掘り方 のみ	—	—	Ba53住	—
Ba06住 (平安)	約 3.00×3.10 2～10	方形	E－5°－S 東	東壁 やや 北寄り	焼土のみ集 積 36×50 他に炉？	—	—	—	地山	—	—	Ai 09住 Ba03溝状 土壙	No.1～3ピット
Ba53住 (平安)	約 3.00×3.20 約10～18	方形	E－27.5°－S 東南東	東壁 北寄り	巾 45～50 奥行 90 深さ 10	長さ 93 巾 15 深さ 6	上場径 32 下場径 24 深さ 5	—	地山 掘り方	—	—	Ba06住	No.1・3・4ピット
Bb18住 (平安)	約 4.70×5.70 10～12	四辺形	W－E 東	東壁 やや 北寄り	巾 30 奥行 110 深さ 7～16	長さ 70 巾 30 深さ 6	上場径47×50 下場径20×30 深さ 22	両側 共有 袖石9	地山	4	—	Bb15溝状 土壙 溝	No.5～8・11・17・19・21ピット
Bd62住 (平安)	約 5.00×4.25 2～10	長方形	S－15.5°－E 南	南壁 東寄り ？	—	—	—	—	地山 掘り方	4	—	Bd62溝状 土壙 溝	No.12・13ピット
Be06住 (平安)	約 5.50×5.40 2～10	方形	W－E 東	東壁 やや 北寄り	巾 15～50 奥行 130 深さ 5	—	—	両側共 若干 残存	地山 掘り方	6	南壁 東半分 ？	—	No.7・8・17・18・19ピット
Bf 30住 (平安)	約 6.20×6.70 10～15	長方形	E－12°－S ほゞ東	東壁 やや 北寄り	巾 約70 奥行 90 深さ ？	—	—	南側 ？	地山	—	—	方形周溝 溝？ 電柱	No.3ピット No.5ピット
Bi 50住 (平安)	約 2.46×2.54 10～17	方形	—	—	—	—	—	—	地山	—	—	Bj 53溝状 土壙 環状溝	No.1・3～7ピット
Bj 21住 (平安)	約 3.80×3.10 5～10	長方形	N－43.5°－E 北東	北壁 東寄り	巾 60×40 奥行 58 深さ 5	長さ 145 巾 15～38 深さ10～29	上場径30×40 下場径23×25 深さ 30	両側 共有	地山	—	—	Bj 24住	No.1～5・7ピット
Cd21住 (平安)	約 4.60×3.75 3～13	長方形	—	— *	—	—	—	—	地山	—	—	—	No.1ピット？

＊（焼土床面中央に有）

第18表　　焼　土　遺　構　一　覧

遺構名	規模(m) 上場 長軸	規模(m) 上場 短軸	規模(m) 下場 長軸	規模(m) 下場 短軸	深さ(m)	方向	形状 上場	形状 下場	埋土	出土遺物
Bi 50	0.50	0.39	0.20	0.17	0.30	—	楕円形	やや方形	(6層)	無し
Bi 56	0.52	0.49	0.43	0.40	0.12	—	円形	円形	3層	土師器・須恵器
Cc 68	約2.5	1.22	2.1	0.9	0.43	N－50°－E	不整楕円形	不整楕円形	6層	土師器・須恵器

第19表　　遺　物　集　計

出土地点	縄文土器 口縁部 縄文L·R	縄文R·L	撚糸	不整撚糸	刺突紋	縄文不整撚糸	不明	体部	体下半	底部(尖底)
Bj 24住	18片	0	0	3	0	0	2	145	19	3
表土等	40	3	3	11	2	2	0	615	23	0

出土地点	石器 凹石	石匙 縦	石匙 横	石鏃(無茎)	掻器	石筒状石器	磨製石斧	磨石	玦状耳飾	不明	剝片等
Bj 24住	2	5	0	4	1	2	0	0	0	1	42
表土等	1	11	1	4	0	11	1	2	1	0	56

遺構名	土師器 甕 長胴	甕 小型	甕 内黒	内黒処理 坏	内黒処理 高台坏	内外黒色処理 坏	内外黒色処理 高台坏	浅鉢	須恵器 壺	甕	長頸壺	小型壺	A類 坏	A類 高台坏	B類 坏	B類 高台坏	土製品	石製品	鉄製品
Ah 12住	11	2	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	19	0	0	1 (支脚?)	0
Ai 09住	128	46	8	55	0	9	0	1	5	1	0	0	9	0	289	5	0	0	0
Ai 50住	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ba 06住	5	0	0	9	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	2	0	2	0	0
Ba 53住	7	2	0	13	0	0	0	1 (内外黒)	3	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0
Bb 18住	88	110	6	81	0	8	0	0	13	0	0	1	70	1	132	0	0	1 砥石	0
Bd 62住	66	33	0	26	0	1	0	0	10	0	7	0	27	0	62	0	0	0	0
Be 06住	110	35	1	41	4	7	0	1 (内外黒)	5	0	1	0	4	0	449	7	13	0	2 刀子
Bf 30住	45	18	1	20	0	0	0	0	7	0	0	1	15	0	30	0	0	0	1
Bi 50住	102	10	0	25	0	0	0	0	2	0	0	0	9	0	120	1	0	0	0
Bj 21住	30	5	0	21	0	2	0	0	2	0	0	0	3	0	117	0	0	0	0
Cd 21住	8	0	0	3	1	0	1	0	3	0	0	0	1	0	23 (皿)	0	0	0	3 鉄滓
Bi 56焼土	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
Cc 68焼土	9	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
表土等	345	105	4	90	1	6	0	0	43	4	2	2	30	0	343	0	0	0	0

第20表　　土器実測図説明 I　（土師器　甕）

No.	遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	調整 口縁部 内面	口縁部 外面	体部上半 内面	体部上半 外面	体部下半 内面	体部下半 外面	底部 上面	底部 下面	器高cm（）は残存部の器高	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	体部最大径(cm)	口縁部高さ(cm)	口端部形状
1	Ah12住	長胴 1	10−1	17−1	横なで	横なで	横なで	横なで	横なで	なで削り	—	—	(16.2)	約22.0	—	約20.0	約22.5	約 1.5	強く上に挽き出す
2	Ai09住	〃 36	12−1	18−2	〃	〃	〃	〃	縦なで	〃	—	—	(12.5)	約22.0	—	約19.4	約20.3	約 1.5	〃
3	〃	〃 37	12−2	18−3	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(7.4)	約26.0	—	約23.3	約24.8	約 1.5	やや上に挽き出す
4	〃	〃 42	12−3	18−1	〃	〃	〃	〃	横なで	なで削り	—	—	(18.5)	約27.0	—	約25.2	約27.2	約 1.8	強く上に挽き出す
5	〃	〃 43	12−5	18−5	〃	〃	刷毛目	縦なで	—	—	—	—	(5.1)	約18.0	—	約16.2	約17.6	約 1.2	薄くなる
6	〃	〃 44	12−4	18−6	〃	〃	横なで	横なで	—	—	—	—	(5.6)	約32.0	—	約30.0	約32.2	約 1.6	強く上に挽き出す
7	〃	〃 33	12−6	18−4	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(5.1)	約16.0	—	約14.8	約17.0	約 1.3	〃
8	〃	小型 34	12−8	18−8	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(2.7)	約15.0	—	約14.0	約14.6	約 1.1	〃
9	〃	壷? 35	12−9	18−16	—	—	—	—	横なで	横なで	ろくろなで	(回転糸切)	(6.3)	—	6.0	—	約10.4	—	—
10	〃	小型 45	12−7	18−7	横なで	横なで	横なで	横なで	—	—	—	—	(3.2)	約16.0	—	約15.0	約15.2	約 0.8	強く上に挽き出す
11	Bb18住	長胴 1	21−1	22−1	〃	〃	〃	〃	横なで	なで削り	刷毛目	箆削り	(10.7)	約25.0	—	約22.8	約23.8	約 2.0	上に挽き出す
12	〃	〃 2	21−2	22−2	〃	〃	〃	縦なで	—	—	—	—	(5.1)	約20.0	—	約17.6	約18.2	約 1.5	平　坦
13	〃	〃 3	21−3	22−3	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	(9.7)	約22.0	—	約19.6	約21.9	約 1.7	上に挽き出す
14	〃	〃 4	21−4	22−4	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(4.2)	約25.0	—	約23.2	約23.4	約 1.8	上下に挽き出す
15	〃	内黒長胴	21−5	22−5	—	—	—	—	みがき	縦なで	放射状みがき	なで	(12.8)	—	9.8	—	約21.6	—	—
16	〃	小型 1	21−7	22−7	横なで	横なで	横なで	横なで	横なで	横なで	ろくろなで	(回転糸切)	14.9	12.9	8.5	11.9	13.4	1.8	上に挽き出す
17	〃	〃 2	21−8	22−8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	(10.0)	約16.0	—	約14.4	約15.4	約 1.7	やや上に挽き出す
18	〃	〃 3	21−9	22−9	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(5.3)	約15.0	—	約13.2	約13.6	約 1.4	強く上に挽き出す
19	〃	〃 4	21−10	22−10	—	—	—	—	横なで	横なで	ろくろなで	(回転糸切)	(8.6)	—	6.4	—	12.2	—	—
20	〃	〃 5	21−11	22−11	横なで	横なで	刷毛目	横なで	—	—	—	—	(5.5)	約14.0	—	約13.2	約14.6	約 1.5	強く上に挽き出す
21	〃	〃 8	21−12	22−12	〃	〃	横なで	〃	—	—	—	—	(5.2)	約13.0	—	約11.6	約12.2	約 1.2	〃
22	Bd62住	長胴 1	25−1	25−1	〃	〃	〃	〃	縦なで	横なで	—	—	(8.7)	約22.0	—	約21.2	約22.4	約 1.5	上下に挽き出す
23	〃	〃 2	25−2	25−3	〃	〃	〃	縦なで	—	—	—	—	(3.5)	約22.0	—	約20.8	—	約 1.9	上に挽き出す
24	〃	〃 3	25−3	25−2	〃	〃	—	—	—	—	—	—	(2.7)	約16.0	—	約14.0	—	2.7	上に挽き出す
25	〃	深鉢 6	25−4	25−4	〃	〃	刷毛目	縦なで	—	—	—	—	(1.1)	約25.0	—	約24.0	—	約 0.8	丸みをもつ
26	〃	小型 1	25−5	25−5	〃	〃	〃	〃	刷毛目	縦なで	刷毛目	なで削り	13.0	12.4	8.0	10.8	12.0	2.0	〃
27	〃	〃 2	26−1	25−8	〃	〃	横なで	横なで	—	—	—	—	(7.0)	約16.4	—	約14.4	約14.8	約 2.2	〃
28	〃	〃 3	25−6	25−6	〃	〃	〃	縦なで	—	—	—	—	(4.3)	約11.0	—	約10.4	約12.0	約 1.6	〃
29	〃	〃 4	25−7	25−7	〃	〃	〃	横なで	—	—	—	—	(4.6)	約14.0	—	約12.2	約12.0	約 1.6	薄くなる
30	Be06住	長胴 1	28−1	26−1	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(4.4)	約26.0	—	約23.2	約23.6	約 2.2	強く上に挽き出す

第20表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部上半 内面	調整 体部上半 外面	調整 体部下半 内面	調整 体部下半 外面	調整 底部 上面	調整 底部 下面	器高cm（ ）は残存部の器高	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	体部最大径(cm)	口縁部高さ(cm)	口端部形状
31	Be06住	小型 1	28−2	26−2	横なで	横なで	横なで	横なで	—	—	—	—	(3.5)	約15.0	—	約14.2	約13.6	約 1.4	上外に挽き出す
32	Bf30住	長胴 1	32−1	28−1	〃	〃	斜めなで	〃	—	—	—	—	(14.0)	約22.0	—	約19.2	約21.2	約 1.5	〃
33	〃	内黒長胴	32−2	28−2	横みがき	〃	横みがき	〃	(縦みがき)	—	—	—	(4.6)	約27.0	—	約24.4	約24.8	約 1.1	丸みをもつ
34	Bj21住	長胴 1	37−1	30−1	横なで	〃	横なで	〃	横なで	なで削り	—	—	(24.0)	約22.0	—	約20.4	約21.6	約 2.0	上に挽き出す
35	〃	〃 2	37−2	30−2	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(3.5)	約22.0	—	約20.4	—	約 2.0	〃
36	Bi50住	長胴 1	35−1	29−1	横なで	横なで	〃	縦なで	—	—	—	—	(3.7)	約24.0	—	約27.4	—	約 1.3	丸みをもつ
37	〃	〃 2	35−2	29−2	〃	〃	〃	横なで	—	—	—	—	(3.3)	約22.0	—	約19.8	—	約 1.6	強く上に挽き出す
38	〃	小型 1	35−3	29−9	〃	横縦なで	横斜なで	なで削り	—	—	—	—	(6.7)	約14.2	—	約12.4	約17.8	約 1.8	丸みをもち薄い
39	Bi56焼土	長胴 1	42−1	31−10	〃	横なで	刷毛目	刷毛目	—	—	—	—	(20.5)	約23.0	—	約21.8	約26.0	約 2.2	丸みをもつ
40	〃	小型 1	42−2	31−11	—	—	—	—	横なで	横なで	ろくろなで	(回転糸切)	—)	—	6.9〜7.3	—	—	—	—
41	Cc68焼土	長胴 1	42−4	31−13	横なで	横なで	横なで	横なで	—	—	—	—	(5.6)	約30.0	—	約26.2	—	約 3.0	強く上に挽き出す
42	〃	〃 2	42−5	31−14	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	(5.1)	約24.0	—	約20.5	—	約 2.2	〃

第21表　土器実測図説明 II（土師器 坏）

No.	遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	調整 外体部下半	調整 底部下面	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体部形状	外面色調
1	Ai09住	内黒 25	13−1	18−17	—	—	—	約13.0	—	約 25°	外反	薄くなる	やや丸み	にぶい黄橙色
2	〃	〃 26	13−2	18−18	—	—	—	約13.0	—	約 40°	外反	丸み	かなり丸み	浅黄橙色
3	〃	〃 27	13−3	18−19	—	—	—	約13.0	—	約 40°	わずか外反	〃	〃	灰褐色
4	〃	〃 28	13−4	18−20	—	—	—	約14.0	—	約 37°	直線的	〃	〃	浅黄橙色
5	〃	〃 29	13−5	18−21	—	—	—	約14.0	—	約 51°	〃	〃	下半かなり丸み	橙色
6	〃	〃 30	13−6	18−22	手持ち箆削り	—	—	約12.0	—	約 30°	〃	〃	やや丸み	にぶい橙色〜橙色
7	〃	〃 31	13−7	18−23	—	—	—	約15.0	—	約 35°	〃	平坦	〃	にぶい橙色
8	〃	〃 32	13−8	18−24	—	—	—	約13.0	—	約 35°	〃	薄くなる	かなり丸み	〃
9	〃	〃 47	13−9	18−26	—	—	—	約15.2	—	約 40°	わずか外反	丸み	〃	橙色
10	〃	〃 48	13−10	18−27	—	—	—	約15.0	—	約 40°	直線的	〃	下半丸み	にぶい橙色
11	〃	〃 49	13−11	18−25	—	—	—	—	—	—	—	—	(墨書)	〃
12	Ba53住	〃 1	19−1	21−1	—	—	—	約14.0	—	約 37°	わずか外反	丸み	かなり丸み	橙色
13	〃	〃 3	19−2	21−2	—	—	—	約13.0	—	約 30°	やや外反	平坦	わずか丸み	淡赤橙色
14	〃	〃 4	19−3	21−3	—	—	—	約14.0	—	約 36°	〃	薄くなる	やや丸み	にぶい橙色

第21表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	調整 外体部下半	調整 底部下面	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体部形状	外面色調
15	Ba53住	内黒 5	19－4	21－4	—	—	—	約14.0	—	約 31°	直線的	丸み	やや丸み	にぶい橙色
16	〃	〃 8	19－5	21－5	—	—	—	約16.0	—	約 28°	やや外反	〃	わずか丸み	〃
17	〃	〃 6	19－6·7	21－7	回転篦削り	回転篦削り	—	—	6.6	—	—	—	(下面に墨書)	浅黄橙色
18	Bb18住	〃 1	22－1	22－15	—	—	5.2	13.7	5.6	38°	直線的	丸み	やや丸み(墨書)	〃
19	〃	〃 2	22－2	22－16	手持ち篦削り	—	4.3～4.5	13.0	5.5	44°	〃	〃	かなり丸み(墨書)	にぶい橙色
20	〃	〃 3	22－3	22－17	回転篦削り	—	5.0	14.0	5.6	40°	〃	やや平坦	丸み	〃
21	〃	〃 5	22－4	23－1	—	—	5.2	15.0	5.2	43.5°	やや外反	薄くなる	かなり丸み	浅黄橙色
22	〃	〃 6	22－5	23－2	—	—	5.3	14.0	5.0	40°	〃	〃	〃	にぶい橙色
23	〃	〃 8	22－6	23－3	手持ち篦削り	—	5.7	14.4	6.1	32°	直線的	〃	〃	浅黄橙色
24	〃	〃 9	22－7	23－4	〃	手持ち篦削り	4.6～4.8	14.6	5.7	44°	〃	丸み	〃	淡橙色
25	〃	〃 10	22－8	23－5	—	—	—	約14.0	—	約 30°	やや外反	〃	丸み	橙色
26	〃	内外黒色	21－6	22－6	—	—	4.9	17.0	4.8	51°	外反	〃	かなり丸み	(黒色)
27	Ba06住	内黒 1	16－1	20－4	篦削り	篦削り	4.8	13.0	5.4	39°	直線的	〃	〃	淡橙色
28	〃	〃 2	16－2	20－5	—	—	—	約15.0	—	約 40°	〃	〃	〃	にぶい橙色
29	〃	〃 3	16－3	20－3	—	—	5.1	14.0	6.6	35°	〃	〃	〃	〃
30	〃	〃 4	16－4	20－7	—	—	—	—	6.2	—	—	—	〃	〃
31	〃	〃 5	16－5	20－6	—	—	—	—	5.8	—	—	—	〃	橙色
32	Bd62住	〃 1	26－2	25－9	—	—	—	約14.0	—	約 40°	直線的	丸み	やや丸み	にぶい橙色
33	〃	〃 2	26－3	25－10	—	—	—	約13.0	—	約 35°	〃	〃	〃	橙色
34	Be06住	内外黒色	28－6	26－6	—	—	4.5	16.0	7.6	43°	〃	〃	かなり丸み	(黒色)
35	〃	内黒 19	28－3	26－3	—	—	—	約15.0	—	約 37°	〃	〃	わずか丸み	にぶい橙色
36	〃	〃 20	28－4	26－4	—	—	—	約14.0	—	約 37°	わずか外反	〃	直線的	浅黄橙色
37	Bf30住	〃 6	32－3	28－3·4	—	X印線刻	5.3	14.2	5.4	40.5°	〃	〃	かなり丸み	にぶい橙色
38	Bj21住	〃 1	37－3	30－3	手持ち篦削り	—	5.2	15.8	6.0	43°	〃	丸く薄い	丸み	灰白色
39	〃	〃 2	37－4	30－4	—	—	—	—	—	—	—	—	(墨書)	浅黄橙色
40	〃	〃 3	37－5	30－5	—	—	5.9	14.0	5.6	35°	かなり外反	丸み	かなり丸み	にぶい橙色
41	〃	〃 4	37－6	30－6	手持ち篦削り	—	—	約14.0	—	約 42°	直線的	薄くなる	やや丸み	淡橙色
42	Bi50住	〃 1	35－4	29－10	—	—	—	約14.0	—	約 40°	〃	丸く薄い	(墨書)	にぶい橙色

第22表　土器実測図説明Ⅲ（土師器　浅鉢）

No.	遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	調整 外体部下半	調整 底部下面	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体部形状	外面色調
1	Ａi09住	盤　？62	12－10	19－33	刷毛目	—	—	約40.0	—	約40°	かなり外反	上に挽き出す	かなり丸み	浅黄橙色
2	Ｂa53住	内外黒 6	19－8	21－13	みがき	みがき	4.1	11.0	6.8	27.5°	かなり外反	上に挽き出す	かなり丸み、最大径9.4	（黒色）
3	Ｂe06住	内外黒 1	28－8	26－7	篦削り	—	4.9	8.4	6.0	—	やや外反	丸く薄い	つよい丸み、最大径10.2	（黒色）

第23表　土器実測図説明Ⅳ（土師器　高台坏）

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	成形技法	器高(cm)	口径(cm)	坏部器高(cm)	高台接合部の径(cm)	高台部下端の径(cm)	高台部器高(cm)	外面色調	付記
Ｂe06住	内黒　21	28－5	26－5	横なで	6.5	15.0	5.3	6.6	8.0	1.2	にぶい橙色	胎部黒色
Ｃd21住	〃　1	39－1	31－1	〃	—	—	—	7.4	7.2	0.1	淡橙色	磨滅著るしい
〃	内外黒色	39－2	31－2	〃	3.3～3.5	10.0	3.2	6.2	6.0	0.3	（黒色）	体部かなり丸み

第24表　土器実測図説明Ⅴ（須恵器　壷）

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	成形技法	底部下面	器高(cm)	口径(cm)	頸部径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	口端部形状	付記
Ｂa53住	大型広口	19－11	21－14	横なで	—	—	約17.0	約13.0	—	—	丸み	複合口縁
Ｂb18住	小型広口	23－7	24－1	〃	回転糸切	9.1	9.6	8.1	10.8	6.4	平坦	硬質褐灰色
Ｂf30住	大型広口	32－5	28－5	〃	—	—	約18.2	約13.8	—	—	上下に挽き出す	自然釉

第25表　土器実測図説明Ⅵ（須恵器　坏）

No.	遺構名	器形番号	実測図No.	写真No.	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体壁形状	底部	外面色調
1	Ah12住	Ｂ類　1	10－2	17－2	口・体上⅛	—	約17.0	—	約50°	わずか外反	丸みをもつ	ほゞ直線的	—	橙色
2	〃	〃　2	10－3	17－3	口・体上⅛	—	約17.0	—	約33°	〃	〃	やや丸み	—	淡赤橙色
3	〃	〃　3	10－4	17－4	口・体上⅛	—	約13.0	—	約30°	やや外反	〃	ほゞ直線的	—	浅黄橙色
4	〃	〃　4	10－5	17－5	口⅛・体底	5.3	12.6	5.6	33°	〃	薄くなる	かなり丸み	回転糸切	淡橙色
5	Ａi09住	Ａ類　11	13－12	19－16	口・体上⅛	—	約15.0	—	約35°	〃	丸みをもつ	ほゞ直線的	—	明褐灰色
6	〃	Ｂ類　1	13－23	19－9	口・体⅛	—	約14.0	—	約42°	外反	〃	かなり丸み	—	浅黄橙色
7	〃	〃　2	13－13	18－28	口・体・底½	4.7	14.2	6.1～6.2	42°	〃	薄くなる	体下かなり丸み	回転糸切	淡橙色
8	〃	〃　3	13－14	19－1	口・体・底⅕	5.2	13.2	6.2	34°	直線的	丸みをもつ	わずか丸み	〃	淡赤橙色
9	〃	〃　4	13－15	18－29	口・体⅛・底	5.1	15.0	4.8	45°	外反	〃	かなり丸み	〃	淡橙色
10	〃	〃　5	13－16	19－10	口・体⅛	—	約12.0	—	約45°	直線的	薄くなる	ほゞ直線的	—	淡赤橙色

第25表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図 No.	写真 No.	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体壁形状	底部	外面色調
11	Ai09住	B類 6	13−17	19−11	口・体 1/8	—	約16.0	—	約45°	わずか外反	薄くなる	ほゞ直線的	—	淡赤橙色
12	〃	〃 7	13−18	19−12	口・体 1/8	—	約13.0	—	約45°	〃	丸みをもつ	〃	—	橙色
13	〃	〃 8	13−19	19−13	口・体 1/8	—	約11.0	—	約25°	〃	〃	〃	—	〃
14	〃	〃 9	13−20	19−14	口・体 1/8	—	約15.0	—	約40°	やや外反	〃	丸みをもつ	—	にぶい橙色
15	〃	〃 10	13−21	19−15	口・体 1/5	—	約15.0	—	約40°	〃	〃	〃	—	淡赤橙色
16	〃	〃 12	13−24	19−17	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約33°	直線的	〃	下半かなり丸み	—	淡橙色
17	〃	〃 13	13−25	19−18	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約30°	〃	〃	かなり丸み	—	浅黄橙色
18	〃	〃 14	13−26	19−19	口・体上 1/8	—	約13.0	—	約45°	〃	薄くなる	やや丸み	—	にぶい橙色
19	〃	〃 16	13−28	19−21	口・体 1/8	—	約14.0	—	約50°	かなり外反	丸みをもつ	ほゞ直線的	—	淡橙色
20	〃	〃 17	13−29	19−22	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約40°	〃	〃	かなり丸み	—	淡赤橙色
21	〃	〃 18	13−30	19−23	口・体 1/8	—	約15.0	—	約45°	わずか外反	〃	〃	—	にぶい橙色
22	〃	〃 19	13−31	19−24	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約50°	やや外反	〃	ほゞ直線的	—	橙色
23	〃	〃 20	13−32	19−25	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約38°	〃	薄くなる	〃	—	淡橙色
24	〃	〃 21	13−22	19−26	口・体上 1/8	—	約13.0	—	約30°	かなり外反	〃	かなり丸み	—	〃
25	〃	〃 22	13−27	19−27	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約40°	〃	〃	丸みをもつ	—	淡橙色〜明褐灰色
26	〃	〃 23	14−17	19−28	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約40°	やや外反	〃	ほゞ直線的	—	淡橙色
27	〃	〃 24	14−18	19−29	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約43°	外反	〃	かなり丸み	—	〃
28	〃	〃 38	14−11	19−2	口・体 2/3 底	4.3〜4.8	14.3	6.0	40°	ほゞ直線的	平坦	ほゞ直線的	回転糸切	浅黄橙色
29	〃	〃 39	14−8	18−34	完形	4.3〜4.4	13.7	6.6	40°	やや外反	〃	かなり丸み	〃	橙色
30	〃	〃 40	14−10		〃	4.6	14.3	5.2	45°	〃	丸みをもつ	やや丸み	〃	浅黄橙色
31	〃	〃 41	14−12	19−3	口・体・底 1/2	4.3〜4.6	14.4	6.4	41°〜42.5°	ほゞ直線的	〃	わずか丸み	〃	〃
32	〃	〃 50	14−9	19−30	口・体 1/8	—	約14.0	—	約40°	やや外反	薄くなる	〃	—	淡橙色
33	〃	〃 51	14−1	19−31	口・体 1/2	—	約17.0	—	約50°	〃	丸みをもつ	やや丸み	—	にぶい橙色
34	〃	〃 52	14−2	19−32	口・体 1/8	—	約15.0	—	約38°	〃	〃	〃	—	淡橙色〜浅黄橙色
35	〃	〃 53	14−3	18−30	口・体・底 1/2	4.5	14.2	5.8	44°	かなり外反	〃	かなり丸み	回転糸切	浅黄橙色
36	〃	〃 54	14−4	18−31	口・体・底 1/2	5.3	15.0	5.4	42°	やや外反	〃	やや丸み	〃	橙色
37	〃	〃 55	14−5	18−32	口・体 1/4 底 3/4	4.3〜5.3	13.4	5.4	43.5°	〃	〃	かなり丸み	〃	〃
38	〃	〃 56	14−6	18−33	口・体 1/4	—	約14〜16	—	約44°	〃	〃	〃	—	淡橙色
39	〃	〃 57	14−7	19−4	口・体 1/4 底 2/3	4.8	14.4	6.6	40°	〃	〃	やや丸み	回転糸切	橙色〜淡赤橙色
40	〃	〃 58	14−13	19−5	口・体 3/4 底全	5.6〜5.7	14.0	4.0〜4.3	42°	わずか外反	〃	〃	〃	浅黄橙色〜橙色
41	〃	〃 59	14−14	19−8	口・体 1/3 底 1/2	5.2	14.8	6.0	40°	ほゞ直線的	薄くなる	体下半丸み	〃	橙色

第25表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図 No.	写真 No.	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体壁形状	底部	外面調整
42	Ai09住	B類 60	14−15	19−7	口・体 1/4	—	約15.0	—	約40°	やや外反	丸みをもつ	体下半丸み	—	淡橙色
43	〃	〃 61	14−16	19−6	口・体 1/4 底全	4.3	13.4	5.4	43.5°	わずか外反	〃	やや丸み	回転糸切	〃
44	Ba53住	〃 1	19−9	21−9	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約30°	外反	薄くなる	〃	—	橙色
45	〃	〃 3	19−10	21−8	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約30°	ほゞ直線的	〃	かなり丸み	—	にぶい橙色
46	Bb18住	A類 1	22−9	23−6	口・体 2/3 底全	4.3〜4.5	15.3	6.1	47.5°	外反	丸みをもつ	丸みをもつ	回転糸切	灰白色
47	〃	〃 2	22−10	23−7	口 1/8 体 1/4 底 1/2	4.4	15.4	6.0	48°	〃	〃	〃	〃	〃
48	〃	〃 3	22−11	23−8	口・体 1/2 底全	4.4〜5.1	14.5	5.3	44°〜48°	〃	〃	〃	〃	灰白色〜灰色
49	〃	〃 4	22−12	23−9	口・体 2/3 底全	4.7〜5.2	15.6	5.6	42.5°	やや外反	〃	かなり丸み	〃	灰白色
50	〃	〃 5	23−1	23−11	口・体・底 1/3	5.0	17.0	6.7	46.5°	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色
51	〃	〃 6	22−13	23−10	口・体・底 1/3	4.4	14.6	5.6	46.5°	かなり外反	〃	やや丸み	〃	灰色〜灰白色
52	〃	〃 7	23−2	23−12	口・体・底 1/8	4.65	17.0	6.2	49.5°	やや外反	〃	わずか丸み	〃	灰白色
53	〃	〃 8	23−3	23−13	口・体 1/4	—	約15.0	—	約40°	ほゞ直線的	〃	やや丸み	—	〃
54	〃	〃 10	23−4	23−14	口・体 1/5	—	約15.0	—	約45°	かなり外反	〃	かなり丸み	—	〃
55	〃	〃 12	23−5	23−15	口・体上 1/8	—	約16.0	—	約40°	〃	〃	丸みをもつ	—	灰黄褐色
56	〃	B類 1	23−8	24−2	ほゞ完形	6.4	15.2	6.0	35°	内湾ぎみ	薄くなる	〃	回転糸切	にぶい橙色
57	〃	〃 2	23−9	24−3	口 1/8 体・底 1/2	5.4	15.0	6.0	40°	〃	丸みをもつ	〃	〃	淡橙色
58	〃	〃 3	23−10	24−4	口・体 1/4 底 3/4	5.3	13.9〜15.0	5.7	38°	外反	〃	かなり丸み	〃	明赤褐色
59	〃	〃 4	23−11	24−5	口・体 1/2 底全	5.1	14.1	4.8	42.5°	ほゞ直線的	〃	〃	〃	橙色
60	〃	〃 6	23−12	24−6	口・体 1/4 底 2/3	5.6	14.0	5.5	36.5°	やや外反	薄くなる	丸みをもつ	〃	浅黄橙色
61	Bd62住	A類(皿) 1	26−4	25−11	口・体上 1/8	—	約16.6	—	約55°	わずか外反	丸みをもつ	わずか丸み	—	灰白色
62	〃	〃 2	26−10	25−12	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約42°	外反	〃	ほゞ直線的	—	〃
63	〃	〃 (皿) 3	26−8	25−13	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約45°	かなり外反	〃	〃	—	〃
64	〃	〃 (椀) 4	26−11	25−14	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約35°	内湾ぎみ	〃	かなり丸み	—	〃
65	〃	〃 5	26−12	25−15	口・体上 1/4	—	約14.0	—	約33°	ほゞ直線的	〃	わずか丸み	—	〃
66	〃	〃 (椀) 6	26−9	25−16	口・体上 1/4	—	約13.0	—	約30°	〃	丸く薄い	やや丸み	—	〃
67	〃	B類 1	26−6	25−19	ほゞ完形	4.9〜5.3	14.5〜15.0	7.0	37°	やや外反	薄くなる	わずか丸み	回転糸切	灰褐色
68	〃	〃 3	26−5	25−17	口・体上 1/8	—	約13.0	—	約32°	わずか外反	丸みをもつ	やや丸み	—	浅黄橙色
69	〃	〃 4	26−7	25−18	口・体 1/8	—	約15.0	—	約38°	〃	丸く薄い	〃	—	〃
70	Be06住	〃 1	28−7	26−8	口・体 2/3 底全	4.8	14.0	5.3	41.5°	やや外反	丸みをもつ	丸みをもつ	回転糸切	淡赤橙色〜橙色
71	〃	〃 2	28−10	26−10	口・体 1/3 底全	5.0	14.0	4.7	43.5°	わずか外反	やや平坦	〃	〃	浅黄橙色
72	〃	〃 3	28−11	26−11	口・体 1/2 底全	4.5〜4.6	14.0	5.1	45°	ほゞ直線的	丸みをもつ	かなり丸み	〃	にぶい橙色

第25表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図 No.	写真 No.	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体壁形状	底部	外面色調
73	Be06住	B類 4	28−12	26−12	口・体 1/4 底全	5.2	13.2	5.4	36°	わずか外反	薄くなる	やや丸み	回転糸切	淡橙色
74	〃	〃 5	28−13	26−13	口・体 1/5 底全	4.9	15.0	5.8	40°	やや外反	丸みをもつ	〃	〃	橙色
75	〃	〃 6	28−9	26−9	口・体 1/3 底全	4.5	13.2	5.2	42°	〃	〃	〃	〃	浅黄橙色
76	〃	〃 7	29−1	26−14	口・体 1/4	—	約13.4	—	約40°	ほぼ直線的	〃	〃	—	橙色
77	〃	〃 8	29−2	26−15	口・体 1/4	—	約13.0	—	約40°	〃	〃	わずか丸み	—	〃
78	〃	〃 9	29−4	26−17	口・体 1/4	—	約16.0	—	約51°	外反	〃	〃	—	浅黄橙色
79	〃	〃 10	29−3	26−16	口・体 1/4	—	約14.0	—	約40°	〃	〃	やや丸み	—	橙色
80	〃	〃 11	29−5	26−18	口・体 1/4	—	約15.2	—	約50°	ほぼ直線的	〃	かなり丸み	—	〃
81	〃	〃 12	29−6	26−19	口・体 1/5	—	約13.0	—	約38°	わずか外反	丸く薄い	〃	—	淡橙色
82	〃	〃 13	29−7	26−20	口・体 1/4	—	約15.0	—	約40°	ほぼ直線的	丸みをもつ	わずか丸み	—	〃
83	〃	〃 14	29−8	26−21	口・体上 1/4	—	約14.2	—	約35°	わずか外反	〃	かなり丸み	—	〃
84	〃	〃 15	29−9	26−22	口・体 1/3	—	約15.0	—	約41°	〃	〃	〃	—	〃
85	〃	〃 16	29−10	26−23	口・体上 1/4	—	約13〜15	—	約36°	〃	〃	丸みをもつ	—	〃
86	Bf30住	A類 1	33−4	28−6	ほぼ完形	4.6〜4.8	13.3	5.5	41°	ほぼ直線的	〃	ほぼ直線的	回転糸切	褐灰色〜灰白色
87	〃	〃 2	33−1	28−7	口・体 1/5 底 1/8	4.7	15.6	6.4	45°	外反	〃	わずか丸み	〃	灰黄色〜灰白色
88	〃	〃 3	33−2	28−8	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約33°	わずか外反	薄くなる	ほぼ直線的	—	褐灰色〜灰白色
89	〃	〃 4	33−6	28−9	口・体 1/4 底 1/8	4.5	16.0	6.6	47°	ほぼ直線的	丸みをもつ	かなり丸み	回転糸切	灰白色
90	〃	〃 5	33−5	28−10	口・体・底 1/8	4.5	14.0	6.2	41°	やや外反	〃	やや丸み	〃	〃
91	〃	〃 6	33−3	28−11	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約50°	かなり外反	〃	〃	—	黄灰色
92	Bi50住	〃 1	35−5	29−13	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約30°	わずか外反	丸く薄い	—	—	灰白色
93	〃	B類 1	35−6	29−14	口・体 1/4	—	約13.6	—	約35°	直線的	丸みをもつ	やや丸み	—	浅黄橙色
94	〃	〃 2	35−7	29−15	口・体 1/4	—	約14.0	—	約36°	やや外反	〃	かなり丸み	—	〃
95	〃	〃 3	35−8	29−16	口・体 1/8	—	約16.0	—	約32°	やや内湾	薄くなる	ほぼ直線的	—	明褐灰色
96	Bj21住	〃 1	37−7	30−7	口・体 1/4 底全	5.0	14.0	5.8	39°	わずか外反	やや平坦	やや丸み	回転糸切	橙色
97	〃	〃 2	37−8	30−8	口・体 1/5 底全	5.0	14.4	5.8	41°	やや外反	丸く薄い	かなり丸み	〃	にぶい橙色
98	〃	〃 3	37−9	30−9	口・体 1/3 底 1/8	4.8〜5.1	13.8	6.2	36.5°	ほぼ直線的	丸みをもつ	丸みをもつ	〃	浅黄橙色
99	〃	〃 4	37−10	30−10	口・体 1/4 底 1/8	5.3	14.0	6.0	37°	わずか外反	〃	〃	〃	〃
100	〃	〃 5	37−11	30−11	口・体 1/4	—	約15.0	—	約40°	〃	〃	やや丸み	—	〃
101	〃	〃 6	37−12	30−12	口・体上 1/4	—	約15.4	—	約40°	かなり外反	〃	〃	—	〃
102	〃	〃 8	37−13	30−13	口・体上 1/8	—	約15.0	—	約30°	ほぼ直線的	〃	〃	—	にぶい橙色
103	〃	〃 9	37−14	30−14	口・体上 1/8	—	約14.0	—	約25°	わずか外反	〃	〃	—	淡橙色

第25表（つづき）

No.	遺構名	器形番号	実測図No.	写真No.	部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体壁形状	底部	外面色調
104	Bj21住	B類 10	37−15	30−15	口・体上$\frac{1}{8}$	—	約13.0	—	約30°	わずか外反	丸みをもつ	やや丸み	—	橙色
105	〃	〃 11	37−19	30−16	底$\frac{1}{4}$	—	—	—		—	—	—（墨書）	回転糸切	淡橙色
106	〃	〃 12	37−17	30−17	体$\frac{1}{8}$以下	—	—	—	—	—	—	—（墨書）	—	にぶい橙色
107	〃	〃 13	37−16	30−18	口・体上$\frac{1}{8}$	—	約14.0	—	約35°	わずか外反	丸く薄い	丸みをもつ	—	〃
108	〃	〃 14	37−18	30−19	口・体上$\frac{1}{8}$	—	約14.0	—	約37°	ほゞ直線的	薄くなる	わずか丸み	—	〃
109	Cd21住	〃（Ⅲ）1	39−3	31−3	完形	1.9	9.6	4.4	55°	〃	やや丸み	〃	回転糸切	橙色・灰色
110	〃	〃（Ⅲ）2	39−4	31−4	口・体$\frac{1}{4}$	—	約14.4	—	約54°	〃	薄くなる	〃	—	淡橙色
111	〃	〃（Ⅲ）3	39−5	31−5	口・体$\frac{1}{8}$	—	約17.0	—	約55°	〃	〃	ほゞ直線的	—	浅黄橙色
112	〃	〃（Ⅲ）4	39−6	31−6	口・体$\frac{1}{8}$	—	約18.0	—	約52°	〃	〃	〃	—	〃
113	Bi53焼土	〃	42−3	31−12	体下・底$\frac{1}{2}$	—	—	6.0	約35°	—	—	わずか丸み	回転糸切	〃

第26表　土器実測図説明Ⅶ（須恵器　高台坏）

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	成形技法	器高(cm)	口径(cm)	坏部器高(cm)	高台接合部の径(cm)	高台部下端の径(cm)	高台部器高(cm)	外面色調	坏部底下面
Bb18住	A類系10	23−6	23−17	横なで	—	—	—	6.3	7.2〜7.4	0.9	褐灰色・灰色	回転糸切
Ai09住	B類系46	14−19	19−34	〃	6.0	15.5	4.5	6.6	7.8	1.5	淡橙色	〃
Be06住	〃 22	29−11	27−1	〃	—	—	—	—	13.0	—	〃	—
〃	〃 23	29−13	27−3	〃	—	—	—	5.0	7.2	2.2	橙色	—

第27表　土器実測図説明Ⅷ（須恵器　浅鉢）

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	成形技法	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外傾度	口縁部形状	口端部形状	体部形状	外面色調
Be06住	B類系17	29−12	27−2	横なで	—	約23	—	約43°	わずか外反	平坦	わずか丸み	橙色

第28表　鉄製品実測図説明

遺構名	名称	実測図番号	図版番号	部位	残存部(cm)	刀身長さ(cm)	刀身巾(cm)	棟巾(cm)	茎長さ(cm)	茎巾(cm)	茎厚さ(cm)	付記
Be06住	刀子 No.23ノ1	30−1	27−5	鋒部	5.9	—	0.9	0.5	—	—	—	平造り・角棟
〃	〃 No.23ノ2	29−14	27−4	刀身茎半分	15.2	10.5	0.7〜1.2	0.8	(4.7)	0.7−1.2	0.4	〃 〃

遺構名	名称	実測図番号	図版番号	縦全長(cm)	横全長(cm)	形状	先端形状	縦の巾(cm)	縦の厚さ(cm)	横の巾(cm)	横の厚さ(cm)	付記
Bf30住	不明	33−7	28−12	(13.0)	約10.2	⊤	∽	0.7〜0.8	0.5〜0.6	0.4〜1.0	0.2〜0.4	茎先欠損

第29表　土製品実測図説明 Ⅸ

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	部位	直径(cm)	高さ(cm)	孔の径(cm)	胎土	色調	焼成	出土地点	付記
Be06住	有孔玉 No.1	30 − 2	27 − 6	ほゞ完形	1.15	0.9	0.16	軟質	黒褐色	不良	かまど南ピット	調整痕
〃	〃 No.2	30 − 3	27 − 7	完形	1.0	0.85	0.18	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 No.3	30 − 4	27 − 8	完形	0.9	0.8	0.2	〃	〃	〃	〃	〃

遺構名	器形番号	実測図番号	図版番号	部位	長さ(cm)	断面径(cm)	断面形状	胎土	色調	焼成	出土地点	付記
Be06住	紐状 25	30 − 5	27 − 9	完形	5.60	0.5〜1.3	やや円形	軟質	にぶい橙色	不良	かまど南ピット	頭部楕円形
〃	塊状 26ノ1	30 − 6	27 − 10	頭部	(1.40)	(1.0)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	紐状 26ノ2	30 − 7	27 − 11	中間部	(0.90)	(0.5)	円形	〃	淡橙色	〃	〃	やや屈曲
〃	〃 26ノ3	30 − 8	27 − 12	〃	(1.20)	(0.5〜0.6)	〃	〃	にぶい橙色	やや不良	〃	
〃	〃 26ノ4	30 − 9	27 − 13	〃	(0.70)	(0.4〜0.5)	楕円形	〃	黒褐色	〃	〃	
〃	〃 26ノ5	30 − 10	27 − 14	先端	(1.50)	(0〜0.3)	円形	〃	にぶい橙色	不良	〃	
〃	〃 26ノ6	30 − 11	27 − 15	完形	1.20	0〜0.3	〃	〃	褐灰色	やや不良	〃	
〃	〃 26ノ7	30 − 12	27 − 16	先端	(0.80)	(0〜0.4)	やや円形	〃	〃	〃	〃	凸凹あり
〃	〃 26ノ8	30 − 13	27 − 17	〃	(0.75)	(0〜0.3)	円形	〃	淡橙色	不良	〃	
〃	〃 26ノ9	30 − 14	27 − 18	〃	(0.70)	(0〜0.3)	〃	〃	灰褐色	やや不良	〃	
Ba06住	扇形	16 − 6	20 − 12	縁部	(9.10)	縦 (5.2)	厚さ(0.7〜1.1)	〃	黄褐色	—	No.2 ピット	焼成せず
〃	不整形	16 − 7	20 − 13	〃	(6.90)	縦 (4.7)	厚さ(0.6〜1.3)	〃	〃	—	〃	〃

No.	遺構名	器形	実測図番号	図版番号	縦(cm)	横 (cm)	厚さ(cm)	成形	胎土	色調	焼成	内面調整	外面調整
1	Be06住	ミニチュア鉢？1	30 − 15	27 − 19	2.7	2.1	0.3〜0.8	手捏ね	やや軟質	浅黄橙色	不良	横なで	指頭なで
2	〃	〃 2	30 − 16	27 − 20	2.8	2.8	0.4〜0.6	〃	〃	にぶい橙色	〃	〃	〃
3	〃	〃 3	30 − 17	27 − 23	2.7	1.9	0.4〜0.6	〃	〃	灰褐色	やや不良	〃	〃
4	〃	〃 4	30 − 18	27 − 28	2.4	1.0	0.5	〃	〃	褐灰色	〃	〃	〃
5	〃	〃 5	—	27 − 29	2.5	2.5	0.3〜0.8	〃	〃	浅黄橙色	不良	〃	〃
6	〃	〃 6	—	27 − 27	2.1	1.6	0.5〜0.6	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃 7	—	27 − 21	1.1	1.7	0.3	〃	〃	にぶい橙色	やや不良	〃	〃
8	〃	〃 8	—	27 − 26	1.5	2.0	0.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃 9	—	27 − 25	2.2	1.7	0.3〜0.4	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃 10	—	27 − 20	1.2	1.2	0.6	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃 11	—	27 − 24	1.5	1.6	0.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃
12	〃	不明12	—	27 − 22	2.3	1.7	1.3	有孔	〃	〃	不良	—	不明

第30表　石製品実測図説明

遺構名	名称	実測図番号	図版番号	部位	長さ(cm)	巾 (cm)	厚さ(cm)	材質	付記
Bb18住	砥石	23 − 13	24 − 7	約半分	(18.1)	19.0	8.0	複輝石安山岩	上下左右4面利用

部と口縁部下端を結ぶ直線と、口縁部外面中央との差が1㎜以内のもの。やや外反は、その差が1～1.5㎜のもの。外反は、その差が1.5～2㎜のもの、かなり外反は、その差が2㎜以上のものとした。

坏類・浅鉢の体部形状を、ほゞ直線的、わずか丸み、やや丸み、丸みをもつ、かなり丸みとしたが、ほゞ直線的は、大部分体部下半が欠損しているもので、口端部と体部残存下端を結ぶ直線が、体壁内中央を通るもの。わずか丸みは、口端部と底部外縁を結ぶ直線が、体部中央で内側を通るもの。丸みをもつものは、口端部と底部外縁を結ぶ直線が、体部中央で内面と接するか内面から2㎜離れるもの。かなり丸みのあるものは、口縁部と底部外縁を結ぶ直線が、体部中央で内面から2㎜以上離れるものとした。

各表20～29などの器形・番号の内、番号は遺物台帳登録番号である。

Ⅳ まとめ

当調査地区は、3度の調査が行なわれ、住居跡13棟、焼土遺構4基、溝状土壙29基、土壙8基、方形周溝1基、溝2条等が発見された。

各遺構は、等高線132.5m以内に密集しており、重複が多い。当調査地区は大部分が132.5m以上で、北東端と南東端が132.0～132.5mである。

縄文時代の遺構は、Bj24住居跡である。不整楕円形のプランを持ち、東西にやや長い。炉跡はなく、床面中央に主柱穴跡と思われる小ピットが1つあり、北西壁に2、南壁外に7つの柱穴跡と思われる小ピットがある。堆積土及び床面上から出土した遺物は、早期末と思われる尖底深鉢形の土器片で、かなり繊維を含み、口縁部上端まで縄文を施されるものが大部分である。(第5・6図)(第19表)。石器は、凹石・縦形石匙・掻器・石箆状石器・石鏃・剝片等で、(第78図)(第19表) 石匙と石鏃に、特徴的なものがみられる。

溝状土壙は、4つが住居跡と重複し、切り合い状態からみて、皆住居跡以前の遺構であり、出土遺物等の資料はないが、他の遺跡の例から、縄文時代の遺構と思われる。従って29基の中の何れかは、Bj24住と同時期のものの可能性がある。

溝状土壙は、位置と平面形、規模からみて、2つに大別出来る。1つはAc09・Ad18・Ai21の各溝状土壙からCd59溝状土壙まで、長さ60m、巾25mの範囲内、北北西から南南東方向に分布しているもので、他の1つはCd21住の南側にある4基で、両者は、平面形と規模にかなりの相違があり、堆積土にも若干の相違がある。(第14表)

平安時代の遺構は、住居跡12棟と焼土遺構3基と思われる。遺跡全体の東側一部が調査区で

あるため、集落全体の状態は不明であるが、Be06住居跡を中心に、東側にBd62住。北側にBa53住・Aj 50住・Ba06住。北西にBb18住。西にBf 30住。南西にBj 21住、南にBi 50住が、環状に囲んでいる様にみえ、更に北側にAi 09住とAh12住。南西にCd21住が少し離れて存在している。

主軸方向は、東向きがBe06住、Ba53住、Ai 09住、Ah12住、Bb18住、Bf 30住である。Bd62住は南向き。Bj 21住は北東向き。Aj 50住・Ba06住・Bi 50住・Cd21住は不明であるが、Cd21住以外は東向きの可能性がある。

堆積土は、Be06住・Bf 30住・Bi 50住に、若干の粉状パミスが混入している。しかし、どの住居跡も上層が削られているので、3棟以外には混入しなかったと断定は出来ない。

柱穴はAi 09住・Bb18住・Bd62住・Be06住に存在し、Bf 30住は不明である。他の規模の小さい住居跡にはみられない。

かまどは、大部分の住居が東壁にあり、Bd62住は南壁。Bj 21住は北壁。Aj 50住、Bi 50住は無い。Cd21住は床面中央やや西寄りに炉と思われる焼土の集積があり、Ba06住もピットNo.4を炉に使用した可能性がある。

貯蔵穴状ピットの中に、かなり厚く、焼土炭化物が堆積しているものがあり、目的は不明であるが、かまどの火を移して、燃焼させたと思われる。Ah12住のピット3と5。Ai 09住のピット9と15。Ba06住のピット4。Be 06住のピット17等である。

年代決定資料については、Bf 30住の須恵器壷（第32図5）が、10世紀初頭と鑑定された結果があり、.Cd21住の須恵器皿B類（第39図3～6）は、他の住居跡出土の遺物より年代は下がると思われる。Aj 50住居跡以外の出土遺物については（第19表）、内黒処理の土師器長胴甕が4棟の住居跡より出土している事、内外黒色処理の坏・浅鉢が7棟の住居跡より出土している事、4タイプの高台坏が出土している事、長胴甕形の須恵器が出土いる事等である。

12棟の住居跡中、5棟が切り合いで新旧関係があるが、Cd21住以外は、ほゞ同時期か、それほど差のない時期と思われ、Cd21住は、ややそれ以降のものと思われる。

焼土遺構は、住居跡とほゞ同時期頃の存在と思われる。

土壙は、切り合った他の遺構も、出土遺物も無く、年代不明である。

方形周溝は、住居跡以降のものであるが、年代・性格等不明である。

溝・円形土壙共に、年代・性格は不明である。

上平沢新田遺跡（かみひらさわしんでん）

Ⅰ　遺跡の位置と立地

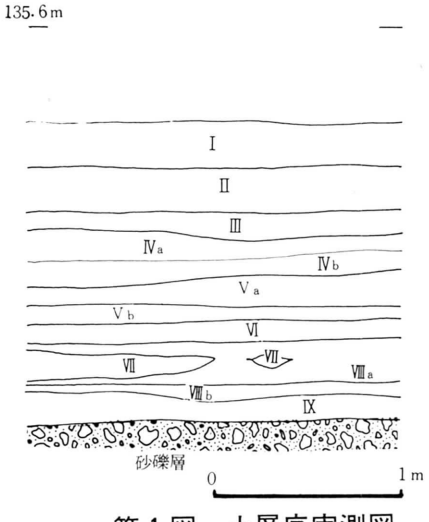
本遺跡は、東北本線「日詰」駅から北西およそ4.3km紫波町西部の上平沢新田に所在し、中位段丘二枚橋面の西南縁部の段丘崖沿いに立地している。遺跡南方約120m内外を東流する平沢川による開析とおもわれる。遺跡立地面の標高は約134m、段丘崖の比高は約１mである。

調査地は、本遺跡の一部で、地形及び表採遺物の分布から、調査地西側及び東側に伸びる段丘崖に沿う畑地・宅地に遺構存在の可能性が極めて強く、本遺跡の範囲として把握しなければならない。

調査地の現状は畑地及び水田と一部宅地であった。段丘崖下周囲はほとんど水田である。本遺跡に近接する遺跡として、北には縄文・古代の宮手遺跡、南に縄文・古代・近世の栗田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡が立地している。

Ⅱ　調査地の層序

原点杭STA516よりN40・W18点とN42・W18点を結ぶ断面観察によれば、第１図のようになる。



第１図　土層序実測図

Ⅰ 層　黒褐色腐植土（表土）

Ⅱ 層　褐色砂質シルト　小豆大の礫を含む。

Ⅲ 層　黒褐色粘質土

$Ⅳ_a$ 層　褐色砂質シルト

$Ⅳ_b$ 層　褐色砂質シルト　$Ⅵ_a$層より粒子が細かく、堆積の差違がはっきりする。

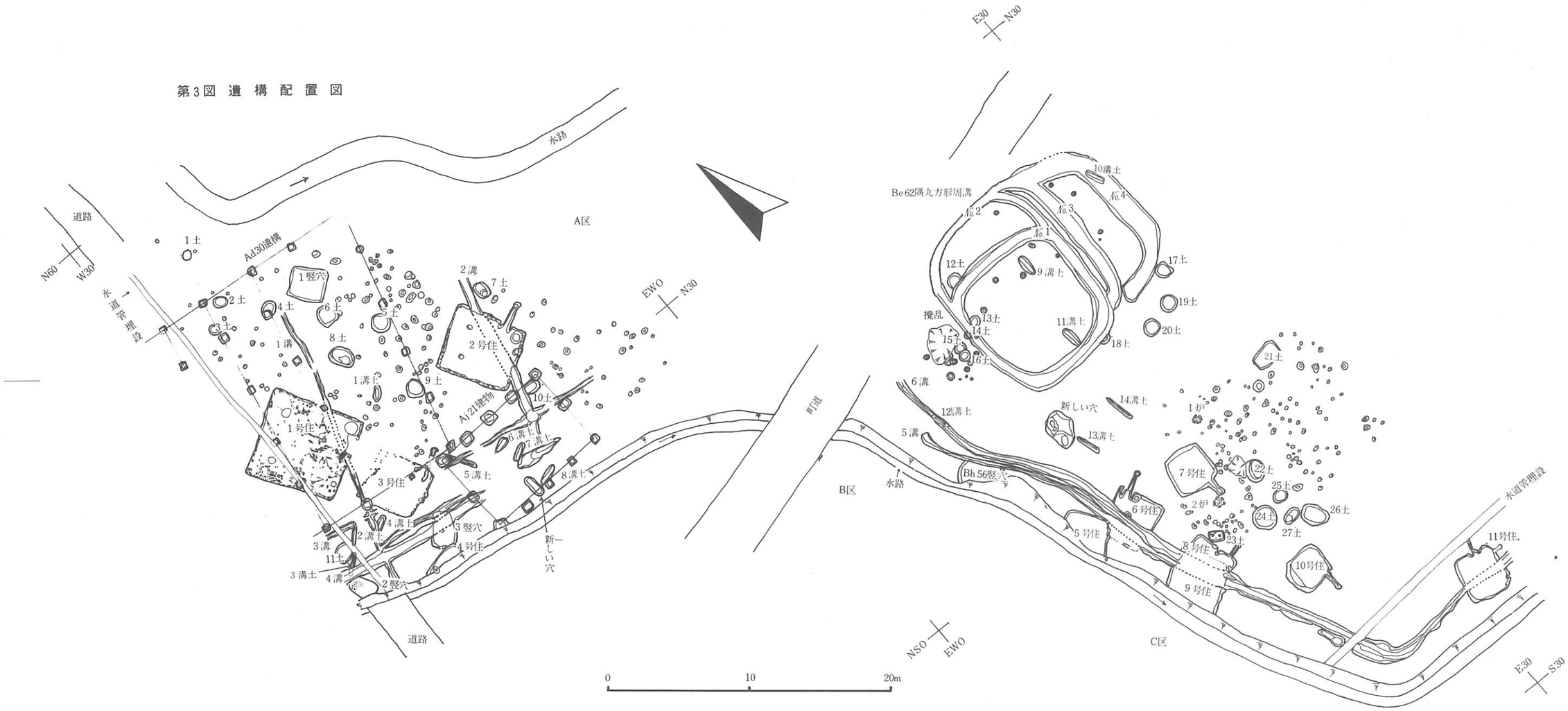
$Ⅴ_a$ 層　灰黄褐色粘質土　褐色細砂がまだら状に混っている。

$Ⅴ_b$ 層　灰黄褐色粘質土　$Ⅴ_a$層とほとんど同じであるが、しまりが強い。

Ⅵ 層　褐色シルト

第２図　調査地の地形と範囲（１：1000）

第3図 遺 構 配 置 図



水路
道路
A区
B区
C区
Be62隅丸方形周溝
Ad30遺構
Aj21建物
水道管理設
町道
撹乱
新しい穴
Bh56竪穴
N60
W30
EWO
N30
E30
S30
NSO
0
10
20m

Ⅶ 層　褐色粗砂

$Ⅷ_a$層　灰黄褐色粘質土　$Ⅴ_a$ 層と類似する土質

$Ⅷ_b$層　灰黄褐色粘質土　$Ⅴ_b$ 層と類似する土質

Ⅸ 層　灰黄褐色砂質シルト

Ⅸ層の下は砂礫層であり湧水を見た。なお、$Ⅴ_a$層以下は酸化とグライ化の状況にある。

以上のことから、黒褐色土（Ⅰ・Ⅲ層）・灰黄褐色土（$Ⅴ_a$・$Ⅴ_b$・$Ⅷ_a$・$Ⅷ_b$層）の粒子の細い土層と、褐色砂質シルト（Ⅱ・$Ⅳ_a$・$Ⅳ_b$・Ⅵ層）の粗い土層が交互に堆積し、層が形成されていることが言える。また、粘質土に細砂がまだら状に混ること（$Ⅴ_a$層）、粘質土層の中に粗砂の層が入り断続する状況（$Ⅷ_a$層とⅦ層）は水成によることを示すものであろう。

第２図に示される層序は基本的なものであるが、調査地域中Ｂ区とＣ区が接するＮＳＯ線の北・南付近（第３図参照）では、黒褐色表土（Ⅰ層）下に黒褐色粘質土（Ⅲ層）相当が見られる。したがって、ここでの遺構検出面は黒褐色粘質土（Ⅲ層）上面であるが、全体的には褐色砂質シルト（Ⅱ層）上面である。

Ⅲ　検出された遺構と遺物

表土除去遺構検出の結果、調査地内を東流する用水路南側の畑地で遺構の検出を見、北側水田では検出を見なかった。（第１図・第３図）

以下、検出遺構及び遺物について述べるが、遺物中古代の坏については、還元焔焼成のいわゆる須恵器をＡ類、酸化焔焼成で赤褐色等の土器をＢ類、酸化焔焼成内面黒色処理のあるいわゆる土師器をＣ類と分類記号で表わす（Ⅳ－２－(3)坏の分類を参照されたい）甕等の他器種については分類記号によらず土師器・須恵器で記述する。また、計測値は一括し表（第12・13表）にまとめることとし、個々の遺物はすべて実測図に付した番号によって示すとともに、土器実測図には分類記号を付した。

１．竪穴住居跡と竪穴

(1)　竪穴住居跡

１号（Ag30）竪穴住居跡

本遺構は、Ａ区路線西境に北西隅が接する位置に検出された焼失家屋であり、炭化材の保存状況が比較的良好で、床面に敷かれた板材及び壁の土留施設の板材が炭化し残され、他にあまり例を見ないことから、文化課は保存方針を決定、日本道路公団と協議を重ねた結果、現地保存とすることになった。

保存に当っては、炭化材の処置について東京国立文化財研究所樋口清治氏の現地指導を10月15日～17日に受け、ヴァインダー17を塗布もしくは注入し固形、その後現状記録を行ない遺物のみ取り上げ、遺構周囲の砂質シルトを埋め固めることの繰り返しによる埋めもどしをした。したがって、炭化材面以下の精査は実施されていない。

遺　構（第４図　図版１～４）

〔**重複**〕　東壁北半から南壁東半にかけて１号溝により切られ、西半部では南北に走る水道管埋設溝で破壊されている。

〔**平面形・規模**〕　方形を呈し辺長は北辺東西方向6.40m・東辺南北方向で6.60mであり、東辺で真北に対し6°30′西に向く。

〔**埋土**〕　大別し三層になる。１層は黒色土と砂質シルトの混合で約20cmの厚さで全域に広がる。２層は黒褐色土と焼土の混合で炭化物を含み厚さ約３cmで、１・３層間に薄くまばらに認められる。３層は炭化物層で板状、茅状、丸材状の炭化物片が全域に広がり約５cmの厚さを持つ。

〔**床・壁**〕　西壁寄りで板敷の床が認められる。材の長さは不明だが、遺存状況から幅20～40cmのものが西・北・南壁に各々木目方向が平行するように敷かれたものと言える。

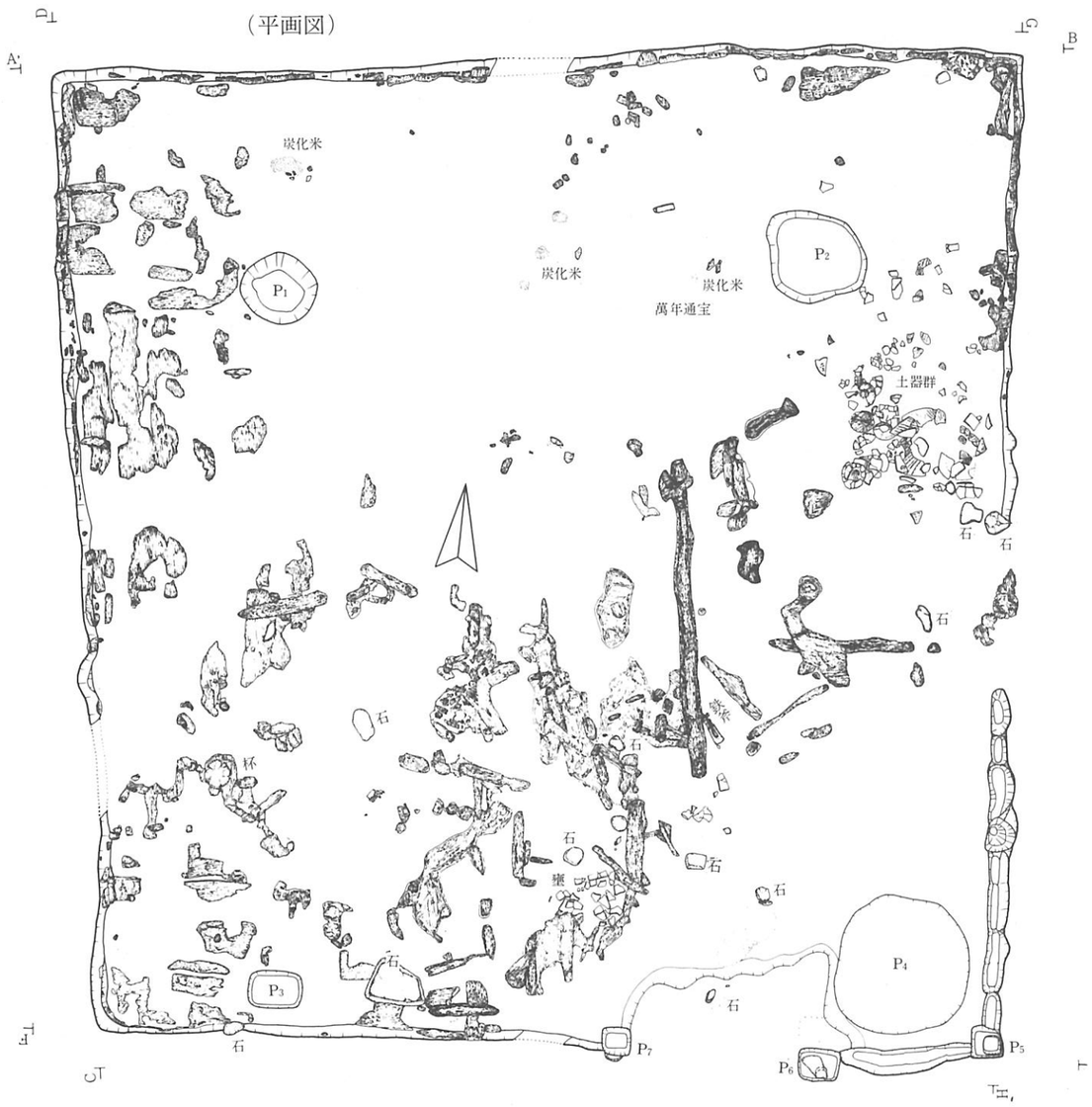
特に南西隅近くに出土した坏が板上に潰れていることは、板敷床の存在を示すものである。ただ、板敷が床全体に及んでいたか否か不明である。東壁中央やや北沿いに一括出土した遺物は板上には遺存していない。

壁の遺存状況は高い個所で30cm、南東ではほとんど削平されている。壁は直に立ちこれに密着し炭化材が確認された。炭化材からみて幅約20cm単位の板材を矢板状に施設したもので、壁面は板であったと考えられ、東壁北半・西壁北半・北壁で遺存が良い。東辺南半と南辺東半では壁部が削平されているが、壁材施設の溝が幅約15cmで20～40cmの区切りをもって確認できた。なお、東南隅のP_5及び南辺のP_6・P_7は一辺15cm～20cm、床面からの深さ約35cmの角柱穴状で壁材固定の要素も持ち合せていたものとみられ、これら壁材施設溝は後述する第２号住居跡でも確認できた。

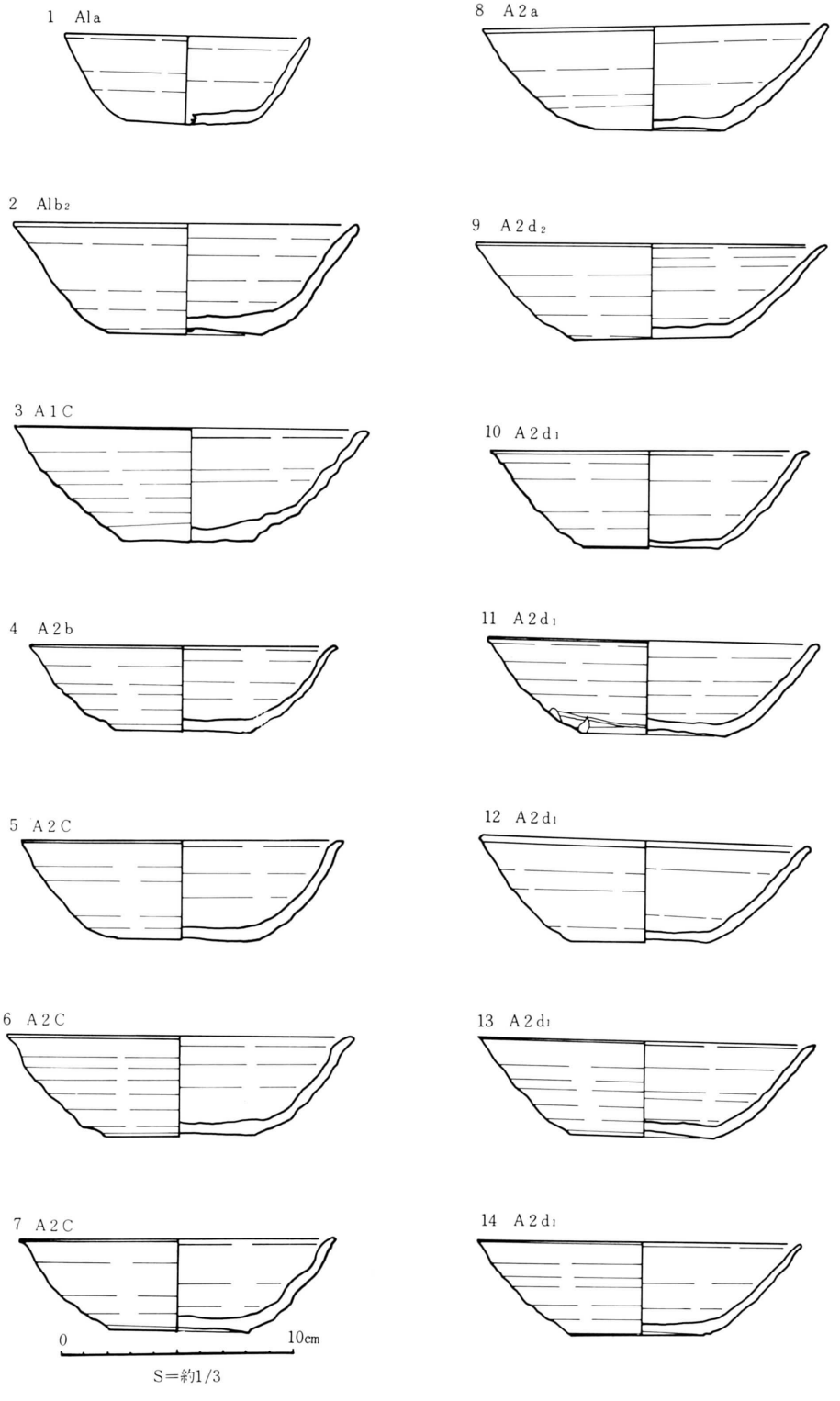
〔**柱穴**〕　P_1・P_2・P_3は位置的に主柱穴と推定できる。東南１本は未確認であるが、南列は南壁沿いにあり、４本が対になる構造と見られる。

〔**かまど**〕　北壁・西壁では、施設痕は全く認められず、東壁南半・南壁東半の削平された部分に施設されていた可能性が強い。南壁東半P_6・P_7間1.3mは壁材施設溝が切れ地山シルトが内側に削り出され床面より５cm高く、焼土と粘土の混土で周囲を固め埋設された石が存在し、続く北側に焼土を認め東南隅にP_4がある。これらが支脚石・かまど関連の焼土・貯蔵穴とすれば、ここにかまどを位置づけれるが断定的には言えない。

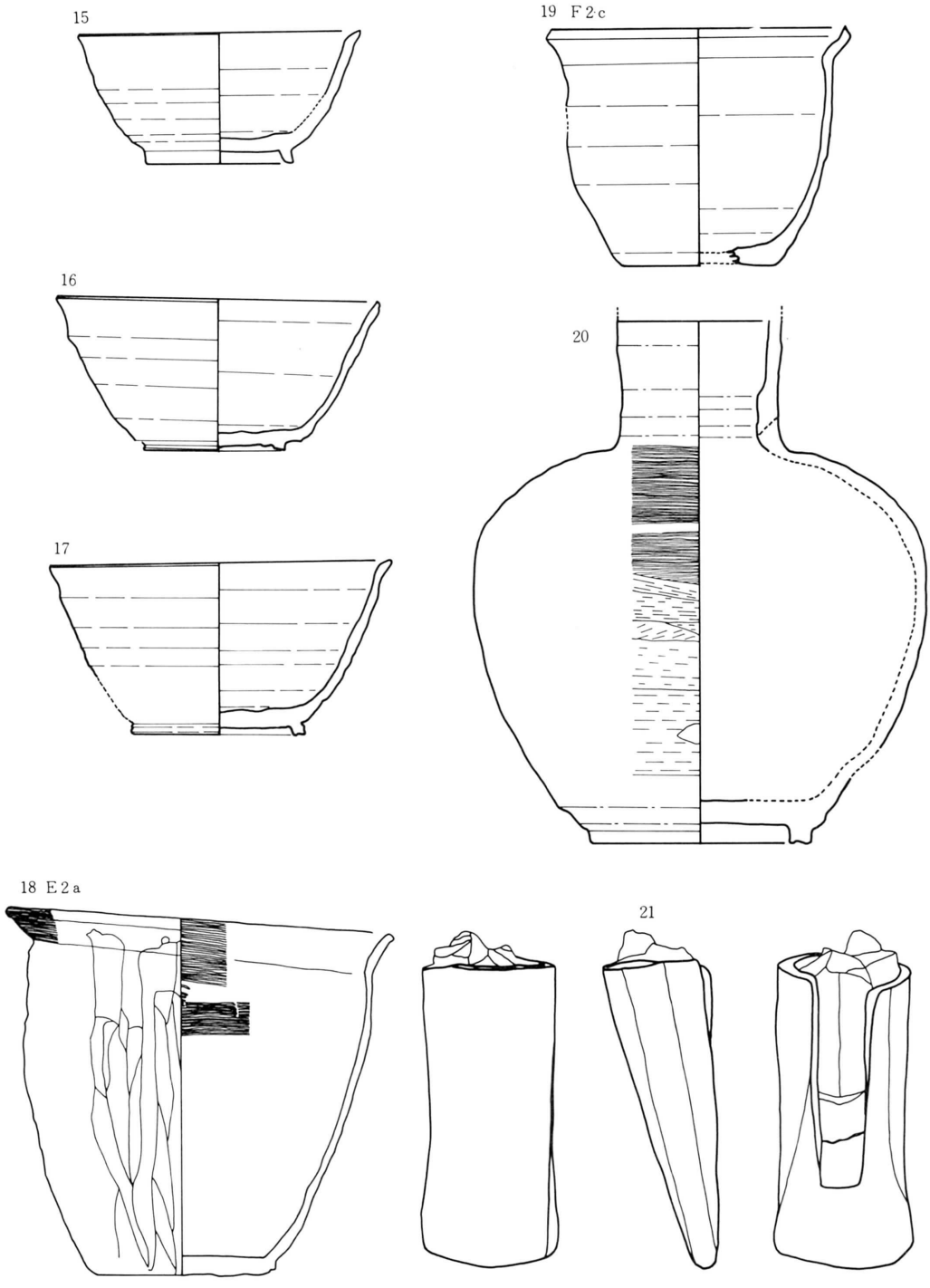
〔**その他の施設**〕　前述と重複するが、東壁東半の地山の削り出し部分はかまどでないとすれ



第4図　第1号（Ag30）竪穴住居跡実測図



第5図　1号竪穴住居跡出土坏実測図



第6図　1号竪穴住居跡出土遺物実測図

ば、他の施設が考えられ、状況から出入口が想定される。

遺　物

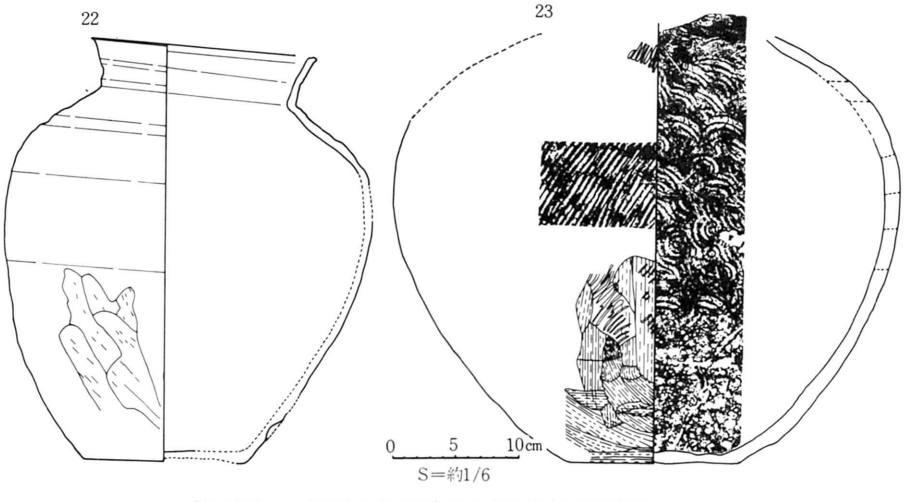
遺物の遺存状況は比較的良好で、坏15点・台付坏３点・甕５点・長頸壺１点が完形もしくは復元実測可能な土器であり、鉄斧１点・萬年通宝１点・炭化米が出土した。

A類坏（第５図１～14　図版20・21）　坏は全てA類でB・C類の出土はない。火災による火熱のため、くすべ色が淡黄色等に変色し、煤の付着するものもある。形態、調整、切り離し技法からみると、図１～３は回転ヘラ切り[(1)]無調整、１は直線的に立ち上がり口径に対する底径比が大きい、２は外反ぎみに立ち上がり、３はやや丸味をもつ立ち上がりで、口径に対する底径比が非常に小さい。図４～14は回転糸切り無調整で、４はやや丸味をもつ立ち上がりで口縁部はわずかに外反する。５～７はやや丸味をもつ立ち上がりで口縁部は外反し内側に稜をもつ、８～14はほぼ直線的な立ち上がりで口縁部はわずかに外反する。

出土地点は、１は埋土からの出土、５が南西隅近くで板上に潰れて出土、他は東壁北半沿いに一括出土したものである。

A類台付坏（第５図15～17　図版21）　３点の出土であり、いずれも底部回転糸切り後台を付す、15は３点の中では小形、16は中形、17は大形になり、体部立ち上がりはほぼ直で口縁は外反する。16の脚部が他２点より若干低いが、総じて大きな差はない。

土師器甕（第６図18・19　図版21）　３点の出土で、いずれも小形甕である。18は口縁「く」字に外反し口唇外側に溜があり、外面は口縁横ナデ、体部ヘラケズリで、内面は口縁ナデ、体部横方向の刷毛目状調整でありロクロ不使用である。他の２点は19のように口縁「く」字に短かく外反、口唇を上方に引き出すロクロ使用で、底部回転糸切り無調整、体部内外ともロクロなで調整である。



第７図　１号竪穴住居跡出土須恵器甕実測図

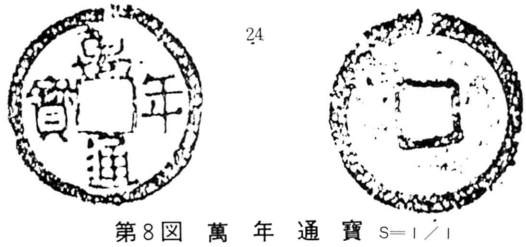
須恵器甕（第７図　図版22）　22は器面が二次火熱によって剝離している部分が多く、そのため底部切り離し技法も不明である。口縁はやや外反し体部中央から下はヘラケズリ、上はロクロナデ調整になる。23の外面調整は体部下端で横のヘラケズリ、上って叩き後のヘラケズリとなり体部中央から肩部は叩きのみとなる。内面下端は剝離で不明であるが大部分が青海波文様であり、肩部付近に横ナデがある。肩部から上は欠損している。22・23とも東壁北半沿い一括土器群での出土である。

須恵器長頸壺（第６図20　図版22）　体部外下端は回転ヘラケズリ、中央部はカキ目後回転ヘラケズリ、肩部から頸部までカキ目、頸部はロクロナデ調整であり、底部は切り離し後回転ヘラケズリ調整をし台を付している。南壁中央近くからの出土である。

鉄　斧（第６図21・図版23）　長さ13㎝、幅5.5㎝の長方形で刃先がやや広くなり、側面は長三角形である。鉄板を両側から折りまげ袋状の銎をつくり木柄を挿入するもので、銎部分の木柄は炭化し残っている。

萬年通寶（第８図　図版23）　材質は銅、直径2.55㎝、重さ1.9g、火熱で面が粗になり薄くなっており、針ほどの穴も見られ「萬」字の右上に若干の欠落もある。P_2西側付近で出土した。

炭化米（図版23）P_1とP_2を結ぶ線の北側数個所で出土した。



第８図　萬　年　通　寶　S＝１／１

注(1) 奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏が、本調査地出土のＡ類坏片（器肉内が褐色を呈するもの）に加熱実験の結果、10YR 5/1灰が、600°Cで10YR 5/2オリーブ灰、800°Cで10YR 6/3にぶい黄橙、1000°Cで7.5YR 6/6橙の変色をみた、加熱時間は各３時間である。なお、色相観察は報告書執筆者による。

２号（Ah15）竪穴住居跡

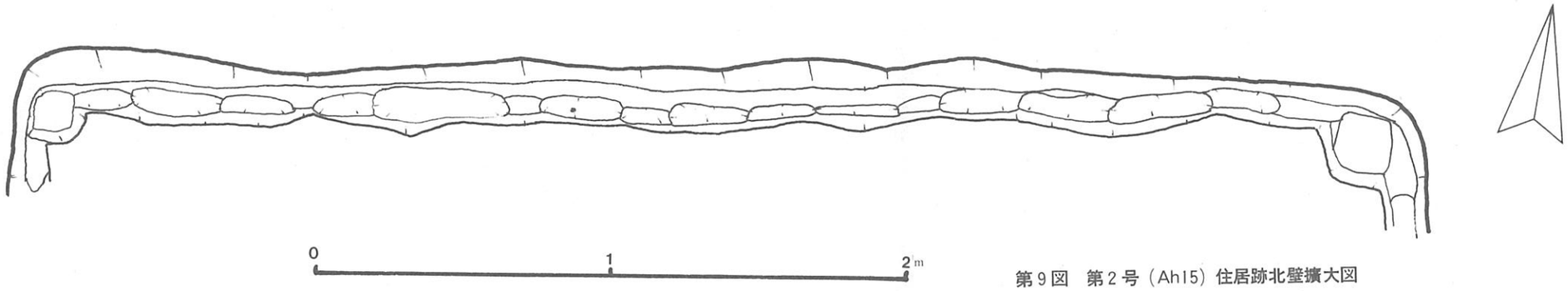
１号住居跡の南東約８ｍの位置で、褐色砂質シルト（Ⅱ層）面で確認されたもので、床面上に広がる焼土、壁沿いの炭化材、遺物出土量の状況から焼失後整理された家屋と推察される。

遺　構（第９・10図　図版５）

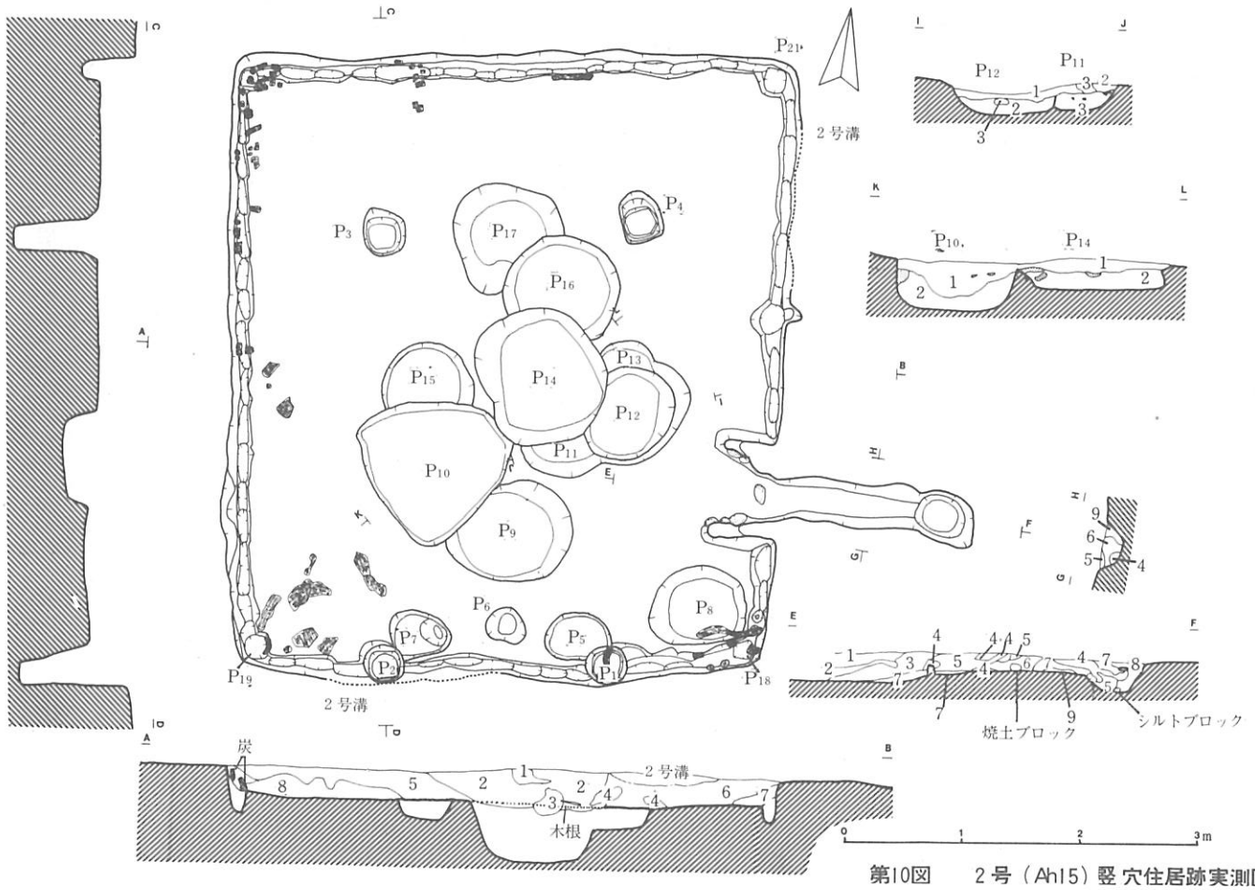
〔**重複**〕　東壁北半から南壁西半へと本遺構を斜めに切る溝２号がある。

〔**平面形・規模**〕　東辺5.1m・西辺5.1m・南辺4.4m・北辺4.75mで南北方向辺にくらべ、東西方向辺が若干短かい方形である。

〔**埋土**〕　１～４層は、りんご植樹による攪乱で黒褐色土に焼土、炭などが若干混り木根が多い。５・６層は、ほぼ同じ土質で壁ぎわを除き全域に広がり、北半部では検出面から床面まで達する。壁ぎわに７層黒色土があり、その下層がシルト・炭・焼土を含む８層となるが、この層は北半には広がらず南半に連続し、黒色土と焼土の混土に多量の炭を含み、にぶい褐色を呈する



第9図　第2号（Ah15）住居跡北壁擴大図



第10図　2号（Ah15）竪穴住居跡実測図

P_{11}・P_{12}埋土
1．10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭混入
2．5YR4/6 焼土　マトリックスはシルト
3．7.5YR3/3 黒褐色土に焼土ブロック混入

P_{10}・P_{14}埋土
1．10YR2/2 黒褐色土 炭・焼土少量含む
2．10YR2/2 黒褐色土 1より炭・焼土が多量

かまど・煙道埋土
1．10YR2/2 黒褐色土 シルト混る炭極少あり
2．10YR2/2 黒褐色土 粒状の焼土が混る
3．10YR3/3 暗褐色シルト 炭極少と焼土ブロック黒色土あり
4．7.5YR2/1 黒色土 粒状の焼土若干あり
5　7.5YR2/2 黒褐色土 焼土ブロックあり
6．7.5YR2/2 黒褐色土 粒状のシルト全体にあり
7．7.5YR2/3 暗褐色土 腐植土・シルト全体にあり
8．10YR2/2 黒褐色土 焼土・粒状シルト若干あり
9．10YR2/3 黒褐色土 シルト・黒色土の混合，焼土ブロックあり

竪穴住居跡埋土
1．5YR3/3 暗褐色焼土
2．7.5YR2/1 黒色土
3．7.5YR2/1 黒色土 焼土と炭若干あり
4．10YR2/2 黒褐色土 シルト混る木根あと
5．7.5YR2/1 黒色土 炭・シルト若干あり
6．7.5YR2/1 黒色土 炭極少あり
7．7.5YR1.7/1 黒色土 炭極少あり
8．10YR2/2 黒褐色土 シルト・焼土・炭が全体に混入

厚さ約10cmの9層(図示なし)となって、南西隅付近とかまど焚口を結ぶ線以南に広がる。9層と壁沿いに遺存する炭化材は、火災による痕跡と考えられるが、北半床面に焼土・炭化材が見られず5・6層が床面まで達すること、遺存する炭化材が小さいこと等から、焼失後整理したものであろう。

〔床・壁〕 床面は中央部を除き地山シルトであるが、部分的に火熱を受けている。中央部は重複するP_9～P_{17}のピットがあり、それぞれ埋められた後、上面を黄褐色シルト等で貼って床面としている。ただし、P_{10}・P_{14}は最も新しいピットで埋土1層は黒褐色土で貼った状況はない。

壁は床面からほぼ直に立ち、壁高は25cmある。東壁を除く壁沿いに炭化材が認められ、四壁に沿って幅15cm、床面からの深さ15cmの周溝状の溝がある。溝は底の凹凸と上端線の出入等から20cm～45cm単位の区切りがあって、四隅のP_{18}～P_{21}は床面からの深さ20cm～30cmで一辺20cmの角柱穴状である。これらは第1号住居跡と類似するもので、溝は壁材施設溝で、壁構造は第1号住居跡と同様だったとみたい。

〔柱穴〕 P_1～P_4が柱穴で形状は隅丸の方形に近く、いずれも一辺30cm、床面からの深さはP_1・P_2で60cm、P_3・P_4で70cmである。埋土はP_3・P_4で黒褐色土が大半をしめ、周囲に部分的に褐色砂質シルトが入る。P_1・P_2については記録しなかった。P_1・P_2は南壁に密着し、P_3・P_4は住居跡四隅の対角線上にあって、それぞれ北壁から南へ1.5mと1.4mの位置にある。柱間寸法はP_1とP_2は1.9m、P_3とP_4は2.2m、P_1とP_4・P_2とP_3間は3.7mを計る。

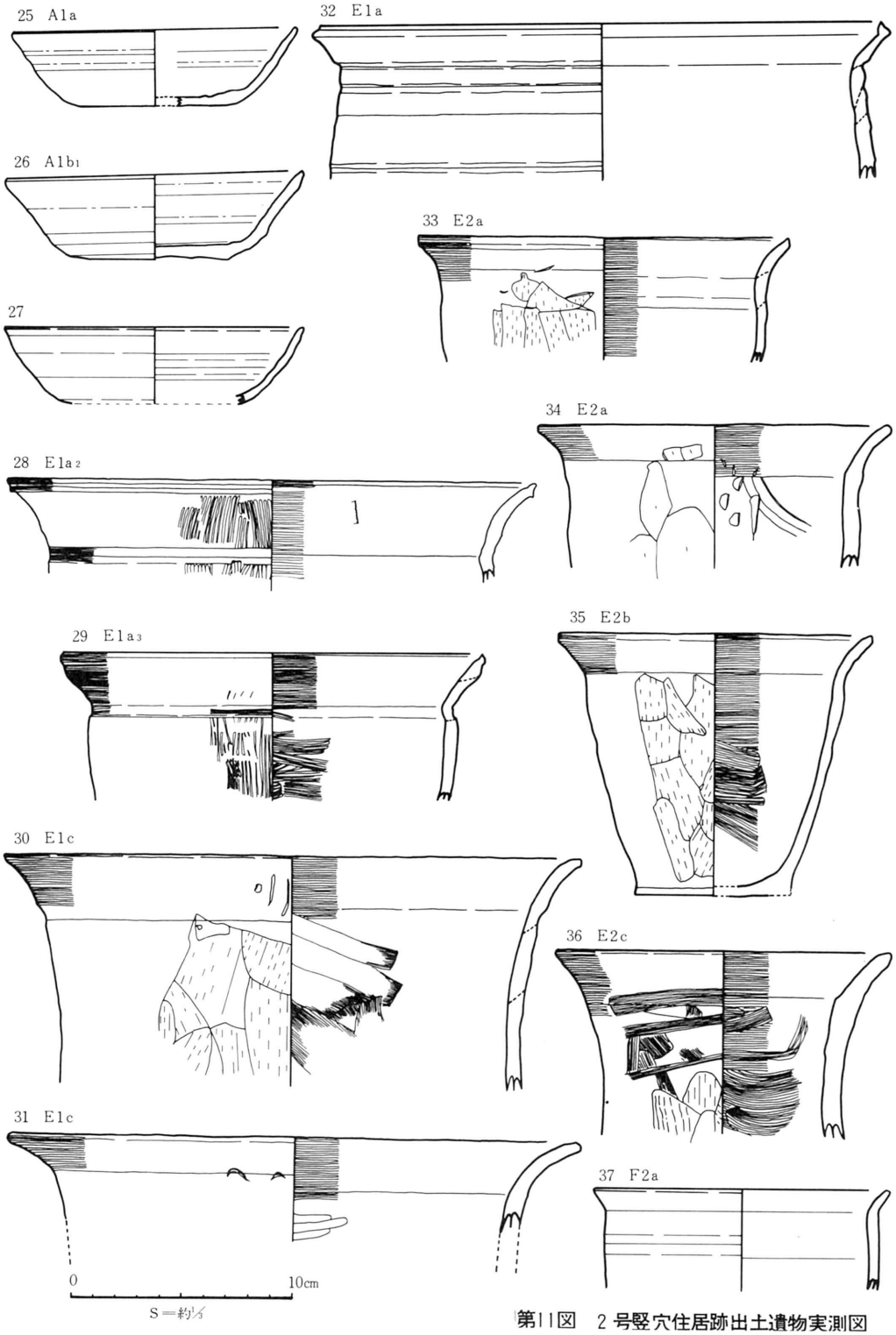
〔かまど〕 東壁南半部の中央に施設され、両袖は川原石を芯材に用いシルトで固め、燃焼部に支脚をもつ、焚口・燃焼部は、奥行60cm、幅50cm～30cmで、地山シルトを火床面とする。床面と同レベルの焚口から燃焼部とゆるやかに傾斜し高くなり煙道に続く、煙道は幅40cm深さ15cmでほぼ水平に1.15m伸び煙出部となる。煙出部は径40cm×50cmの円形で、底は煙道底面より10cm低くなる。なお、煙道は真北に対し89°東を向く。

〔その他の施設〕 P_8は径80cm×75cmの円形で深さ15cmであり、位置的に貯蔵穴と想定できるが遺物量は少ない。P_5・P_6・P_7はそれぞれ25cm・35cm・20cmの深さを計り、位置的に主柱穴P_1・P_2に隣接し、その関連も考えられるが性格不明である。P_9～P_{17}は、前述のように中央部に集中しており、径70cm～1m・深さ30cm～40cmの円形ピットで何回かの新旧の重複が見られ、人為的に埋めた攪乱土の上をシルトで貼り、床面にしていることはP_{10}・P_{14}を除き、ほぼ共通するが、性格については不明である。

遺　物

完形品は少なく、実測図は反転によるものが大部分である。

A類坏（第11図25～27　図版23）　25・26とも回転ヘラ切り無調整、25の体は直線的に立ち上がり口径に対する底径比が大きい、26はやや外反ぎみに立ち上がるものである。27は底部欠損で切り離しは不明であり、体部はやや丸味をもつ、口縁に重ね焼き痕があり破損断面を見る



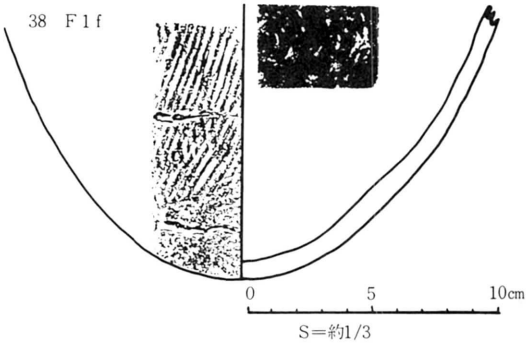
第11図　2号竪穴住居跡出土遺物実測図

と器肉内は褐色である。

土師器甕（第11図28～37　図版23・24）　28・29・30・31は、ロクロ不使用の長胴甕で、28は肩部段が形式化し、口縁は若干湾曲をもって外反する。口唇は上方に軽く引き出され、体部調整工具を用い調整していて、肩部段も同様である。口縁、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横ナデ調整である。29は、肩部段は形式化し、口縁が「く」字状に外反、口唇は軽く上方に引き出され、口縁内外と体内面は横ナデ、体外面は縦の刷毛目調整である。30・31は、肩部無段で、口縁の屈曲がゆるやかで湾曲しながら外反する。口縁は内外とも横ナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は刷毛目調整である。32は、ロクロ使用の長胴甕で、口縁は「く」字状に外反、口唇を上方に引き出す、口縁は、内外とも横ナデで、体部内外は刷毛目状のロクロナデ調整である。

33・34・35・36は、ロクロ不使用の小形甕で、33・34は、口縁「く」字状に外反し、口唇外側に溜がある。口縁は内外とも横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面刷毛目調整である。35は、口縁「く」字状に外反し、口唇を上方に軽く引き出す。体部の最大径は肩部付近にあり、調整は33・34に類似する。36は、口縁から口唇の形態が長胴甕30・31に類似し、口縁内外とも横ナデ、体部外面は肩部付近で刷毛目、以下でヘラケズリ調整となる。

37は、ロクロ使用の小形甕で、口縁は「く」字状に短かく外反し口唇に変化はない。口縁、体内外面ともロクロナデ調整で、底部は回転糸切り無調整である。



第12図　2号竪穴住居跡出土甕

第12図38（図版24）の土師器甕は、上半を欠くため全体的な形態は不明であるが、砲弾状の丸底で、体外面には全体に叩き目があり火熱を受けている。

内面はあて工具痕が見られる。赤褐色で焼成は良い。技法的には須恵器の甕によく見られる技法に類似している。

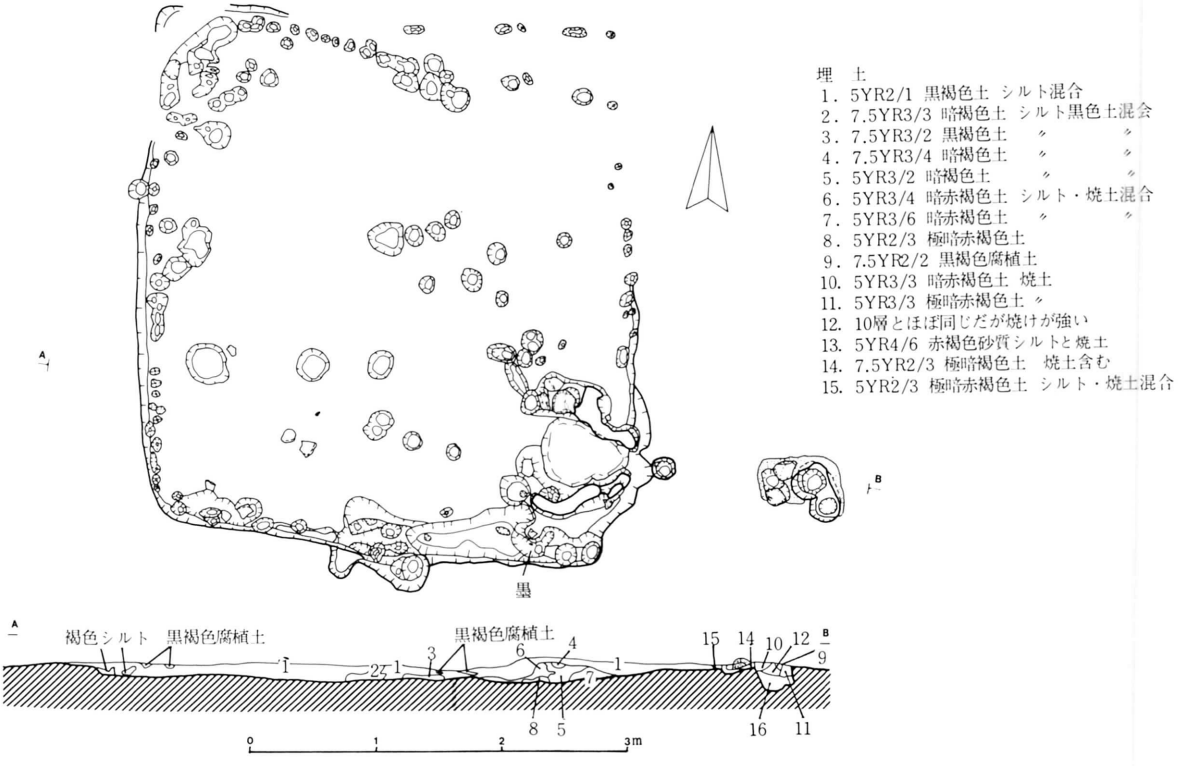
3号（Aj27）竪穴住居跡

1号住居跡の約2m南で、褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出されたが、削平が著しく壁高はほとんどなく、辛くも床面が遺存していた。

遺　構（第13図　図版6）

〔**重複**〕　北西隅を1号溝・南東隅から西壁へ3号溝が本遺構を切る。

〔**平面形・規模**〕　平面形は、削平著しく明確さに欠けるが、東辺4.20m・西辺4.00m・南辺3.50m・北辺3.60mのやや南北に長い方形である。



第13図　3号（Aj27）竪穴住居跡実測図

〔埋土〕　1層の黒褐色土と褐色シルトの混合土が全体に広がり、部分的に褐色シルトや黒褐色土のブロックが入る状況が、検出面から床面まで達する。

〔床・壁〕　床面は地山シルトをそのまま利用しほぼ平担である。壁は削平のため遺存状況が不良で、壁高は高い部分で、10cmであるが、東壁北半と北壁はほとんど認められない。

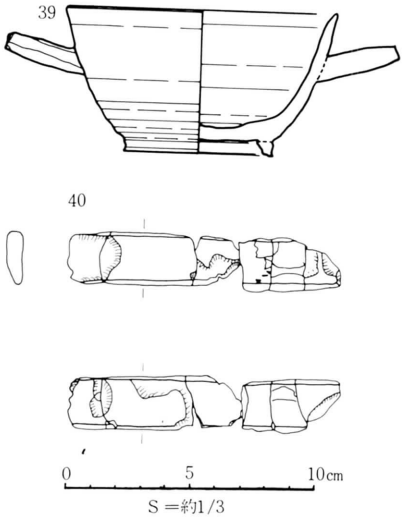
壁沿いに径10cmで円形の小ピットが並ぶ、深さは20cm～10cmのものまであるが、総じて浅く、壁構築施設痕とも考えられるが明確ではない。

〔柱穴〕　床面に10数個の円形小ピットを認めるが、深さ10cm以下で柱穴はない。

〔かまど〕　東壁南半の南東隅寄りに施設され、両袖は遺存するが状況は良くない。左袖は川原石を芯としシルトで固め、右袖は黒褐色腐植土とシルトの混合土でつくっている。

焚口・燃焼部は、奥行70cm・幅50cm～30cmで、焚口でわずかに落ちこみ燃焼部から煙道へゆるやかに上るが、削平のため原形を留めるものか疑問である。なお、地山シルトを火床面としている。煙道は遺存しないが壁から東1.10mに煙出部があり、南東部は後の攪乱を受けているが、径30cmの円形で深さ20cm以上のものであると推定される。

なお、推定される煙道方向は、真北に対し92°東を向く。



第14図　3号竪穴住居跡出土遺物

4号（Bb27）竪穴住居跡

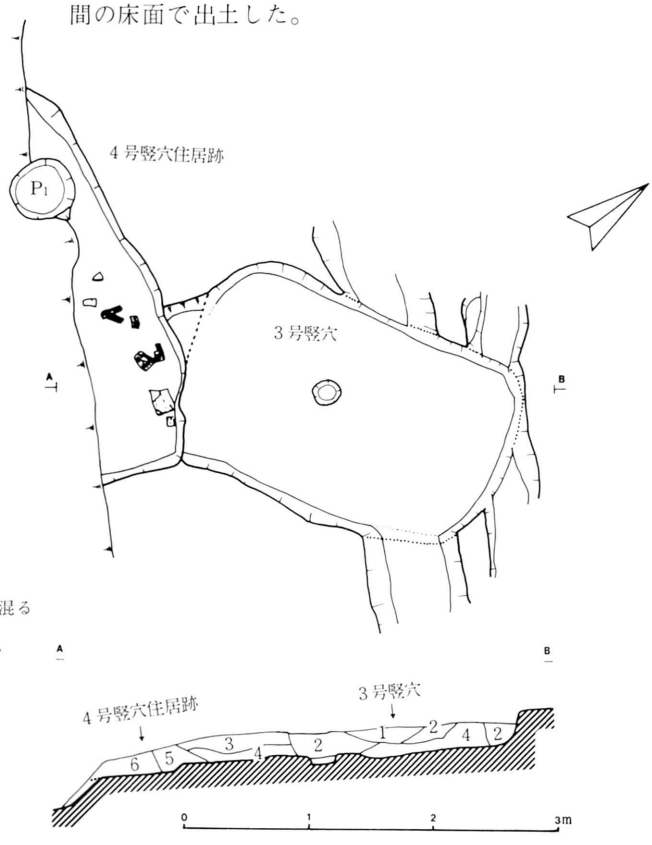
3号住居跡の南約3.5mの段丘崖で、褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出されたが、開田・水路による侵食のため、一部のみ遺存する。

埋　土
1．10YR2/2　黒褐色土
2．75YR2/2　黒褐色土
　　極少の炭あり
3．10YR3/2　黒褐色土
　　粒状のシルト・極少の炭あり
4．10YR3/2　黒褐色土
　　3層よりシルトが多い
5．10YR3/4　暗褐色土シルト　黒色土がまだら状に混る
6．10YR2/2　黒褐色土
　　シルトのブロック・炭・焼土・を含む

遺　物

A類台付双耳坏（第14図39　図版24）　体部はやや丸味をもって立ち上がり、口唇で若干外反する。内外面ともロクロナデによって整形した後、ヘラケズリ調整をした耳を貼り付け、底部は回転糸切り後、台をつけたものであり、床面中央からややかまど寄りで出土した。

墨（第14図40　図版6・24）　両端が欠けるため、本来の長さを知り得ないが、現存部分は11cmある。表面は剝離している部分もあるが、全体として遺存状況は良く、滑らかな加工面をもち、幅2.1cm・厚さ0.8cmを計る。かまど右袖部分と南壁間の床面で出土した。



第15図　4号（Bb27）竪穴住居跡・3号（Ba24）竪穴実測図

遺　構（第15図　図版６）

〔重複〕　北東隅の一部が３号竪穴と重複する。この部分は本遺構廃棄後、褐色シルトと黒褐色土の混合土（埋土５層）で壁がつくられ３号竪穴が構築される。

〔平面形・規模〕　一部の遺存なので全体の形状は不明であるが方形と推察される。遺存する北辺は3.2mである。

〔埋土〕　図示の６層単層である。黒褐色土に小豆大のシルトブロックと炭・焼土を含んでいる。

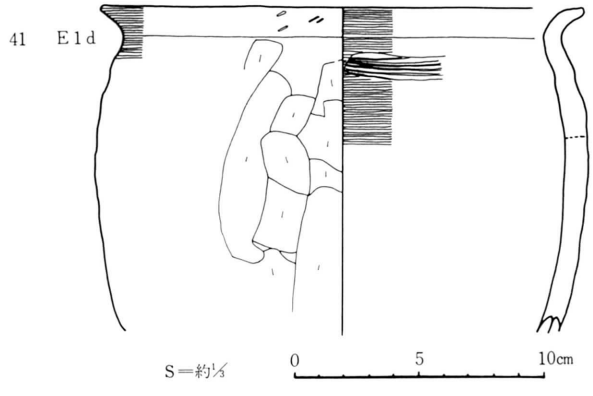
〔床・壁〕　床は褐色シルト面をそのまま利用しているが、面は汚れ生活痕を示し焼土と炭化材が認められた。壁高は北壁西半で30cm、東半の３号竪穴と重複する部分で10cmで外傾する。

〔柱穴〕　西寄りに径50cm、深さ43cmの円形ピットを認めるが、柱穴と言い得る確証はない。

〔その他の施設〕　確認できない。

遺　物

土師器甕（第16図　図版25）の出土がある。ロクロ不使用で口縁は極端に短かく、外につまみ出すように外反し口唇の変化はない。口縁内外と体部内面は刷毛目、体部外面はヘラケズリ調整で、一部口縁まで及ぶ、器面は全体に粗で石英を多く含む。



第16図　４号竪穴住居跡出土甕

５号（Bj59）竪穴住居跡

NSO・EWO点の約12m東の段丘崖にかかる地点で検出された。

検出面は木根や後世の攪乱壙のため、東南隅付近を除き明瞭でなかった。開田・用水路等の侵食によって一部のみ遺存する。

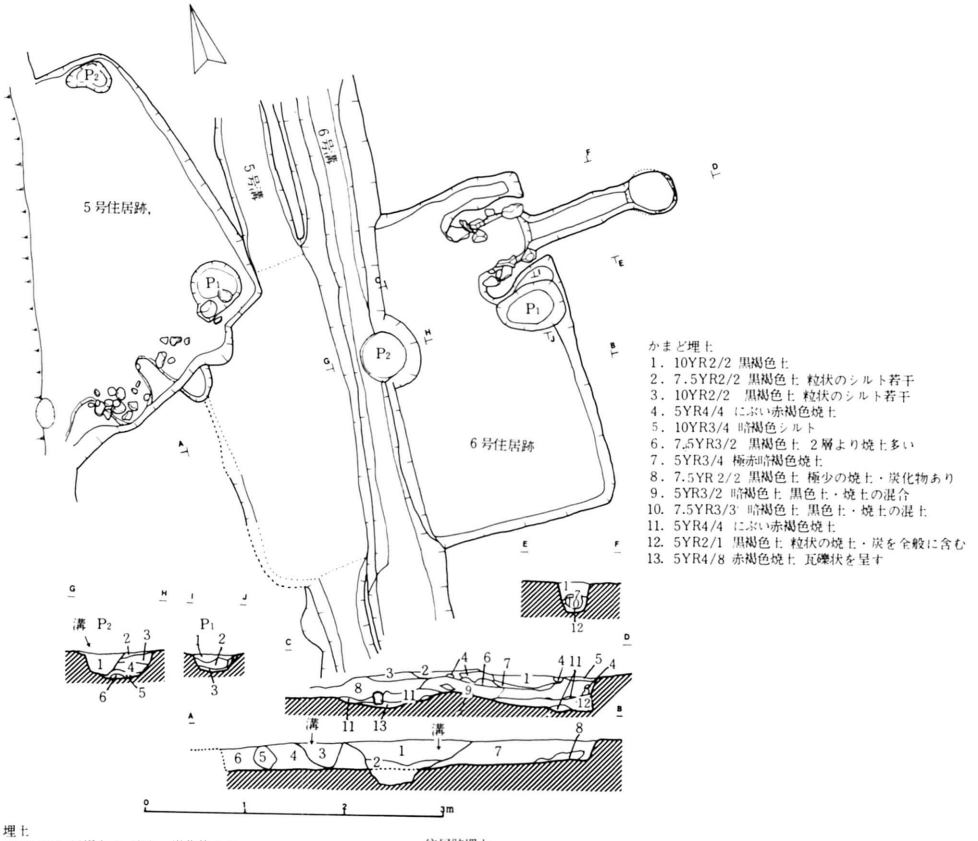
遺　構（第17図　図版７）

〔重複〕　６号住居跡の北西隅を切る。

〔平面形・規模〕　全体の形状は不明であるが、方形と推定される。東辺３m、南辺と北辺の遺存部分はそれぞれ2.5m、0.7mあり、西辺は遺存しない。

〔埋土〕　黒褐色土を主体とし、褐色シルトの混入したものであったが、検出面での攪乱が著しく、当初、遺構の確認に欠けたため、実測記録がなく詳細は不明である。

〔床・壁〕　床面北半は褐色シルトをそのまま利用しているが、南半は一担掘り下げ黒褐色土と褐色シルトの混土を北半と同じ面まで埋め固めている。



第17図　5号（Bj59）竪穴住居跡・6号（Ca62）竪穴住居跡実測図

壁高は、東壁40cm、南壁30cm、北壁20cmで、東壁は比較的直に立つが南壁は崩れがみられる。

〔柱穴〕　南東隅に径50cm深さ20cmのP_1と、北東隅で径30cm深さ18cmのP_2を確認したが柱穴と言い得る確証はない。

〔かまど〕　南壁遺存部の西半に地山シルトが削り出され袖状を呈する個所があり、ここに遺物と礫が集中し、近くに焼土も認めたが断定できない。

遺　物

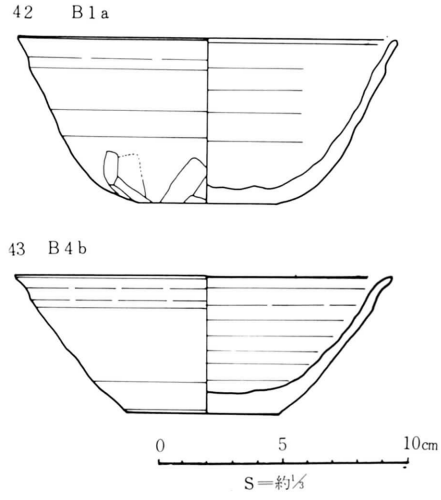
出土遺物はB類の坏3点がある。

B類坏（第18図42・43　図版25）　42　体部下端で丸味をもち、上は直線的に立ち上がり肩

に段をもち口縁は外反し器高が高く、体部下端から底部は手持ヘラケズリ調整を施し切り離し技法は不明である。内面に漆状の付着物があり黒色を呈するがロクロナデ痕が明瞭である。

43　直線的に外傾する摺鉢形で肩に段をもち口縁は外反する。器面全体が摩滅のため粗になっており底部切り離し技法は不明である。

図示した以外に、全体的形態は体部上半を欠くため不明であるが、回転糸切り無調整の体下端部がある。



第18図　5号竪穴住居跡出土坏

6号（Ca62）竪穴住居跡

5号住居跡の東南に隣接し黒褐色粘質土面（Ⅲ層）で検出され、西半は段丘崖に接し木根等の攪乱で検出状況は明瞭でなかった。

遺・構（第17図　図版7・8）

〔**重複**〕　北西隅が5号住居跡に、中央付近は南北に走る5・6号溝によって切られる。なお6号溝底は住居跡床面以下に達する。

〔**平面形・規模**〕　完全に遺存する東辺が3.5m、床面の広がりとからみて一辺3.5m程の方形を呈するものと推察される。

〔**埋土**〕　1・2層は6号溝、3層は5号溝埋土の黒褐色土、5層は木根による攪乱黒色土が大きなブロック状を呈するもので、いずれも全体的な広がりはない。4・6層は黒褐色土を主体に植生痕が著しく草木根による攪乱をうけている。7・8層が攪乱のない黒褐色土で7層は東半全体に、壁ぎわには8層が認められた。

〔**床・壁**〕　床面は西半で木根等による若干の攪乱と溝による破壊はあるが、遺存部分は比較的良好で、褐色シルト面をそのまま利用した堅く平担なものである。

壁の遺存は東半と西辺の一部であるが、東半は遺存が良く壁高は20cmで垂直に近い。

〔**柱穴**〕　確認できない。

〔**かまど**〕　東壁北半の北東隅寄りに施設され遺存状況が良い。両袖は長径20cm短径15cm大の川原石4～5個を組み並べ芯材とし、その上にシルトを貼り固めて構築している。

焚口・燃焼部は若干掘りくぼめているが、地山を火床面とし火熱のため埋土13層にみられるように瓦礫状を呈している。燃焼部に数個の川原石を認めたが施設されたものではなく、支脚石は確認できない。

燃焼部からゆるやかに立ち上がった頂点から東へ1mの煙道がのびる。幅30cm深さ20～30cm

で、東へゆるやかに下がり煙出部となる。煙出部は径40×50cmの円形で検出面からの深さは35cmあり、底は煙道より若干下がる。なお、煙道は真北に対し88°東を向く。

〔その他の施設〕 かまどの南に隣接するP_1は径48cm×67cm深さ18cmの平面楕円であり、埋土は1・3層の黒褐色土があり、その間に暗褐色焼土があって土師器甕片を含んでいる。

一方、P_2は中央に位置し、径70cm深さ25cm、平面円形と推定されるもので埋土は2～6層まで認められ、黒褐色土・にぶい黄褐色シルトと黒色土の混土等があり、2・6層を除き土器の小破片を含む。P_1・P_2とも埋土が互層で人為的に埋められた可能性があり、P_2では特に強い。施設された位置からP_1は貯蔵穴的性格を推察できるが、P_2については不明である。

遺　物

B類坏1点・C類坏2点・土師器長胴甕2点・土師器小形甕1点がある。

B類坏（第9図44　図版25）　体はやや丸味をもって立ち上がり、口縁でわずかに外反する、器高は高く底径は小さい。底部の切り離しは回転糸切りで調整はない。

内外面とも灰褐色を呈し、一見A類の色調に似るが、口縁から体内面の一部にタール状の付着物があり、更に器面の剝離が認められること、体外面に黒斑があること等から二次的火熱による変色と考えられる。出土地点はかまど焚口付近である。

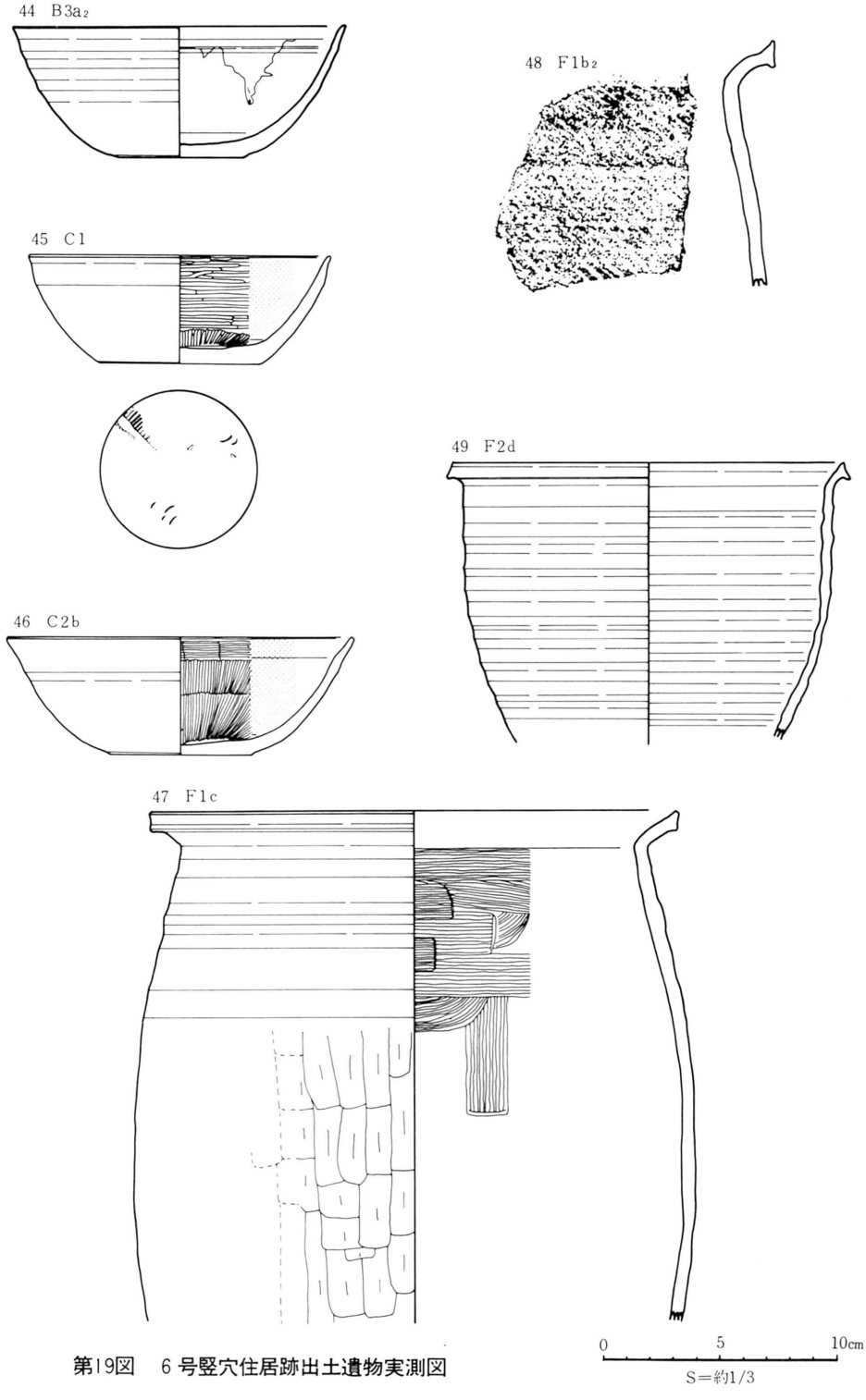
C類坏（第19図45・46　図版25）　45の体はやや丸味をもって立ち上がり、口縁でわずかに外反する。内面調整は底で放射状に、体部から口縁は横方向へのヘラミガキである。底部切り離しは調整と摩滅によって不明であり、調整技法も不明瞭であるが爪状の圧痕がある。この坏は完形でP_1の北縁で出土した。

46もやや丸味をもった立ち上がりで口縁の変化はない。内面調整は底で放射状、体部で縦方向、口縁で横方向のヘラミガキであり、底部切り離しは回転糸切り無調整である。

土師器甕（第19図47～49　図版25・26）　47・48はロクロ使用の長胴甕である。47は口縁が短かく強い屈曲で外反し口唇を上方に引き出す。外面調整は口縁と体上半でロクロナデ、特に体上半ではロクロ痕が明瞭に残り、下半は縦方向のヘラケズリとなる。内面は口縁、体部とも刷毛目調整である。48も口縁は短かく強い屈曲で外反し口唇を上下に引きだす。外面調整は口縁をロクロナデ、肩部以下はロクロナデ後、斜方向の平行叩き目であり、内面は口縁・体部ともロクロナデ調整である。

以上の他に、図示しない長胴甕片が2点ある。1点はロクロ使用で、口縁が短かく外反、口唇を上方に引き出し、外面は口縁でロクロナデ、肩部以下は縦のヘラケズリで、内面は口縁と肩部近くはロクロナデ、以下はロクロナデ後、縦の刷毛目が部分的に認められる。

いま1点はロクロ不使用で、口縁は「く」字状に比較的強く外反し口唇に軽い沈線があり、肩部段は形式化し無段に近い。外面は口縁で横ナデ、肩部以下は全面縦のヘラケズリで、内面は



第19図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図

口縁と肩部近くの一部で横ナデ、以下は縦の刷毛目である。

49はロクロ使用の小形甕で、口縁は極端に短かく外反し口唇を上下に引き出す。内外面ともロクロナデでロクロ痕が明瞭である。

7号（Ca68）竪穴住居跡

6号竪穴住居跡の東約2mの黒褐色粘質土面（Ⅲ層）で検出された。

遺　構（第20図　図版8）

〔**重複**〕　なし。

〔**平面形・規模**〕　東辺2.5m・西辺2.7m・南辺3.0m・北辺2.7mを計る方形を呈している。

〔**埋土**〕　1～5層よりなる。1層の黒色土は広く厚く堆積し一部床面まで達する。この層は、かまど埋土の1層と色調は若干異なるが、連続するものと考えてよい。壁沿いには2・4・5層を認め、混入物に多少の相違を見るが、いずれも黒色土で1層以前の堆積である。3層は、かまど焚口付近で最も厚く、南半部一帯に広がる黒色土、焼土の混土で、かまど埋土3層に連続する。

6層は、床面以下で黒褐色土・シルトの混合で、床の構築土であって直接的な住居跡の埋土ではない。

〔**床・壁**〕　床面は、北西の一部で地山（Ⅳa層）をそのまま利用しているが、床面積の約⅔ほどは一担地山を掘りこんだ後、前項で述べた6層に相当する土を埋め床面としている。

壁の遺存状況は良く、壁高は40～45cmを計り、やや外に傾く立ち上がりである。

〔**柱穴**〕　確認できない。

〔**かまど**〕　南壁東半の南東隅寄りに施設されている。袖は左のみ遺存するが褐色シルトと黒色土の混合土を固め構築し、川原石等の芯材は認められない。焚口・燃焼部は46cm×50cmほどの円形の範囲で地山火床が認められ若干の落ちこみがある。燃焼部からわずかに立ち上がって煙道となる。煙道は、長さ88cm・幅53cmで底はほぼ平担である。煙出部は径50cm×58cmの円形で、検出面からの深さ55cm・煙道底面からは25cmある。

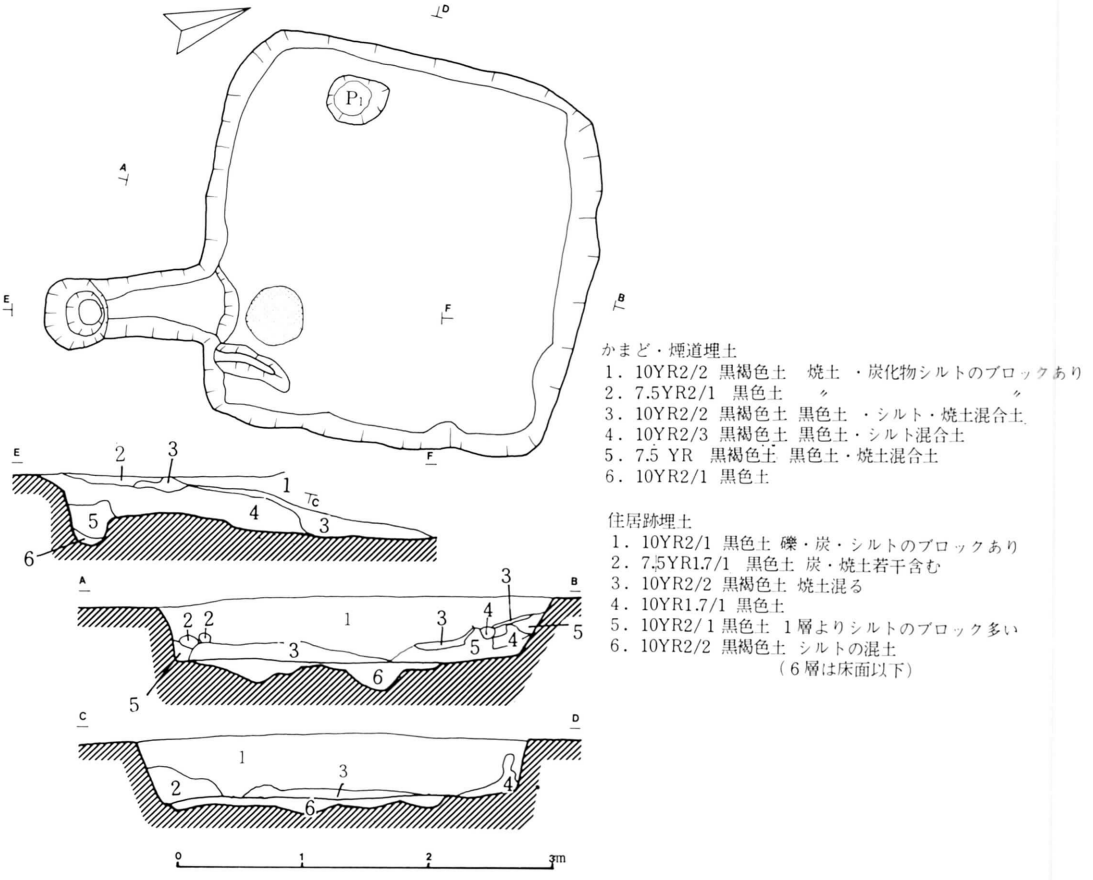
なお、真北に対する煙道方向は195°南を向く。

〔**その他の施設**〕　西半西壁近くの床面で、径40cm×50cmの円形プランをもち、深さ25cmのP_1が検出された。ピット東壁部に青灰色粘土が付着し、埋土は、上から暗褐色の焼土・黒色土・シルトの混土層とシルト・黒色土の混土層の二層からなる。性格は不明である。

遺　物

A類坏2点、B類坏2点、土師器長胴甕4点、須恵器甕片2個体分の出土である。

A類坏（第21図50　図版26）　50　体部がやや丸味をもった立ち上がりで口縁部はわずかに

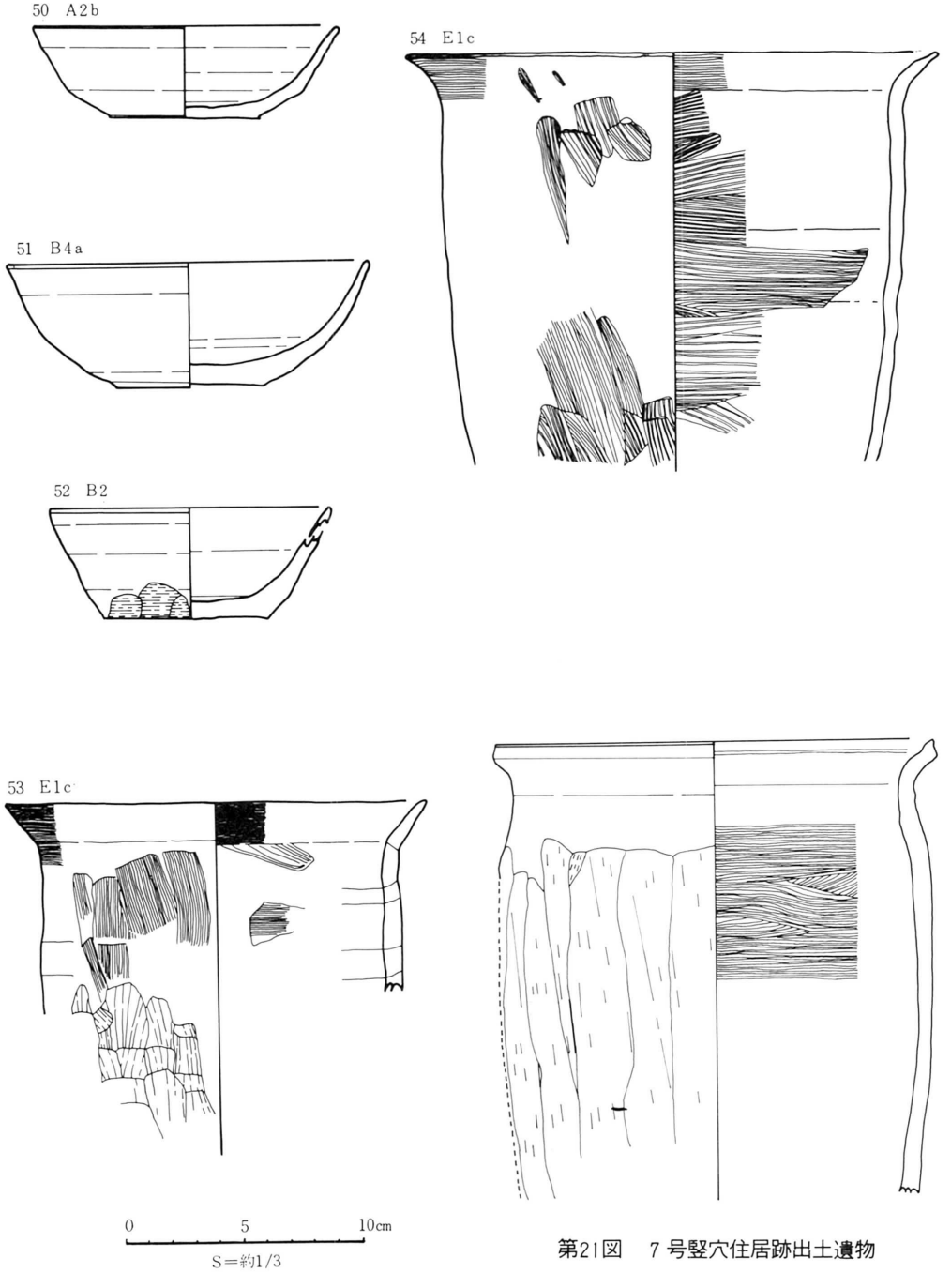


第20図　7号（Ca36）竪穴住居跡実測図

外反し、底部回転糸切り無調整である。図示ないものに、一部体下端と底部のみ残存し、底部回転糸切り無調整のものが1点ある。

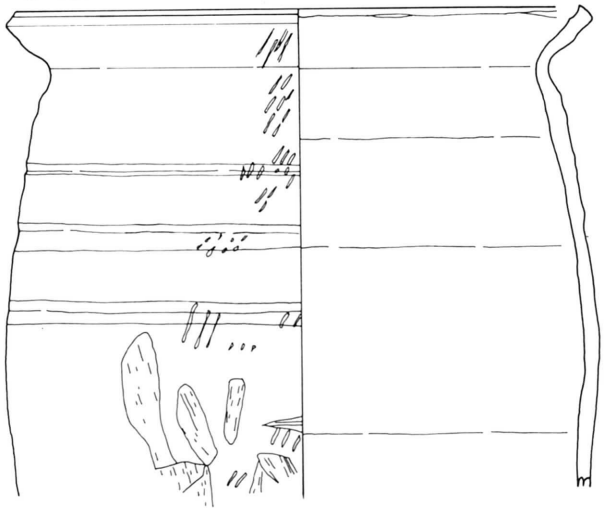
B類坏（第21図51・52　図版26）　51はやや丸味を持った立ち上がりで口縁部の変化はない。底部切り離し技法は摩滅のため不明である。52は直線的な立ち上がりで口縁部の変化はなく、口径に対する底径・器高比が大きい。底部は回転ヘラ切りで体部下端から底部を手持ヘラケズリ調整している。

土師器甕（第21図53～55　第22図56　図版26・27）　いずれも長胴甕、第21図53・54はロクロ不使用のものである。53は口縁ゆるやかな屈曲で外反し口唇が薄くなる。肩部段は見られず、外面は口縁で横ナデ、体部は上半肩部近くは縦の刷毛目、以下は縦のヘラケズリであり、内面は口縁で横ナデ、体部は横を主体とする刷毛目である。54は口縁がゆるやかな屈曲で湾曲ぎみ

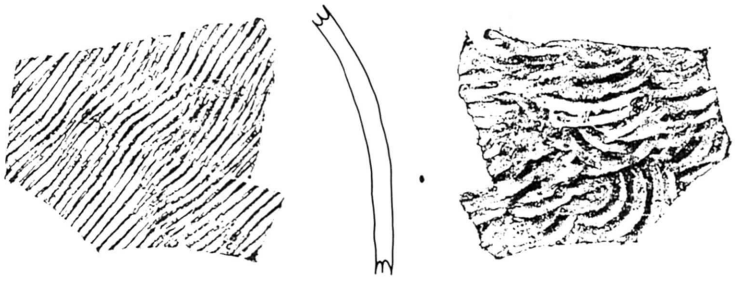


第21図　7号竪穴住居跡出土遺物

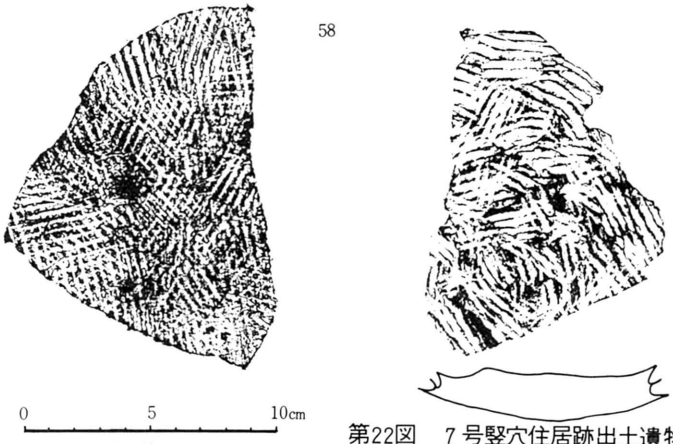
56 F2b



57



58



0 5 10cm

S=約1/3

第22図　7号竪穴住居跡出土遺物

に外反し口唇は薄くなる。肩部段はなく、外面は口縁で横ナデ、体部は縦を主体とする荒い刷毛目であり、内面は口縁で横ナデ、体部は横方向の荒い刷毛目である。

第21図55・第22図56はロクロ使用のものである。55は口縁が短かく外反し口唇を上方に引き出す。外面は口縁でロクロナデ、体部の肩部近くはロクロナデで、以下は縦のヘラケズリをもつ、内面の口縁はロクロナデ、体部は横の刷毛目調整である。56は口縁が「く」字状に外反し、口唇を上方に引き出す。外面は口縁から体部上半にロクロナデ後の叩き目があり、下半はヘラケズリとなり、内面は口縁・体部ともロクロナデ調整である。

須恵器甕（第22図57・58）　57は外面の色調が極暗赤褐色、断面と内面は橙色を呈し、外面は平行叩き目文、内面に青海波状の圧痕をもつ。58は内外面とも橙の色調を呈するが、焼成は完全な須恵器であって丸底大甕の底の一部である。外面は格子目文、内面はあて工具による平行波線文である。外面に炎による二次火熱痕とみられる暗赤褐色を呈する部分がある。なお、出土地点はかまど燃焼部内である。

8号（Cc68－Ⅰ）竪穴住居跡

6号住居跡の南約3mの黒褐色粘質土面（Ⅲ層）で検出された。検出面での状況は重複する5・6号溝以東のみが明瞭で、他は段丘崖沿いの木根等による攪乱のためはっきりせず、検出面も10cm以上低くなる。当初9号竪穴住居跡との重複を予見できなかった。

遺　構（第23図　図版8）

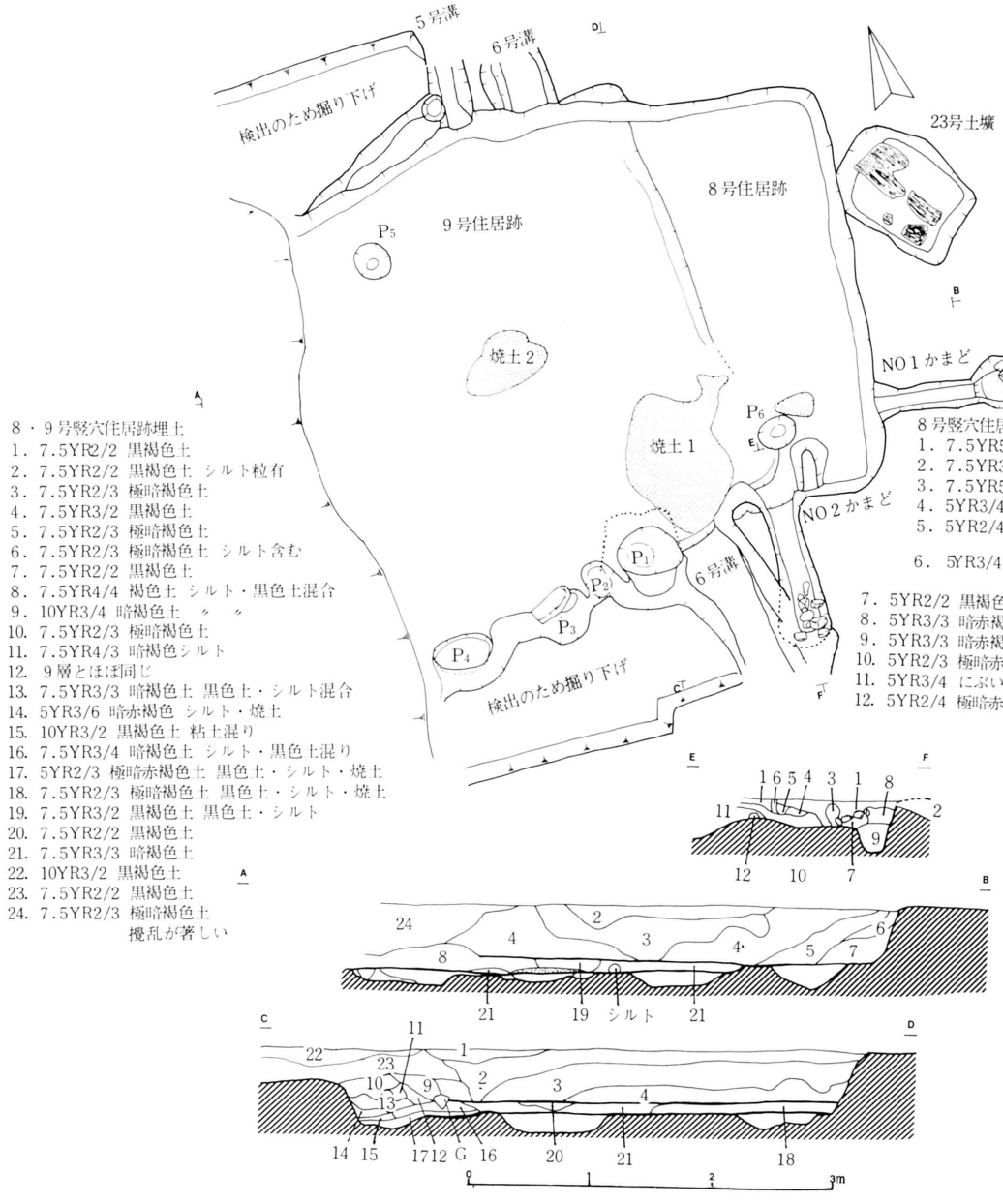
〔**重複**〕　9号住居跡と重複する。前述のように当初の検出面では予見できなかったが、西半を下げる中で確認し、更に埋土と床の状況から9号竪穴住居跡より新しいと推察した。

また、23号土壙を切り、5・6号溝に切られる。

〔**平面形・規模**〕　完全に遺存する東辺は3.3m、北辺は3.0m、南辺0.5mの遺存で西辺は不明であるが、東辺から推定して一辺3.3m規模の方形であったとみられる。

〔**埋土**〕　1～3層の黒褐色土は直接的には5・6号溝の埋土で、22～24層の黒褐色・極暗褐色土は溝の掘さくや段丘崖沿いのため動いたもので、特に24層の攪乱は著しい。遺構の直接的な埋土として4層の黒褐色土を中に東壁沿いに5～7層の極暗褐色土・黒褐色土が斜めに入りこむ、南壁沿いの9号住居跡P_1・P_2を覆う9～17層は暗褐色のシルトと黒色土の混合土や暗赤褐色のシルトと焼土の混土、黒色土に粘土混りの層等が互層状に近い状況でみられることは人為的なものと推察する。この部分は第23図P_1付近に点線で示した範囲に広がり、その北縁は、遺存する南壁の延長線上にほぼのる。したがって、壁構築のための積土かと考えられる。

〔**床・壁**〕　床の東半は、9号住居跡の東壁から1～1.5m東に広げている。この部分の北半は地山シルトを床面とし、南半では一担地山シルトを掘りこんだ後、黒褐色土とシルトの混土を



第23図　8号（Cc68－Ⅰ）竪穴住居跡・9号（Cc68－Ⅱ）竪穴住居跡実測図

一定面まで埋め固め床面としている。西半は9号住居跡の床面上に約7㎝の厚さで黒色土とシルトの混合土を敷き固めている。

壁は東半部分で比較的遺存状況が良く、壁高35㎝を計り直に近い立ち上がりである。西半部分は溝や攪乱のためほとんど不明に近いが、前述のP_1付近の埋土と8層の褐色土が西端で若干高まる部分が壁の痕跡を示すものとも考えられる。

〔柱穴〕 確認できない。

〔かまど〕 No.1かまど　東壁南半のやや南東隅寄りに施設されている。煙道・煙出部分のみの遺存で煙道は床画より23㎝直に上がり、更に東へゆるやかに上って後、水平にのび煙出に達する。煙道部は長さ85㎝、幅20㎝、検出面からの深さは7～15㎝を計る。煙出部は40×40㎝の円形プランで、検出面からは40㎝、煙道底部から33㎝の深さである。

No.2かまど　南壁東半の中央と推察される位置に施設され、袖はシルトと黒褐色土の混土で固め、左袖の大半と右袖の一部が遺存する。焚口から燃焼部とゆるやかに上がり、その頂点から煙道となる。煙道は幅25～30㎝、検出面から15～22㎝の深さで南に向って30㎝の長さをゆるやかに下がり、更に50㎝を水平にのびて煙出部に達する。煙出部は一部を6号溝によって切られており、プランは明瞭でないが円形と推察される。深さは検出面から40㎝、煙道底部から20㎝を計る。なお、比較的上にこぶし大の礫が10個ほど詰っていた。

No.1・2の関係はNo.2が新しく、真北に対しNo.1は東へ103°、No.2は189°南を向く。

〔その他の施設〕 認めない。

遺　物

B類坏4点、土師器長胴甕1点、小形甕1点、刀子1点が出土した。

B類坏（第25図62～65　図版27）　62　丸味をもった立ち上がりで体外面にロクロ調整による稜がみられ、底部切り離し技法はヘラナデ調整のため不明である。63　やや丸味をもつ立ち上がりで口縁部はわずかに外反し底部外面と内面に黒斑が認められる。回転糸切り無調整である。64・65の坏は、丸味をもって立ち上がり口縁部は比較的長く大きく外反し器形にゆがみがある。色調は浅黄橙系統で一般に軟質で胎土は密であり、底部切離し技法は回転糸切り無調整である。64は口縁内部の一部にタール状の付着物があり、外面に煤をうけた様相である。なお、この2点の坏は、9号竪穴住居跡出土の66～68坏と器の大小の差はあるが類似する点が多い。

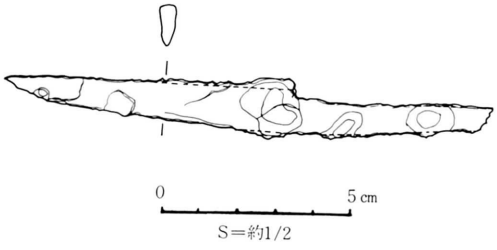
土師器甕（第26図70・72　図版28）　70　ロクロ不使用の長胴甕で、口縁は「く」字状に外反し口唇の変化はなく、頸部段は形式化する。外面調整は口縁で横ナデ、肩部以下は縦のヘラケズリであり、内面は口縁、体部とも横ナデである。

72　ロクロ使用の小形甕で、口縁は「く」字状に短かく外反し口唇に変化はない。内外ともロクロナデで、底部は回転糸切り無調整である。

59

刀子（第24図　図版27）

No.1 かまど煙道内から出土している。現存の長さ13cm、刀身部で7.7cm、幅1cmあり、刀身部の断面は刃部で鋭く背は平担である。



第24図　8号竪穴住居跡出土刀子

9号（Cc68－Ⅱ）竪穴住居跡

8号住居跡を検出する過程の中で確認したものであり、検出状況は8号竪穴住居跡の項を参照されたい。

遺　構（第23図　図版8）

〔重複〕　8号住居跡より古い。

〔平面形・規模〕　各辺とも完全な遺存ではないが、確認できるのは東辺で3.5m、西辺は不明、南辺3.2m、北辺3.0mであり、一辺3.5m規模の方形と推察される。

〔埋土〕　床面直上に、8号住居跡の床を構築するための黒色土とシルトの混合土があり、西端は段丘崖で撹乱の著しい黒褐色土である。

〔床・壁〕　床は一部分を除き、一担地山シルトを掘りこんだ後、黒褐色土とシルトの混土を埋め固めて構築しており、焼土1付近の床構築土には土器片を多く含む。

壁の遺存状態は良くなく、南・北壁とも溝・木根等による撹乱があり、西壁は段丘崖、水路によって削られて痕跡をとどめない。東壁は8号住居跡東半の床面と10cmの段差をもってその痕跡を残す。壁高は比較的状況の良い北東隅で検出面から45cm、南・北壁で20cmを計る。

〔柱穴〕　P_1～P_6の小ピットを検出した中で、P_1とP_4は南壁に位置しその間1.7mあり、P_1は径40×50cm、深さ15cm、P_4は径30×50cm、深さ20cmあって柱穴の可能性もあるが確証に欠ける。

〔かまど〕　確認できないが、床面に焼土1・2が認められ、それぞれ焼土の堆積と床に直接火熱をうけている。特に焼土1では南半部分が橙色を呈し、瓦礫状になっていることから、ここにかまどが位置した可能性はあるが確証はない。

〔その他の施設〕　前述したP_1とP_4を除き、P_2・P_3は径20cm、深さ10cm、P_5・P_6は径30cm、深さ15cmを計る。P_1・P_3は南壁沿いにP_1とP_4の間に位置し、相互に関連することも考えられる。P_5は北西に、P_6は南東隅近くに位置する。柱穴でないとするならば、P_1・P_4も含め、これらの小ピットの性格は不明である。

遺　物

A類坏2点、B類坏3点、C類坏1点、土師器甕1点、その他に須恵器甕片が出土した。

A類坏（第25図60・61　図版27）　60はやや丸味をもった立ち上がりで、口縁部はわずかに

外反する。底部回転糸切り無調整、体部の２ヵ所に墨書を認めるが、いずれも判読できない。両墨書は筆運びからみて天地が異るものと思われる。

61の坏は器形が58に似る。底部の残存は約３分の１であるが回転糸切り無調整と観察される。

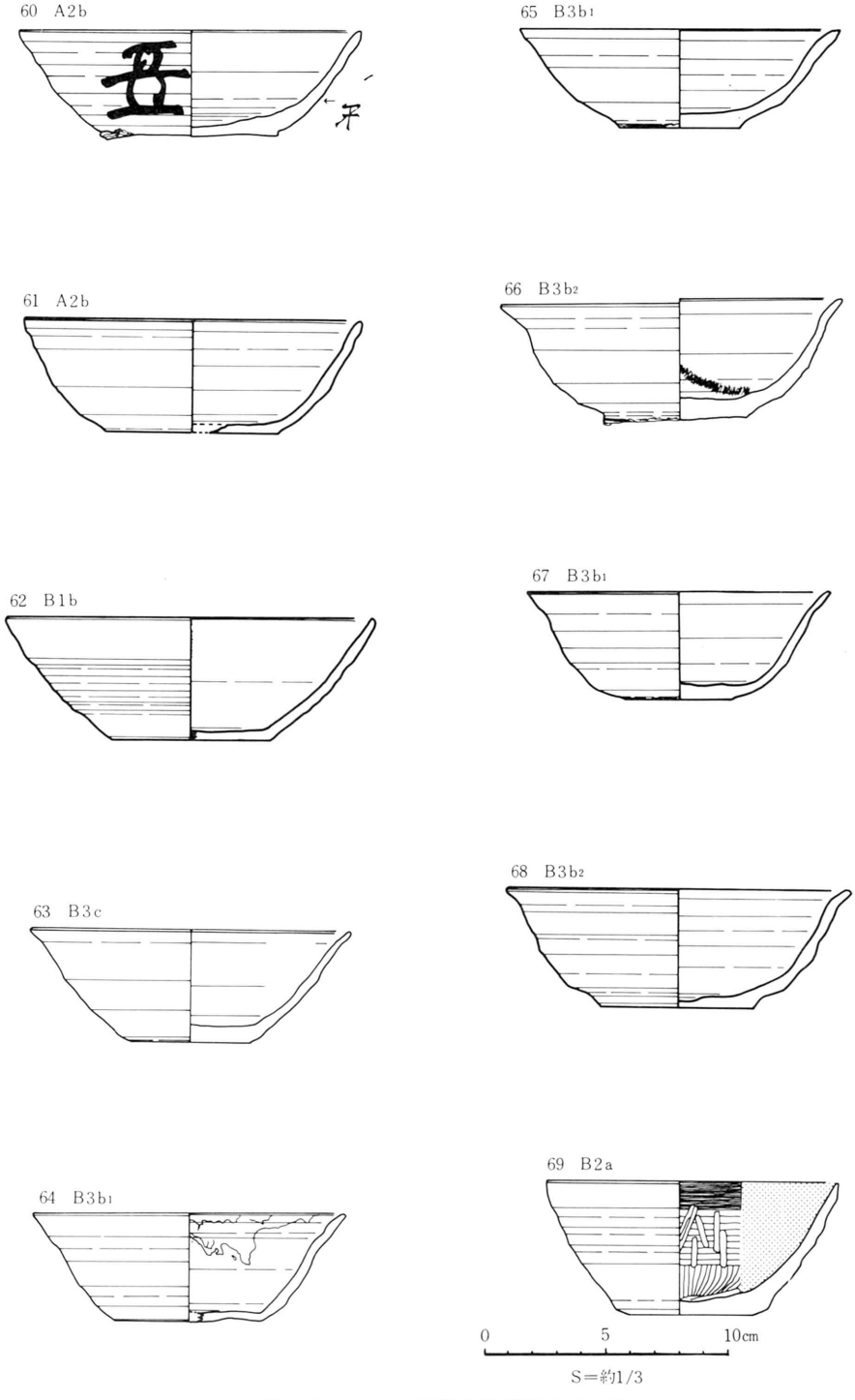
Ｂ類坏（第25図66～68　図版27・28）　66～68の坏は、器の大小の差はあるが類似し、体は丸味をもつ立ち上がりで口縁部が比較的長く大きく外反し、器形がゆがんでいる。色調は浅黄橙系統で一般に軟質で胎土は密である。底部切り離し技法は回転糸切り無調整で、66は体内部に連続した爪状の圧痕が認められ、P_1内の出土である。65は二次的火熱によって内外面に淡赤褐色に変色した部分と煤状の黒変を認める。

なお、これらの　は８号住居跡出土の64・65の坏と類似するとともに、この類のものは本調査地検出の住居跡では他に認められない。

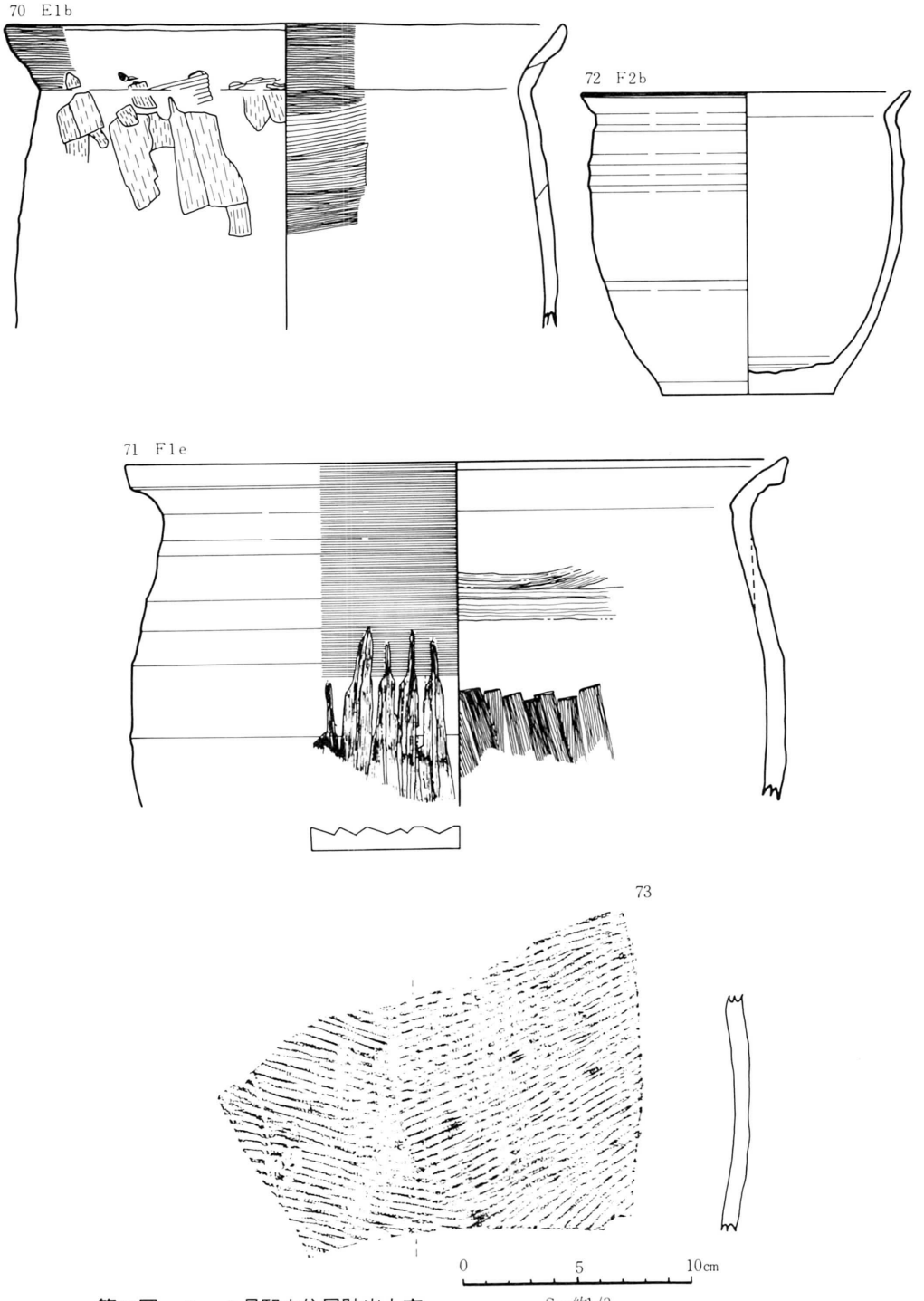
Ｃ類坏（第25図69　図版28）　直線的な立ち上がりでロクロ痕が明瞭で、器高が高く口縁は直口ぎみである。内面調整は底部で放射状、体部は横とわずかに縦へのヘラミガキ、口縁は横ナデを施している。

土師器甕（第26図71　図版28）　ロクロ使用の長胴甕で、口縁は短かく外反し、口唇を上方に引き出す。外面調整は、口縁と肩部近くで荒いロクロナデ、以下は先の鋭い工具を用い、縦方向に刻み状のケズリを施す。内面は口縁とロクロナデ、体部は上で横方向、下で縦方向の刷毛目状のナデであって、内外面には朱が塗られている。

須恵器甕　第26図72に示した拓影の他に２点の破片がある。いずれも大形甕（あるいは壺）の破片で３点とも外面は刻みのある工具による平行叩き目文で、一部格子目状になっている。内面は無文のあて工具を用いている。焼成、胎土とも普通で色調は灰色を呈し器厚は0.5cmある。出土地点は床面とその直上の埋土（８号竪穴住居跡床構築土）であり、３片とも同一個体の可能性もある。



第25図　8・9号竪穴住居跡出土 成坏



第26図　8・9号竪穴住居跡出土甕

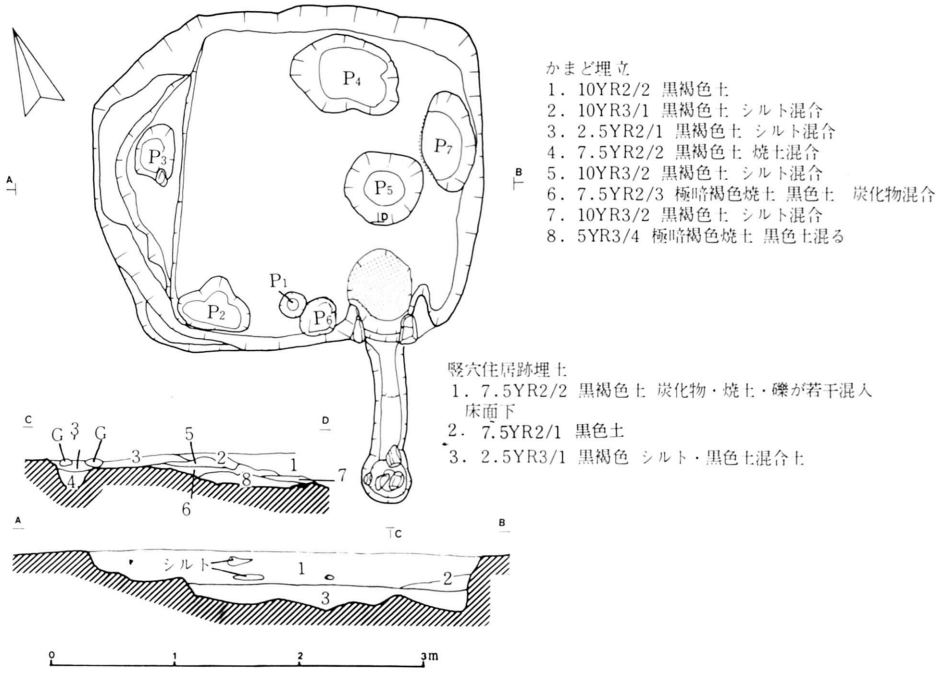
10号 （Ce 68）竪穴住居跡

7号住居跡の南約13mの褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出された。検出状況は比較的良好であった。

遺　構（第27図　図版9）

〔**重複**〕 西外側に弧状に張り出した部分があり、増築の可能性もあるが積極的根拠に欠ける。共通埋土をもっていることから本住居跡の一部であることは疑いない。

〔**平面形・規模**〕 西側に弧状のふくらみをもつ五角形状を呈するが、基本形は方形と考えられる。東辺2.4m・西辺の弦部分が2.5mあり、その中心から70cm西へ張り出す。南辺2.3m・北辺2.3mを計る。



第27図　10号（Ce68）竪穴住居跡実測図

〔埋土〕 1・2層からなる。1層の黒褐色土は、炭化物・焼土・礫と焼土混りのシルトブロックを若干含んでおり、ほぼ全体に広がり床面まで達する。2層の黒褐色土は1層のような混入物がなく、南壁から東壁沿いと南壁近くの床面上にわずかに見られる。

〔床・壁〕 床の構築は西の張り出し部分を除き、一担地山を掘りこんだ後、シルトと黒褐色土の混土を埋め固めておりほぼ平担である。張り出し部分は地山シルトを直接利用したもので、8㎝の高低差をもつ二段状を呈しているが、意図的なものかは不明であり、埋土には壁の崩壊を示す状況が見られない。なお、張り出し部分と他の床面とに高低差があり、5㎝張り出し部分が5㎝高い。

壁の立ち上がりは全体的に外傾ぎみであり、遺存状況は良い。壁高は北壁中央で30㎝、張り出し部分で15㎝を計る。

〔柱穴〕 確認できない。

〔かまど〕 南壁の南東隅に近く施設されている。右袖はほとんど遺存せず左袖の一部分が遺存するのみで、シルトで構築したものである。焚口から燃焼部に相当するところは、径50㎝×55㎝の浅い落ちこみがあり火熱を受けていた。煙道は長さ1m、幅25㎝でゆるやかに立ち上がり中半から水平になって煙出に達する。煙出のプランは径37㎝×40㎝の円形で、深さは検出面から20㎝、煙道底面から15㎝を計る。

なお、煙道は真北に対し南200°である。

〔その他の施設〕 ピットP_1～P_7を床面で検出した。P_1は径20㎝×25㎝、深さ7㎝あり、以下、P_2・不整形で深さ7㎝、P_3・35㎝×45㎝・8㎝、P_4・65㎝×95㎝・12㎝、P_5・53㎝×55㎝・17㎝、P_6・29㎝×32㎝・9㎝、P_7・56㎝×77㎝・15㎝のような規模をもち、埋土はP_2・P_4を除き、黒褐色土を主体としている。P_2・P_4は黒褐色土およびシルトの層、あるいは、シルトと黒褐色土の混土層をもち、床構築の際の埋土をピットと誤認した可能性が強い。P_1・P_3・P_5～P_7は性格は不明である。

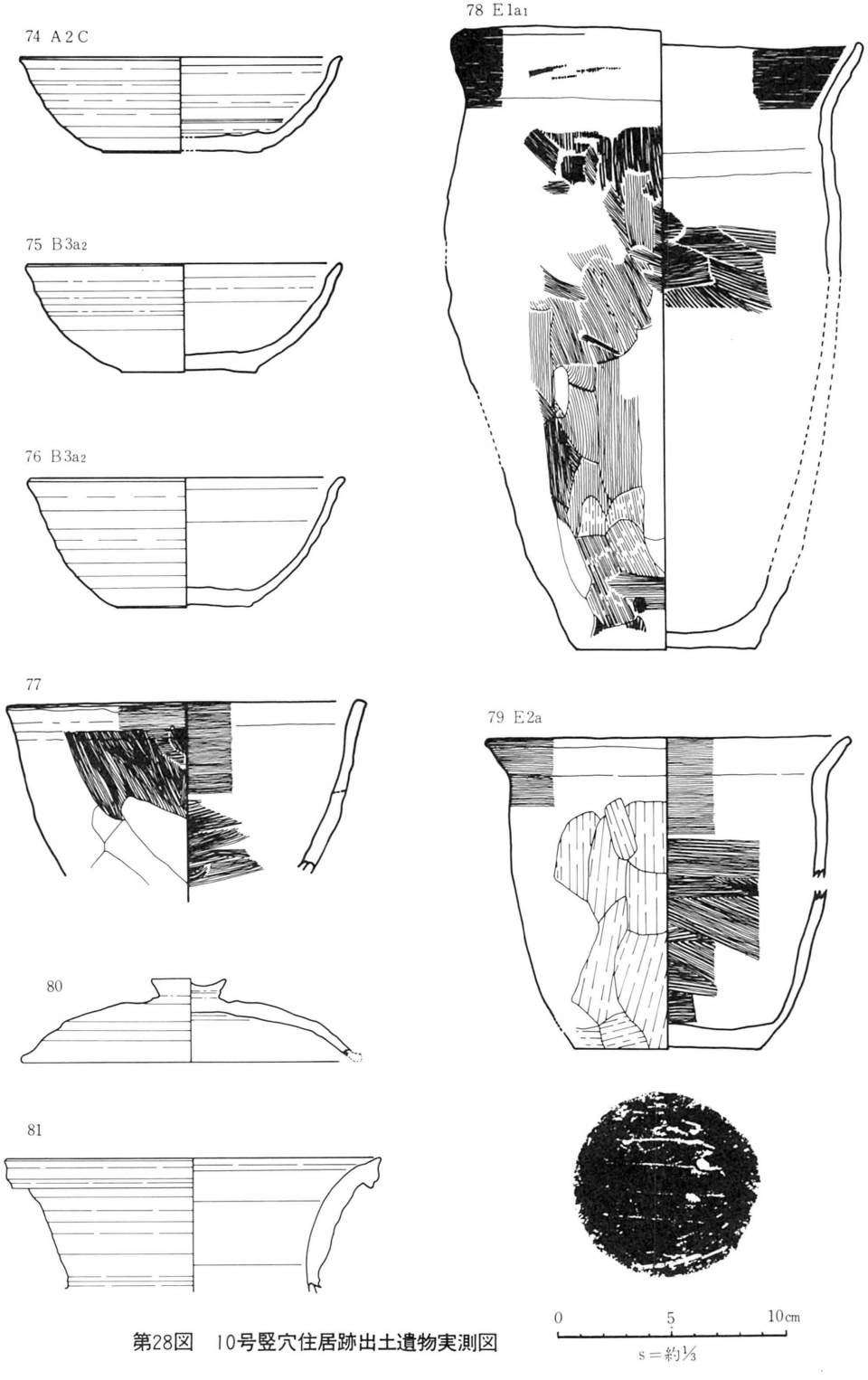
遺　物

A類坏1点、B類坏2点、土師器鉢1点、土師器甕2点、須恵器蓋1点、須恵器甕1点が出土した。

A類坏（第28図74　図版29）　やや丸味をもった立ち上がりで口縁部は外反し、内側に稜をもつ、口縁の一部に重ね焼き痕があり、底部回転糸切り無調整である。

B類坏（第28図75・76　図版29）　75　やや丸味をもった立ち上がりで口縁部はわずかに外反し、底部回転糸切り無調整である。76　丸味をもった立ち上がりで口縁部がわずかに外反、器高が高く底径と近似の数値を示す。

土師器鉢（第28図77　図版29）　ロクロ使用で口縁部はわずかに外反し、肩部にかすかな陵



第28図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図

をもつ、外面調整は口縁部で横ナデ、体部上半は横ナデ後、斜方向の刷毛目状ナデと下半ではヘラケズリとなる。内面は、口縁近くで横ナデで下半は横方向の刷毛目となる。焼成・胎土とも普通で色調は褐色であるが、肩部近く一帯に煤状の付着が見られる。

土師器甕（第28図78・79　図版29）　78　ロクロ不使用の長胴甕で、口縁は「く」字状にかるく外反し口唇を上方にかるく引き出す。肩部段は形式化され外面調整は口縁で横ナデ、肩部付近で縦の刷毛目があり、以下は縦方向のヘラナデまたはヘラケズリとなる。内面は口縁で横ナデ、体部で不定方向の刷毛目となる。79　ロクロ不使用の小形甕で、口縁は「く」字状に外反し口唇の外側に溜がある。外面は口縁で横ナデ、体部は縦方向の荒いヘラケズリである。内面は口縁部で横ナデ、体部は横方向を主体とする刷毛目である。体外面と口縁の一部が二次火熱によると思われる黒色または灰色の変色を呈する。なお、底部には藁状の敷物の圧痕の上に、細い刻線を4本平行につけ、周りにヘラケズリ調整を施している。出土地点はかまど焚口の焼土内からである。

須恵器蓋（第28図80　図版29）　約3分の1ほどの破片で推定口径15cm・器高3.7cmあり、焼成は良く、胎土は普通、色調は黄灰色を呈する。口縁部は欠損し不明、天井部にロクロナデ痕がある。

須恵器甕（第28図81　図版29）　甕（あるいは壺）の頸部破片である。口径約16.5cm、頸高5cmで、内外ともロクロナデ調整をなし、外面は自然袖によって黒色を内面は灰色を呈している。焼成は堅く、胎土は良い。

11号（Cg 77）竪穴住居跡

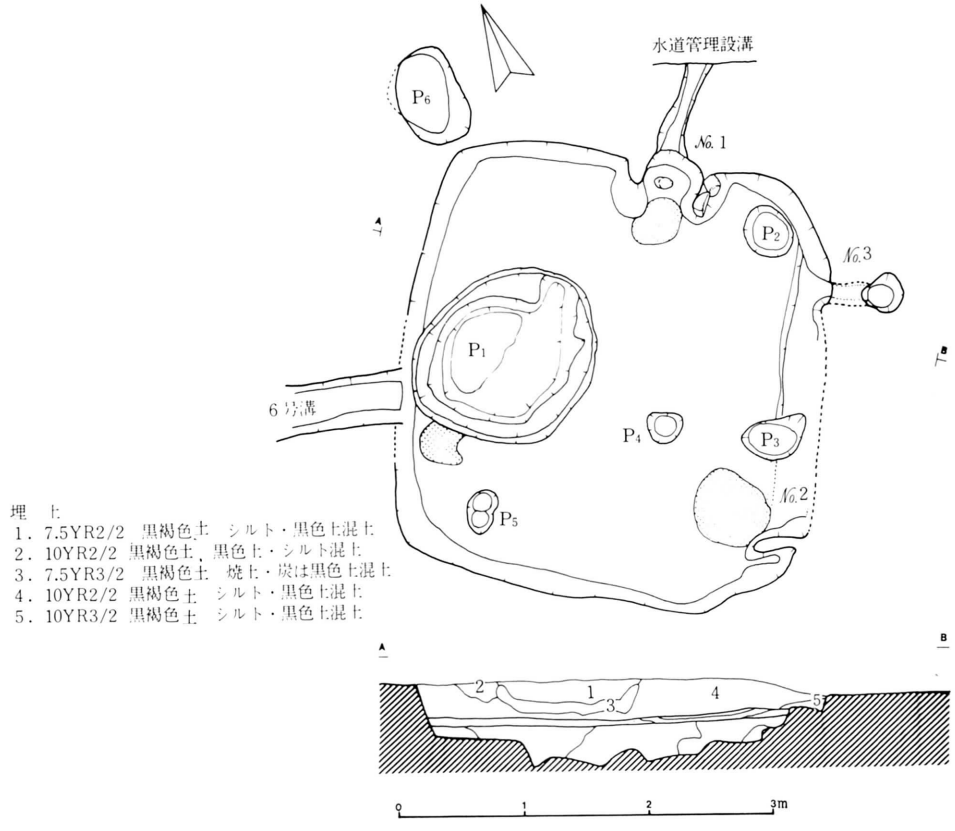
10号住居跡の南東約10m、本調査地の最南端の段丘沿いに位置する。土取りのため検出面の荒れが激しく、散乱する焼土と水道管埋設により一部破壊されたNo.1煙道の確認から遺構の存在を知った。

遺　構（第29図　図版9）

〔**重複**〕　新旧2時期の生活面があり、1期めの生活面に貼り床し、更に東側を一部拡張して2期めの新しい生活面が認められた。したがって、1期（旧）・2期（新）となる。また、6号溝が東西に切っているが床面には達しない。

〔**平面形・規模**〕　1期は東辺3.3m・西辺3.2m・南辺2.8m・北辺2.8mで南北にやや長い方形であり、2期は1期の東壁を東に張り出させるように一部拡張したため、1期に比較し若干広くなる。

〔**埋土**〕　黒褐色土を主体とした1～5層であるが、黒色土とシルトの混合の比率が多少異なる。1層はシルトの比率が非常に多く、北西部に広がる。その下3層は黒色土・焼土・炭の混



第29図　11号（Cg77）竪穴住居跡実測図

合で焼土と炭が多くレンズ状堆積を示すが、1・3層とも人為的掘りこみに埋めた可能性が強く3層は焚火痕とも思われる。

埋土の主流は4層の黒褐色土でほぼ全体に広がる。シルトに若干の黒色土を混る5層が東壁や南壁沿いに見られる。

〔床・壁〕　1期の床は、一担地山を掘りこんだ後、黒褐色土とシルトの混土を一定面まで埋め固めて構築しており、2期は、1期の床上に黒褐色土とシルトの混土に焼土・炭を含んだ約5㎝の貼りがあり、その上面を床としていて、東側拡張部分は地山シルト面をそのまま利用している。

壁は東壁を除き1・2期とも共通し、壁高は南壁中央で、1期35㎝・2期30㎝あって外傾ぎみである。2期東壁は1期東壁よりも約30㎝東になり、最近の土取りのため、ほとんど破壊され痕跡を残す程度である。1期の東壁は、2期拡張部分と1期床面との段差約6㎝として残存している。

〔柱穴〕 1期床面検出のP_4・P_5が柱穴状を呈する。P_4は径27cm・深さ20cmで、P_5は径20cm×35cmの双円状で、北側で18cmの深さであるが、いずれも柱穴としての確証はなく、2期では確認できなかった。

〔かまど〕 1・2期あわせて3基を認めた。No.1かまど、北壁中央より若干東寄りの2期貼土上に施設され、両袖ともこぶし大の礫数個を芯材として用い、シルトと黒褐色土の混合土で固めている。焚口・燃焼部はわずかなくぼみをもち、更に、北へゆるやかな傾斜で高くなり、支脚石を認め、焚口付近では火熱によって瓦礫状を呈する部分もある。煙道へは10cmで急な立ち上がりで、現存の長さ75cm・幅15cmの煙道が北にのびる。煙出は水道管埋設溝により破壊され不明である。なお、煙道方向は真北に対し40°東になる。

No.2かまど、東壁の東南隅の近くに施設されているが、破壊がひどく、右袖と推察されるシルトの削り出しの存在と、焚口・燃焼部と推察される焼土の堆積と火熱痕が、2期床面から下へ落ちこみ認められたことから、かまどと推定した。土取りのために大半が破壊され、全貌を知り得ないが、2期に伴うかまどである可能性が強い。

No.3かまど、東壁の北東隅寄りに施設されたものが、2期拡張時に取り除かれ煙道と煙出のみ遺存する。トンネル状の煙道で径18cm、現存の長さ35cmで円筒状に東にのび煙出に達する。煙出は円形プランを呈し、径30cm×35cm、深さは検出面から44cm、煙道底から18cmを計る。真北に対する煙道方向は115°東を向く。

以上、No.2には推定的な面が強いが、かまどとして肯定した場合、No.1～3かまどの新旧関係は、古いものから順に1期のNo.3→2期のNo.2→No.1となる。

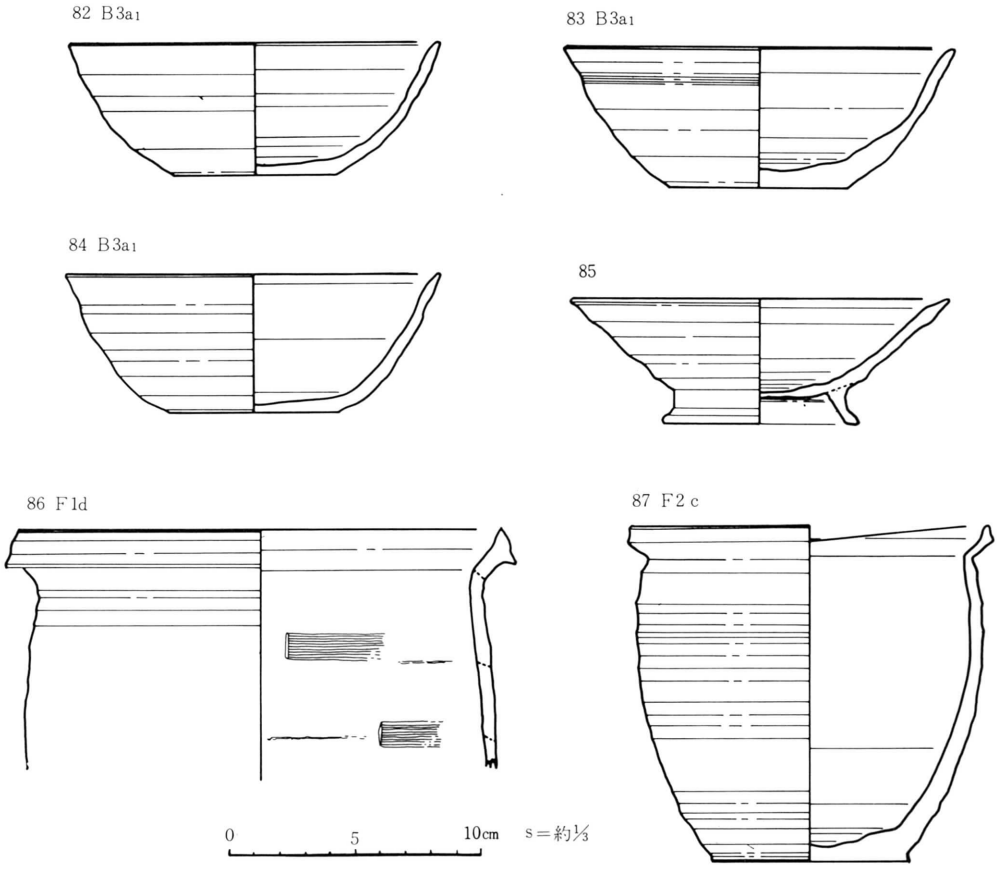
〔その他の施設〕 P_1～P_5のピットを検出した。P_1・P_3は2期床面で、他は1期床面で確認された。P_1は径1.3m×1.5mの楕円形状で深さ30cmある、壁および底は不整で、覆土は暗褐色土に炭と焼土を若干含んでいて上面は柔かく床面とは考えにくい。したがって、時期と掘りこみ面は不明であるが竪穴住居跡廃棄後に掘りこまれた可能性が強い。P_3は30cm×50cmの楕円で深さ8cmあり、上部は削平をうけており、本来もっと深いものである。位置的にはNo.2かまどに隣接し、貯蔵穴的性格も考えられる。

P_2は径40cm×45cmの円形、深さ16cmで、位置的にはNo.3かまどに関係する貯蔵穴的性格も考えらる。P_4・P_5については柱穴の項で述べた通りである。

住居跡外にP_6を検出したが、径50cm×75cmの楕円、深さ30cmあり、埋土は黒色土・焼土の混る褐色土・赤褐色土とシルト・黒色土の混る暗褐色土が、土師器甕の小破片を含んで不整状に埋められたもので、性格と住居跡との関係は不明である。

遺　物

出土遺物は、いずれも2期めに関係したもので、B類坏3点、台付坏1点、土師器甕2点であ



第30図　11号竪穴住居跡出土遺物

る。

B類坏（第30図82～84　図版30）　82　やや丸味をもった立ち上がりで口縁部はほとんど直口に近い。底部は固転糸切り無調整、内面底部・口縁部等で二次加熱によるとみられる器面の剝離があり、外面にも黒の変色部分がある。No.1かまど袖からの出土である。83　やや丸味をもつ立ち上がりで口縁部はわずかに外反、底部は回転糸切り無調整であり、外面に二次火熱によるとみられる赤の変色部分がある。No.1かまど内からの出土である。84　器形は83に類似し、底部回転糸切り無調整、内外面に二次火熱によるとみられる赤と黒の変色部分があり、床面直上の埋土からの出土であるが、本遺構に関係すると見たい。

B類台付坏（第30図85　図版30）　体部は直線的に大きく開き口縁はやや外反し、坏部は浅くむしろ皿状を呈する。底部回転糸切り後、台を貼り付けたもので、台は外反ぎみに下に開く。色調は黄橙であり、台内面に煤状の付着物が認められる。床面上の埋土出土だが、本遺構と関

係するものと見たい。

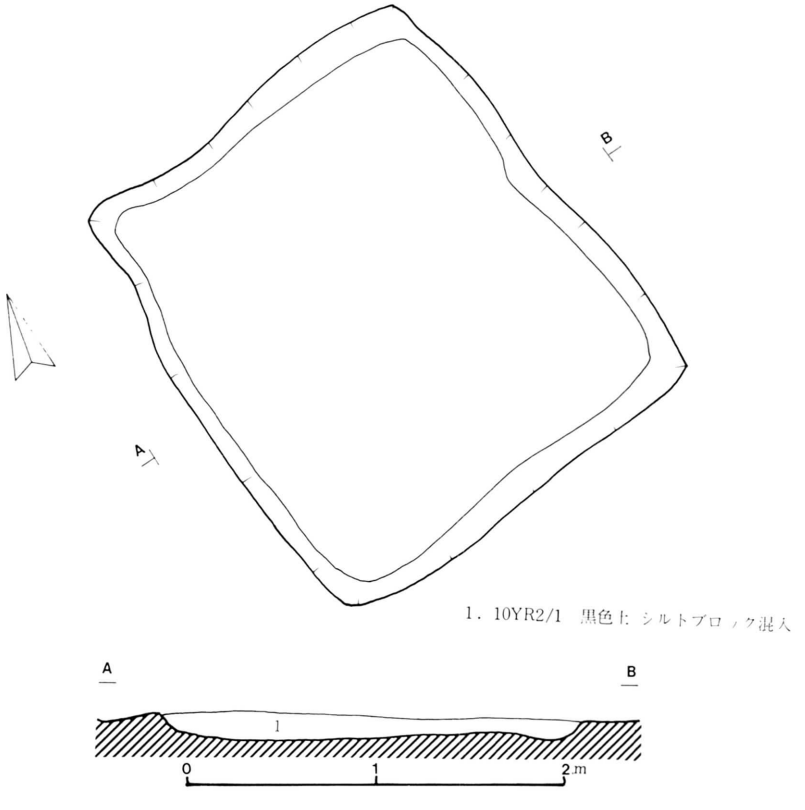
土師器甕（第30図86・87　図版30）　86　ロクロ使用の長胴甕で、口縁は極端に短かく外反し口唇を上下に引き出している。口縁・肩部付近はロクロナデ調整を認めるが、他は器面が粗く不明で、内面はロクロナデに部分的なヘラナデ痕がある。No.1 かまど内の出土である。

87　ロクロ使用の小形甕で口縁が短く「く」字状に外反し、口唇を上方に引き出す。内外面ともロクロナデ調整で、底部は回転糸切り無調整である。外面底部から口縁に二次火熱によるとみられる赤色変化と外面肩部付近、口縁内側の一部に煤状の付着物がある。床面直上埋土からの出土である。

(2) 竪　穴

地山を掘りこんだいわゆる竪穴であるが、かまど・柱穴・遺物等を欠き住居跡と決定づけ得ない遺構を竪穴とした。

1号（Ad21）竪穴（第31図）



第31図　1号（Ad21）竪穴実測図

1号住居跡の北東約8mに位置し、褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出された。遺物の共伴なく時期は不明である。

〔**重複**〕　なし。

〔**平面形・規模**〕　東・西辺が2.5m、南辺2.2m、北辺2.0mを計り、やや南北に長い方形を呈する。

〔**埋土**〕　黒色土に径0.5cm～2cm大のシルトのブロックが散在する単層のみである。

〔**床・壁**〕　床は地山シルト面そのままで、北半では木根の攪乱で多少の凹凸を見るが、ほぼ平担であり堅くない。

壁の立ち上がりは外傾し壁高は10cmである。

〔その他の施設〕 なし。

2号（Ba 30）竪穴（第32図　図版10）

3号住居跡の南東約5mの段丘崖沿いで褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出された。遺物の共伴はなく時期は不明である。

〔重複〕 北壁の一部分が4号溝に切られる。

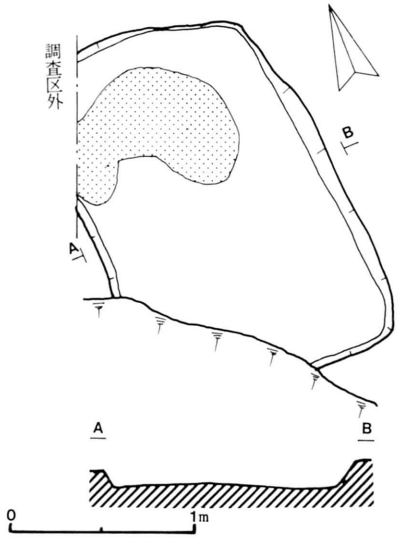
〔平面形・規模〕 北西隅が調査地外、南西隅は水路等による後世の開析で欠け不明である。知り得る範囲での計測によれば、東辺1.8m、西・南辺0.5m、西辺0.9mであって、東壁を基準に一般的形態を考えれば、東・西辺1.8m、南・北辺1.3mの南北に長い長方形と推察できる。

〔埋土〕 記録せず不明

〔床・壁〕 床面は地山シルトがそのまま用いられていて竪く、南にゆるやかに傾斜する。南北の高低差は約10cmである。

しかし、面的には凹凸がみられない。

壁は外傾するが、上は削平されている可能性が強く、最も高いところで15cmである。



第32図　2号（Ba30）竪穴実測図

〔その他の施設〕 北半の床面上に南北50cm、東西85cmの弧状に広がる焼土の堆積が厚さ約5cmで認められ、堆積焼土を除去した下の面は直接火熱をうけていることから、地床炉的な性格も考えられる。

3号（Ba 24）竪穴（第15図　図版10）

4号竪穴住居跡に接する段丘崖近くの褐色砂質シルト面（Ⅱ層）で検出され、遺物は共伴しない。